

こころ

夏目漱石

青空文庫

上 先生と私

一

私は^{わたくし}その人を常に先生と呼んでいた。だからここでもただ先生と書くだけで本名は打ち明けない。これは世間を^{はば}憚かる遠慮というよりも、その方が私にとって自然だからである。私はその人の記憶を呼び起すごとに、すぐ「先生」といいたくなる。筆を執^とつても心持は同じ事である。よそよそしい頭^{かしら}文字などはとても使

う気にならない。

私が先生と知り合いになつたのは鎌倉かまくらである。その時私はまだ若々しい書生であつた。暑中休暇を利用して海水浴に行つた友達からぜひ来いという端書はがきを受け取つたので、私は多少の金を工く面めんして、出掛ける事にした。私は金の工面にに二、三日を費やした。ところが私が鎌倉に着いて三日と経たたないうちに、私を呼び寄せた友達は、急に国元から帰れという電報を受け取つた。電報には母が病氣だからと断つてあつたけれども友達はそれを信じなかつた。友達はかねてから国元にいる親たちに勧すすまない結婚を強しいられていた。彼は現代の習慣からいうと結婚するにはあまり年が若過ぎた。それに肝心かんじんの当人が氣に入らなかつた。それで夏休み

に当然帰るべきところを、わざと避けて東京の近くで遊んでいたのである。彼は電報を私に見せてどうしようかと相談をした。私にはどうしていいか分らなかった。けれども実際彼の母が病気であるとするれば彼は固^{もと}より帰るべきはずであつた。それで彼はとうとう帰る事になった。せつかく来た私は一人取り残された。

学校の授業が始まるにはまだ大分^{だいぶん}日数があるので鎌倉におつてもよし、帰つてもよいという境遇にいた私は、当分元の宿に留^とまる覚悟をした。友達は中国のある資産家の息子^{むすこ}で金に不自由のない男であつたけれども、学校が学校なのと年が年なので、生活の程度は私とそう変りもしなかつた。したがつて一人^{ひとり}ぼっちになつた私は別に恰^{かつこう}好な宿を探す面倒ももたなかつたのである。

宿は鎌倉でも辺鄙な方角にあつた。玉突きだのアイスクリームだのというハイカラなものには長い暇を一つ越さなければ手が届かなかつた。車で行つても二十銭は取られた。けれども個人の別荘はそこここにいくつでも建てられていた。それに海へはごく近いので海水浴をやるには至極便利な地位を占めていた。

私は毎日海へはいりに出掛けた。古い燻ぶり返つた藁葺の間を通り抜けて磯へ下りると、この辺にこれほどの都会人種が住んでいるかと思うほど、避暑に來た男や女で砂の上が動いていた。ある時は海の中が銭湯のように黒い頭でごちやごちやしている事もあつた。その中に知つた人を一人ももたない私も、こういう賑やかな景色の中に裹まれて、砂の上に寝そべてみたり、膝

頭しらを波に打たしてそこいらを跳ね廻はまわるのは愉快であつた。

私は実に先生をこの雑沓ざつとうの間に見付け出したのである。その時海岸には掛茶屋かけぢややが二軒あつた。私はふとした機会はすみからその一軒の方に行き慣なれていた。長谷辺はせへんに大きな別荘を構えている人と違つて、各自めいめいに専有きがえの着換場きかへばを拵こしらえていないここいらの避暑客ふしゅくには、ぜひともこうした共同着換所といった風なものが必要なのであつた。彼らはここで茶を飲み、ここで休息する外ほかに、ここで海水着かきを洗濯させたり、ここで鹹しおはゆい身体からだを清めたり、ここへ帽子や傘かさを預けたりするのである。海水着を持たない私にも持物を盗まれる恐れはあつたので、私は海へはいるたびにその茶屋へ一切いっさいを脱ぬぎ棄すてる事ことにしていた。

二

わたくし
私^{わたくし}がその掛茶屋で先生を見た時は、先生がちようど着物を脱いでこれから海へ入ろうとするところであつた。私はその時反対に濡^ぬれた身体^{からだ}を風に吹かして水から上がつて来た。二人の間^{あいだ}には目を遮^{さへぎ}る幾多の黒い頭が動いていた。特別の事情のない限り、私はついに先生を見逃したかも知れなかつた。それほど浜辺が混雑し、それほど私の頭が放^{ほう}漫^{まん}であつたにもかかわらず、私がすぐ先生を見付け出したのは、先生が一人の西洋人を伴^つっていたからである。

その西洋人の優れて白い皮膚の色が、掛茶屋へ入るや否や、すぐ私の注意を惹いた。純粹の日本の浴衣を着ていた彼は、それを床几の上にすぽりと放り出したまま、腕組みをして海の方を向いて立っていた。彼は我々の穿く猿股一つの外何物も肌に着けていなかった。私にはそれが第一不思議だった。私はその二日前に由井が浜まで行つて、砂の上にしゃがみながら、長い間西洋人の海へ入る様子を眺めていた。私の尻をおろした所は少し小高い丘の上で、そのすぐ傍がホテルの裏口になっていたので、私の凝としてゐる間に、大分多くの男が塩を浴びに出て来たが、いずれも胴と腕と股は出していなかった。女は殊更肉を隠しがちであった。大抵は頭に護謨製の頭巾を被つて、海老茶や紺や藍の色を

波間に浮かしていた。そういう有様を目撃したばかりの私の眼めには、猿股一つで済まして皆みんなの前に立っているこの西洋人がいかにも珍しく見えた。

彼はやがて自分の傍わきを顧みて、そこにこごんでいる日本人に、ひとことふたことなにより一言二言何かいった。その日本人は砂の上に落ちた手拭てぬぐいを拾い上げているところであつたが、それを取り上げるや否や、すぐ頭を包んで、海の方へ歩き出した。その人がすなわち先生であつた。

私は単に好奇心のために、並んで浜辺を下りて行く二人の後うしろ姿すがたを見守っていた。すると彼らは真直まっすぐに波の中に足を踏み込んだ。そうして遠浅とおあさの磯いそ近くちかにわいわい騒いでいる多人数たにんずの

間あいだを通り抜けて、比較的広々した所へ来ると、二人とも泳ぎ出した。彼らの頭が小さく見えるまで沖の方へ向いて行つた。それから引き返してまた一直線に浜辺まで戻つて来た。掛茶屋へ帰ると、井戸の水も浴びずに、すぐ身体からだを拭ふいて着物を着て、さっさとどこへか行つてしまった。

彼らの出て行つた後あと、私はやはり元の床しょうぎ几ぎに腰をおろして烟草タバコを吹かしていた。その時私はぽかんとしながら先生の事を考えた。どうもどこかで見た事のある顔のように思われてならなかった。しかしどうしてもいつどこで会つた人が想おもい出せずになつた。

その時の私は屈くつ托たくがないというよりむしろ無聊ぶりように苦しんで

いた。それで翌あくるひ日もまた先生に会った時刻を見計らつて、わざわざ掛茶屋かけぢやまで出かけてみた。すると西洋人は来ないで先生一人麦藁帽むぎわらぼうを被かぶつてやつて来た。先生は眼鏡めがねをとつて台の上に置いて、すぐ手拭てぬぐいで頭を包んで、すたすた浜を下りて行つた。先生が昨日きのうのように騒がしい浴客よくかくの中を通り抜けて、一人で泳ぎ出した時、私は急にその後あとが追い掛けなくなつた。私は浅い水を頭の上まで跳はねかして相当の深さの所まで来て、そこから先生を目め標しるしに拔手ぬきでを切つた。すると先生は昨日と違つて、一種の弧線こせんを描えがいて、妙な方向から岸の方へ帰り始めた。それで私の目的はついに達せられなかつた。私が陸おかへ上がつて雫しずくの垂れる手を振りながら掛茶屋に入ると、先生はもうちゃんと着物を着て入れ違いに

外へ出て行つた。

三

わたくし

私は次の日も同じ時刻に浜へ行つて先生の顔を見た。その次の日にもまた同じ事を繰り返した。けれども物をいい掛ける機会も、^{あいさつ}挨拶をする場合も、二人の間には起らなかった。その上先生の態度はむしろ非社交的であつた。一定の時刻に超然として来て、また超然と歸つて行つた。周囲がいくら賑^{にぎ}やかでも、それにはほとんど注意を払う様子が見えなかつた。最初いつしよに來た西洋人はその後^ごまるで姿を見せなかつた。先生はいつでも一人であつ

た。

或る時先生が例の通りさつさと海から上がつて来て、いつもの場所に脱ぎ棄てた浴衣を着ようとすると、どうした訳か、その浴衣に砂がいっぱい着いていた。先生はそれを落すために、後ろ向きになつて、浴衣を二、三度振つた。すると着物の下に置いてあつた眼鏡が板の隙間から下へ落ちた。先生は白^{しろがすり} 紺^{くろ}の上へ兵児^{へこ}帯^{おび}を締めてから、眼鏡の失^なくなつたのに気が付いたと見えて、急にそこいらを探し始めた。私はすぐ腰掛^{こしかけ}の下へ首と手を突ツ込んで眼鏡を拾い出した。先生は有難うといつて、それを私の手から受け取つた。

次の日私は先生の後^{あと}につづいて海へ飛び込んだ。そうして先生

といっしよの方角に泳いで行つた。二丁^{ちよう}ほど沖へ出ると、先生は後ろを振り返つて私に話し掛けた。広い蒼い海^{あお}の表面に浮いてゐるものは、その近所に私ら二人より外^{ほか}になかつた。そうして強い太陽の光が、眼の届く限り水と山とを照らしていた。私は自由と歡喜^みに充ちた筋肉を動かして海の中で躍^{おど}り狂つた。先生はまたばかりと手足の運動を已^やめて仰向けになつたまま浪^{なみ}の上に寝た。私もその真似^{まね}をした。青空の色がぎらぎらと眼を射るように痛烈な色を私の顔に投げ付けた。「愉快ですね」と私は大きな声を出した。

しばらくして海の中で起き上がるように姿勢を改めた先生は、「もう帰りませんか」といつて私を促した。比較的強い體質をも

った私は、もつと海の中で遊んでいたかった。しかし先生から誘われた時、私はすぐ「ええ帰りましょう」と快く答えた。そうして二人でまた元の路を浜辺へ引き返した。

私はこれから先生と懇意になった。しかし先生がどこにいるかはまだ知らなかった。

それから中^{なか}二日おいてちようど三日目の午後だったと思う。先生と掛^{かけ}茶屋^{ぢやや}で出会った時、先生は突然私に向かつて、「君はまだ大分^{だいぶん}長くここにいますつもりですか」と聞いた。考えのない私はこういう問いに答えるだけの用意を頭の中に蓄えていなかった。それで「どうだか分かりません」と答えた。しかしにやにや笑っている先生の顔を見た時、私は急に極^{きま}りが悪くなった。「先生は？」

と聞き返さずにはいられなかった。これが私の口を出た先生という言葉の始まりである。

私はその晩先生の宿を尋ねた。宿といっても普通の旅館と違って、広い寺の境内^{けいだい}にある別荘のような建物であった。そこに住んでいる人の先生の家族でない事も解^{わか}った。私が先生先生と呼び掛けるので、先生は苦笑いをした。私はそれが年長者に対する私の口癖^{くちくせ}だといって弁解した。私はこの間の西洋人の事を聞いてみた。先生は彼の風変りのところや、もう鎌倉^{かまくら}にいない事や、色々の話をした末、日本人にさえあまり交際^{つきあい}をもたないのに、そういう外国人と近付き^{ちかづ}になったのは不思議だといったりした。私は最後に先生に向かって、どこかで先生を見たように思うけれ

ども、どうしても思い出せないといった。若い私はその時暗^{あん}に相手も私と同じような感じを持つてはいはしまいかと疑った。そうして腹の中で先生の返事を予期してかかった。ところが先生はしばらく沈^{ちんぎん}吟したあとで、「どうも君の顔には見覚え^{みおぼ}がありませんね。人違いじゃないですか」といったので私は変に一種の失望を感じた。

四

私^{わたくし}は月の末に東京へ帰った。先生の避暑地を引き上げたのはそれよりずっと前であった。私は先生と別れる時に、「これから折

々お宅へ伺つても宜よござんすか」と聞いた。先生は單簡たんかんにただ「ええいらつしやい」といっただけであつた。その時分の私は先生とよほど懇意になつたつもりでいたので、先生からもう少し濃こまやかな言葉を予期して掛かつたのである。それでこの物足りない返事が少し私の自信を傷いためた。

私はこういう事でよく先生から失望させられた。先生はそれと気が付いているようでもあり、また全く気が付かないようでもあつた。私はまた軽微な失望を繰り返しながら、それがために先生から離れて行く気にはなれなかつた。むしろそれとは反対で、不安に揺うごかされるたびに、もつと前へ進みたくなつた。もつと前へ進めば、私の予期するあるものが、いつか眼の前に満足に現われ

て来るだろうと思つた。私は若かつた。けれどもすべての人間に
 対して、若い血がこう素直に働こうとは思わなかつた。私はなぜ
 先生に対してだけこんな心持が起るのか解わからなかつた。それが先
 生の亡くなつた今日こんにちになつて、始めて解つて来た。先生は始め
 から私を嫌つていたのではなかつたのである。先生が私に示した
 時々そつけの素気ない挨拶あいさつや冷淡に見える動作は、私を遠ざけようと
 する不快の表現ではなかつたのである。傷いたましい先生は、自分に
 近づこうとする人間に、近づくほどの価値のないものだから止よせ
 という警告を与えたのである。他の懐かしみに応じない先生は、
 他ひとを軽蔑けいべつする前に、まず自分を軽蔑していたものとみえる。

私は無論先生を訪ねるつもりで東京へ歸つて来た。歸つてから

授業の始まるまでにはまだ二週間の日数^{ひかず}があるので、そのうちに一度行つておこうと思つた。しかし歸つて二日三日と経^たつうちに、鎌倉^{かまくら}にいた時の気分が段々薄くなつて來た。そうしてその上にいろど彩られる大都會の空氣が、記憶の復活に伴う強い刺戟^{しげき}と共に、濃く私の心を染め付けた。私は往來で学生の顔を見るたびに新しい学年に対する希望と緊張とを感じた。私はしばらく先生の事を忘れた。

授業が始まつて、一カ月ばかりすると私の心に、また一種の弛^{たる}みができてきた。私は何だか不足な顔をして往來を歩き始めた。物欲しように自分の室^{へや}の中を見廻^{みまわ}した。私の頭には再び先生の顔が浮いて出た。私はまた先生に会いたくなつた。

始めて先生の宅を訪ねた時、先生は留守であつた。二度目に行つたのは次の日曜だと覚えている。晴れた空が身に沁み込むように感ぜられる好い日和であつた。その日も先生は留守であつた。鎌倉にいた時、私は先生自身の口から、いつでも大抵宅にいるという事を聞いた。むしろ外出嫌いだという事も聞いた。二度来て二度とも会えなかつた私は、その言葉を思い出して、理由もない不満をどこかに感じた。私はすぐ玄関先を去らなかつた。下女の顔を見て少し躊躇してそこに立っていた。この前名刺を取り次いだ記憶のある下女は、私を待たしておいてまた内へはいつた。すると奥さんらしい人が代つて出て来た。美しい奥さんであつた。

私はその人から鄭寧^{ていねい}に先生の出先を教えられた。先生は例月その日になると雑司ヶ谷^{ぞうしがや}の墓地にある或^ある仏^{ぶつ}へ花を手向け^{たむ}に行く習慣なのだそうである。「たつた今出たばかりで、十分になるかならないかでございます」と奥さんは気の毒そうにいつてくれた。私は会釈^{えしやく}して外へ出た。賑^{にぎや}かな町の方へ一丁^{ちよう}ほど歩くと、私も散歩がてら雑司ヶ谷へ行つてみる氣になった。先生に会えるか会えないかという好奇心も動いた。それですぐ踵^{きびすめぐ}を回らした。

五

私^{わたくし}は墓地の手前にある苗^{なえ} 畠^{はたけ}の左側からはいって、両方^{かえで}に楓

を植え付けた広い道を奥の方へ進んで行つた。するとその端れに
見える茶店ちやみせの中から先生らしい人がふいと出て来た。私はその
人の眼鏡めがねの縁ふちが日に光るまで近く寄つて行つた。そうして出し抜
けに「先生」と大きな声を掛けた。先生は突然立ち留まつて私の
顔を見た。

「どうして……、どうして……」

先生は同じ言葉を二遍へん繰り返した。その言葉は森閑しんかんとした昼
の中うちに異様な調子をもつて繰り返された。私は急に何とも応えら
れなくなつた。

「私の後あとを跟つけて来たのですか。どうして……」

先生の態度はむしろ落ち付いていた。声はむしろ沈んでいた。

けれどもその表情の中には判然^{はつきり}いえないような一種の曇りがあった。

私は私がどうしてここへ来たかを先生に話した。

「誰^{だれ}の墓へ参りに行つたか、妻^{さい}がその人の名をいいましたか」

「いいえ、そんな事は何もおつしやいけません」

「そうですか。——そう、それはいうはずがありませんね、始めて会つたあなたに。いう必要がないんだから」

先生はようやく得^{とく}心^{しん}したらしい様子であつた。しかし私にはその意味がまるで解^{わか}らなかつた。

先生と私は通りへ出ようとして墓の間を抜けた。依撒伯拉^{イサベラ}何々^{なになに}

の墓だの、神僕^{しんぼく}ロギンの墓だのという傍^{かたわら}に、一切衆生^{いっさいしゅじょう}悉^{しつ}

有^{ぶつしょう}仏生と書いた塔^{とうば}婆などが建ててあつた。全権公使何々とい
うのもあつた。私は安得烈と彫^ほり付けた小さい墓の前で、「これ
は何と読むんでしょう」と先生に聞いた。「アンドレとでも読ま
せるつもりでしょうね」といって先生は苦笑した。

先生はこれらの墓標が現わす人種^{ひとさま}々の様式に対して、私ほど
に滑^{こつ}稽^{けい}もアイロニーも認めてないらしかった。私が丸い墓^{はかいし}石
だの細長い御影^{みかげ}の碑^ひだのを指して、しきりにかれこれいいたがる
のを、始めのうちは黙つて聞いていたが、しまいに「あなたは死
という事実をまだ真^ま面^め目に考えた事がありませんね」といった。
私は黙つた。先生もそれぎり何ともいわなくなつた。

墓地の区切り目に、大きな銀杏^{いちょう}が一本空を隠すように立つて

いた。その下へ来た時、先生は高い梢^{こずえ}を見上げて、「もう少しすると、綺麗^{きれい}ですよ。この木がすっかり黄葉^{こうよう}して、ここいらの地面は金色^{きんいろ}の落葉で埋^{うず}まるようになります」といった。先生は月に一度ずつは必ずこの木の下を通るのであった。

向うの方で凸凹^{でこぼこ}の地面をならして新墓地を作っている男が、鍬^{くわ}の手を休めて私たちを見ていた。私たちはそこから左へ切れてすぐ街道へ出た。

これからどこへ行くという目的^{あて}のない私は、ただ先生の歩く方へ歩いて行つた。先生はいつもより口数を利^きかなかつた。それでも私はさほどの窮屈を感じなかつたので、ぶらぶらいつしよに歩いて行つた。

「すぐお宅へお帰りですか」

「ええ別に寄る所ありませんから」

二人はまた黙って南の方へ坂を下りた。

「先生のお宅の墓地はあすこにあるんですか」と私がまた口を利き出した。

「いいえ」

「どなたのお墓があるんですか。——ご親類のお墓ですか」

「いいえ」

先生はこれ以外に何も答えなかった。私もその話はそれぎりにして切り上げた。すると一町ちようほど歩いた後で、あと先生が不意にそこへ戻って来た。

「あすこには私の友達の墓があるんです」

「お友達のお墓へ毎月まいげつお参りをなさるんですか」

「そうです」

先生はその日これ以外を語らなかった。

六

私はそれから時々先生を訪問するようになった。行くと共に先生は在宅であつた。先生に会う度数どすうが重なるにつれて、私はますますしげ繁しげく先生の玄関へ足を運んだ。

けれども先生の私に対する態度は初めて挨拶あいさつをした時も、懇

意になつたその後のちも、あまり変りはなかつた。先生は何時いつも静かであつた。ある時は静か過ぎて淋さびしいくらいであつた。私は最初から先生には近づきたい不思議があるように思つていた。それでいて、どうしても近づかなければいけないという感じが、どこかに強く働いた。こういう感じを先生に対してもつていたものは、多くの人のうちであるいは私だけかも知れない。しかしその私だけにはこの直感が後のちになつて事実の上に証拠立てられたのだから、私は若々しいといわれても、馬鹿ばかげていると笑われても、それを見越した自分の直覺をとにかく頼もしくまた嬉うれしく思つてゐる。人間を愛し得うる人、愛せずにはいられない人、それでいて自分の懐ふところに入ろうとするものを、手をひろげて抱き締める事ので

きない人、——これが先生であつた。

今いった通り先生は始終静かであつた。落ち付いていた。けれども時として変な曇りがその顔を横切る事があつた。窓に黒い鳥影が射^さすように。射すかと思うと、すぐ消えるには消えたが。私が始めてその曇りを先生の眉^{みげん}間に認めたのは、雑司ヶ^{ぞうしがや}谷の墓地で、不意に先生を呼び掛けた時であつた。私はその異様の瞬間に、今まで快く流れていた心臓の潮流をちよつと鈍らせた。しかしそれは単に一時の結^{けつ}滞^{たい}に過ぎなかつた。私の心は五分と経^たたないうちに平素の弾力を回復した。私はそれぎり暗そうなこの雲の影を忘れてしまった。ゆくりなくまたそれを思い出させられたのは、
小春^{こはる}の尽きるに間^まのない或^ある晩の事であつた。

先生と話していた私は、ふと先生がわざわざ注意してくれた銀い杏ちようの大樹たいじゆを眼めの前に想おもい浮かべた。勘定してみると、先生が毎月例まいげつれいとして墓参に行く日が、それからちようど三日目に當つていた。その三日目は私の課業ひるおが午で終える楽な日であつた。私は先生に向かつてこういった。

「先生ぞうし雑司ヶ谷の銀杏はもう散つてしまつたでしようか」

「まだ空坊主からぼうずにはならないでしょう」

先生はそう答えながら私の顔を見守つた。そうしてそこからしばし眼を離さなかつた。私はすぐいった。

「今度お墓参はかまいりにいらつしやる時にお伴ともをしても宜よござんすか。

私は先生といっしよにあすこいらが散歩してみたい」

「私は墓参りに行くんで、散歩に行くんじゃないですよ」

「しかしついでに散歩をなすつたらちようど好いじやありませんか」

先生は何とも答えなかった。しばらくしてから、「私のは本当の墓参りだけなんだから」といつて、どこまでも墓参^{ぼさん}と散歩を切り離そうとする風^{ふう}に見えた。私と行きたくない口実^{くぐせ}だか何だか、私にはその時の先生が、いかにも子供らしくて変に思われた。私はなおと先へ出る気になった。

「じやお墓参りでも好いからいつしよに伴^つれて行つて下さい。私もお墓参りをしますから」

実際私には墓参と散歩との区別がほとんど無意味のように思わ

れたのである。すると先生の眉がちよつと曇つた。眼のうちにも異様の光が出た。それは迷惑とも嫌悪とも畏怖とも片付けられない微かな不安らしいものであつた。私は忽ち雑司ヶ谷で「先生」と呼び掛けた時の記憶を強く思い起した。二つの表情は全く同じだつたのである。

「私は」と先生がいった。「私はあなたに話す事のできないある理由があつて、他といつしよにあすこへ墓参りには行きたくないのです。自分の妻さえまだ伴れて行つた事がないのです」

七

わたしは不思議に思った。しかし私は先生を研究する気でその宅へ
出入りでいをするのではなかった。私はただそのままにして打ち過ぎ
た。今考えるとその時の私の態度は、私の生活のうちでむしろ尊
むべきものの一つであつた。私は全くそのために先生と人間らし
い温かい交際つきあいができたのだと思う。もし私の好奇心が幾分でも
先生の心に向かつて、研究的に働き掛けたなら、二人の間を繋ぐ
同情の糸は、何の容赦もなくその時ふつりと切れてしまつたらう。
若い私は全く自分の態度を自覺していなかつた。それだから尊い
のかも知れないが、もし間違えて裏へ出たとしたら、どんな結果
が二人の仲に落ちて来たらう。私は想像してもぞつとする。先生
はそれでもなくとも、冷たい眼まなこで研究されるのを絶えず恐れていた

のである。

私は月に二度もしくは三度ずつ必ず先生の宅へ行くようになった。私の足が段々繁しげくなつた時のある日、先生は突然私に向かつて聞いた。

「あなたは何でそうたびたび私のようなものの宅へやって来るのですか」

「何でといつて、そんな特別な意味はありません。——しかしお邪魔じやまなんですか」

「邪魔だとはいいません」

なるほど迷惑という様子は、先生のどこにも見えなかった。私は先生の交際の範囲の極きわめて狭い事を知っていた。先生の元の同

級生などで、その頃東京^{ところ}にいるものはほとんど二人か三人しかないという事も知っていた。先生と同郷の学生などには時たま座敷で同座する場合もあつたが、彼らのいずれもは皆^{みんな}な私ほど先生に親しみをもっていないように見受けられた。

「私は淋^{さび}しい人間です」と先生がいった。「だからあなたの来て下さる事を喜んでいます。だからなぜそうたびたび来るのかといつて聞いたのです」

「そりやまたなぜです」

私がこう聞き返した時、先生は何とも答えなかつた。ただ私の顔を見て「あなたは幾^{いくつ}歳ですか」といった。

この問答は私にとってすこぶる不得^{ふとくようりよう}要領^{ようりよう}のものであつたが、

私はその時底^{そこ}まで押さずに帰ってしまった。しかもそれから四日と経^たたないうちにまた先生を訪問した。先生は座敷へ出るや否^{いな}や笑い出した。

「また来ましたね」といった。

「ええ来ました」といって自分も笑った。

私は外^{ほか}の人からこういわれたらきつと癩^{しやくさわ}に触ったろうと思う。

しかし先生にこういわれた時は、まるで反対であつた。癩に触らないばかりでなくかえつて愉快だつた。

「私は淋^{さび}しい人間です」と先生はその晩またこの間の言葉を繰り返した。「私は淋しい人間ですが、ことによるとあなたも淋しい人間じゃないですか。私は淋しくつても年を取っているから、動

かずにいられるが、若いあなたはそうは行かないでしょう。動けるだけ動きたいでしょう。動いて何かに打^ぶつかりたいのでしょう……」

「私はちつとも淋^{さむ}しくはありません」

「若いうちほど淋^{さむ}しいものはありません。そんならなぜあなたはそうたびたび私の宅^{うち}へ来るのですか」

ここでもこの間の言葉がまた先生の口から繰り返された。

「あなたは私に会ってもおそらくまだ淋^{さび}しい気がどこかでしているでしょう。私にはあなたのためにその淋しさを根元^{ねもと}から引き抜いて上げるだけの力がないんだから。あなたは外^{ほか}の方を向いて今に手を広げなければなりません。今に私の宅の方へは足が

向かなくなります」

先生はこういつて淋しい笑い方をした。

八

幸いにして先生の予言は実現されずに済んだ。経験のない当時^{さいわ}の私は、この予言の中に含まれている明白な意義さえ了解し得な^{わたくし}かった。私は依然として先生に会いに行つた。その内^{うち}いつの間にか先生の食卓で飯^{めし}を食うようになった。自然の結果奥さんとも口を利^きかなければならないようになった。

普通の人間として私は女に対して冷淡ではなかつた。けれども

年の若い私の今まで経過して来た境遇からいって、私はほとんど交際らしい交際を女に結んだ事がなかった。それが原因^{げんいん}かどうかは疑問だが、私の興味は往来で出合う知りもしない女に向かつて多く働くだけであつた。先生の奥さんにはその前玄関で会つた時、美しいという印象を受けた。それから会うたんびに同じ印象を受けない事はなかった。しかしそれ以外に私はこれといつてとくに奥さんについて語るべき何物ももたないような気がした。

これは奥さんに特色がないというよりも、特色を示す機会が来なかつたのだと解釈する方が正當かも知れない。しかし私はいつでも先生に付属した一部分のような心持で奥さんに対していた。奥さんも自分の夫の所へ来る書生だからという好意で、私を遇し

ていたらしい。だから中間に立つ先生を取り除ければ、つまり二人はばらばらになっていた。それで始めて知り合いになった時の奥さんについては、ただ美しいという外ほかに何の感じも残っていない。

ある時私は先生の宅うちで酒を飲まされた。その時奥さんが出て来てそばしやく傍で酌をしてくれた。先生はいつもより愉快そうに見えた。奥さんに「お前も一つお上がり」といって、自分の呑のみ干さした盃さかずきを差した。奥さんは「私は……」と辞退しかけた後あと、迷惑そうにそれを受け取った。奥さんは綺麗な眉きれいまゆを寄せて、私の半分ばかり注いで上げた盃を、唇の先へ持つて行つた。奥さんと先生の間に下のような会話が始まつた。

「珍しい事。私に吞めとおつしやった事は滅多めったにないのにね」
「お前は嫌いきらいだからさ。しかし稀たまには飲むといいよ。好い心持になるよ」

「ちつともならないわ。苦しいぎりで。でもあなたは大変ご愉快ゆかいそうね、少しご酒しゅを召し上がると」

「時によると大変愉快になる。しかしいつでもというわけにはいかない」

「今夜はいかがです」

「今夜は好いいい心持だね」

「これから毎晩少しずつ召し上がると宜よござんすよ」

「そうはいかない」

「召し上がって下さいよ。その方が淋さむしくなくって好いから」

先生の宅うちは夫婦と下女げじよだけであつた。行いくたたびに大抵たいていはひそりとしていた。高い笑い声などの聞こえる試しはまるでなかつた。或ある時ときは宅の中うちの中にいるものは先生と私だけのようないふがした。

「子供でもあると好いんですがね」と奥さんは私の方を向いていいつた。私は「そうですな」と答えた。しかし私の心には何の同情も起おけなかつた。子供を持もつた事のないその時の私は、子供をたただ蒼蠅うるさいもののように考かんえていた。

「一人貰もらつてやろうか」と先生がいつた。

貰もらッ子じや、ねえあなた」と奥さんはまた私の方を向むいた。

「子供はいつまで経たつたつてできつこないよ」と先生がいつた。

奥さんは黙っていた。「なぜです」と私が代りに聞いた時先生は「天罰だからさ」といつて高く笑った。

九

私の知る限り先生と奥さんとは、仲の好い夫婦のいつつい対であつた。家庭の一員として暮した事のない私のことだから、深い消息は無論解らなかつたけれども、座敷で私と対坐たいざしている時、先生は何かのついでに、下女げじよを呼ばないで、奥さんと呼ぶ事があつた。（奥さんの名は静しずといった）。先生は「おい静」といつでも襖ふすまの方を振り向いた。その呼びかたが私には優しく聞こえた。返事を

して出て来る奥さんの様子も甚だ素直であつた。ときたまご馳走ちそうになつて、奥さんが席へ現われる場合などには、この関係が一層明らかに二人の間に描き出されるようであつた。あいだえが

先生は時々奥さんを伴つれて、音楽会だの芝居だのに行つた。それから夫婦づれで一週間以内の旅行をした事も、私の記憶によると、二、三度以上あつた。私は箱根はこねから貰つた絵端書えはがきをまだ持つている。日光にっこうへ行つた時は紅葉もみじの葉を一枚封じ込めた郵便も貰つた。

当時の私の眼に映つた先生と奥さんの間柄はまずこんなものであつた。そのうちにたつた一つの例外があつた。ある日私がいつもの通り、先生の玄関から案内を頼もうとすると、座敷の方でだ

れかの話し声がした。よく聞くと、それが尋常の談話でなくつて、
どうも言逆^{いさか}いらしかった。先生の宅は玄関の次がすぐ座敷になつ
ているので、格子^{こうし}の前に立っていた私の耳にその言逆^{いさか}いの調子だ
けはほぼ分った。そうしてそのうちの一人が先生だという事も、
時々高まつて来る男の方の声で解った。相手は先生よりも低い音^{おん}
なので、誰だか判^{はつきり}然しなかったが、どうも奥さんらしく感ぜら
れた。泣いているようでもあった。私はどうしたものだろうと思
つて玄関先で迷つたが、すぐ決心をしてそのまま下宿へ帰つた。
妙に不安な心持が私を襲つて来た。私は書物を読んでも呑^のみ込
む能力を失つてしまった。約一時間ばかりすると先生が窓の下へ
来て私の名を呼んだ。私は驚いて窓を開けた。先生は散歩しよう

といつて、下から私を誘つた。先刻さつき帯の間へ包くるんだままの時計を出して見ると、もう八時過ぎであつた。私は歸つたなりまだ袴はかまを着けていた。私はそれなりすぐ表へ出た。

その晩私は先生といつしよに麦酒ビールを飲んだ。先生は元來酒量に乏しい人であつた。ある程度まで飲んで、それで酔えなければ、酔うまで飲んでみるという冒険のできない人であつた。

「今日は駄目だめです」といって先生は苦笑した。

「愉快になれませんか」と私は氣の毒そうに聞いた。

私の腹の中には始終先刻さつきの事が引ひつ懸かつていた。肴さかなの骨が咽喉のどに刺さつた時のように、私は苦しんだ。打ち明けてみようかと考えた、止よした方が好よかろうかと思ひ直したりする動搖が、妙に

私の様子をそわそわさせた。

「君、今夜はどうかしていますね」と先生の方からいい出した。

「実は私も少し変なのですよ。君に分りますか」

私は何の答えもし得なかった。

「実は先刻妻と少し喧嘩さつきさいをしてね。それで下くだらない神経を昂奮こうふんさせてしまったんです」と先生がまたいった。

「どうして……」

私には喧嘩という言葉が口へ出て来なかった。

「妻が私を誤解するのです。それを誤解だといって聞かせても承知しないのです。つい腹を立てたのです」

「どんなに先生を誤解なさるんですか」

先生は私のこの問いに答えようとはしなかった。

「妻が考えているような人間なら、私だってこんなに苦しんでいやしない」

先生がどんなに苦しんでいるか、これも私には想像の及ばない問題であつた。

十

二人が帰るとき歩きながらの沈黙が一丁も二丁もつづいた。その後で突然先生が口を利き出した。

「悪い事をした。怒って出たから妻はさぞ心配をしているだろう。」

考えると女は可愛^{かわい}い哀^{あは}れそうなものです。私の妻などは私より外^{ほか}にまるで頼りにするものがないんだから」

先生の言葉はちよつとそこで途切^{とぎ}れたが、別に私の返事を期待する様子もなく、すぐその続きへ移つて行つた。

「そういうと、夫の方はいかにも心丈夫のようで少し滑稽^{こっけい}だが。君、私は君の眼にどう映りますかね。強い人に見えますか、弱い人に見えますか」

「中^{ちゆうぐらい}位に見えます」と私は答えた。この答えは先生にとって少し案外^{あんがい}らしかつた。先生はまた口を閉じて、無言で歩き出した。先生の宅^{うち}へ帰るには私の下宿^{しよく}のついで^{そば}を通るのが順路であつた。私はそこまで来て、曲り角で分れるのが先生に済まないような気

がした。「ついでにお宅の前までお伴ともしようか」といった。

先生は忽ち手たちまで私を遮さへぎった。

「もう遅いから早く帰りましたまゑ。私も早く帰つてやるんだから、

妻さいくん君のために」

先生が最後に付け加えた「妻君のために」という言葉は妙にその時の私の心を暖かにした。私はその言葉のために、帰つてから安心して寝る事ができた。私はその後ごも長い間この「妻君のために」という言葉を忘れなかつた。

先生と奥さんの間に起つた波瀾はらんが、大したものではない事はこれでも解わかつた。それがまた滅多めったに起る現象でなかつた事も、その後絶えず出で入いりをして来た私にはほぼ推察ができた。それどころか

先生はある時こんな感想すら私に洩^もらした。

「私は世の中で女というものをたった一人しか知らない。妻^{さい}以外の女はほとんど女として私に訴えないのです。妻の方でも、私を天下にただ一人しかない男と思っています。そういう意味からいって、私たちは最も幸福に生れた人間の^{いっつい}一対であるべきはずです」

私は今前後の行き掛^ゆりを忘^がれてしまったから、先生が何のためにこんな自白を私にして聞かせたのか、判^は然^っという事ができない。けれども先生の態度の真面目^{まじめ}であつたのと、調子の沈んでいたのとは、いまだに記憶に残っている。その時ただ私の耳に異様に響いたのは、「最も幸福に生れた人間の^{いっつい}一対であるべきはずです」

という最後の一句であつた。先生はなぜ幸福な人間といい切らないで、あるべきはずであると断つたのか。私にはそれだけが不審であつた。ことにそこへ一種の力を入れた先生の語氣が不審であつた。先生は事實はたして幸福なのだろうか、また幸福であるべきはずでありながら、それほど幸福でないのだろうか。私は心うちの中うちで疑うたぐらざるを得なかつた。けれどもその疑いは一時限りどこかへ葬ほうむられてしまつた。

私はそのうち先生の留守に行つて、奥さんと二人差さ向むかいで話をする機会に出合つた。先生はその日横よこ浜はまを出しゅ帆つぱんする汽船に乗つて外国へ行くべき友人を新橋しんばしへ送りに行つて留守であつた。横浜から船に乗る人が、朝八時半の汽車で新橋を立つのはそ

の頃ころの習慣であつた。私はある書物について先生に話してもらふ必要があつたので、あらかじめ先生の承諾を得た通り、約束の九時に訪問した。先生の新橋行きは前日わざわざ告別に來た友人に對する礼義れいぎとしてその日突然起つた出来事であつた。先生はすぐ歸るから留守でも私に待っているようにといい残して行つた。それで私は座敷へ上がつて、先生を待つ間、奥さんと話をした。

十一

その時の私わたくしはすでに大学生であつた。始めて先生の宅うちへ來た頃ころから見るとずっと成人した氣でいた。奥さんとも大分懇意だいぶになつ

た後^{のち}であつた。私は奥さんに対して何の窮屈も感じなかつた。差^さ向^{むか}いで色々の話をした。しかしそれは特色のないただの談話だから、今ではまるで忘れてしまった。そのうちでたつた一つ私の耳に留まつたものがある。しかしそれを話す前に、ちよつと断つておきたい事がある。

先生は大学出身であつた。これは始めから私に知れていた。しかし先生の何もしないで遊んでいるという事は、東京へ歸つて少し経^たつてから始めて分つた。私はその時どうして遊んでいられるのかと思つた。

先生はまるで世間に名前を知られていない人であつた。だから先生の学問や思想については、先生と密^{みっせつ}切^{けつ}の關係をもっている

私より外ほかに敬意を払うもののあるべきはずがなかった。それを私は常に惜おしい事だといった。先生はまた「私のようなものが世の中へ出て、口を利きいては済まない」と答えるぎりで、取り合わなかった。私にはその答えが謙遜けんそん過ぎてかえって世間を冷評するようにも聞こえた。実際先生は時々昔の同級生で今著名になつてゐる誰だれ彼かれを捉とらえて、ひどく無遠慮な批評を加える事があつた。それで私は露骨にその矛盾を挙げて云々うんぬんしてみた。私の精神は反抗の意味というよりも、世間が先生を知らないで平氣でいるのが残念だったからである。その時先生は沈んだ調子で、「どうしても私は世間に向かつて働き掛ける資格のない男だから仕方がありません」といった。先生の顔には深い一種の表情がありありと

刻まれた。私にはそれが失望だか、不平だか、悲哀だか、解^{わか}らなかつたけれども、何しろ二の句の継げないほどに強いものだつたので、私はそれぎり何もいう勇気が出なかつた。

私が奥さんと話している間に、問題が自然先生の事からそこへ落ちて来た。

「先生はなぜああやって、宅で考えたり勉強したりなさるだけで、世の中へ出て仕事をなさらないんでしょう」

「あの人は駄^だ目^めですよ。そういう事が嫌いなんですから」

「つまり下^{くだ}らない事だと悟つていらつしやるんでしょうか」

「悟るの悟らないのつて、——そりや女だからわたくしには解りませんけれど、おそらくそんな意味じゃないでしょう。やつぱり

何かやりたいのでしよう。それでいてできないんです。だから気の毒ですわ」

「しかし先生は健康からいって、別にどこも悪いところはないよ
うじやありませんか」

「丈夫ですとも。何にも持病はありません」

「それでなぜ活動ができないんでしょう」

「それが解^{わか}らないのよ、あなた。それが解るくらいなら私だって、
こんなに心配しやしません。わからないから気の毒でたまらない
んです」

奥さんの語気には非常に同情があつた。それでも口元^{まじめ}だけには
微笑が見えた。外側からいえば、私の方がむしろ真面目^{まじめ}だった。

私はむずかしい顔をして黙っていた。すると奥さんが急に思い出したようにまた口を開いた。

「若い時はあんな人じゃなかったんですよ。若い時はまるで違っていました。それが全く変ってしまっただけです」

「若い時っていつ頃ですか」と私が聞いた。

「書生時代よ」

「書生時代から先生を知っていらっしやっただけですか」
奥さんは急に薄赤い顔をした。

奥さんは東京の人であつた。それはかつて先生からも奥さん自身からも聞いて知つていた。奥さんは「本当あいうと合この子こなんですよ」といった。奥さんの父親はたしか鳥取とっとりかどこかの出であるのに、お母さんの方はまだ江戸といった時分じぶんの市ヶ谷いちがやで生れた女なので、奥さんは冗談半分そういつたのである。ところが先生は全く方角違いの新潟にいがた県人であつた。だから奥さんがもし先生の書生時代を知っているとすれば、郷里の関係からでない事は明らかであつた。しかし薄赤い顔をした奥さんはそれより以上の話をしたくないようだったので、私の方でも深くは聞かずに聞いた。

先生と知り合いになつてから先生の亡くなるまでに、私はずいぶん色々の問題で先生の思想や情操に触れてみたが、結婚当時の

状況については、ほとんど何もかも聞き得なかった。私は時によると、それを善意に解釈してもみた。年輩の先生の事だから、艶^{なま}めかしい回想などを若いものに聞かせるのはわざと慎^{つつし}んでいるのだらうと思った。時によると、またそれを悪くも取った。先生に限らず、奥さんに限らず、二人とも私に比べると、一時代前の因襲のうちに成人したために、そういう艶^{つや}っぽい問題になると、正直に自分を開放するだけの勇気がないのだらうと考えた。もっともどちらも推測に過ぎなかった。そうしてどちらの推測の裏にも二人の結婚の奥に横たわる花やかなロマンスの存在を仮定していた。

私の仮定ははたして誤らなかった。けれども私はただ恋の半面

だけを想像に描き得たに過ぎなかった。先生は美しい恋愛の裏に、恐ろしい悲劇を持っていた。そうしてその悲劇のどんなに先生にとつて見惨みじめなものであるかは相手の奥さんにまるで知れていなかった。奥さんは今でもそれを知らずにいる。先生はそれを奥さんに隠して死んだ。先生は奥さんの幸福を破壊する前に、まず自分の生命を破壊してしまった。

私は今この悲劇について何事も語らない。その悲劇のためにむしろ生れ出たともいえる二人の恋愛については、先刻さつきいった通りであった。二人とも私にはほとんど何も話してくれなかった。奥さんは慎みのために、先生はまたそれ以上の深い理由のために。ただ一つ私の記憶に残っている事がある。或る時あ花時はなじぶん分に私

は先生といっしよに上野^{うえの}へ行つた。そうしてそこで美しい一対^{いっつい}の男女^{なんによ}を見た。彼らは睦^{むつ}まじそうに寄り添つて花の下を歩いてゐた。場所が場所なので、花よりもそちらを向いて眼を峙^{そば}だててゐる人が沢山あつた。

「新婚の夫婦のようだね」と先生がいつた。

「仲^よが好さそうですね」と私が答えた。

先生は苦笑さえしなかつた。二人の男女を視線の外^{ほか}に置くような方角へ足を向けた。それから私にこう聞いた。

「君は恋をした事がありますか」

私はないと答えた。

「恋をしたくはありませんか」

私は答えなかった。

「したくない事はないでしょう」

「ええ」

「君は今あの男と女を見て、冷評ひやかしましたね。あの冷評ひやかのうちに
は君が恋を求めながら相手を得られないという不快まじの聲が交まじつて
いますよう」

「そんな風ふうに聞こえましたか」

「聞こえました。恋の満足を味わっている人はもつと暖かい声を
出すものです。しかし……しかし君、恋は罪惡ですよ。解わかつてい
ますか」

私は急に驚かされた。何とも返事をしなかった。

十三

我々は群集の中にいた。群集はいずれも嬉しうれそうな顔をしていた。そこを通り抜けて、花も人も見えない森の中へ来るまでは、同じ問題を口にする機会がなかった。

「恋は罪悪ですか」と私わたくしがその時突然聞いた。

「罪悪です。たしかに」と答えた時の先生の語気は前と同じように強かった。

「なぜですか」

「なぜだか今に解ります。今にじゃない、もう解っているはずで

す。あなたの心はとつくの昔からすでに恋で動いているじやありませんか」

私は一応自分の胸の中を調べて見た。けれどもそこは案外に空虚であつた。思いあたるようなものは何にもなかった。

「私の胸の中にこれという目的物は一つもありません。私は先生に何も隠してはいないつもりです」

「目的物が無いから動くのです。あれば落ち付けるだろうと思つて動きたくなるのです」

「今それほど動いちゃいません」

「あなたは物足りない結果私の所に動いて来たじやありませんか」
「それはそうかも知れません。しかしそれは恋とは違います」

「恋に上るのぼ階段かいだんなんです。異性と抱き合う順序として、まず同性の私の所へ動いて来たのです」

「私には二つのものが全く性質を異ことにしているように思われます」

「いや同じです。私は男としてどうしてもあなたに満足を与えられない人間なのです。それから、ある特別の事情があつて、なおさらあなたに満足を与えられないでいるのです。私は実際お気の毒に思っています。あなたが私からよそへ動いて行くのは仕方がない。私はむしろそれを希望しているのです。しかし……」

私は変に悲しくなった。

「私が先生から離れて行くようにお思になれば仕方がありませんが、私にそんな気の起った事はまだありません」

先生は私の言葉に耳を貸さなかった。

「しかし気を付けないといけない。恋は罪悪なんだから。私の所では満足が得られない代りに危険もないが、——君、黒い長い髪で縛られた時の心持を知っていますか」

私は想像で知っていた。しかし事実としては知らなかった。いずれにしても先生のいう罪悪という意味は朦朧もうろうとしてよく解わからなかった。その上私は少し不愉快になった。

「先生、罪悪という意味をもっと判然はつきりいつて聞かして下さい。

それでなければこの問題をここで切り上げて下さい。私自身に罪悪という意味が判然解るまで」

「悪い事をした。私はあなたに真実まことを話している気でいた。とこ

ろが實際は、あなたを焦慮^{じら}していたのだ。私は悪い事をした」

先生と私とは博物館の裏から鶯^{うぐいすだに} 溪^{すきま}の方角に静かな歩調で歩

いて行つた。垣の隙間から広い庭の一部に茂る熊笹^{くまざさ}が幽邃^{ゆうすい}に

見えた。

「君は私がなぜ毎月^{まいげつ} 雑誌^{ぞうし}司ケ谷^{しがや}の墓地に埋^{うま}っている友人の墓へ参るのか知っていますか」

先生のこの問いは全く突然であつた。しかも先生は私がこの問いに対して答えられないという事もよく承知していた。私はしばらく返事をしなかつた。すると先生は始めて気が付いたようにこういつた。

「また悪い事をいつた。焦慮^{じら}せるのが悪いと思つて、説明しよう

とすると、その説明がまたあなたを焦慮せるような結果になる。どうも仕方がない。この問題はこれで止めましよう。とにかく恋は罪悪ですよ、よござんすか。そうして神聖なものですよ」

私には先生の話がますます解^{わか}らなくなった。しかし先生はそれぎり恋を口にしなかった。

十四

年の若い私^{わたくし}はややともすると一^{いち}図^ずになりやすかった。少なくとも先生の眼にはそう映っていたらしい。私には学校の講義よりも先生の談話の方が有益なのであった。教授の意見よりも先生の思

想の方が有難いのであった。とどの詰まりをいえば、教壇に立つて私を指導してくれる偉い人々よりもただ独りひとを守つて多くを語らない先生の方が偉く見えたのであった。

「あんまり逆上のぼせちやいけません」と先生がいった。

「覚めた結果としてそう思うんです」と答えた時の私には充分の自信があつた。その自信を先生は肯うけがつてくれなかつた。

「あなたは熱に浮かされているのです。熱がさめると厭いやになります。私は今のあなたからそれほどに思われるのを、苦しく感じています。しかしこれから先のあなたに起るべき変化を予想して見ると、なお苦しくなります」

「私はそれほど軽薄に思われているんですか。それほど不信用な

んですか」

「私はお気の毒に思うのです」

「気の毒だが信用されないとおっしゃるんですか」

先生は迷惑そうに庭の方を向いた。その庭に、この間まで重そうな赤い強い色をぽたぽた点じていた椿つばきの花はもう一つも見えなかった。先生は座敷からこの椿の花をよく眺ながめる癖があつた。

「信用しないって、特にあなたを信用しないんじゃない。人間全体を信用しないんです」

その時生垣いけがきの向うで金魚売りらしい声がした。その外ほかには何の聞こえるものもなかった。大通りから二丁ちようも深く折れ込んだ小路うじは存外ぞんがい静かであつた。家の中はいつもの通りひっそりしてい

た。私は次の間に奥さんまのいる事を知っていた。黙って針仕事か何かしている奥さんの耳に私の話し声が聞こえるという事も知っていた。しかし私は全くそれを忘れてしまった。

「じや奥さんも信用なさらないんですか」と先生に聞いた。

先生は少し不安な顔をした。そうして直接の答えを避けた。

「私は私自身さえ信用していないのです。つまり自分で自分が信用できないから、人も信用できないようになっていのです。自分を呪のろうより外ほかに仕方がないのです」

「そうむずかしく考えれば、誰だって確かなものはないでしょう」「いや考えたんじゃない。やったんです。やった後で驚いたんです。そうして非常に怖こわくなったんです」

私はもう少し先まで同じ道を辿^{たど}って行きたかった。すると襖^{ふすま}の陰で「あなた、あなた」という奥さんの声が二度聞こえた。先生は二度目に「何だい」といった。奥さんは「ちよつと」と先生を次の間^まへ呼んだ。二人の間にどんな用事が起つたのか、私には解^{わか}らなかった。それを想像する余裕を与えないほど早く先生はまた座敷へ歸つて来た。

「とにかくあまり私を信用してはいけませんよ。今に後悔するから。そうして自分が欺^{あざむ}かれた返報に、残酷な復讐^{ふくしゅう}をするようになるものだから」

「そりやどういう意味ですか」

「かつてはその人の膝^{ひざ}の前に跪^{ひざまず}いたという記憶が、今度はその人

の頭の上に足を載せさせようとするのです。私は未来の侮辱を受けないために、今の尊敬を斥けたいと思うのです。私は今より一層淋しい未来の私を我慢する代りに、淋しい今の私を我慢したいのです。自由と独立と己れとに充ちた現代に生れた我々は、その犠牲としてみんなこの淋しみを味わわなくてはならないでしょう」

私はこういう覚悟をもっている先生に対して、いうべき言葉を知らなかった。

十五

その後私は奥さんの顔を見るたびに気になった。先生は奥さん

に對しても始終こういう態度に出るのだろうか。もしそうだとすれば、奥さんはそれで満足なのだろうか。

奥さんの様子は満足とも不満足とも極めようがなかった。私はそれほど近く奥さんに接触する機会がなかったから。それから奥さんは私に会うたびに尋常であつたから。最後に先生のいる席でなければ私と奥さんとは滅多に顔を合せなかつたから。

私の疑惑はまだその上にもあつた。先生の人間に對するこの覺悟はどこから来るのだろうか。ただ冷たい眼で自分を内省したり現代を觀察したりした結果なのだろうか。先生は坐つて考える質の人であつた。先生の頭さえあれば、こういう態度は坐つて世の中を考えていても自然と出て来るものだろうか。私にはそうばか

りとは思えなかった。先生の覚悟は生きた覚悟らしかった。火に焼けて冷却し切った石造家屋の輪廓りんかくとは違っていた。私の眼に映ずる先生はたしかに思想家であつた。けれどもその思想家の纏まとめ上げた主義の裏には、強い事実が織り込まれているらしかった。自分と切り離された他人の事実でなくつて、自分自身が痛切に味わつた事実、血が熱くなつたり脈が止まつたりするほどの事実が、畳み込まれているらしかった。

これは私の胸で推測するものはない。先生自身すでにそうだと告白していた。ただその告白が雲の峯みねのようであつた。私の頭の上に正体の知れない恐ろしいものを蔽おほい被かぶせた。そうしてなぜそれが恐ろしいか私にも解わからなかつた。告白はぼうとしていた。

それでいて明らかに私の神経を震ふるわせた。

私は先生のこの人生観の基点に、或る強烈な恋愛事件を仮定してみた。（無論先生と奥さんとの間に起った）。先生がかつて恋は罪悪だといった事から照らし合せて見ると、多少それが手掛りにもなつた。しかし先生は現に奥さんを愛していると私に告げた。すると二人の恋からこんな厭えん世せいに近い覚悟が出ようはずがなかつた。「かつてはその人の前に跪ひざまずいたという記憶が、今度はその人の頭の上に足を載のせさせようとする」といった先生の言葉は、現代一般の誰彼たれかれについて用いられるべきで、先生と奥さんの間には当てはまらないもののもあつた。

雑司ヶ谷ぞうしがやにある誰だれだか分らない人の墓、——これも私の記憶に

時々動いた。私はそれが先生と深い縁故のある墓だという事を知っていた。先生の生活に近づきつつありながら、近づく事のできない私は、先生の頭の中にある生命いのちの断片として、その墓を私の頭の中にも受け入れた。けれども私に取ってその墓は全く死んだものであった。二人の間にある生命いのちの扉を開ける鍵かぎにはならなかった。むしろ二人の間に立って、自由の往来を妨げる魔物のようであった。

そうこうしているうちに、私はまた奥さんと差し向いで話をしなければならぬ時機が来た。その頃は日ころの詰つまって行くせわしない秋に、誰も注意を惹ひかれる肌寒はださむの季節であった。先生の附近ふきんで盗難に罹かかったものが三、四日続いて出た。盗難はいずれも宵の

口であつた。大したものを持って行かれた家はほとんどなかったけれども、はいられた所では必ず何か取られた。奥さんは気味をわるくした。そこへ先生がある晩家を空けなければならぬ事情ができてきた。先生と同郷の友人で地方の病院に奉職しているものが上京したため、先生は外の二、三名と共に、ある所でその友人に飯を食わせなければならぬなつた。先生は訳を話して、私に帰ってくる間までの留守番を頼んだ。私はすぐ引き受けた。

十六

私^{わたくし}の行つたのはまだ灯^ひの点^{つつ}くか点かない暮れ方であつたが、几^き

ちようめん

帳面な先生はもう宅にいなかった。「時間に後れると悪いって、

つい今しがた出掛けました」といった奥さんは、私を先生の書斎へ案内した。

書斎には洋机テーブルと椅子いすの外に、沢山の書物が美しい背皮せがわを並べ

て、硝子越ガラスごしに電燈でんとうの光で照らされていた。奥さんは火鉢の前

に敷いた座蒲団ざぶとんの上へ私を坐すわらせて、「ちつとそこいらにある本

でも読んでいて下さい」と断って出て行つた。私はちようど主人

の帰りを待ち受ける客のような気がして済まなかった。私は畏かしこま

ったまま烟草タバコを飲んでいた。奥さんが茶の間で何か下女げじょに話して

いる声が聞こえた。書斎は茶の間の縁側を突き当つて折れ曲つた

角かどにあるので、棟むねの位置からいうと、座敷よりもかえつて掛け離

れた静かさを領^{りよう}していた。ひとしきりで奥さんの話し声が已^やむと、後はしんとした。私は泥棒を待ち受けるような心持で、凝^{じっ}としながら気をどこかに配った。

三十分ほどすると、奥さんがまた書斎の入口へ顔を出した。

「おや」といって、軽く驚いた時の眼を私に向けた。そうして客に來た人のように鹿^{しか}爪^{つめ}らしく控えている私をおかしそうに見た。

「それじゃ窮屈でしょう」

「いえ、窮屈じゃありません」

「でも退屈でしょう」

「いいえ。泥棒が来るかと思つて緊張しているから退屈でもありません」

奥さんは手に紅茶茶碗こうちやぢやわんを持ったまま、笑いながらそこに立っていた。

「ここは隅つこだから番をするには好くありませんね」と私がいった。

「じゃ失礼ですがもつと真中へ出て来て頂戴。ご退屈ちようだい たいくつだろうと思つて、お茶を入れて持つて来たんですが、茶の間で宜しければあちらで上げますから」

私は奥さんの後あとに尾ついて書齋を出た。茶の間には綺麗きれいな長火鉢ながひばちに鉄瓶てつびんが鳴なっていた。私はそこで茶と菓子のご馳走ちそうになつた。奥さんは寝ねられないといけないといつて、茶碗に手を触れなかつた。

「先生はやつぱり時々こんな会へお出掛けになるんですか」

「いいえ滅多に出た事はありません。近頃は段々人の顔を見るのが嫌いになるようです」

こういつた奥さんの様子に、別段困つたものだという風も見えなかつたので、私はつい大胆になつた。

「それじゃ奥さんだけが例外なんですか」

「いいえ私も嫌われている一人なんです」

「そりや嘘です」と私がいつた。「奥さん自身嘘と知りながらそうおっしゃるんでしょう」

「なぜ」

「私にいわせると、奥さんが好きになつたから世間が嫌いになる

んですもの」

「あなたは学問をする方^{かた}だけあつて、なかなかお上手^{じょうず}ね。空^{から}っぽな理屈を使いこなす事が。世の中が嫌いになつたから、私までも嫌いになつたんだともいわれるじやありませんか。それと^{おん}なじ理屈で」

「両方ともいわれる事はいわれますが、この場合は私の方が正しいのです」

「議論はいやよ。よく男の方は議論だけなさるのね、面白そうに。空^{からさ}の盃でよくああ飽^あきずに^{けんしゅう}献酬^{けんしゅう}ができると思いますわ」

奥さんの言葉は少し手痛^{てひど}かった。しかしその言葉の耳^{みみ}障^{ざわり}かという、決して猛烈なものではなかった。自分に頭脳のある事

を相手に認めさせて、そこに一種の誇りを見出すほどに奥さんは現代的でなかった。奥さんはそれよりもつと底の方に沈んだ心を大事にしているらしく見えた。

十七

私はまだその後わたくしあとにいうべき事をもっていた。けれども奥さんいたずらから徒らに議論を仕掛ける男のように取られては困ると思つて遠慮した。奥さんは飲み干した紅茶茶碗こうちやぢやわんの底を覗のぞいて黙っている。私を外そらさないように、「もう一杯上げましょうか」と聞いた。私はすぐ茶碗を奥さんの手に渡した。

「いくつ？ 一つ？ ニツつ？」

妙なもので角砂糖をつまみ上げた奥さんは、私の顔を見て、茶碗の中へ入れる砂糖の数かずを聞いた。奥さんの態度は私に媚こびるというほどではなかったけれども、先刻さつきの強い言葉を力つとめて打ち消そうとする愛嬌あいきように充みちていた。

私は黙って茶を飲んだ。飲んでしまっても黙っていた。

「あなた大変黙り込こじまったのね」と奥さんがいった。

「何かいうとまた議論を仕掛けるなんて、叱しかり付けられそうですから」と私は答えた。

「まさか」と奥さんが再びいった。

二人はそれを緒いとくち口くちにまた話を始めた。そうしてまた二人に共

通な興味のある先生を問題にした。

「奥さん、先刻さつきの続きをもう少しいわせて下さいませんか。奥さんには空からな理屈と聞こえるかも知れませんが、私はそんな上うわの空でいってゐる事じゃないんだから」

「じゃおつしやい」

「今奥さんが急にいなくなつたとしたら、先生は現在の通りで生きていられるでしょうか」

「そりや分らないわ、あなた。そんな事、先生に聞いて見るより外ほかに仕方がないじやありませんか。私の所へ持つて来る問題じやないわ」

「奥さん、私は真面目まじめですよ。だから逃げちゃいけません。正直

に答えなくっちゃ」

「正直よ。正直にいつて私には分らないのよ」

「じや奥さんは先生をどのくらい愛していらっしゃるんですか。これは先生に聞くよりむしろ奥さんに伺っていい質問ですから、あなたに伺います」

「何もそんな事を開き直って聞かなくつても好いじゃありませんか」

「真面目くさって聞くがものはない。分り切つてるとおっしゃるんですか」

「まあそうよ」

「そのくらい先生に忠実なあなたが急にいなくなったら、先生は

どうなるんでしょう。世の中のどっちを向いても面白そうでない先生は、あなたが急にいなくなったら後でどうなるでしょう。先生から見てもじやない。あなたから見てもです。あなたから見ても先生は幸福になるでしょうか、不幸になるでしょうか」

「そりや私から見れば分っています。（先生はそう思っていないかも知れませんが）。先生は私を離れれば不幸になるだけです。あるいは生きていられないかも知れませんが、おのぼ己惚れになるようですが、私は今先生を人間としてできるだけ幸福にしているんだと信じていますわ。どんな人があっても私ほど先生を幸福にできるものはないとまで思い込んでいますわ。それだからこうして落ち付いていられるんです」

「その信念が先生の心に好く映るはずだと私は思いますが」

「それは別問題ですわ」

「やっぱり先生から嫌われているとおっしゃるんですか」

「私は嫌われているとは思いません。嫌われる訳がないんですもの。しかし先生は世間が嫌いなんでしょう。世間というより近頃では人間が嫌いになつているんでしょう。だからその人間の一人として、私も好かれるはずがないじゃありませんか」

奥さんの嫌われているという意味がやっと私に呑み込めた。

十八

わたくし

私は奥さんの理解力に感心した。奥さんの態度が旧式の日本の女らしくないところも私の注意に一種の刺戟しげきを与えた。それで奥さんはその頃流行り始めたいわゆる新しい言葉などはほとんど使わなかった。

私は女というものに深い交際つきあいをした経験のない迂闊うかつな青年であつた。男としての私は、異性に対する本能から、憧憬どうけいの目的物として常に女を夢みていた。けれどもそれは懐かしい春の雲を眺めるながような心持で、ただ漠然ぼくぜんと夢みていたに過ぎなかつた。だから実際の女の前へ出ると、私の感情が突然変る事が時々あつた。私は自分の前に現われた女のために引き付けられる代りに、その場に臨んでかえつて変な反撥力はんぱつりよくを感じた。奥さんに対し

た私にはそんな気がまるで出なかった。普通男女なんによの間に横たわる思想の不均平均という考えもほとんど起らなかった。私は奥さんの女であるという事を忘れた。私はただ誠実なる先生の批評家および同情家として奥さんを眺めた。

「奥さん、私がこの前なぜ先生が世間的にもっと活動なさらないのだろうといつて、あなたに聞いた時に、あなたはおっしゃった事がありますね。元はああじゃなかったんだって」

「ええいいました。実際あんじゃなかったんですもの」

「どんなだったんですか」

「あなたの希望なさるような、また私の希望するような頼もしい人だったんです」

「それがどうして急に変化なすったんですか」

「急にじやありません、段々ああなつて来たのよ」

「奥さんはその間^{あいだ}始終先生といっしよにいらしたんでしよう」

「無論いましたわ。夫婦ですもの」

「じや先生がそう變つて行かれる源^{げん}因^{いん}がちやんと解^{わか}るべきはず
ですがね」

「それだから困るのよ。あなたからそういわれると実に辛^{つら}いんですが、私にはどう考えても、考えようがないんですもの。私は今まで何^{なん}遍^{べん}あの人に、どうぞ打ち明けて下さいって頼んで見たか
分りやしません」

「先生は何とおっしゃるんですか」

「何にもいう事はない、何にも心配する事はない、おれはこういう性質になったんだからというだけで、取り合ってくれないんです」

私は黙っていた。奥さんも言葉を途切^{とぎ}らした。下女部屋^{げじよべや}にいる下女はことりとも音をさせなかった。私はまるで泥棒の事を忘れてしまった。

「あなたは私に責任があるんだと思ってやしませんか」と突然奥さんが聞いた。

「いいえ」と私が答えた。

「どうぞ隠さずにいつて下さい。そう思われるのは身を切られるより辛いんだから」と奥さんがまたいった。「それでも私は先生

のためのできるだけの事はしているつもりなんです」

「そりや先生もそう認めていられるんだから、大丈夫です。ご安心なさい、私が保証します」

奥さんは火鉢の灰を掻き馴らした。それから水注の水を鉄瓶に注した。鉄瓶は忽ち鳴りを沈めた。

「私はとうとう辛防し切れなくなつて、先生に聞きました。私に悪い所があるなら遠慮なくいつて下さい、改められる欠点なら改めるからつて、すると先生は、お前に欠点なんかありやしない、欠点はおれの方にあるだけだというんです。そういわれると、私悲しくなつて仕様がなぃんです、涙が出てなおの事自分の悪い所が聞きたくなるんです」

奥さんは眼の中に涙をいっぱい溜めた。

十九

始め私は理解のある女性として奥さんに対していた。私がその気で話しているうちに、奥さんの様子が次第に変つて来た。

奥さんは私の頭脳に訴える代りに、私の心臓を動かし始めた。自分と夫の間には何の蟠まりもない、またないはずであるのに、やはり何かある。それだのに眼を開けて見極めようとすると、やはり何にもない。奥さんの苦にする要点はここにあつた。

奥さんは最初世の中を見る先生の眼が厭世的だから、その結

果として自分も嫌われているのだと断言した。そう断言しておきながら、ちつともそこに落ち付いていられなかった。底を割ると、かえってその逆を考えていた。先生は自分を嫌う結果、とうとう世の中まで厭いやになったのだろうと推測していた。けれどもどう骨を折っても、その推測を突き留めて事実とする事ができなかった。先生の態度はどこまでも良人おととらしかった。親切で優しくかった。疑いの塊かたまりりをその日その日の情じょう合あいで包んで、そつと胸の奥にしまつておいた奥さんは、その晩その包みの中を私の前で開けて見せた。

「あなたどう思つて？」と聞いた。「私からああなつたのか、それともあなたのいう人じん世せい観かんとか何とかいうものから、ああなつ

たのか。隠さずいつて頂戴ちようだい」

私は何も隠す気はなかった。けれども私の知らないあるものがそこに存在しているとすれば、私の答えが何であろうと、それが奥さんを満足させるはずがなかった。そうして私はそこに私の知らないあるものがあると信じていた。

「私には解わかりません」

奥さんは予期の外はずれた時に見る憐あわれな表情をその咄とつ嗟さに現わした。私はすぐ私の言葉を継ぎ足した。

「しかし先生が奥さんを嫌っていらつしやらない事だけは保証します。私は先生自身の口から聞いた通りを奥さんに伝えるだけです。先生は嘘うそを吐つかない方かたでしよう」

奥さんは何とも答えなかった。しばらくしてからこういった。

「実は私すこし思いあたる事があるんですけれども……」

「先生がああいう風ふうになった源げん因いんについてですか」

「ええ。もしそれが原因だとすれば、私の責任だけはなくなくなるんだから、それだけでも私大変楽になれるんですが、……」

「どんな事ですか」

奥さんはいい洩ひざって膝ひざの上に置いた自分の手を眺めていた。

「あなた判断して下すって。いうから」

「私にできる判断ならやります」

「みんなはいえないのよ。みんないうと叱しかられるから。叱しかられないところだけよ」

私は緊張して唾液つばきを呑み込んだ。

「先生がまだ大学にいる時分、大変仲の好いお友達が一人あつたのよ。その方がかたちょうど卒業する少し前に死んだんです。急に死んだんです」

奥さんは私の耳に私語ささやくような小さな声で、「実は変死したんです」といった。それは「どうしても」と聞き返さずにはいられないようないい方であつた。

「それっ切りしかいえないのよ。けれどもその事があつてから後のちなんです。先生の性質が段々變つて来たのは。なぜその方が死んだのか、私には解らないの。先生にもおそらく解つていないでしょう。けれどもそれから先生が變つて来たと思えば、そう思われ

ない事もないのよ」

「その人の墓ですか、雑司ぞうしがやヶ谷にあるのは」

「それもいわない事になってるからいいません。しかし人間は親友を一人亡くしただけで、そんなに変化できるものでしょうか。

私はそれが知りたくって堪たまらないんです。だからそこを一つあなたに判断して頂きたいと思うの」

私の判断はむしろ否定の方に傾いていた。

二十

わたくし
私は私のつらまえた事実の許す限り、奥さんを慰めようとした。

奥さんもまたできるだけ私によつて慰められたそうに見えた。それで二人は同じ問題をいつまでも話し合つた。けれども私はもともと事の大根^{おおね}を攫^{つか}んでいなかった。奥さんの不安も実はそこに漂^{ただよ}う薄い雲に似た疑惑から出て来ていた。事件の真相になると、奥さん自身にも多くは知れていなかった。知れているところでも悉^す皆^{つかり}は私に話す事ができなかった。したがつて慰める私も、慰められる奥さんも、共に波に浮いて、ゆらゆらしていた。ゆらゆらしながら、奥さんはどこまでも手を出して、覚^{おぼ}束^{つか}ない私の判断に縋^{すが}り付こうとした。

十時頃^{じごろ}になつて先生の靴の音が玄関に聞こえた時、奥さんは急に今までのすべてを忘れたように、前に坐^{すわ}っている私をそつちの

けにして立ち上がった。そうして格子こうしを開ける先生をほとんど出で合あい頭がしらに迎えた。私は取り残されながら、後あとから奥さんに尾ついて行つた。下女げじよだけは仮寝うたたねでもしていたとみえて、ついに出て来なかつた。

先生はむしろ機嫌がよかつた。しかし奥さんの調子はさらによかつた。今しがた奥さんの美しい眼のうちに溜たまつた涙の光と、それから黒い眉毛まゆげの根に寄せられた八の字を記憶していた私は、その変化を異常なものとして注意深く眺ながめた。もしそれが詐いつわりでなかつたならば、（実際それは詐りとは思えなかつたが）、今まで奥さんの訴えは感センチメント傷もてあそを玩ぶためにとくに私を相手こしらに拵こしらえた、徒いたずらな女性の遊戯と取れない事もなかつた。もつともその時の私

には奥さんをそれほど批評的に見る気は起らなかった。私は奥さんの態度の急に輝いて来たのを見て、むしろ安心した。これならばそう心配する必要もなかったんだと考え直した。

先生は笑いながら「どうもご苦労さま、泥棒は来ませんでしたか」と私に聞いた。それから「来ないんで張^{はりあい}合が抜けやしませんか」といった。

帰る時、奥さんは「どうもお気の毒さま」と会釈した。その調子は忙しいところを暇を潰^{つぶ}させて気の毒だというよりも、せっかく来たのに泥棒がはいらなくて気の毒だという冗談のように聞こえた。奥さんはそういういながら、先刻^{さつき}出した西洋菓子^{たもと}の残りを、紙に包んで私の手に持たせた。私はそれを袂^{たもと}へ入れて、人通りの

少ない夜寒よさむの小路こうじを曲折にぎして賑やかな町の方へ急いだ。

私はその晩の事を記憶のうちから抽ひき抜いてここへ詳くわしく書いた。これは書くだけの必要があるから書いたのだが、実をいうと、奥さんに菓子を貰もらって帰るときの気分では、それほど当夜の会話を重く見ていなかった。私はその翌日よくじつ午飯ひるめしを食いに学校から帰ってきて、昨夜机ゆうべの上に載のせて置いた菓子かしの包みを見ると、すぐその中からチョコレートとびいろを塗った鳶色とびいろのカステラを出して頬張ほおばった。そうしてそれを食う時に、必ひつきよう竟この菓子を私にくれた二人の男女なんによは、幸福な一対いつついとして世の中に存在しているのだと自覚しつつ味わった。

秋が暮れて冬が来るまで格別の事もなかった。私は先生の宅うちへ

出^ではいりをするついでに、衣服^{あらく}の洗い張りや仕立^{した}て方^{かた}などを奥さんに頼^{たの}んだ。それまで繻^{じゅ}絆^{ばん}というものを着^きた事^{こと}のない私が、シヤツの上に黒い襟^{えり}のかかったものを重ねるようになったのはこの時からであつた。子供^{こども}のない奥^{おく}さんは、そういう世話^{せわ}を焼^やくのかえつて退屈^{たいくつ}凌^{しの}ぎになつて、結句^{けつこ}身体^{からだ}の薬^{くすり}だぐらいの事をいつていた。

「こりや手織^{てお}りね。こんな地^じの好^こい着物^{きもの}は今^{いま}まで縫^ぬつた事^{こと}がないわ。その代^かり縫^ぬい悪^{にく}いのよそりやあ。まるで針^{はり}が立たないんですもの。お蔭^{かげ}で針^{はり}を二本折^かりましたわ」

こんな苦情^{くせい}をいう時^{とき}ですら、奥^{おく}さんは別に面^{めん}倒^{だう}くさいという顔をしなかつた。

二十一

冬が来た時、私は偶然国へ帰らなければならぬ事になった。^{わたくし}
私の母から受け取った手紙の中に、父の病気の経過が面白くない
様子を書いて、今が今という心配もあるまいが、年が年だから、
できるなら都合して帰って来てくれと頼むように付け足してあつ
た。

父はかねてから腎^{じんぞう}臓を病んでいた。中年以後の人にしばしば
見る通り、父のこの病^{やまい}は慢性であつた。その代り要心さえしてい
れば急変のないものと当人も家族のものも信じて疑わなかった。

現に父は養生のお蔭^{かげ}一つで、今日^{こんにち}までどうかこうか^{しの}凌いで来たように客が来ると吹^ふ聴^いしていた。その父が、母の書信によると、庭へ出て何かしている機^{はずみ}に突然眩暈^{めまい}がして引ッ繰り返った。家内^{かない}のものは軽症の脳溢血^{のういつけつ}と思い違えて、すぐその手当をした。後^{あと}で医者からどうもそうではないらしい、やはり持病の結果だろうという判断を得て、始めて卒倒と腎臓病とを結び付けて考えるようになったのである。

冬休みが来るにはまだ少し間^まがあつた。私は学期の終りまで待つていても差^さ支^しえ^{つか}あるまいと思つて一日二日そのままにしておいた。するとその一日二日の間に、父の寝ている様子だの、母の心配している顔だのが時々眼に浮かんだ。そのたびに一種の心苦

しさを嘗^なめた私は、とうとう帰る決心をした。国から旅費を送らせる手数^{てかず}と時間を省くため、私は暇^{いとまご}乞いかたがた先生の所へ行つて、要^いるだけの金を一時立て替えてもらう事にした。

先生は少し風邪^{かぜ}の気味で、座敷へ出るのが臆^{おつくう}劫だといつて、私をその書齋に通した。書齋の硝子戸^{ガラスド}から冬に入^いって稀^{まれ}に見るよ
うな懐^{やわ}かしい和らかな日光が机掛^{つくえか}けの上に射^さしていた。先生は
この日あたりの好^いい室^{へや}の中へ大きな火鉢を置いて、五徳^{ごどく}の上に懸
けた金盥^{かなだら}から立ち上^{あが}る湯気^{ゆげ}で、呼吸^{いき}の苦しくなるのを防いで
いた。

「大病は好^いいが、ちよつとした風邪^{かぜ}などはかえつて厭^{いや}なものです
ね」といった先生は、苦笑しながら私の顔を見た。

先生は病氣という病氣をした事のない人であつた。先生の言葉を聞いた私は笑いたくなつた。

「私は風邪ぐらいなら我慢しますが、それ以上の病氣は眞^ま平^つです。先生だつて同じ事でしょう。試みにやつてご覧になるとよく解^{わか}ります」

「そうかね。私は病氣になるくらいなら、死病^{しか}に雇^かりたいと思つてゐる」

私は先生のいう事に格別注意を払わなかつた。すぐ母の手紙の話をして、金の無心を申し出た。

「そりや困るでしょう。そのくらいなら今手元にあるはずだから持つて行きたまえ」

先生は奥さんと呼んで、必要の金額を私の前に並べさせてくれた。それを奥の茶筭^{ちやだんす}筭か何かの抽出^{ひきだし}から出して来た奥さんは、白い半紙の上へ鄭寧^{ていねい}に重ねて、「そりやご心配ですね」といった。

「何^{なんべん}遍も卒倒したんですか」と先生が聞いた。

「手紙には何とも書いてありませんが。——そんなに何度も引ッ繰り返るものですか」

「ええ」

先生の奥さんの母親という人も私の父と同じ病気で亡くなったのだという事が始めて私に解った。

「どうせむずかしいんでしょう」と私がいった。

「そうさね。私が代られれば代ってあげても好いい。——嘔はきけ気はあるんですか」

「どうですか、何とも書いてないから、大おお方かたないんでしよう」

「吐気さえ来なければまだ大丈夫ですよ」と奥さんがいった。

私はその晩の汽車で東京を立つた。

二十二

父の病気は思ったほど悪くはなかった。それでも着いた時は、床とこの上に胡坐あぐらをかいて、「みんなが心配するから、まあ我慢してこじう凝じとしてゐる。なにもう起きてもいいのさ」といった。しか

しその翌日よくじつからは母が止めるのも聞かずに、とうとう床を上げさせてしまった。母は不承ふしょう無性ぶしょうに太織ふとおりの蒲団ふとんを畳みながら「お父さんはお前が帰つて来たので、急に気が強くおなりなんだよ」といった。わたくし私には父の挙動がさして虚勢を張っているようにも思えなかった。

私の兄はある職を帯びて遠い九州にいた。これは万一の事があ
る場合でなければ、容易ちちははに父ちちはは母の顔を見る自由きの利かない男であつた。妹は他国へ嫁とついだ。これも急場の間に合うように、おいそれと呼び寄せられる女ではなかった。兄きょうだい妹三人のうちで、一番便利なのはやはり書生をしている私だけであつた。その私が母のいい付け通り学校の課業を放ほうり出して、休み前に帰つて来た

という事が、父には大きな満足であつた。

「これしきの病氣に学校を休ませては氣の毒だ。お母さんがあま
り仰ぎようさん山な手紙を書くものだからいけない」

父は口ではこういった。こういったばかりでなく、今まで敷いていた床とこを上げさせて、いつものような元氣を示した。

「あんまり輕はずみをしてまた逆ぶりかえ回すといけませんよ」

私のこの注意を父は愉快そうにしかし極きわめて軽く受けた。

「なに大丈夫、これでいつものように要ようじん心さえていれば」

實際父は大丈夫らしかった。家の中を自由に往来して、息も切れなければ、眩暈めまいも感じなかった。ただ顔色だけは普通の人よりも大変悪かったが、これはまた今始まつた症状でもないのです、私

たちは格別それを気に留めなかつた。

私は先生に手紙を書いて 恩^{おんしやく} 借^かの礼を述べた。正月上京する

時に持参するからそれまで待つてくれるようにと断わつた。そうして父の病状の思つたほど險悪でない事、この分なら当分安心な事、眩暈^{はきけ}も嘔^い氣^きも皆無^なな事などを書き連ねた。最後に先生の風^{ふうじ}邪^{じゃ}についても一言^{いちごん}の見舞^{みまい}を附^つけ加えた。私は先生の風邪を實際軽く見ていたので。

私はその手紙を出す時に決して先生の返事を予期していなかつた。出した後で父や母と先生の噂^{うわさ}などをしながら、遥^{はる}かに先生の書齋^{しよさい}を想像した。

「こんど東京へ行くときには椎^{しい}茸^{いたけ}でも持つて行つてお上げ」

「ええ、しかし先生が干した椎茸などを食うかしら」

「旨くはないが、別に嫌きらいな人もないだろう」

私には椎茸と先生を結び付けて考えるのが変であった。

先生の返事が来た時、私はちよつと驚かされた。ことにその内容が特別の用件を含んでいなかった時、驚かされた。先生はただ親切ずくで、返事を書いてくれたんだと私は思った。そう思うと、その簡単な一本の手紙が私には大層な喜びになった。もつともこれは私が先生から受け取った第一の手紙には相違なかったが。

第一というと私と先生の間には書信の往復がたびたびあったように思われるが、事實は決してそうでない事をちよつと断わつておきたい。私は先生の生前にたった二通の手紙しか貰もらつていない。

その一通は今いうこの簡単な返書で、あとの一通は先生の死ぬ前とくに私宛^{あて}で書いた大変長いものである。

父は病気の性質として、運動を慎まなければならぬので、床を上げてからも、ほとんど戸外^{そと}へは出なかった。一度天氣のごく穏やかな日の午後庭へ下りた事があるが、その時は万一を氣遣^{きづか}つて、私が引き添^そうように傍^{そば}に付いていた。私が心配して自分の肩へ手を掛けさせようとしても、父は笑つて応じなかった。

二十三

私^{わたくし}は退屈な父の相手としてよく将碁盤^{しょうぎばん}に向かった。二人とも

無精な性質たちなので、炬燵こたつにあたつたまま、盤やぐらを櫓のの上へ載せて、駒こまを動かすたびに、わざわざ手を掛蒲団かけぶとんの下から出すような事をした。時々持駒もちこまを失くして、次の勝負の来るまで双方とも知らずにいたりした。それを母が灰の中から見付け出して、火箸ひばしで挟はさみ上げるといふ滑稽こっけいもあつた。

「碁ごだと盤が高過ぎる上に、足が着いているから、炬燵の上では打てないが、そこへ来ると将碁盤いは好いね、こうして楽に差せるから。無精者には持つて来いだ。もう一番やろう」

父は勝つた時は必ずもう一番やろうといった。そのくせ負けた時にも、もう一番やろうといった。要するに、勝つても負けても、炬燵にあたって、将碁を差したがる男であつた。始めのうちは珍

しいので、この隠居いんきよじみた娯楽が私にも相当の興味を与えたが、少し時日が経たつに伴つれて、若い私の気力はそのくらいな刺戟しげきで満足できなくなつた。私は金きんや香車きやうしやを握こぶつた拳こぶしを頭の上へ伸ばして、時々思い切つたあくびをした。

私は東京の事を考えた。そうして漲みなぎる心臓の血潮の奥に、活動と打ちつづける鼓動こどうを聞いた。不思議にもその鼓動の音がある微妙な意識状態から、先生の力で強められているように感じた。

私は心のうちで、父と先生とを比較して見た。両方とも世間から見れば、生きているか死んでいるか分らないほど大人おとなしい男であつた。他ひとに認められるという点からいえばどっちも零れいであつた。

それでいて、この将碁を差したがる父は、単なる娯楽の相手とし
 ても私には物足りなかった。かつて遊興のために往来をした覚え
 のない先生は、歡樂の交際から出る親しみ以上に、いつか私の頭
 に影響を与えていた。ただ頭というのはあまりに冷やか過ぎるか
 ら、私は胸といい直したい。肉のなかに先生の力が喰い込んでい
 るといつても、血のなかに先生の命が流れているといつても、そ
 の時の私には少しも誇張でないように思われた。私は父が私の本
 当の父であり、先生はまたいうまでもなく、あかの他人である
 という明白な事実を、ことさらに眼の前に並べてみて、始めて大き
 な真理でも発見したかのごとくに驚いた。

私がのつそつし出すと前後して、父や母の眼にも今まで珍しか

つた私が段々陳腐ちんぷになつて来た。これは夏休みなどに国へ帰る誰でもが一樣に経験する心持だろうと思うが、当座の一週間ぐらいは下にも置かないように、ちやほや歓待もてなされるのに、その峠を定て規通いきどおり通り越すと、あとはそろそろ家族の熱が冷めて来て、しまいには有つても無くつても構わないもののように粗末に取り扱われがちになるものである。私も滞在中にその峠を通り越した。その上私は国へ帰るたびに、父にも母にも解わからない変なところを東京から持つて歸つた。昔でいうと、儒者じゅしゃの家へ切支丹キリシタンの臭においを持ち込むように、私の持つて歸るものは父とも母とも調和しなかった。無論私はそれを隠していた。けれども元々身に着いているものだから、出すまいと思つても、いつかそれが父や母の眼

に留^とまつた。私はつい面白くなくなった。早く東京へ帰りたくなつた。

父の病氣は幸い現状維持のままで、少しも悪い方へ進む模様は見えなかつた。念のためにわざわざ遠くから相当の医者を招いたりして、慎重に診察してもらつてもやはり私の知っている以外に異状は認められなかつた。私は冬休みの尽きる少し前に国を立つ事にした。立つといい出すと、人情は妙なもので、父も母も反対した。

「もう帰るのかい、まだ早いじゃないか」と母がいった。

「まだ四、五日いても間に合うんだろう」と父がいった。

私は自分の極^きめた出^{しゅ}立^{ったつ}の日を動かさなかつた。

二十四

東京へ帰つてみると、松まつかざり飾しはいつか取り払われていた。町は寒い風の吹くに任せて、どこを見てもこれというほどの正月めいた景気はなかった。

わたくし さつそく

私は早速先生のうちへ金を返しに行つた。例の椎しい茸いたけもついでに持つて行つた。ただ出すのは少し変だから、母がこれを差し上げてくれといいましたとわざわざ断つて奥さんの前へ置いた。椎茸は新しい菓子折に入れてあつた。鄭てい寧ねいに礼を述べた奥さんは、次の間まへ立つ時、その折を持つて見て、軽いのに驚かされた

のか、「こりや何の御菓子」と聞いた。奥さんは懇意になると、こんなところに極めて淡泊な小供らしい心を見せた。

二人とも父の病氣について、色々掛念の問いを繰り返してくれ
た中に、先生はこんな事をいった。

「なるほど容体を聞くと、今が今どうという事もないようです
が、病氣が病氣だからよほど氣をつけないといけません」

先生は腎臓の病について私の知らない事を多く知っていた。

「自分で病氣に罹っているが、氣が付かないで平氣でいるのが
あの病の特色です。私の知ったある士官は、とうとうそれでやら
れたが、全く嘘のような死に方をしたんですよ。何しろ傍に寝て
いた細君が看病をする暇もなんにもないくらいなんですからね。

夜中にちよつと苦しいといつて、細君を起したぎり、翌^{あく}朝はもう死んでいたんです。しかも細君は夫が寝ているとばかり思つてたんだつていうんだから」

今まで楽天的に傾いていた私は急に不安になった。

「私の父もそんなになるでしょうか。ならんともいえないですね」
おやし

「医者は何というのです」

「とても医者は到底治らないというんです。けれども当分のところ心配はあるまいともいうんです」

「それじゃ好^いいでしょう。医者がそういうなら。私の今話したのは気が付かず^にいた人の事で、しかもそれがずいぶん乱暴な軍人なんだから」

私はやや安心した。私の変化を凝^{じつ}と見ていた先生は、それからこう付け足した。

「しかし人間は健康にしろ病気にしろ、どつちにしても脆^{もろ}いものです。いつどんな事でどんな死にようをしないととも限らないから」

「先生もそんな事を考えてお出^{いで}ですか」

「いくら丈夫の私でも、満^{まんざら}更考えない事ありません」

先生の口元には微笑の影が見えた。

「よくころりと死ぬ人があるじゃありませんか。自然に。それからあつと思^まう間に死ぬ人もあるでしょう。不自然な暴力で」

「不自然な暴力って何ですか」

「何だかそれは私にも解^{わか}らないが、自殺する人はみんな不自然な暴力を使うんでしょう」

「すると殺されるのも、やはり不自然な暴力のお蔭^{かげ}ですね」

「殺される方はちつとも考えていなかった。なるほどそういえばそうだ」

その日はそれで帰った。帰ってから父の病気はそれほど苦にならなかった。先生のいった自然に死ぬとか、不自然の暴力で死ぬとかいう言葉も、その場限りの浅い印象を与えただけで、後は^{あと}何らのこだわりを私の頭に残さなかった。私は今まで幾^{いくたび}度か手を着けようとしては手を引つ込めた卒業論文を、いよいよ本式に書き始めなければならぬと思ひ出した。

二十五

その年の六月に卒業するはずの私は、^{わたくし}ぜひとこの論文を成^{せい}規^ど通^おり四月いっぱいに書き上げてしまわなければならなかった。二、三、四と指を折つて余る時日を勘定して見た時、私は少し自分の度胸^{うたぐ}を疑^うつた。他^{ほか}のものはよほど前から材料を蒐^{あつ}めたり、ノート^たを溜^ためたりして、余^よ所^そ目^めにも忙^いし^そうに見えるのに、私だけはまだ何にも手を着けずにいた。私にはただ年が改まつたら大いにやろうという決心だけがあつた。私はその決心でやり出した。そうして忽^{たちま}ち動けなくなつた。今まで大きな問題^{くわ}を空^えに描^がいて、

骨組みだけはほぼでき上っているくらいに考えていた私は、頭をおさ抑えて悩み始めた。私はそれから論文の問題を小さくした。そうして練り上げた思想を系統的に纏まとめる手数を省くために、ただ書物の中にある材料を並べて、それに相当な結論をちよつと付け加える事にした。

私の選択した問題は先生の専門と縁故の近いものであつた。私がかつてその選択について先生の意見を尋ねた時、先生は好いいでしょうといった。狼ろうばい狽ばいした気味の私は、早さつそく速先生の所へ出掛けて、私の読まなければならない参考書を聞いた。先生は自分の知っている限りの知識を、快く私に与えてくれた上に、必要の書物を、二、三冊貸そうといった。しかし先生はこの点について毫ごう

も私を指導する任に当ろうとしなかった。

「近頃ちかごろはあんまり書物を読まないから、新しい事は知りませんよ。学校の先生に聞いた方が好いでしょう」

先生は一時非常の読書家であつたが、その後ごどういふ訳か、前ほどこの方面に興味が無くなったようだとかつて奥さんから聞いた事があるのを、私はその時ふと思い出した。私は論文をよくそれに、そぞろに口を開いた。

「先生はなぜ元のように書物に興味をもち得ないんですか」

「なぜという訳ありませんが。……つまりいくら本を読んでもそれほどえらくならないと思うせいでしよう。それから……」

「それから、まだあるんですか」

「まだあるというほどの理由でもないが、以前はね、人の前へ出たり、人に聞かれたりして知らないと恥のようにきまりが悪かったものだが、近頃は知らないという事が、それほどの恥でないように見え出したものだから、つい無理にも本を読んでみようという元気が出なくなつたのでしよう。まあ早くいえば老い込んだのです」

先生の言葉はむしろ平静であつた。世間に背中を向けた人の苦^く味^みを帯びていなかっただけに、私にはそれほどの手応え^{てうた}もなかった。私は先生を老い込んだとも思わない代りに、偉いとも感心せず^ずに歸つた。

それからの私はほとんど論文に崇^たられた精神病者のように眼を

赤くして苦しんだ。私は一年前^{ぜん}に卒業した友達について、色々様
 子を聞いてみたりした。そのうちの一人^{いちにん}は締切^{しめきり}の日に車で事務
 所へ馳^かけつけて漸^{ようや}く間に合わせたといった。他の一人は五時を十
 五分ほど後^{おく}らして持つて行つたため、危^{あやう}く跳ね付けられようとし
 たところを、主任教授の好意でやつと受理してもらつたといった。
 私は不安を感じると共に度胸^すを据えた。毎日机の前で精根のつづ
 く限り働いた。でなければ、薄暗い書庫^{こうず}にはいつて、高い本棚の
 あちらこちらを見廻^{みまわ}した。私の眼は好事家^{こうずか}が骨董^{こつとう}でも掘り出す
 時のように背表紙の金文字をあさつた。

梅が咲くにつけて寒い風は段々^{むき}向を南へ更^かえて行つた。それが
 一仕切^{ひとしきり}経^たつと、桜^{うわさ}の噂^{うわさ}がちらほら私の耳に聞こえ出した。それ

でも私は馬車馬のように正面ばかり見て、論文に鞭むちうたれた。私
 はついに四月の下旬が来て、やっと予定通りのものを書き上げる
 まで、先生の敷居を跨またがなかった。

二十六

私わたくしの自由になったのは、八重桜やえざくらの散った枝にいつしか青い葉
 が霞かすむように伸び始める初夏の季節であった。私は籠かごを抜け出し
 た小鳥の心をもつて、広い天地を一目ひとめに見渡しながら、自由に羽は
 搏ばたきをした。私はすぐ先生の家うちへ行つた。枳からたち殻がらの垣が黒ずんだ
 枝の上に、萌もえるような芽を吹いていたり、柘榴ざくろの枯れた幹から、

つやつやしい茶褐色の葉が、柔らかそうに日光を映していたりするの、道々私の眼を引き付けた。私は生れて初めてそんなものを見るような珍しさを覚えた。

先生は嬉し^{うれ}そうな私の顔を見て、「もう論文は片付いたんですか、結構ですね」といった。私は「お蔭^{かげ}でようやく済みました。もう何にもする事はありません」といった。

実際その時の私は、自分のなすべきすべての仕事^{けつり}がすでに結了^{よくちよう}して、これから先は威張^{よう}って遊んでいても構わないような晴やかな心持でいた。私は書き上げた自分の論文に対して充分の自信と満足をもっていた。私は先生の前で、しきりにその内容を喋^ちようちようした。先生はいつもの調子で、「なるほど」とか、「そう

ですか」とかいつてくれたが、それ以上の批評は少しも加えなかった。私は物足りないというよりも、聊いささか拍子抜けの気味であつた。それでもその日私の気力は、因いんじん循ゆんらしく見える先生の態度に逆襲を試みるほどに生いきいき々いきしていた。私は青く蘇よみがえ生ろうとする大きな自然の中に、先生を誘い出そうとした。

「先生どこかへ散歩しましょう。外へ出ると大変好い心持です」
「どこへ」

私はどこでも構わなかった。ただ先生を伴つれて郊外へ出たかった。

一時間の後、のち先生と私は目的どおり市を離れて、村とも町とも区別の付かない静かな所を宛あてもなく歩いた。私はかなめの垣から

若い柔らかい葉を撈ぎ取つて芝笛を鳴らした。ある鹿児島人を友達にもつて、その人の真似をしつつ自然に習い覚えた私は、この芝笛というものを鳴らす事が上手であつた。私が得意にそれを吹きつづけると、先生は知らん顔をしてよそを向いて歩いた。

やがて若葉に鎖ざされたように蒨鬱した小高い一構えの下に細い路が開けた。門の柱に打ち付けた標札に何々園とあるので、その個人の邸宅でない事がすぐ知れた。先生はだらだら上りになつてゐる入口を眺めて、「はいつてみようか」といった。私はすぐ「植木屋ですな」と答えた。

植込の中をうねりして奥へ上ると左側に家があつた。明け放つた障子の内はがらんとして人の影も見えなかつた。ただ軒

きさき

先に据えた大きな鉢の中に飼つてある金魚が動いていた。

「静かだね。断わらずにはいつでも構わないだろうか」

「構わないでしょう」

二人はまた奥の方へ進んだ。しかしそこにも人影は見えなかった。躑躅つつじが燃えるように咲き乱れていた。先生はそのうちで樺かばい

色いろの丈たけの高いのを指して、「これは霧島きりしまでしょう」といった。

芍薬しやくやくも十坪とつぽあまり一面に植え付けられていたが、まだ季節

が来ないので花を着けているのは一本もなかった。この芍薬ばたけ畠はたけの

傍そばにある古びた縁台のようなものの上に先生は大の字なりに寝た。

私はその余った端はじの方に腰をおろして烟草タバコを吹かした。先生は蒼あお

い透すき徹とおるような空を見ていた。私は私を包む若葉の色に心を奪

われていた。その若葉の色をよくよく眺めると、一々違っていた。
 同じ楓かえでの樹きでも同じ色いろを枝えだに着きけているものは一つもなかった。
 細い杉苗いただきの頂かぶに投げ被かぶせてあつた先生の帽子が風に吹かれて落ち
 た。

二十七

私はわたくしすぐその帽子を取り上げた。所々ところどころに着きいている赤土を
 爪つめで弾はじきながら先生を呼んだ。

「先生帽子が落ちました」

「ありがとうございます」

からだ
身体を半分起してそれを受け取った先生は、起きるとも寝ると

も片付かないその姿勢のまま、変な事を私に聞いた。

「突然だが、君の家には財産がよつぽあるんですか」

「あるというほどありません」

「まあどのくらいあるのかね。失礼のようだが」

「どのくらいって、山と田地でんぢが少しあるぎり、金なんかまるでないでしょう」

先生が私の家の経済いえについて、問いらしい問いを掛けたのはこれが始めてであった。私の方はまだ先生の暮し向きに関して、何も聞いた事がなかった。先生と知り合いになった始め、私は先生がどうして遊んでいられるかを疑うたぐった。その後もこの疑いは絶え

ず私の胸を去らなかつた。しかし私はそんな露骨あらわな問題を先生の前に持ち出すのをぶしつけとばかり思つていつでも控えていた。若葉の色で疲れた眼を休ませていた私の心は、偶然またその疑いに触れた。

「先生はどうなんです。どのくらいの財産をもつていらつしやるんですか」

「私は財産家と見えますか」

先生は平生からむしろ質素な服装なりをしていた。それに家内かないは人数にんずであつた。したがつて住宅も決して広くはなかつた。けれどもその生活の物質的に豊かな事は、内輪にはいり込まない私の眼にさえ明らかであつた。要するに先生の暮しは贅ぜい沢たくといえない

までも、あたじけなく切り詰めた無弾力性のもではなかった。

「そうでしょう」と私がいった。

「そりやそのくらいの金はあるさ、けれども決して財産家じゃありません。財産家ならもつと大きな家うちでも造るさ」

この時先生は起き上つて、縁台の上に胡坐あぐらをかいていたが、こ
ういい終ると、竹の杖つえの先で地面の上へ円のようなものを描かき始
めた。それが済むと、今度はステツキを突き刺すように真直まっすぐに
立てた。

「これでも元は財産家なんだがなあ」

先生の言葉は半分独り言ひとごとのようであつた。それですぐ後あとに尾つ
て行き損なつた私は、つい黙っていた。

「これでも元は財産家なんですよ、君」といい直した先生は、次に私の顔を見て微笑した。私はそれでも何とも答えなかった。むしろ不調法で答えられなかったのである。すると先生がまた問題を他へ移した。

「あなたのお父さんの病気はその後どうなりました」

私は父の病気について正月以後何にも知らなかった。月々国から送ってくれる為替かわせと共に来る簡単な手紙は、例の通り父の手蹟きであつたが、病気の訴えはそのうちにほとんど見当らなかつた。その上書体も確かであつた。この種の病人に見る顫ふるえが少しも筆の運びはこを乱していなかつた。

「何ともいつて来ませんが、もう好いんでしよう」

「好ければ結構だが、——病症が病症なんだからね」

「やっぱり駄目ですかね。でも当分は持ち合ってるんでしよう。」

何ともいって来ませんよ」

「そうですか」

私は先生が私のうちの財産を聞いたり、私の父の病気を尋ねたりするのを、普通の談話——胸に浮かんだまをその通り口にする、普通の談話と思って聞いていた。ところが先生の言葉の底には両方を結び付ける大きな意味があった。先生自身の経験を持たない私は無論そこに気が付くはずがなかった。

「君のうちに財産があるなら、今のうちによく始末をつけてもらっておかないといけないと思うがね、余計なお世話だけれども。君のお父さんが達者なうちに、貰うものはちゃんと貰っておくようにしたらどうですか。万一の事があつたあとで、一番面倒の起るのは財産の問題だから」

「ええ」

わたくし 私は先生の言葉に大した注意を払わなかった。私の家庭でそんな心配をしているものは、私に限らず、父にしろ母にしろ、一人もないと私は信じていた。その上先生のいう事の、先生として、あまりに実際的なのに私は少し驚かされた。しかしそこは年長者

に對する平生の敬意が私を無口にした。

「あなたのお父さんが亡くなられるのを、今から予想してかかるような言葉遣いことばづかをするのが氣に触さわったら許してくれたまえ。しかし人間は死ぬものだからね。どんなに達者なものでも、いつ死ぬか分らないものだからね」

先生の口氣こうきは珍しく苦々しかった。

「そんな事をちつとも氣に掛けちやいけません」と私は弁解した。
「君の兄きょうだい弟は何人でしたかね」と先生が聞いた。

先生はその上に私の家族の人数にんずを聞いたり、親類の有無を尋ねたり、叔父おじや叔母おばの様子を問いなどした。そうして最後にこういった。

「みんな善い人ですか」

「別に悪い人間というほどのものもないようです。大抵田舎者ですから」

「田舎者はなぜ悪くないんですか」

私はこの追^{ついきゆう}窮に苦しんだ。しかし先生は私に返事を考えさせる余裕さえ与えなかった。

「田舎者は都会のものより、かえって悪いくらいなものです。それから、君は今、君の親戚^{しんせき}なぞの中に、これといって、悪い人間はいないようだと言いましたね。しかし悪い人間という一種の人間が世の中にあると君は思っているんですか。そんな鑄^い型^{かた}に入れたような悪人は世の中にあるはずがありませんよ。平生はみん

な善人なんです。少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざという間際に、急に悪人に変るんだから恐ろしいのです。だから油断ができないんです」

先生のいう事は、ここで切れる様子もなかった。私はまたここ
で何かいおうとした。すると後ろの方で犬が急に吠え出した。先生も私も驚いて後ろを振り返った。

縁台の横から後部へ掛けて植え付けてある杉苗の傍に、熊笹が三坪ほど地を隠すように茂って生えていた。犬はその顔と背を熊笹の上に現わして、盛んに吠え立てた。そこへ十ぐらいの小供が馳けて来て犬を叱り付けた。小供は徽章の着いた黒い帽子を被ったまま先生の前へ廻って礼をした。

「叔父さん、はいって来る時、家に誰もいなかったかい」と聞いた。

「誰もいなかったよ」

「姉さんやおつかさんが勝手の方にいたのに」

「そうか、いたのかい」

「ああ。叔父さん、今日はって、断ってはいって来ると好かつた

のに」

先生は苦笑した。懐中から墓口を出して、五銭の白銅を

小供の手に握らせた。

「おつかさんにそういつとくれ。少しここで休まして下さいって」
小供は伶俐りこうそうな眼に笑いを漲みなぎらして、首肯うなずいて見せた。

「今^{せつこうちよう}斥候長になつてるところなんだよ」

小供はこう断つて、躑躅^{つづじ}の間を下の方へ駈け下りて行つた。犬も尻尾^{しっぽ}を高く巻いて小供の後を追い掛けた。しばらくすると同じくらいの年格好の小供が二、三人、これも斥候長の下りて行つた方へ駈けていった。

二十九

先生の談話は、この犬と小供のために、結末まで進行する事ができなくなつたので、私はついにその要領を得ないでしまった。

先生の氣にする財産^{うんぬん}云々の掛念^{けねん}はその時の私^{わたくし}には全くなかつた。

私の性質として、また私の境遇からいって、その時の私には、そんな利害の念に頭を悩ます余地がなかったのである。考えるとこれは私がまだ世間に出ないためでもあり、また実際その場に臨まないためでもあったろうが、とにかく若い私にはなぜか金の問題が遠くの方に見えた。

先生の話のうちでただ一つ底まで聞きたかったのは、人間がいざという間に、誰でも悪人になるという言葉の意味であつた。単なる言葉としては、これだけでも私に解^{わか}らない事はなかつた。しかし私はこの句についてもっと知りたかつた。

犬と小供^{こども}が去つたあと、広い若葉の園は再び故^{もと}の静かさに歸つた。そうして我々は沈黙に鎖^とざされた人のようにしばらく動かず

にいた。うるわしい空の色がその時次第に光を失って来た。眼の前にある樹は大概きかえで楓であつたが、その枝に滴したたるように吹いた軽い緑の若葉が、段々暗くなつて行くように思われた。遠い往来を荷車を引いて行く響きがごろごろと聞こえた。私はそれを村の男が植木か何かを載せて縁えんにち日へでも出掛けるものと想像した。先生はその音を聞くと、急に瞑めい想そうから呼息いきを吹き返した人のように立ち上がった。

「もう、そろそろ帰りましょう。大分だいぶん日が永くなつたようだが、やっぱりこう安閑あんかんとしているうちには、いつの間にか暮れて行くんだね」

先生の背中には、さつき縁台の上に仰向あおむきに寝た痕あとがいつぱい

着いていた。私は両手でそれを払い落した。

「ありがとう。脂やにがこびり着いてやしませんか」

「綺麗きれいに落ちました」

「この羽織はつい此こないだ間しち持えたばかりなんだよ。だからむやみに汚して帰ると、妻さいに叱しかられるからね。有難う」

二人はまただらだら坂さかの中途にある家うちの前へ来た。はいる時には誰もいる気色けしきの見えなかった縁えんに、お上かみさんが、十五、六の娘を相手に、糸巻へ糸を巻きつけていた。二人は大きな金魚鉢の横から、「どうもお邪魔じやまをしました」と挨拶あいさつした。お上さんは「いいえお構かまい申しも致しませんで」と礼を返した後あと、先刻さつき小供にやった白銅はくどうの礼を述べた。

門口かどぐちを出て二、三町ちよう来た時、私はついに先生に向かって口を切った。

「さきほど先生のいわれた、人間は誰だれでもいざという間際に悪人になるんだという意味ですね。あれはどういう意味ですか」

「意味といつて、深い意味ありません。——つまり事実なんですよ。理屈じゃないんだ」

「事実で差さしつかえありませんが、私の伺いたいののは、いざという間際という意味なんです。一体どんな場合を指すのですか」

先生は笑い出した。あたかも時機じきの過ぎた今、もう熱心に説明する張合いがないといった風ふうに。

「金かねさ君。金を見ると、どんな君子くんしでもすぐ悪人になるのさ」

私には先生の返事があまりに平凡過ぎて詰つまらなかつた。先生が調子に乗らないごとく、私も拍子抜けの気味であつた。私は澄ましてさつさと歩き出した。いきおい先生は少し後おくれがちになつた。先生はあとから「おいおい」と声を掛けた。

「そら見たまえ」

「何をですか」

「君の気分だつて、私の返事一つですぐ変わるじゃないか」

待ち合わせるために振り向いて立ち留どまつた私の顔を見て、先生はこういった。

その時の私は腹わたくしの中で先生を憎らしく思った。肩を並べて歩き

出してから、自分の聞きたい事をわざと聞かずにいた。しかし先生の方では、それに気が付いていたのか、いないのか、まるで私の態度に拘泥こたわる様子を見せなかった。いつもの通り沈黙がちに落ち付き払った歩調をすまして運んで行くので、私は少し業腹ごうはらになった。何とかいつて一つ先生をやっ付けてみたくなって来た。

「先生」

「何ですか」

「先生はさつき少し昂奮こうふんなさいましたね。あの植木屋の庭で休んでいる時に。私は先生の昂奮したのを滅多めったに見た事がないんで

すが、今日は珍しいところを拝見したような気がします」

先生はすぐ返事をしなかった。私はそれを手^て応^{こた}えのあつたようにも思った。また的^{まと}が外^{はず}れたようにも感じた。仕方がないから後^{あと}はいわぬ事にした。すると先生がいきなり道の端^{はじ}へ寄^よつて行^いつた。そうして綺麗^{きれい}に刈^きり込んだ生^い垣^{がき}の下で、裾^{すそ}をまくつて小便をした。私は先生が用を足す間^まぼんやりそこに立^たつていた。

「やあ失敬」

先生はこういつてまた歩き出した。私はとうとう先生をやり込める事を断念した。私たちの通る道は段々^{にぎ}賑^{にぎ}やかになつた。今ま^{はたけ}でちらほらと見えた広い畠^{はたけ}の斜面^{ひらち}や平地^{ひらち}が、全く眼^いに入^いらないように左右の家^{いえ}並^{なみ}が揃^{そろ}つてきた。それでも所^{ところ}々^{どころ}宅地^{ちち}の隅^{すみ}など

に、豌豆えんどうの蔓つるを竹にからませたり、金網かなあみで鶏にわとりを囲い飼いにしたりするのが閑静ながに眺められた。市中から帰る駄馬だばが仕切りなく擦れ違すって行つた。こんなものに始終氣を奪とられがちな私は、さつきまで胸の中にあつた問題をどこかへ振り落してしまった。先生が突然そこへ後戻あともしりをした時、私は實際それを忘れていた。「私は先刻さつきそんなに昂奮したように見えたんですか」

「そんなにというほどでもありませんが、少し……」

「いや見えても構わない。實際昂奮こうふんするんだから。私は財産の事をいうときつと昂奮するんです。君にはどう見えるか知らないが、私はこれで大變執念深い男なんだから。人から受けた屈辱や損害は、十年たつても二十年たつても忘れやしないんだから」

先生の言葉は元よりもお昂奮していた。しかし私の驚いたのは、決してその調子ではなかった。むしろ先生の言葉が私の耳に訴える意味そのものであった。先生の口からこんな自白を聞くのは、いかな私にも全くの意外に相違なかった。私は先生の性質の特色として、こんな執着しゅうじやくりよく力をいまだかつて想像した事さえなかった。私は先生をもつと弱い人と信じていた。そうしてその弱くて高い処ところに、私の懐かしみの根を置いていた。一時の気分で先生にちよつと盾たてを突いてみようとした私は、この言葉の前に小さくなった。先生はこういった。

「私は他ひとあざむに欺かれたのです。しかも血のつづいた親戚しんせきのものです。私は決してそれを忘れないのです。私の父の欺かれたのです。私は決してそれを忘れないのです。私の父の

前には善人であつたらしい彼らは、父の死ぬや否^{いな}や許しがたい不徳義漢に變つたのです。私は彼らから受けた屈辱と損害を小供^{こども}の時から今日^{きょう}まで背負^{しよ}わされている。恐らく死ぬまで背負わされ通しでしょう。私は死ぬまでそれを忘れる事ができないんだから。しかし私はまだ復讐^{ふくしゅう}をせずにいる。考えると私は個人に對する復讐以上の事を現にやっているんだ。私は彼らを憎むばかりじゃない、彼らが代表している人間というものを、一般に憎む事を覚えたのだ。私はそれで沢山だと思う」

私は慰藉^{いしや}の言葉さえ口へ出せなかつた。

その日の談話もついにこれぎりで発展せずにした。私はむしろ先生の態度に畏縮して、先へ進む気が起らなかったのである。

二人は市の外れから電車に乗ったが、車内ではほとんど口を聞かなかつた。電車を降りると間もなく別れなければならなかつた。別れる時の先生は、また変っていた。常よりは晴やかな調子で、「これから六月までは一番気楽な時ですね。ことによると生涯で一番気楽かも知れない。精出して遊びたまえ」といった。私は笑つて帽子を脱つた。その時私は先生の顔を見て、先生ははたして心のどこで、一般の人間を憎んでいるのだろうかと思つた。その

眼、その口、どこにも厭^{えん}世的^{せい}の影は射^さしていなかった。

私は思想上の問題について、大なる利益を先生から受けた事を自白する。しかし同じ問題について、利益を受けようとしても受けられない事が間々^{まゝ}あったといわなければならない。先生の談話は時として不得^{ふとくようりよう}要領に終った。その日二人の間に起った郊外の談話も、この不得要領の一例として私の胸の裏^{うち}に残った。

無遠慮な私は、ある時ついにそれを先生の前に打ち明けた。先生は笑っていた。私はこういった。

「頭が鈍くて要領を得ないのは構いませんが、ちゃんと解^{わか}つてるくせに、はつきりいつてくれないのは困ります」

「私は何にも隠してやしません」

「隠していらっしゃいます」

「あなたは私の思想とか意見とかいうものと、私の過去とを、ごちやごちやに考えているんじゃないやありませんか。私は貧弱な思想家ですけれども、自分の頭で纏め上げた考えをむやみに人に隠しやしません。隠す必要がないんだから。けれども私の過去を悉くあなたの前に物語らなくてはならないとなると、それはまた別問題になります」

「別問題とは思われません。先生の過去が生み出した思想だから、私は重きを置くのです。二つのものを切り離したら、私にはほとんど価値のないものになります。私は魂の吹き込まれていない人形を与えられただけで、満足はできないのです」

先生はあきれたといった風に、私の顔を見た。巻烟草まきたばこを持つ

ていたその手が少し顫ふるえた。

「あなたは大胆だ」

「ただ真面目まじめなんです。真面目に人生から教訓を受けたいのです」

「私の過去を許あばいてもですか」

許くという言葉が、突然恐ろしい響きひびをもつて、私の耳を打つ

た。私は今私の前に坐すわっているのが、一人の罪人ざいにんであつて、不
断から尊敬している先生でないような気がした。先生の顔は蒼あおか
つた。

「あなたは本当に真面目なんですか」と先生が念を押した。「私
は過去の因果いんがで、人を疑うたぐりつけている。だから実はあなたも疑つ

ている。しかしどうもあなただけは疑りたくない。あなたは疑るにはあまりに単純すぎるようだ。私は死ぬ前にたった一人で好いから、他を信用して死にたいと思っている。あなたはそのたった一人になれますか。なつてくれますか。あなたははらの底から真面目ですか」

「もし私の命が真面目なものなら、私の今いった事も真面目です」
私の声は顫えた。

「よろしい」と先生がいった。「話しましょう。私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう。その代り……。いやそれは構わない。しかし私の過去はあなたに取つてそれほど有益でないかも知れませんか。聞かない方が増かましかも知れませんか。それから、

——今は話せないんだから、そのつもりでいて下さい。適當の時機が来なくつちや話さないんだから」

私は下宿へ歸つてからも一種の圧迫を感じた。

三十二

私の論文は自分が評価していたほどに、教授の眼にはよく見えなかつたらしい。それでも私は予定通り及第した。卒業式の日、私は^{かびくさ}黴臭くなつた古い冬服を^{こうり}行李の中から出して着た。式場にならぶと、どれもこれもみな暑そうな顔ばかりであつた。私は風の通らない^{あつらシヤ}厚羅紗の下に密封された自分の^{からだ}身体を持て余した。

しばらく立っているうちに手に持ったハンケチがぐしよぐしよになつた。

私は式が済むとすぐ帰つて裸体はだかになつた。下宿の二階の窓をあ

けて、遠眼鏡とおめがねのようにぐるぐる巻いた卒業証書の穴から、見え

るだけの世の中を見渡した。それからその卒業証書を机の上に放り出した。そうして大の字なりになつて、室へやの真中に寝そべつた。

私は寝ながら自分の過去を顧みた。また自分の未来を想像した。

するとその間に立って一区切りを付けているこの卒業証書なるものが、意味のあるような、また意味のないような変な紙に思われた。

私はその晩先生の家へ御馳走ごちそうに招かれて行つた。これはもし卒

業したらその日の晩餐ばんさんはよそで喰くわずに、先生の食卓で済ますという前からの約束であつた。

食卓は約束通り座敷の縁えん近くに据えられてあつた。模様の織り出された厚い糊のりの硬い卓こわ布テーブルクロスが美しくかつ清らかに電燈の光を射返いかえしていた。先生のうちで飯めしを食うと、きつとこの西洋料理店に見るような白いリンネルの上に、箸はしや茶碗ちやわんが置かれた。そうしてそれが必ず洗濯したての真白まっしろなものに限られていた。「カラヤカフスと同じ事さ。汚れたのを用いるくらいなら、一層いっそう始めから色の着いたものを使うが好い。白ければ純白でなくつちや」

こういわれてみると、なるほど先生は潔癖であつた。書斎など

も実に整然きちりと片付いていた。無頓着むとんじやくな私には、先生のそういう特色が折々著しく眼に留まった。

「先生は癩かんしょう性しょうですね」とかつて奥さんに告げた時、奥さんは「でも着物などは、それほど気にしないようですよ」と答えた事があつた。それを傍そばに聞いていた先生は、「本当をいうと、私は精神的に癩性ばかばかなんです。それで始終苦しいんです。考えると実に馬鹿馬鹿ばかばかしい性しょうぶん分ぶんだ」といつて笑つた。精神的に癩性ばかばかという意味は、俗にいう神経質という意味か、または倫理的に潔癖けつへきだという意味か、私には解わからなかつた。奥さんにも能く通じないらしいかつた。

その晩私は先生と向い合せに、例の白い卓布たくふの前に坐すわつた。奥

さんは二人を左右に置いて、独り庭の方を正面にして席を占めた。
「お目出とう」といつて、先生が私のために杯を上げてくれた。
私はこの盃さかずきに対してそれほど嬉しいうれ気を起さなかった。無論私自身の心がこの言葉に反響するように、飛び立つ嬉しさをもっていなかったのが、一つの源げん因であつた。けれども先生のいい方も決して私の嬉うれしさを唆そる浮々うきうきした調子を帯びていなかった。先生は笑つて杯さかずきを上げた。私はその笑いのうちに、些ちつとも意地の悪いアイロニーを認めなかった。同時に目出たいという真情も汲くみ取る事ができなかった。先生の笑いは、「世間はこんな場合によくお目出とうといったがるものですね」と私に物語つていた。

奥さんは私に「結構ね。さぞお父さんやお母さんかあはお喜びでし

よう」といつてくれた。私は突然病気の父の事を考えた。早くあの卒業証書を持って行つて見せてやろうと思つた。

「先生の卒業証書はどうしました」と私が聞いた。

「どうしたかね。——まだどこかにしまつてあつたかね」と先生が奥さんに聞いた。

「ええ、たしかしまつてあるはずですが」

卒業証書の在^{ありどころ}処は二人ともよく知らなかった。

三十三

飯^{めし}になつた時、奥さんは傍^{そば}に坐^{すわ}つてゐる下女^{げじよ}を次へ立たせて、

自分で給仕きゆうじの役をつとめた。これが表立たない客に対する先生
の家の仕来りしきたらしかった。始めの一、二回は私も窮屈わたくしを感じたが、
度数の重なるにつけ、茶碗ちやわんを奥さんの前へ出すのが、何でもな
くなった。

「お茶？ ご飯はん？ ずいぶんよく食べるのね」

奥さんの方でも思い切つて遠慮のない事をいうことがあつた。
しかしその日は、時候が時候なので、そんなに調戯からかわれるほど食
欲が進まなかつた。

「もうおしまい。あなた近頃ちかごろ大変しょうしょく小食しょうしょくになつたのね」

「小食になつたんじゃありません。暑いんで食われないんです」

奥さんは下女を呼んで食卓を片付けさせた後へ、改めてアイス

クリームと水菓子^{みずがし}を運ばせた。

「これは宅で拵^{うちこしら}えたのよ」

用のない奥さんには、手製のアイスクリームを客に振舞^{ふるま}うだけの余裕があると見えた。私はそれを二杯更^かえてもらった。

「君もいよいよ卒業したが、これから何をする気ですか」と先生が聞いた。先生は半分縁側の方へ席をずらして、敷居^{しきいぎわ}際で背中を障子^{しょうじ}に靠^もたせていた。

私にはただ卒業したという自覚があるだけで、これから何をしようという目的^{あて}もなかった。返事にためらっている私を見た時、奥さんは「教師？」と聞いた。それにも答えずにいると、今度は、「じゃお役人^{やくにん}？」とまた聞かれた。私も先生も笑い出した。

「本当いうと、まだ何をする考えもないんです。実は職業というものについて、全く考えた事がないくらいなんですから。だいたいどれが善^いいか、どれが悪^いいか、自分がやって見た上でないと解^{わか}らないんだから、選択に困る訳だと思います」

「それもそうね。けれどもあなたは必^{ひつきよう} 竟 財産があるからそんな呑^{のんき}気な事をいつていられるのよ。これが困る人でご覧なさい。なかなかあなたのように落ち付いちやいられないから」

私の友達には卒業しない前から、中学教師の口を探している人があつた。私は腹の中で奥さんのいう事実を認めた。しかしこういつた。

「少し先生にかぶれたんでしよう」

「碌^{ろく}なかぶれ方をして下さらないのね」

先生は苦笑した。

「かぶれても構わないから、その代りこの間いった通り、お父さんの生きてるうちに、相当の財産を分けてもらってお置きなさい。それでないと決して油断はならない」

私は先生といっしよに、郊外の植木屋の広い庭の奥で話した、あの躑^{つづじ}躑の咲いている五月の初めを思い出した。あの時帰り途^{みち}に、先生が昂^{こうふん}奮した語気で、私に物語った強い言葉を、再び耳の底で繰り返した。それは強いばかりでなく、むしろ凄^{すご}い言葉であつた。けれども事実を知らない私には同時に徹底しない言葉でもあつた。

「奥さん、お宅^{たく}の財産はよッぽどあるんですか」

「何だつてそんな事をお聞きになるの」

「先生に聞いても教えて下さらないから」

奥さんは笑いながら先生の顔を見た。

「教えて上げるほどないからでしょう」

「でもどのくらいあつたら先生のようにしていられるか、宅^{うち}へ歸つて一つ父に談判する時の参考にしますから聞かして下さい」

先生は庭の方を向いて、澄まして烟草^{タバコ}を吹かしていた。相手は自然奥さんでなければならなかった。

「どのくらいってほどありやしませんわ。まあこうしてどうかこうか暮してゆかれるだけよ、あなた。——そりやどうでも宜^いいと

して、あなたはこれから何か為なさらくちや本当にいけませんよ。先生のようにごろごろばかりしていちや……」

「ごろごろばかりしていやしないさ」

先生はちよつと顔だけ向け直して、奥さんの言葉を否定した。

三十四

わたくし私はその夜十時過ぎに先生の家を辞した。二、三日うちに帰国するはずになつていたので、座を立つ前に私はちよつと暇いとま乞いの言葉を述べた。

「また当分お目にかかれませんか」

「九月には出ていらつしやるんでしようね」

私はもう卒業したのだから、必ず九月に出て来る必要もなかった。しかし暑い盛りの八月を東京まで来て送ろうとも考えていなかった。私には位置を求めるための貴重な時間というものがなかった。

「まあ九月頃（べいごころ）になるでしょう」

「じゃずいぶんご機嫌（きげん）よう。私たちもこの夏はことによるとどこかへ行くかも知れないのよ。ずいぶん暑そうだから。行ったらまた絵端書（えはがき）でも送って上げましょう」

「どちらの見当です。もしいらつしやるとすれば」

先生はこの問答をにやにや笑って聞いていた。

「何まだ行くとも行かないとも極^きめていやしないんです」

席を立とうとした時、先生は急に私をつらまえて、「時にお父さんの病気はどうなんです」と聞いた。私は父の健康についてほとんど知るところがなかった。何ともいつて来ない以上、悪くはないのだろうくらいに考えていた。

「そんなに容^{たやす}易く考えられる病気じゃありませんよ。尿^{にようどくしよ}毒

症^うが出ると、もう駄^だ目^めなんだから」

尿毒症という言葉も意味も私には解^{わか}らなかった。この前の冬休みに国で医者と会見した時に、私はそんな術語をまるで聞かなかつた。

「本当に大事にしてお上げなさいよ」と奥さんもいった。「毒が

脳へ廻^{まわ}るようになると、もうそれつきりよ、あなた。笑い事じゃないわ」

無経験な私は気味を悪がりながらも、にやにやしていた。

「どうせ助からない病気だそうですから、いくら心配したって仕方ありません」

「そう思い切りよく考えれば、それまでですけれども」

奥さんは昔同じ病気で死んだという自分のお母さんの事でも憶^{おも}い出したのか、沈んだ調子でこういったなり下を向いた。私も父の運命が本当に気の毒になった。

すると先生が突然奥さんの方を向いた。

「静^{しず}、お前はおれより先へ死ぬだろうかね」

「なぜ」

「なぜでもない、ただ聞いてみるのさ。それとも己おれの方がお前より前に片付くかな。大抵世間じや旦那だんなが先で、細君さいくんが後へ残るのが当り前きまのようになってるね」

「そう極きまった訳でもないわ。けれども男ほうの方はどうしても、そら年が上でしよう」

「だから先へ死ぬという理屈なのかね。すると己もお前より先にあの世へ行かなくっちゃならない事になるね」

「あなたは特別よ」

「そうかね」

「だって丈夫なんですもの。ほとんど煩わづらった例ためしがないじやありません」

せんか。そりやどうしたって私の方が先だわ」

「先かな」

「え、きつと先よ」

先生は私の顔を見た。私は笑った。

「しかしもしおれの方が先へ行くとするね。そうしたらお前どうする」

「どうするって……」

奥さんはそこで口くちぐち籠もった。先生の死に対する想像的な悲哀が、

ちよつと奥さんの胸を襲襲ったらしかった。けれども再び顔をあげた時は、もう気分を更かえていた。

「どうするって、仕方がないわ、ねえあなた。老ろう少しょう不ふ定じょうって

いうくらいだから」

奥さんはことさらに私の方を見て 笑しょうだん談らしくこういった。

三十五

私はわたくし立て掛けた腰をまたおろして、話の区切りの付くまで二人の相手になっていた。

「君はどう思います」と先生が聞いた。

先生が先へ死ぬか、奥さんが早く亡くなるか、固もとより私に判断のつくべき問題ではなかった。私はただ笑っていた。

「寿命は分りませんね。私にも」

「こればかりは本当に寿命ですからね。生れた時にちゃんと極^{きま}つた年数をもらつて来るんだから仕方がないわ。先生のお父^{とう}さんやお母^{おんな}さんなんか、ほとんど同じよ、あなた、亡くなつたのが」

「亡くなられた日がですか」

「まさか日まで同じじゃないけれども。でもまあ同じよ。だつて続いて亡くなつちまつたんですもの」

この知識は私にとって新しいものであつた。私は不思議に思つた。

「どうしてそう一度に死なれたんですか」

奥さんは私の問いに答えようとした。先生はそれを遮^{さへぎ}つた。

「そんな話はお止^よしよ。つまらないから」

先生は手に持った団扇うちわをわざとばたばたいわせた。そうしてまた奥さんを顧みた。

「静しず、おれが死んだらこの家うちをお前にやろう」

奥さんは笑い出した。

「ついでに地面も下さいよ」

「地面は他ひとのものだから仕方がない。その代りおれの持つてるものは皆みんななお前にやるよ」

「どうも有難う。けれども横文字の本なんか貰もらつても仕様がないわね」

「古本屋に売るさ」

「売ればいくらぐらいになって」

先生はいくらともいわなかった。けれども先生の話は、容易に自分の死という遠い問題を離れなかった。そうしてその死は必ず奥さんの前に起るものと仮定されていた。奥さんも最初のうちは、わざとたわいのない受け答えをしているらしく見えた。それがいつの間にか、感傷的な女の心を重苦しくした。

「おれが死んだら、おれが死んだらって、まあ何^{なんべん}遍おつしやるの。後^{ごしょう}生だからもう好^{いい}い加減にして、おれが死んだらは止^よしてちょうだい。頂^{ちやうだい}戴^{えんぎ}。縁喜でもない。あなたが死んだら、何でもあなたの思い通りにして上げるから、それで好^{いい}いじゃありませんか」

先生は庭の方を向いて笑った。しかしそれぎり奥さんの厭^{いや}がる事をいわなくなつた。私もあまり長くなるので、すぐ席を立つた。

先生と奥さんは玄関まで送つて出た。

「ご病人をお大事に」と奥さんがいった。

「また九月に」と先生がいった。

私は挨拶あいさつをして格子こうしの外へ足を踏み出した。玄関と門の間に
あるこんもりした木犀もくせいの一株ひとかぶが、私の行手ゆくてを塞ふさぐように、夜
陰いんのうちに枝を張つていた。私は二、三步動き出しながら、黒ず
んだ葉おほに被おほわれているその梢こずえを見て、来たるべき秋の花と香おもを想
い浮べた。私は先生の宅うちとこの木犀とを、以前から心のうちで、
離す事のできないもののように、いつしよに記憶していた。私が
偶然その樹きの前に立つて、再びこの宅の玄関を跨またぐべき次の秋に
思いを馳はせた時、今まで格子の間から射さしていた玄関の電燈がふ

つと消えた。先生夫婦はそれぎり奥へはいったらしかった。私は一人暗い表へ出た。

私はすぐ下宿へは戻らなかった。国へ帰る前に調^{ととの}える買物もあったし、ご馳走^{ちそう}を詰めた胃袋にくつろぎを与える必要もあったので、ただ賑^{にぎ}やかな町の方へ歩いて行つた。町はまだ宵の口であつた。用事もなさそうな男^{なん}女^{によ}がぞろぞろ動く中に、私は今日私といつしよに卒業したなにがしに会つた。彼は私を無理やりにある酒場^{バー}へ連れ込んだ。私はそこで麦酒^{ビール}の泡のような彼の気^{きえん}を聞かされた。私の下宿へ帰つたのは十二時過ぎであつた。

三十六

わたくし
私はその翌日よくじつも暑さを冒おかして、頼まれものを買集めて歩いた。
手紙で注文を受けた時は何でも無いように考えていたのが、いざ
となると大變臆おつくう劫に感ぜられた。私は電車の中で汗を拭ふきなが
ら、他ひとの時間と手数に氣の毒という觀念をまるでもっていない田
舎者なかものを憎らしく思つた。

私はこの一夏ひとなつを無為に過すごす氣はなかつた。国へ歸つてから
の日程りこうというようなものをあらかじめ作つておいたので、それを
履行りこうするに必要な書物も手に入れなければならなかつた。私は半
日を丸善まるぜんの二階で潰つぶす覺悟でいた。私は自分に關係の深い部門
の書籍棚の前に立つて、隅から隅まで一冊ずつ点検して行つた。

買物のうちで一番私を困らせたのは女の半襟はんえりであつた。小僧にいうと、いくらでも出してはくれるが、さてどれを選んでいいのか、買う段になつては、ただ迷うだけであつた。その上価あたいきわが極めて不定であつた。安かろうと思つて聞くと、非常に高かつたり、高かろうと考へて、聞かずにいると、かえつて大変安かつたりした。あるいはいくら比べて見ても、どこから価格の差違が出るのか見当の付かないのもあつた。私は全く弱らせられた。そうして心のうちで、なぜ先生の奥さんを煩わづらわさなかつたかを悔いた。

私は鞆かばんを買つた。無論和製の下等な品に過ぎなかつたが、それでも金具やなどがぴかぴかしているの、田舎ものを威嚇おどかすには充分であつた。この鞆を買うという事は、私の母の注文であつ

た。卒業したら新しい鞆を買って、そのなかに一切いっさいの土産みやげものを入れて帰るようにと、わざわざ手紙の中に書いてあった。私はその文句を読んだ時に笑い出した。私には母の料簡りようけんが解わからないというよりも、その言葉が一種の滑稽こっけいとして訴えたのである。私は暇いとま乞いをする時先生夫婦に述べた通り、それから三日目の汽車で東京を立つて国へ帰った。この冬以来父の病氣について先生から色々の注意を受けた私は、一番心配しなければならぬ地位にありながら、どういうものか、それが大して苦にならなかつた。私はむしろ父がいなくなつたあとの母を想像して氣の毒に思つた。そのくらいだから私は心のどこかで、父はすでに亡くなるべきものと覺悟していたに違いなかつた。九州にいる兄へやつ

た手紙のなかにも、私は父の到底故とてもとのような健康体になる見込みのない事を述べた。一度などは職務の都合もあろうが、できるなら繰り合せてこの夏ぐらい一度顔だけでも見に帰ったらどうだとまで書いた。その上年寄が二人ぎりいで田舎にいるのは定めて心細いだろう、我々も子として遺憾いかんの至りであるというような感傷的な文句さえ使った。私は實際心に浮ぶままを書いた。けれども書いたあとの気分は書いた時とは違っていた。

私はそうした矛盾を汽車の中で考えた。考えているうちに自分が自分に気の変りやすい軽薄もののように思われて来た。私は不愉快になった。私はまた先生夫婦の事を想い浮べた。ことに二、三日前晩食ばんめしに呼ばれた時の会話を憶い出した。

「どっちが先へ死ぬだろう」

私はその晩先生と奥さんの間に起った疑問をひとり口の内でも繰り返してみた。そうしてこの疑問には誰も自信をもつて答える事ができないのだと思った。しかしどっちが先へ死ぬと判断はつきり分つていたならば、先生はどうするだろう。奥さんはどうするだろう。先生も奥さんも、今のような態度でいるより外ほかに仕方がないだろうと思った。（死に近づきつつある父を国元に控えながら、この私がどうする事もできないように）。私は人間を果敢はかないものに観じた。人間のどうする事もできない持つて生れた輕薄を、果敢ないものに観じた。

中 両親と私

一

宅^{うち}へ帰って案外に思ったのは、父の元気がこの前見た時と大して変っていない事であつた。

「ああ帰ったかい。そうか、それでも卒業ができてまあ結構だつ

た。ちよつとお待ち、今顔を洗つて来るから」

父は庭へ出て何かしていたところであつた。古い麦藁帽むぎわらぼうの後ろへ、日除ひよけのために括り付けた薄汚うすぎたないハンケチをひらひらさせながら、井戸のある裏手の方へ廻まわつて行つた。

学校を卒業するのを普通の人間として当然のように考えていた私は、それを予期以上に喜んでくれる父の前に恐縮した。

「卒業ができてまあ結構だ」

父はこの言葉を何遍なんべんも繰り返した。私は心のうちでこの父の喜びと、卒業式のあつた晩先生の家の食卓で、「お目出とう」といわれた時の先生の顔付かおつきとを比較した。私には口で祝つてくれながら、腹の底でけなしている先生の方が、それほどにもないも

のを珍しそうに嬉^{うれ}しがる父よりも、かえって高尚に見えた。私はしまいに父の無知から出る田舎臭^{いなかぐさ}いところに不快を感じ出した。「大学ぐらい卒業したって、それほど結構でもありません。卒業するものは毎年何百人だってあります」

私はついにこんな口の利き^きようをした。すると父が変な顔をした。

「何も卒業したから結構とばかりいうんじゃない。そりや卒業は結構に違^{ちが}いないが、おれのいうのはもう少し意味があるんだ。それがお前に解^{わか}つていてくれさえすれば、……」

私は父からその後^{あと}を聞こうとした。父は話したくなさそうであったが、とうとうこういった。

「つまり、おれが結構という事になるのさ。おれはお前の知つて
 通りの病氣だろう。去年の冬お前に会つた時、ことによるとも
 う三月みつきか四月よつきぐらいなものだろうと思つていたのさ。それがどう
 いう仕合せしあわせか、今日までこうしている。起居たちいに不自由なくこうし
 ている。そこへお前が卒業してくれた。だから嬉しいうれのさ。せつ
 かく丹精たんせいした息子が、自分のいなくなつた後あとで卒業してくれる
 よりも、丈夫なうちに学校を出てくれる方が親の身になれば嬉しいうれ
 いだろうじゃないか。大きな考えをもっているお前から見たら、
 高たかが大学を卒業したぐらいで、結構だ結構だといわれるのは余り
 面白くもないだろう。しかしおれの方から見てご覧、立場が少し
 違つてゐるよ。つまり卒業はお前に取つてより、このおれに取つ

て結構なんだ。解ったかい」

私は一言もなかつた。詫まる以上^{あや}に恐縮して俯向^{うつむ}いていた。父は平気なうちに自分の死を覚悟していたものとみえる。しかも私の卒業する前に死ぬだろうと思ひ定めていたとみえる。その卒業が父の心にどのくらい響くかも考えずにいた私は全く愚^{おろ}かものであつた。私は鞆^{かばん}の中から卒業証書を取り出して、それを大事そうに父と母に見せた。証書は何かに圧^おし潰^{つぶ}されて、元の形を失つていた。父はそれを鄭寧^{ていねい}に伸した。

「こんなものは巻いたなり手に持つて来るものだ」

「中^{しん}に心でも入れると好^よかつたのに」と母も傍^{かたわら}から注意した。

父はしばらくそれを眺^{なが}めた後^{あと}、起^たつて床^{とこ}の間の所へ行つて、誰^{だれ}

の目にもすぐはいるような正面へ証書を置いた。いつもの私ならすぐ何とかいうはずであつたが、その時の私はまるで平生と違つていた。父や母に対して少しも逆らう気が起らなかった。私はだまつて父の為すがままに任せておいた。一旦癖のついた鳥の子紙の証書は、なかなか父の自由にならなかつた。適当な位置に置かれるや否や、すぐ己れに自然な勢いを得て倒れようとした。

二

私は母を蔭へ呼んで父の病状を尋ねた。

「お父さんはあんなに元氣そうに庭へ出たり何かしているが、あ

れでいいんですか」

「もう何ともないようだよ。大方おおかた好くおなりなんだろう」

母は案外平気であつた。都会から懸かけ隔かたつた森や田の中に住んでゐる女の常として、母はこういう事に掛けてはまるで無知識であつた。それにしてもこの前父が卒倒した時には、あれほど驚いて、あんなに心配したものを、と私は心のうちで独り異いな感じを抱いだいた。

「でも医者はその時到底とてもむずかしいって宣告したじやありませんか」

「だから人間の身体からだほど不思議なものはないと思うんだよ。あれほどお医者が手重ておもくいったものが、今までしやんしやんしている

んだからね。お母さんも始めのうちは心配して、なるべく動かさないようにと思つてたんだがね。それ、あの気性だろう。養生はしなざるけれども、強情ごうじょうでねえ。自分が好いと思ひ込んだら、なかなか私のわたしいう事なんか、聞きそうにもなさらないんだからね」

私はこの前歸つた時、無理に床とこを上げさせて、髭ひげを剃そつた父の様子と態度とを思ひ出した。「もう大丈夫、お母さんがあんまり仰ぎよう山過やまぎるからいけないんだ」といつたその時の言葉を考へてみると、満更母まんざらばかり責める氣にもなれなかつた。「しかし傍はたでも少しは注意しなくっちゃ」といおうとした私は、とうとう遠慮して何にも口へ出さなかつた。ただ父の病やまいの性質について、私の知る限りを教えるように話して聞かせた。しかしその大部分

は先生と先生の奥さんから得た材料に過ぎなかった。母は別に感動した様子も見せなかった。ただ「へえ、やつぱり同じ病気でね。お気の毒だね。いくつでお亡くなりかえ、その方は」など聞いた。た。

私は仕方がないから、母をそのままにしておいて直接父に向かった。父は私の注意を母よりは真面目まじめに聞いてくれた。「もつともだ。お前のいう通りだ。けれども、己の身体おれからだは必ひつきよう 竟 己の身体で、その己の身体についての養生法は、多年の経験上、己が一番能く心得ているはずだからね」といった。それを聞いた母は苦笑した。「それご覧な」といった。

「でも、あれでお父さんは自分でちゃんと覚悟だけはしているん

ですよ。今度私が卒業して帰ったのを大変喜んでいるのも、全くそのためなんです。生きてるうちに卒業はできまいと思ったのが、達者なうちに免状を持って来たから、それが嬉しいんだって、お父さんは自分でそういつていましたぜ」

「そりや、お前、口でこそそうおいだけどもね。お腹のなかではまだ大丈夫だと思ってお出のだよ」

「そうでしようか」

「まだまだ十年も二十年も生きる気でお出のだよ。もっとも時々
はわたしにも心細いような事をおいいだがね。おれもこの分じや
もう長い事もあるまいよ、おれが死んだら、お前はうちでこの家
にうちにいる気かなんて」

私は急に父がいなくなつて母一人が取り残された時の、古い広い田舎家いなかやを想像して見た。この家いえから父一人を引き去つた後は、そのままで立ち行くだろうか。兄はどうするだろうか。母は何と云うだろうか。そう考える私はまたこの土を離れて、東京で氣樂に暮らして行けるだろうか。私は母を眼の前に置いて、先生の注意——父の丈夫でいるうちに、分けて貰もらうものは、分けて貰つて置けという注意を、偶然思ひ出した。

「なにね、自分で死ぬ死ぬつていう人に死んだ試ためしはないんだから安心だよ。お父さんなんでも、死ぬ死ぬつていいながら、これから先まだ何年生きなさるか分るまいよ。それよりか黙つてる丈夫の人の方が剣呑けんおんさ」

私は理屈から出たとも統計から来たとも知れない、この陳腐な
 ような母の言葉を默然と聞いていた。

三

私のために赤い飯を炊いて客をするという相談が父と母の間に
 起った。私は帰った当日から、あるいはこんな事になるだろうと
 思つて、心のうちで暗にそれを恐れていた。私はすぐ断わつた。

「あんまり仰山な事は止してください」

私は田舎の客が嫌いだった。飲んだり食つたりするのを、最後
 の目的としてやって来る彼らは、何か事があれば好いといった風

の人ばかり揃そろっていた。私は子供の時から彼らの席に侍じするのを心苦しく感じていた。まして自分のために彼らが来るとなると、私の苦痛はいっそう甚はなはだしいように想像された。しかし私は父や母の手前、あんな野鄙やひな人を集めて騒ぐのは止せともいいかねた。それで私はただあまり仰山ちやうざんだからとばかり主張した。

「仰山ちやうざん仰山とおいだが、些ちとも仰山じゃないよ。生涯に二度とある事じゃないんだからね、お客ぐらいするのは当たり前だよ。そう遠慮をお為しでない」

母は私が大学を卒業したのを、ちようど嫁でも貰もらったと同じ程度に、重く見ているらしかった。

「呼ばなくっても好いいが、呼ばないとまた何とかいうから」

これは父の言葉であつた。父は彼らの陰口を気にしていた。実際彼らはこんな場合に、自分たちの予期通りにならないと、すぐ何とかいいたがる人々であつた。

「東京と違つて田舎は蒼蠅うるさいからね」

父はこうもいった。

「お父さんの顔もあるんだから」と母がまた付け加えた。

私は我がを張る訳にも行かなかつた。どうしても二人の都合の好いようにしたらと思ひ出した。

「つまり私のためなら、止よして下さいというだけなんです。陰で何かいわれるのが厭いやだからというご主意しゅいなら、そりやまた別です。あなたがたに不利益な事を私が強いて主張したって仕方がありません。

せん」

「そう理屈をいわれると困る」

父は苦い顔をした。

「何もお前のためにするんじゃないとお父さんがおっしゃるんじゃないけれども、お前だって世間への義理ぐらいは知っているだろう」

母はこうなると女だけにしどろもどろな事をいった。その代り口数からいうと、父と私を二人寄せてもなかなか敵^{かな}うどころではなかった。

「学問をさせると人間がとかく理屈っぽくなっていけない」

父はただこれだけしかいわなかった。しかし私はこの簡単な一

句のうちに、父が平生へいぜいから私に対してもっている不平の全体を見た。私はその時自分の言葉使いの角張かどばったところに気が付かずに、父の不平の方ばかりを無理のように思った。

父はその夜よまた氣を更かえて、客を呼ぶなら何日いつにするかと私の都合を聞いた。都合の好いいも悪いもなしにただぶらぶら古い家の中に寝起ねおきしている私に、こんな問いを掛けるのは、父の方が折れて出たのと同じ事であつた。私はこの穏やかな父の前に拘泥こだわらない頭を下げた。私は父と相談の上招待しょうだいの日取りを極きめた。

その日取りのまだ来ないうちに、ある大きな事が起つた。それは明治天皇めいじてんのうのご病氣の報知であつた。新聞紙ですぐ日本中へ知れ渡つたこの事件は、一軒の田舎家いなかやのうちに多少の曲折を経てよ

うやく纏まとまろうとした私の卒業祝いを、塵ちりのごとくに吹き払った。

「まあ、ご遠慮申した方がよからう」

眼鏡めがねを掛けて新聞を見ていた父はこういった。父は黙って自分の病気の事も考えているらしかった。私はついこの間の卒業式に例年の通り大学へ行幸ぎようこうになった陛下を憶おもい出したりした。

四

小勢こぜいな人数にんずには広過ぎる古い家がひっそりしている中に、私はわたくし行李こうりを解いて書物を繙ひもとき始めた。なぜか私は気が落ち付かなかつた。あの目眩めまぐるしい東京の下宿の二階で、遠く走る電車の音を耳

にしながら、頁ページを一枚一枚にまくって行く方が、氣に張りがあつて心持よく勉強ができた。

私はややともすると机にもたれて仮寝うたたねをした。時にはわざわざ枕まくらさえ出して本式に昼寝を食むさほる事もあつた。眼が覚めると、蟬せみの声を聞いた。うつつから続いているようなその声は、急に八や釜かましく耳の底を搔かき乱した。私は凝じつとそれを聞きながら、時に悲しい思いを胸むねに抱いだいた。

私は筆を執とつて友達のだれかれに短い端書はがきまたは長い手紙を書いた。その友達のあるものは東京に残つていた。あるものは遠い故郷に歸もどつていた。返事の来るのも、音信たよりの届かないのもあつた。私は固もとより先生を忘れなかつた。原稿紙へ細字さいじで三枚ばかり国へ

歸つてから以後の自分というようなものを題目にして書き綴つたのを送る事にした。私はそれを封じる時、先生ははたしてまだ東京にいるだろうかうたぐと疑つた。先生が奥さんといつしよに宅うちを空ける場合には、五十恰好がっこうの切下きりさげの女の人がどこからか来て、留守番をするのが例になつていた。私がかつて先生にあの人は何ですかと尋ねたら、先生は何と見えますかと聞き返した。私はその人を先生の親類と思ひ違へていた。先生は「私には親類はありませんよ」と答へた。先生の郷里にいる続きあいの人々と、先生は一向つこう音信の取り遣りとやをしていなかった。私の疑問にしたその留守番の女の人は、先生とは縁のない奥さんの方の親戚しんせきであつた。私は先生に郵便を出す時、ふと幅の細い帯を樂に後ろで結んでい

るその人の姿を思い出した。もし先生夫婦がどこかへ避暑にでも行つたあとへこの郵便が届いたら、あの切下のお婆ばあさんは、それをすぐ転地先へ送ってくれるだけの氣転と親切があるだろうかなどと考えた。そのくせその手紙のうちにはこれというほどの必要の事も書いてないのを、私は能く承知よしていた。ただ私は淋さびしかった。そうして先生から返事の来るのを予期してかかった。しかしその返事はついに来なかった。

父はこの前の冬に歸つて来た時ほど将棋しょうぎを差したがらなくなつた。将棋盤はほこりの溜たまつたまま、床とこの間の隅に片寄せられてあつた。ことに陛下のご病氣以後父は凝じつと考え込んでいるように見えた。毎日新聞の来るのを待ち受けて、自分が一番先へ読んだ。

それからその読^{よみ}がらをわざわざ私のいる所へ持って来てくれた。

「おいご覧、今日も天子さまの事が詳しく出ている」

父は陛下のことを、つねに天子さまといっていた。

「勿^{もつ}体^{たい}ない話だが、天子さまのご病氣も、お父さんのとまあ似たものだろうな」

こういう父の顔には深い掛^け念^{ねん}の曇^{くも}りがかかっていた。こういうわれる私の胸にはまた父がいつ斃^{たお}れるか分らないという心配がひらめいた。

「しかし大丈夫だろう。おれのような下^{くだ}らないものでも、まだこうしていられるくらいだから」

父は自分の達者な保証を自分で与えながら、今にも己^{おの}れに落ち

かかつて来そうな危険を予感しているらしかった。

「お父さんは本当に病気を怖こわがってるんですよ。お母さんのおつしやるように、十年も二十年も生きる気じやなさそうですぜ」

母は私の言葉を聞いて当惑そうな顔をした。

「ちよつとまた将棋でも差すように勧めてご覧な」

私は床の間から将棋盤を取りおろして、ほこりを拭ふいた。

五

父の元気は次第に衰えて行つた。わたくし私を驚かせたハンケチ付きの古い麦藁帽子むぎわらぼうしが自然と閑かんきやく却されるようになった。私は黒い

煤^{すす}けた棚の上に載^のっているその帽子を眺^{なが}めるたびに、父に対して
気の毒な思いをした。父が以前のように、軽々と動く間は、もう
少し慎^{つつし}んでくれたらと心配した。父が凝^{じっ}と坐^{すわ}り込むようになると、
やはり元の方が達者だったのだという気が起った。私は父の健康
についてよく母と話し合った。

「まったく気のせいだよ」と母がいった。母の頭は陛下^{やまい}の病と父
の病とを結び付けて考えていた。私にはそうばかりとも思えな
かった。

「氣じゃない。本当に身体^{からだ}が悪かないんでしょうか。どうも気分
より健康の方が悪くなつて行くらしい」

私はこういつて、心のうちでまた遠くから相当の医者でも呼ん

で、一つ見せようかしらと思案した。

「今年の夏はお前も詰つまらなからう。せつかく卒業したのに、お祝いもして上げる事ができず、お父さんの身体からだもあの通りだし。それに天子様のご病気で。——いっその事、帰るすぐにお客でも呼ぶ方が好かつたんだよ」

私が帰つたのは七月の五、六日で、父や母が私の卒業を祝うために客を呼ぼうといひだしたのは、それから一週間後ごであつた。そうしていよいよと極きめた日はそれからまた一週間の余も先になつていた。時間に束縛を許さない悠長な田舎いなかに帰つた私は、お蔭かげで好もしくない社交上の苦痛から救われたも同じ事であつたが、私を理解しない母は少しもそこに気が付いていないらしかつた。

いめりんすの地と、地のなかに染め出した赤い日の丸の色とを眺^{なが}めた。それが薄汚ない屋根の藁に映るのも眺めた。私はかつて先生から「あなたの宅の構えはどんな体裁ですか。私の郷里の方とは大分趣^{だいぶん}が違っていますかね」と聞かれた事を思い出した。私は自分の生れたこの古い家を、先生に見せたくもあつた。また先生に見せるのが恥ずかしくもあつた。

私はまた一人家のなかへはいった。自分の机の置いてある所へ来て、新聞を読みながら、遠い東京の有様を想像した。私の想像は日本一の大きな都が、どんなに暗いなかでどんなに動いているだろうかの画面に集められた。私はその黒いなりに動かなければ仕末のつかなくなった都会の、不安でざわざわしているなかに、

一点の燈火のごとくに先生の家を見た。私はその時この燈火が音のしない渦うずの中に、自然と捲まき込まれている事に気が付かなかつた。しばらくすれば、その灯ひもまたふつと消えてしまふべき運命を、眼めの前に控えているのだとは固もとより気が付かなかつた。

私は今度の事件について先生に手紙を書くかと思つて、筆を執とりかけた。私はそれを十行ばかり書いて已やめた。書いた所は寸す々んずんに引き裂いて屑くず籠かごへ投げ込んだ。（先生に宛あててそういう事を書いて仕方がないとも思つたし、前例ちように徴さしてみると、とても返事をくれそうになかつたから）。私は淋さびしかった。それで手紙を書くのであつた。そうして返事が来れば好いいと思うのであつた。

六

八月の半ば^{なか}ごろになって、私は^{わたくし}ある朋^{ほう}友^{ゆう}から手紙を受け取った。その中に地方の中学教員の口があるが行かないかと書いてあった。この朋友は経済の必要上、自分でそんな位地を探し廻^{まわ}る男であつた。この口も始めは自分の所へかかつて来たのだが、もつと好^{いい}い地方へ相談ができたので、余つた方を私に譲る気で、わざわざ知らせて来てくれたのであつた。私はすぐ返事を出して断つた。知り合いの中には、ずいぶん骨を折つて、教師の職にありつきたがつているものがあるから、その方へ廻^{まわ}してやったら好^よかる

うと書いた。

私は返事を出した後で、父と母にその話をした。二人とも私の断った事に異存はないようであつた。

「そんな所へ行かないでも、まだ好い口があるだろう」

こういつてくれる裏に、私は二人が私に対してもっている過分な希望を読んだ。迂闊^{うかつ}な父や母は、不相当な地位と収入とを卒業したての私から期待しているらしかったのである。

「相当の口つて、近^{ちかごろ}頃じやそんな旨い^{うま}口はなかなかあるものじやありません。ことに兄さんと私とは専門も違ふし、時代も違ふんだから、二人を同じように考えられちや少し困ります」

「しかし卒業した以上は、少なくとも独立してやって行つてくれ

なくつちやこつちも困る。人からあなたの所のご二男じなんは、大学を卒業なすつて何をしてお出いでですかと聞かれた時に返事ができないようじや、おれも肩身が狭いから」

父は洩しゅうめん面をつくつた。父の考えは、古く住み慣れた郷里から外へ出る事を知らなかった。その郷里の誰だれ彼から、大学を卒業すればいくらぐらい月給が取れるものだろうと聞かれたり、まあ百円ぐらいなものだろうかといわれたりした父は、こういう人々に対して、外聞の悪くないように、卒業したての私を片付けたかったのである。広い都を根拠地として考えている私は、父や母から見ると、まるで足を空に向けて歩く奇体きたいな人間に異ならなかった。私の方でも、実際そういう人間のような氣持を折々起した。

私はあからさまに自分の考えを打ち明けるには、あまりに距離の懸隔けんかくはなはだの甚しい父と母の前に默然もくねんとしていた。

「お前をよく先生先生という方にでもお願いしたら好いじゃないか。こんな時こそ」

母はこうより外ほかに先生を解釈する事ができなかつた。その先生は私に国へ帰つたら父の生きているうちに早く財産を分けて貰えと勧める人であつた。卒業したから、地位の周旋をしてやろうという人ではなかつた。

「その先生は何をしているのかい」と父が聞いた。

「何にもしていないんです」と私が答えた。

私はとくの昔から先生の何もしないという事を父にも母に

も告げたつもりでいた。そうして父はたしかにそれを記憶しているはずであった。

「何もしていないというのは、またどういう訳かね。お前がそれほど尊敬するくらいな人なら何かやっていそうなものだがね」

父はこういつて、私を諷ふうした。父の考えでは、役に立つものは世の中へ出てみんな相当の地位を得て働いている。必ひつきよう 竟きよう やくざだから遊んでいるのだと結論しているらしかった。

「おれのような人間だって、月給こそ貰もらっちゃいないが、これでも遊んでばかりいるんじゃない」

父はこうもいった。私はそれでもまだ黙っていた。

「お前のいうような偉い方なら、きっと何か口を探して下さるよ。」

頼んでご覧なのかい」と母が聞いた。

「いいえ」と私は答えた。

「じゃ仕方がないじゃないか。なぜ頼まないんだい。手紙でも好
いからお出しな」

「ええ」

私は生返事なまへんじをして席を立つた。

七

父は明らかに自分の病気を恐れていた。しかし医者いしやの来るたび
に蒼蠅そうろうい質問を掛けて相手を困らす質たちでもなかった。医者の方で

もまた遠慮して何ともいわなかった。

父は死後の事を考えているらしかった。少なくとも自分がいなくなつた後のわが家いえを想像して見るらしかった。

「小供こどもに学問をさせるのも、好よし悪あしだね。せつかく修業をさせると、その小供は決して宅うちへ歸つて来ない。これじゃ手もなく親子を隔離するために学問させるようなものだ」

学問をした結果兄は今遠えんごく国にいた。教育を受けた因果わたくしで、私はまた東京に住む覚悟を固くした。こういう子を育てた父の愚痴ぐちはもとより不合理ではなかった。永年住み古した田舎家いなかやの中に、たった一人取り残されそうな母を描えがき出す父の想像はもとより淋さびしいに違いなかった。

わが家^{いえ}は動かす事のできないものと父は信じ切っていた。その中に住む母もまた命のある間は、動かす事のできないものと信じていた。自分が死んだ後^{あと}、この孤独な母を、たった一人伽藍堂^{がらんどう}のわが家に取り残すのもまた甚^{はなは}だしい不安であつた。それなのに、東京で好^いい地位を求めろといつて、私を強^しいたがる父の頭には矛盾があつた。私はその矛盾をおかしく思つたと同時に、そのお蔭^{かげ}でまた東京へ出られるのを喜んだ。

私は父や母の手前、この地位をできるだけの努力で求めつつあるごとくに装おわなくてはならなかつた。私は先生に手紙を書いて、家の事情を精^{くわ}しく述べた。もし自分の力でできる事があつたら何でもするから周旋してくれと頼んだ。私は先生が私の依頼に

取り合うまいと思ひながらこの手紙を書いた。また取り合うつもりでも、世間の狭い先生としてはどうする事もできまいと思ひながらこの手紙を書いた。しかし私は先生からこの手紙に対する返事がきつと来るだろうと思つて書いた。

私はそれを封じて出す前に母に向かつていった。

「先生に手紙を書きましたよ。あなたのおつしやつた通り。ちよつと読んでご覧なさい」

母は私の想像したごとくそれを読まなかつた。

「そうかい、それじゃ早くお出し。そんな事は他がひと氣を付けないでも、自分で早くやるものだよ」

母は私をまだ子供のように思つていた。私も實際子供のような

感じがした。

「しかし手紙じや用は足りませんよ。どうせ、九月にでもなつて、私が東京へ出てからでなくっちゃ」

「そりやそうかも知れないけれども、またひよつとして、どんな好い口がないとも限らないんだから、早く頼んでおくに越した事はないよ」

「ええ。とにかく返事は来るに極きまつてますから、そうしたらまたお話ししましょう」

私はこんな事に掛けて几帳面きちようめんな先生を信じていた。私は先生の返事の来るのを心待ちに待った。けれども私の予期はついはずに外れた。先生からは一週間経たつても何の音信たよりもなかった。

「おおかた大方どこかへ避暑にでも行っているんでしよう」

私は母に向かって言いいわけ訳らしい言葉を使わなければならなかった。そうしてその言葉は母に対する言訳ばかりでなく、自分の心に対する言訳でもあった。私は強しいても何かの事情を仮定して先生の態度を弁護しなければ不安になった。

私は時々父の病気を忘れた。いつそ早く東京へ出てしまおうかと思ったりした。その父自身もおのれの病気を忘れる事があった。未来を心配しながら、未来に対する所置は一向取らなかった。私はついに先生の忠告通り財産分配の事を父にいい出す機会を得ずに過ぎた。

八

九月始めになって、^{わたくし}私はいよいよまた東京へ出ようとした。私は父に向かって当分今まで通り学資を送ってくれるようにと頼んだ。

「ここにこうしていたって、あなたのおっしゃる通りの地位が得られるものじゃないですから」

私は父の希望する地位を得るために東京へ行くような事をいった。

「無論口の見付かるまでで好いですから」ともいった。

私は心のうちで、その口は到底私の頭の上に落ちて来ないと思

っていた。けれども事情にうとい父はまたあくまでもその反対を信じていた。

「そりや僅わずかの間の事あいだだろうから、どうにか都合してやろう。その代り永くはいけないよ。相当の地位を得え次第独立しなくっちゃ。元来学校を出た以上、出たあくる日から他の世話になんぞなるものじゃないんだから。今の若いものは、金を使う道だけ心得て、金を取る方は全く考えていないようだね」

父はこの外ほかにもまだ色々の小言こごとをいった。その中には、「昔の親は子に食わせてもらつたのに、今の親は子に食われるだけだ」などという言葉があつた。それらを私はただ黙つて聞いていた。

小言が一通り済んだと思つた時、私は静かに席を立とうとした。

父はいつ行くかと私に尋ねた。私には早いだけが好かつた。

「お母さんに日を見てもらいなさい」

「そうしましょう」

その時の私は父の前にぞんがい存外おとなしかった。私はなるべく父の機嫌に逆らわずに、田舎いなかを出ようとした。父はまた私を引き留めた。

「お前が東京へ行くと宅うちはまた淋さみしくなる。何しろ己おれとお母さんだけなんだからね。そのおれも身体からださえ達者なら好いいが、この様子じやいつ急にどんな事がないともいえないよ」

私はできるだけ父を慰めて、自分の机を置いてある所へ歸つた。私は取り散らした書物の間に坐すわつて、心細そうな父の態度と言葉

とを、幾度いくたびか繰り返し眺めた。私はその時また蟬せみの声を聞いた。その声はこの間あいだしゅう中聞いたのと違つて、つくつく法師ほうしの声であつた。私は夏郷里に歸つて、煮え付くような蟬の声の中に凝じつと坐つていると、変に悲しい心持になる事がしばしばあつた。私の哀愁はいつもこの虫の烈はげしい音ねと共に、心の底に沁しみ込むように感ぜられた。私はそんな時にはいつも動かずに、一人で一人を見詰めていた。

私の哀愁はこの夏帰省した以後次第に情調を変えて来た。油蟬の声がつくつく法師の声に変わるごとくに、私を取り巻く人の運命が、大きな輪廻りんねのうちに、そろそろ動いているように思われた。私は淋さびしそうな父の態度と言葉を繰り返しながら、手紙を出して

も返事を寄こさない先生の事をまた憶い浮べた。先生と父とは、まるで反対の印象を私に与える点において、比較の上にも、連想の上にも、いっしょに私の頭に上りやすかつた。

私はほとんど父のすべても知り尽くしていた。もし父を離れるとすれば、情合じょうあいの上に親子の心残りがあるだけであつた。先生の多くはまだ私に解わかつていなかった。話すと約束されたその人の過去もまだ聞く機会を得ずにいた。要するに先生は私にとって薄暗かつた。私はぜひともそこを通り越して、明るい所まで行かなければ気が済まなかつた。先生と関係の絶えるのは私にとって大いなる苦痛であつた。私は母に日を見てもらつて、東京へ立つ日取りを極きめた。

九

わたくし
私がいよいよ立とうという間際になって、（たしか二日前の夕方
の事であつたと思うが、）父はまた突然引ひつ繰り返つた。私は
その時書物や衣類を詰めた行李（こうり）をからげていた。父は風呂へ入つ
たところであつた。父の背中を流しに行つた母が大きな声を出し
て私を呼んだ。私は裸体（はだか）のまま母に後ろから抱かれている父を見
た。それでも座敷へ伴（つ）れて戻つた時、父はもう大丈夫だといった。
念のために枕元（まくらもと）に坐（すわ）つて、濡手拭（ぬれてぬぐい）で父の頭を冷（ひや）していた私
は、九時頃（ごろ）になつてようやく形（かた）ばかりの夜食を済ました。

翌日よくじつになると父は思ったより元気が好よかった。留とめるのも聞かずに歩いて便所へ行ったりした。

「もう大丈夫」

父は去年の暮倒れた時に私に向かつていったと同じ言葉をまた繰り返した。その時ははたして口でいった通りまあ大丈夫であった。私は今度もあるいはそうなるかも知れないと思った。しかし医者はただ用心が肝要だと注意するだけで、念を押しても判然はつきりした事を話してくれなかった。私は不安のために、出立しゅつたつの日が来てもついに東京へ立つ気が起らなかった。

「もう少し様子を見てからにしましょうか」と私は母に相談した。「そうしておくれ」と母が頼んだ。

母は父が庭へ出たり背戸^{せど}へ下りたりする元気を見ている間だけは平気でいるくせに、こんな事が起るとまた必要以上に心配したり気を揉^もんだりした。

「お前は今日東京へ行くはずじゃなかったか」と父が聞いた。

「ええ、少し延ばしました」と私が答えた。

「おれのためにかい」と父が聞き返した。

私はちよつと躊躇^{ちゆうちよ}した。そうだといえば、父の病気の重い

のを裏書きするようなものであつた。私は父の神経を過敏にしくなかつた。しかし父は私の心をよく見抜いているらしかつた。

「気の毒だね」といつて、庭の方を向いた。

私は自分の部屋にはいつて、そこに放り出された行李を眺めた。

行李はいつ持ち出しても差^さ支^しえないように、堅く括^くられたままであつた。私はぼんやりその前に立つて、また縄を解こうかと考えた。

私は坐つたまま腰を浮かした時の落ち付かない気分で、また三、四日を過ごした。すると父がまた卒倒した。医者は絶対に安臥^{あんが}を命じた。

「どうしたものだろね」と母が父に聞こえないような小さな声で私にいった。母の顔はいかにも心細そうであつた。私は兄と妹^{いもと}に電報を打つ用意をした。けれども寝ている父にはほとんど何の苦悶^{くもん}もなかつた。話をするところなどを見ると、風邪^{かぜ}でも引いた時と全く同じ事であつた。その上食欲は不断よりも進んだ。傍^{はた}の

ものが、注意しても容易にいう事を聞かなかった。

「どうせ死ぬんだから、旨いものでも食って死ななくっちゃ」

私には旨いものという父の言葉が滑稽にも悲酸にも聞こえた。

父は旨いものを口に入れられる都には住んでいなかったのである。
夜に入ってかき餅などを焼いてもらってぼりぼり噛んだ。

「どうしてこう渴くのかね。やっぱりに心に丈夫の所があるのかも知れないよ」

母は失望していいところにかえって頼みを置いた。そのくせ病気の時にしか使わない渴くという昔風の言葉を、何でも食べたがる意味に用いていた。

伯父が見舞に来たとき、父はいつまでも引き留めて帰さなかつ

た。淋しい^{さむ}からもつといてくれというのが重^{おも}な理由であつたが、母や私が、食べただけ物を食べさせないという不平を訴えるのも、その目的の一つであつたらしい。

十

父の病気は同じような状態で一週間以上つづいた。^{わたくし}私はその間に長い手紙を九州にいる兄宛^{あて}で出した。妹^{いもと}へは母から出させた。私は腹^{たより}の中で、おそらくこれが父の健康に関して二人へやる最後の音信^{たより}だろうと思つた。それで両方へいよいよという場合には電報を打つから出て来いという意味を書き込めた。

兄は忙しい職にいた。妹は妊娠中であつた。だから父の危険が
 眼の前に逼せまらないうちに呼び寄せる自由は利きかなかつた。といつ
 て、折角都合して来たには来たが、間まに合わなかつたといわれる
 のも辛つらかつた。私は電報を掛ける時機について、人の知らない責
 任を感じた。

「そう判然はつきりした事になると私にも分りません。しかし危険はい
 つ来るか分らないという事だけは承知していて下さい」

ステーション

停車場のある町から迎えた医者には私にこういった。私は母と
 相談して、その医者まの周旋で、町の病院から看護婦を一人頼む事
 にした。父は枕まくらもと元へ来て挨拶あいさつする白い服を着た女を見て変
 な顔をした。

父は死病に罹^{かか}っている事をとうから自覚していた。それでいて、眼前にせまりつつある死そのものには気が付かなかつた。

「今に癒^{なお}つたらもう一返^{いっぺん}東京へ遊びに行ってみよう。人間はいつ死ぬか分らないからな。何でもやりたい事は、生きてるうちにやっておくに限る」

母は仕方なしに「その時は私もいっしょに伴^つれて行つて頂きましょう」などと調子を合せていた。

時とするとまた非常に淋^{さみ}しがった。

「おれが死んだら、どうかお母さんを大事にしてやってくれ」

私はこの「おれが死んだら」という言葉に一種の記憶をもつていた。東京を立つ時、先生が奥さんに向かって何^{なんべん}遍もそれを繰

り返したのは、私が卒業した日の晩の事であつた。私は笑いを帯びた先生の顔と、縁喜えんぎでもないと耳を塞ふさいだ奥さんの様子とを憶い出した。あの時の「おれが死んだら」は単純な仮定であつた。今私が聞くのはいつ起るか分らない事実であつた。私は先生に対する奥さんの態度を学ぶ事ができなかった。しかし口の前では何とか父を紛らさなければならなかつた。

「そんな弱い事をおつしやつちやいけませんよ。今に癒なおつたら東京へ遊びにいらつしやるはずじやありませんか。お母さんといつしよに。今度いらつしやるときつと吃驚びつくりしますよ、変つてゐるんで。電車の新しい線路だけでも大變増ふえていますからね。電車が通るようになれば自然町まちなみ並も変るし、その上に市区改正もあ

るし、東京が凝^{じつ}としてゐる時は、まあ二六時中^{にろくじちゅう}一分もないといつていいくらいです」

私は仕方がないからいわないでいい事まで喋^{しゃべ}舌^つつた。父はまた、満足らしくそれを聞いていた。

病人があるので自然家^{いえ}の出入りも多くなつた。近所にゐる親類などは、二日に一人ぐらいの割で代る代る見舞に來た。中には比較的遠くにいて平^{へい}生^{せい}疎^そ遠^{えん}なものもあつた。「どうかと思つたら、この様子じゃ大丈夫だ。話も自由だし、だいち顔がちつとも瘠^やせていないじゃないか」などといつて歸るものがあつた。私の歸つた当時はひっそりし過ぎるほど静かであつた家庭が、こんな事で段々ざわざわし始めた。

その中に動かずにいる父の病氣は、ただ面白くない方へ移つて行くばかりであつた。私は母や伯父おじと相談して、とうとう兄いもとと妹に電報を打った。兄からはすぐ行くという返事が来た。妹の夫からも立つという報知しらせがあつた。妹はこの前かいにん懷妊した時に流産したので、今度こそは癖にならないように大事を取らせるつもりだと、かねていい越したその夫は、妹の代りに自分で出て来るかも知れなかつた。

十一

こうした落ち付きのない間にも、わたくし私はまだ静かに坐すわる余裕をも

つていた。偶には書物を開けて十頁もつづけざまに読む時間さえ出て来た。一旦堅く括られた私の行李は、いつの間にか解かれてしまった。私は要るに任せて、その中から色々なものを取り出した。私は東京を立つ時、心のうちで極めた、この夏中の日課を顧みた。私のやった事はこの日課の三が一にも足らなかった。私は今までもこういう不愉快を何度となく重ねて来た。しかしこの夏ほど思った通り仕事の運ばない例も少なかった。これが人の世の常だろうと思いつながら私には厭な気持ちに抑え付けられた。

私はこの不快の裏に坐りながら、一方に父の病気を考えた。父の死んだ後の事を想像した。そうしてそれと同時に、先生の事を一方に思い浮べた。私はこの不快な心持の両端に地位、教育、性

格の全然異なつた二人の面影を眺めた。

私が父の枕元まくらもとを離れて、独り取り乱した書物の中に腕組みをしているところへ母が顔を出した。

「少し午眠ひるねでもおしよ。お前もさぞ草臥くたびれるだろう」

母は私の気分を了解していなかった。私も母からそれを予期するほどの子供でもなかった。私は単簡たんかんに礼を述べた。母はまだ室へやの入口に立っていた。

「お父さんは？」と私が聞いた。

「今よく寝てお出いでだよ」と母が答えた。

母は突然はいつて来て私の傍そばに坐すわつた。

「先生からまだ何ともいつて来ないかい」と聞いた。

母はその時の私の言葉を信じていた。その時の私は先生からきつと返事があると母に保証した。しかし父や母の希望するような返事が来るとは、その時の私もまるで期待しなかった。私は心得があつて母を欺いたと同じ結果に陥った。

「もう一遍^{いっぺん}手紙を出してご覧な」と母がいった。

役に立たない手紙を何通書こうと、それが母の慰安になるなら、手数を厭^{いと}うような私ではなかった。けれどもこういう用件で先生にせまるのは私の苦痛であつた。私は父に叱^{しか}られたり、母の機嫌を損じたりするよりも、先生から見下げられるのを遥^{はる}かに恐れていた。あの依頼に対して今まで返事の貰^{もら}えないのも、あるいはそうした訳からじゃないかしらという邪推もあつた。

「手紙を書くのは訳はないですが、こういう事は郵便じゃとても埒^{らち}は明きませんよ。どうしても自分で東京へ出て、じかに頼^{まわ}んで廻^{まわ}らなくっちゃ」

「だってお父さんがあの様子じゃ、お前、いつ東京へ出られるかわらないじゃないか」

「だから出やしません。癒^{なお}るとも癒らないとも片付かないうちは、ちやんとこうしているつもりです」

「そりや解^{わか}り切った話だね。今にもむずかしいという大病人を放^{ほう}ちらかしておいて、誰が勝手に東京へなんか行けるものかね」

私は始め心のなかで、何も知らない母を憐^{あわ}れんだ。しかし母がなぜこんな問題をこのざわざわした際に持ち出したのか理解でき

なかった。私が父の病気をよそに、静かに坐ったり書見したりする余裕のあるごとくに、母も眼の前の病人を忘れて、外の事を考^{ほか}えるだけ、胸に空地^{すきま}があるのかしらと疑^{うたぐ}った。その時「実はね」と母がいい出した。

「実はお父さんの生きてお出^{いで}のうちに、お前の口が極^{きま}たらさぞ安心なさるだろうと思うんだがね。この様子じゃ、とても間に合わないかも知れないけれども、それにしても、まだああやって口も慥^{たし}かなら気も慥かなんだから、ああしてお出のうちに喜ばして上げるように親孝行をおしな」

憐れな私は親孝行のできない境遇にいた。私はついに一行の手紙も先生に出さなかった。

十二

兄が歸つて来た時、父は寝ながら新聞を読んでいた。父は平生から何を措^おいても新聞だけには眼を通す習慣であつたが、床についてからは、退屈のため猶^{なおさら}更それを読みたがつた。母も私も強^しいては反対せずに、なるべく病人の思い通りにさせておいた。「そういう元気なら結構なものだ。よつぽど悪いかと思つて来たら、大変好^いいようじやありませんか」

兄はこんな事をいいながら父と話をした。その賑^{にぎ}やか過ぎる調子が私にはかえつて不調和に聞こえた。それでも父の前を外^{はず}して

私と差し向いになった時は、むしろ沈んでいた。

「新聞なんか読ましちやいけないかないか」

「私もそう思うんだけど、読まないと承知しないんだから、^{わたし}

仕様がない」

兄は私の弁解を黙って聞いていた。やがて、「よく解^{わか}るのかな」といった。兄は父の理解力が病気のために、平生よりはよつぽど鈍^{にぶ}つているように観察したらしい。

「そりや慥^{たし}かです。^{わたし}私はさつき二十分ばかり枕^{まくらもと}元^{すわ}に坐つて色々話してみたが、調子の狂つたところは少しもないです。あの様子じやことによるとまだなかなか持つかも知れませんよ」

兄と前後して着いた妹^{いもと}の夫の意見は、我々よりもよほど樂觀的

であつた。父は彼に向かつて妹の事をあれこれと尋ねていた。

「身体からだが身体だからむやみに汽車になんぞ乗つて揺ゆれない方が好い。無理をして見舞に來られたりすると、かえつてこつちが心配だから」といつていた。「なに今に治なつたら赤ん坊の顔でも見に久しぶりにこつちから出掛けるから差さ支しえつかない」ともいつていた。

乃木大將のぎだいしょうの死んだ時も、父は一番さきに新聞でそれを知つた。「大變だ大變だ」といつた。

何事も知らない私たちはこの突然な言葉に驚かされた。

「あの時はいいよ頭が変になつたのかと思つて、ひやりとした」と後で兄が私にいつた。「私わたしも実は驚きました」と妹の夫も同感

らしい言葉つきであつた。

その頃の新聞は實際田舎ものには日ごとに待ち受けられるような記事ばかりあつた。私は父の枕元に坐つて鄭寧にそれを読んだ。読む時間のない時は、そつと自分の室へ持つて来て、残らず眼を通した。私の眼は長い間、軍服を着た乃木大将と、それから官女みたような服裝をしたその夫人の姿を忘れる事ができなかつた。

悲痛な風が田舎の隅まで吹いて来て、眠たそうな樹や草を震わせている最中に、突然私は一通の電報を先生から受け取つた。洋服を着た人を見ると犬が吠えるような所では、一通の電報すら大事件であつた。それを受け取つた母は、はたして驚いたような

様子をして、わざわざ私を人のいない所へ呼び出した。

「何だい」といって、私の封を開くのを傍そばに立って待っていた。

電報にはちよつと会いたいが来られるかという意味が簡単に書いてあつた。私は首を傾けた。

「きつとお頼たのもうしておいた口の事だよ」と母が推断してくれた。

私もあるいはそうかも知れないと思つた。しかしそれにしては少し変だとも考えた。とにかく兄いや妹もとの夫まで呼び寄せた私が、

父の病氣を打遣うちやつて、東京へ行く訳には行かなかつた。私は母と

相談して、行かれないという返電を打つ事にした。できるだけ簡

略な言葉で父の病氣の危篤きとくに陥りつつある旨むねも付け加えたが、そ

れでも気が済まなかつたから、委細いさい手紙として、細かい事情をそ

の日のうちに認^{したた}めて郵便で出した。頼んだ位地の事とばかり信じ切った母は、「本当に間の悪^まい時は仕方のないものだね」といつて残念そうな顔をした。

十三

私^{わたくし}の書いた手紙はかなり長いものであつた。母も私も今度こそ先生から何とかいって来るだろうと考えていた。すると手紙を出して二日目にまた電報が私宛^{あて}で届いた。それには来ないでもよろしいという文句だけしかなかった。私はそれを母に見せた。

「大^{おお}方^{かた}手紙で何とかいってきて下さるつもりだろうよ」

母はどこまでも先生が私のために衣食の口を周旋してくれるものとばかり解釈しているらしかった。私もあるいはそうかとも考えたが、先生の平生から推^おしてみると、どうも変に思われた。

「先生が口を探してくれる」。これはあり得^うべからざる事のように私には見えた。

「とにかく私の手紙はまだ向うへ着いていないはずだから、この電報はその前に出したものに違いないですね」

私は母に向かってこんな分り切った事をいった。母はまたもつともらしく思案しながら「そうだね」と答えた。私の手紙を読まない前に、先生がこの電報を打ったという事が、先生を解釈する上において、何の役にも立たないのは知れているのに。

その日はちょうど主治医が町から院長を連れて来るはずになっていたので、母と私はそれぎりこの事件について話をする機会がなかった。二人の医者は立ち合いの上、病人に浣腸かんちようなどをして帰って行つた。

父は医者から安臥あんがを命ぜられて以来、両便とも寝たまま他ひとの手で始末してもらつていた。潔癖な父は、最初の間こそ甚はなはだしくそれを忌み嫌つたが、身体からだが利きかないので、やむを得ずいやいや床の上で用を足した。それが病氣の加減で頭がだんだん鈍くなるのか何だか、日を経ふるに従つて、無精な排泄はいせつを意としないようになった。たまには蒲団ふとんや敷布を汚して、傍はたのものが眉まゆを寄せるのに、当人はかえつて平気でいたりした。もつとも尿の量は病氣の

性質として、極めて少なくなった。医者はそれを苦にした。食欲も次第に衰えた。たまに何か欲しがっても、舌が欲しがらただけで、^{のど}咽喉から下へはごく僅し^{わずか}か通らなかつた。好きな新聞も手に取る氣力がなくなつた。枕^{まくら}の傍^{そば}にある老眼鏡^{ろうがんきょう}は、いつまでも黒い鞆^{さや}に納められたままであつた。子供の時分から仲の好かつた作さん^{さく}という今では一里^りばかり隔たつた所に住んでいる人が見舞に來た時、父は「ああ作さんか」といつて、どんよりした眼を作さんの方に向けた。

「作さんよく来てくれた。作さんは丈夫^{うらや}で羨ましいね。己^{おれ}はもう駄目^{だめ}だ」

「そんな事はないよ。お前なんか子供は二人とも大学を卒業する

し、少しぐらい病氣になつたつて、申し分はないんだ。おれをご覧よ。かかあには死なれるしき、子供はなしき。ただこうして生きてゐるだけの事だよ。達者だつて何の楽しみもないじゃないか」

浣腸かんちようをしたのは作さんが来てから二、三日あとの事であつた。父は医者のお蔭かげで大変樂になつたといつて喜んだ。少し自分の寿命に対する度胸ができたという風ふうに機嫌が直つた。傍そばにいる母は、それに釣り込まれたのか、病人に氣力を付けるためか、先生から電報のきた事を、あたかも私の位置が父の希望する通り東京にあつたように話した。傍そばにいる私はむずがゆい心持がしたが、母の言葉を遮さへぎる訳にもゆかないので、黙つて聞いていた。病人は嬉うれしそうな顔をした。

「そりや結構です」と妹の夫もいった。

「何の口だかまだ分らないのか」と兄が聞いた。

私は今更それを否定する勇氣を失った。自分にも何とも訳の分らない曖昧な返事をして、わざと席を立った。

十四

父の病氣は最後の一撃を待つ間際まで進んで来て、そこでしばらく躊躇するようになつた。家のものは運命の宣告が、今日下るか、今日下るかと思つて、毎夜床にはいつた。

父は傍のものを辛くするほどの苦痛をどこにも感じていなかった。

た。その点になると看病はむしろ樂であつた。要心のために、誰か一人ぐらいつつ代る代る起きてはいたが、あとのものは相當の時間に各自めいめいの寢床へ引き取つて差支さしつかえなかつた。何かの拍子で眠れなかつた時、病人の唸うなるような声を微かすかに聞いたと思ひ誤つた私は、一遍半夜ぺんよなかに床を抜け出して、念のため父の枕まくらもと元まで行つてみた事があつた。その夜は母が起きている番に當つていた。しかしその母は父の横ひじに肱を曲げて枕としたなり寢入つていた。父も深い眠りの裏うちにそつと置かれた人のように静かにしていた。私は忍び足でまた自分の寢床へ歸つた。

私は兄といつしよの蚊帳かやの中に寢た。妹いもとの夫だけは、客扱いを受けているせい、独り離れた座敷に入いつて休んだ。

「関^{せき}さんも気の毒だね。ああ幾日も引つ張られて帰れなくっちゃあ」

関というのはその人の苗^{みょうじ}字であつた。

「しかしそんな忙しい身体^{からだ}でもないんだから、ああして泊つていてくれるんでしょう。関さんよりも兄さんの方が困るでしょう、
 こう長くなっちゃ」

「困つても仕方がない。外^{ほか}の事と違うからな」

兄と床^{とこ}を並べて寝る私は、こんな寝物語をした。兄の頭にも私の胸にも、父はどうせ助からないという考えがあつた。どうせ助からないものならばという考えもあつた。我々は子として親の死ぬのを待っているようなものであつた。しかし子としての我々は

それを言葉の上に表わすのを憚^{はば}かった。そうしてお互いにお互いがどんな事を思っているかをよく理解し合っていた。

「お父さんは、まだ治る気でいるようだな」と兄が私にいった。

實際兄のいう通りに見えるところもないではなかった。近所のものが見舞にくると、父は必ず会うといつて承知しなかった。会えばきつと、私の卒業祝いに呼ぶ事ができなかったのを残念がった。その代り自分の病気が治ったらというような事も時々付け加えた。

「お前の卒業祝いは已^やめになって結構だ。おれの時には弱^{あお}ったからね」と兄は私の記憶を突ツついた。私はアルコールに煽^{あお}られたその時の乱雑な有様を想^{おも}い出して苦笑した。飲むものや食うもの

を強^しいて廻^{まわ}る父の態度も、にがにがしく私の眼に映った。

私たちはそれほど仲の好^いい兄弟ではなかった。小^ちさいうちは好^よく喧嘩^{けんか}をして、年の少ない私の方がいつでも泣かされた。学校へはいつてからの専門の相違も、全く性格の相違から出ていた。大学に在る時分の私は、ことに先生に接触した私は、遠くから兄を眺^{なが}めて、常に動物的だと思つていた。私は長く兄に会わなかつたので、また懸け隔たつた遠くにいたので、時からいつでも距離からいつても、兄はいつでも私には近くなかつたのである。それでも久しぶりにこう落ち合つてみると、兄弟の優^{やさ}しい心持がどこからか自然に湧^わいて出た。場合が場合なのもその大きな源^{げん}因^{いん}になつていた。二人に共通な父、その父の死のうとしている枕^{まくら}元^{もと}

で、兄と私は握手したのであった。

「お前これからどうする」と兄は聞いた。私はまた全く見当の違った質問を兄に掛けた。

「一体家の財産はどうなってるんだらう」
うち

「おれは知らない。お父さんはまだ何ともいわないから。しかし財産っていったところで金としては高の知れたものだらう」
たか

母はまた母で先生の返事の来るのを苦にしていた。

「まだ手紙は来ないかい」と私を責めた。

十五

「先生先生というのは一体誰だれの事だい」と兄が聞いた。

「こないだ話したじゃないか」と私は答わたくしえた。私は自分で質問をしておきながら、すぐ他の説明ひとを忘れてしまう兄に対して不快の念を起した。

「聞いた事は聞いたけれども」

兄は必ひつきよう竟聞いても解わからないというのであつた。私から見ればなにも無理に先生を兄に理解してもらふ必要はなかつた。けれども腹は立つた。また例の兄らしい所が出て来たと思つた。

先生先生と私が尊敬する以上、その人は必ず著名の士でなくてはならないように兄は考えていた。少なくとも大学の教授ぐらいだろうと推察していた。名もない人、何もしていない人、それが

どこに価値をもっているだろう。兄の腹はこの点において、父と全く同じものであった。けれども父が何もできないから遊んでい
るのだと速断するのに引きかえて、兄は何かやれる能力があるの
に、ぶらぶらしているのは詰らん人間に限るといった風の口吻
を洩らした。

「イゴイストはいけないね。何もしないで生きていようというの
は横着な了簡だからね。人は自分のもっている才能をできる
だけ働かせなくっちゃ嘘だ」

私は兄に向かつて、自分の使っているイゴイストという言葉の
意味がよく解るかと聞き返してやりたかった。

「それでもその人のお蔭で地位ができればまあ結構だ。お父さん

も喜んでるようじゃないか」

兄は後からこんな事をいった。先生から明めいりよう瞭な手紙の来な

い以上、私はそう信ずる事もできず、またそう口に出す勇氣もな

かった。それを母の早吞はやのみ込みでみんなにそう吹ふいちよう聴してしま

った。今となつてみると、私は急にそれを打ち消す訳に行かなくな

った。私は母に催促されるまでもなく、先生の手紙を待ち受けた。

そうしてその手紙に、どうかみんなの考えているような衣食の口

の事が書いてあればいいかと念じた。私は死に瀕ひんしている父の手

前、その父に幾分でも安心させてやりたいと祈りつつある母の手

前、働かなければ人間でないようにいう兄の手前、その他妹たもとの夫

だの伯父おじだの叔母おばだのの手前、私のちつとも頓とんじやく着やくしていない

事に、神経を悩まさなければならなかった。

父が変な黄色いものも嘔^はいた時、私はかつて先生と奥さんから聞かされた危険を思い出した。「ああして長く寝ているんだから胃も悪くなるはずだね」といった母の顔を見て、何も知らないその人の前に涙ぐんだ。

兄と私が茶の間で落ち合った時、兄は「聞いたか」といった。それは医者^がが帰り際に兄に向っていった事を聞いたかという意味であつた。私には説明を待たないでもその意味がよく解っていた。「お前ここへ帰つて来て、宅^{うち}の事を監理する気がないか」と兄が私を顧みた。私は何とも答えなかった。

「お母さん一人じゃ、どうする事もできないだろう」と兄がまた

いった。兄は私を土の臭いにおを嗅いかいで朽ちて行つても惜しくないように見ていた。

「本を読むだけなら、田舎いなかでも充分できるし、それに働く必要もなくなるし、ちょうど好いいいだろう」

「兄さんが帰つて来るのが順ですね」と私がいった。

「おれにそんな事ができるものか」と兄は一口ひとくちに斥しりぞけた。兄の腹の中には、世の中でこれから仕事をしようという気が充みち満みちていた。

「お前がいやなら、まあ伯父さんにでも世話を頼むんだが、それにしてもお母さんはどっちかで引き取らなくっちゃなるまい」

「お母さんがここを動くか動かないかがすでに大きな疑問ですよ」

兄弟はまだ父の死なない前から、父の死んだ後^{あと}について、こんな風に語り合つた。

十六

父は時々囁^{うわごと}語をいうようになった。

「^{のぎたいしよう}乃木大将に済まない。実に面^{めん}目^{ぼく}次第^{しだい}がない。いえ私もすぐお後^{あと}から」

こんな言葉をひよいひよい出した。母は気味を悪がつた。なるべくみんなを枕^{まくらもと}元へ集めておきたがつた。気のたしかな時は頻^{しき}りに淋^{さび}しがる病人にもそれが希望らしく見えた。ことに室^{へや}の中^{うち}

を見廻みまわして母の影が見えないと、父は必ず「お光みつは」と聞いた。

聞かないでも、眼がそれを物語っていた。わたくし私はよく起たつて母を呼

びに行つた。「何かご用ですか」と、母が仕掛しかけた用をそのまま

にしておいて病室へ来ると、父はただ母の顔を見詰めるだけで何

もいわない事があつた。そうかと思うと、まるで懸け離れた話を

した。突然「お光お前まえにも色々世話になつたね」などと優やさしい言

葉を出す時もあった。母はそういう言葉の前にきつと涙ぐんだ。

そうした後ではまたきつと丈夫であつた昔の父をその対照として

想おもい出すらしかつた。

「あんな憐あわれつぽい事をお言いだがね、あれでもとはずいぶん酷ひど

かつたんだよ」

ほうき

母は父のために箒で背中をどやされた時の事などを話した。今まで何^{なんべん}遍もそれを聞かされた私と兄は、いつもとはまるで違った気分で、母の言葉を父の記念^{かたみ}のように耳へ受け入れた。

父は自分の眼の前に薄暗く映る死の影を眺めながら、まだ遺^{ゆいご}言^んらしいものを口に出さなかった。

「今のうち何か聞いておく必要はないかな」と兄が私の顔を見た。「そうだなあ」と私は答えた。私はこちらから進んでそんな事を持ち出すのも病人のために好^よし悪^あしだと考えていた。二人は決しかねてついに伯父^{おじ}に相談をかけた。伯父も首を傾けた。

「いいたい事があるのに、いわないで死ぬのも残念だろうし、といて、こっちから催促するのも悪いかも知れず」

話はとうとう愚図^{ぐずぐず}愚図^{ぐず}になつてしまつた。そのうちに昏睡^{こんすい}が来た。例の通り何も知らない母は、それをただの眠りと思い違えてかえつて喜んだ。「まあああして楽に寝られれば、傍^{はた}にいるものも助かります」といった。

父は時々眼を開けて、誰^{だれ}はどうしたなどと突然聞いた。その誰はつい先刻^{さつき}までそこに坐^{すわ}つていた人の名に限られていた。父の意識には暗い所と明るい所とできて、その明るい所だけが、闇^{やみ}を縫う白い糸のように、ある距離を置いて連続するようにみえた。母が昏睡^{こんすい}状態を普通の眠りと取り違えたのも無理はなかつた。そのうち舌が段々^{もつ}纏れて来た。何かいい出しても尻^{しり}が不明瞭^{ふめいりよう}に了^{おわ}るために、要領を得ないでしまう事が多くあつた。そのくせ

話し始める時は、危篤の病人とは思われないほど、強い声を出した。我々は固^{もと}より不断以上に調子を張り上げて、耳元へ口を寄せるようにしなければならなかった。

「頭を冷やすと好^いい心持ですか」

「うん」

私は看護婦を相手に、父の水^{みづ}枕^{まくら}を取り更^かえて、それから新しい氷を入れた氷^{ひょうのう}嚢^{ふくろ}を頭の上へ載^のせた。がさがさに割られて尖^{とが}り切った氷の破片が、嚢^{ふくろ}の中で落ちつく間、私は父の禿^はげ上った額^{はづれ}の外でそれを柔らかに抑^{おさ}えていた。その時兄が廊下^{ろうかづた}伝いにはいって来て、一通の郵便を無言のまま私の手に渡した。空^あいた方の左手を出して、その郵便を受け取った私はすぐ不審を起した。

それは普通の手紙に比べるとよほど目方の重いものであった。
 並の^{なみ}状^{じょうぶくろ}袋にも入れてなかった。また並の状袋に入れられべき
 分量でもなかった。半紙で包んで、封じ目を鄭^{てい}寧^{ねい}に糊^{のり}で貼^はり付
 けてあった。私はそれを兄の手から受け取った時、すぐその書留
 である事に気が付いた。裏を返して見るとそこに先生の名がつつ
 しんだ字で書いてあった。手の放せない私は、すぐ封を切る訳に
 行かないので、ちよつとそれを懷^{ふところ}に差し込んだ。

十七

その日は病人の出来がことに悪いように見えた。^{わたくし}私が廁^{かわや}へ行こ

うとして席を立った時、廊下で行き合つた兄は「どこへ行く」と番兵のような口調で誰^{すいか}何した。

「どうも様子が少し変だからなるべく傍^{そば}にいるようにしなくつちやいけないよ」と注意した。

私もそう思っていた。^{かいちゆう}懐中した手紙はそのままにしてまた病室へ歸つた。父は眼を開けて、そこに並んでいる人の名前を母に尋ねた。母があれば誰、これは誰と一々説明してやると、父はそのたびに首肯^{うなず}いた。首肯かない時は、母が声を張りあげて、何々さんです、分りましたかと念を押した。

「どうも色々お世話になります」

父はこういった。そうしてまた昏睡状態に陥つた。枕^{まくら}辺^へを取

り巻いている人は無言のまましばらく病人の様子を見詰めていた。
 やがてその中の一人が立つて次の間へ出た。するとまた一人立つ
 た。私も三人目にとうとう席を外して、自分の室へ来た。私には
 先刻懐へ入れた郵便物の中を開けて見ようという目的があつた。
 それは病人の枕元でも容易にできる所作には違いなかつた。しか
 し書かれたものの分量があまりに多過ぎるので、一息にそこで
 読み通す訳には行かなかつた。私は特別の時間を偷んでそれに充
 てた。

私は繊維の強い包み紙を引き搔くように裂き破つた。中から出
 たものは、縦横に引いた罫の中へ行儀よく書いた原稿様のもの
 であつた。そうして封じる便宜のために、四つ折に畳まれてあつ

た。私は癖のついた西洋紙を、逆に折り返して読みやすいように平たくした。

私の心はこの多量の紙と印氣インキが、私に何事を語るのだろうかと思つて驚いた。私は同時に病室の事が氣にかかった。私がこのかきものを読み始めて、読み終わらない前に、父はきつとどうかなる、少なくとも、私は兄からか母からか、それでなければ伯父おじからか、呼ばれるに極きまつていゝという予覺よかくがあつた。私は落ち付いて先生の書いたものを読む氣になれなかつた。私はそわそわしながらただ最初の一頁ページを読んだ。その頁は下しものように綴つづられていた。

「あなたから過去を問いただされた時、答える事のできなかつた勇氣のない私は、今あなたの前に、それを明白に物語る自由を得

たと信じます。しかしその自由はあなたの上京を待っているうちにはまた失われてしまう世間的の自由に過ぎないのであります。したがって、それを利用できる時に利用しなければ、私の過去をあなたの頭に間接の経験として教えて上げる機会を永久に逸^{いつ}するようになります。そうすると、あの時あれほど堅く約束した言葉がまるで嘘^{うそ}になります。私はやむを得ず、口でいふべきところを、筆で申し上げる事にしました」

私はそこまで読んで、始めてこの長いものが何のために書かれたのか、その理由を明らかに知る事ができた。私の衣食の口、そんなものについて先生が手紙を寄こす氣遣^{きづか}いはないと、私は初手から信じていた。しかし筆を執^とることの嫌いな先生が、どうして

あの事件をこう長く書いて、私に見せる気になったのだろう。先生はなぜ私の上京するまで待っていてられないだろう。

「自由が来たから話す。しかしその自由はまた永久に失われなければならぬ」

私は心のうちでこう繰り返しながら、その意味を知るに苦しんだ。私は突然不安に襲われた。私はつづいて後あとを読もうとした。

その時病室の方から、私を呼ぶ大きな兄の声が聞こえた。私はまた驚いて立ち上った。廊下を馳かけ抜けるようにしてみんなのいる方へ行った。私はいよいよ父の上に最後の瞬間が来たのだと覚悟した。

十八

病室にはいつの間にか医者が来ていた。なるべく病人を楽にするという主意からまたかんちよう浣腸を試みるところであつた。看護婦は昨夜ゆうべの疲れを休めるために別室で寝ていた。慣れない兄は起つてまごまごしていた。わたくし私の顔を見ると、「ちよつと手をお貸し」といったまま、自分は席に着いた。私は兄に代つて、あぶらがみ油紙を父の尻しりの下に宛あてがったりした。

父の様子は少しくつろいで来た。三十分ほどまくらもと枕元にすわ坐つていた医者は、かんちよう浣腸の結果を認めた上、また来るといつて、歸つて行つた。歸り際きざに、もしもの事があつたらいつでも呼んでく

れるようにわざわざ断っていた。

私は今にも変^{へん}がありそうな病室を退^{しりぞ}いてまた先生の手紙を読もうとした。しかし私はすこしも寛^{ゆっ}くりした気分になれなかった。机の前に坐るや否^{いな}や、また兄から大きな声で呼ばれそうでならなかった。そうして今度呼ばれれば、それが最後だという畏^い怖^ふが私の手を顫^{ふる}わした。私は先生の手紙をただ無意味に頁^{ページ}だけ剥^は繰^ぐって行^いった。私の眼は几^{きち}帳^{よう}面^{めん}に杵^きの中^{なか}に簞^はめ^められた字^じ画^{かく}を見た。けれどもそれを読む余裕はなかった。拾^{ひろ}い読^よみにする余裕すら覚^{おぼ}束^かなかつた。私は一番しまいの頁^たまで順^た々に開^ひけて見^みて、またそれを元の通^とりに畳^{たた}んで机の上に置^おこうとした。その時ふと結^{むす}末^{まつ}に近い一句が私の眼にはいった。

「この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう。とくに死んでいるでしょう」

私ははっと思った。今までざわざわと動いていた私の胸が一度に凝結ぎようけつしたように感じた。私はまた逆に頁をはぐり返した。

そうして一枚に一句ぐらいずつの割で倒さかさに読んで行つた。私は咄と嗟つさの間に、私の知らなければならぬ事を知ろうとして、ちらちらする文字もんじを、眼で刺し通そうと試みた。その時私の知ろうとするのは、ただ先生の安否だけであつた。先生の過去、かつて先生が私に話そうと約束した薄暗いその過去、そんなものは私に取つて、全く無用であつた。私は倒さかさまに頁をはぐりながら、私に必要な知識を容易に与えてくれないこの長い手紙を自烈じれつたそうに畳ん

だ。

私はまた父の様子を見に病室の戸口まで行つた。病人の枕^{まくら}辺^へは存^{ぞん}外^{がい}静かであつた。頼りなさそうに疲れた顔をしてそこに坐^まっている母を手招^{てまね}ぎして、「どうですか様子は」と聞いた。母は「今少し持ち合つてるようだよ」と答えた。私は父の眼の前へ顔を出して、「どうです、浣腸して少しは心持が好くなりましたか」と尋ねた。父は首肯^{うなづ}いた。父ははつきり「有難う」といった。父の精神は存外^{もつろ}朦朧^{もうろう}としていなかった。

私はまた病室^{しりぞ}を退いて自分の部屋に歸つた。そこで時計を見ながら、汽車の発着表を調べた。私は突然立つて帯を締め直して、袂^{たもと}の中へ先生の手紙を投げ込んだ。それから勝手口から表へ出た。

私は夢中で医者の家へ馳^かけ込んだ。私は医者から父がもう二、三^に日^{んちも}保つだろうか、そのところを判^{はつきり}然聞こうとした。注射でも何でもして、保たしてくれと頼もうとした。医者は生^{あいにく}憎留守であつた。私には凝^{じつ}として彼の帰るのを待ち受ける時間がなかつた。心の落^おち付^つきもなかつた。私はすぐ俵^{くるま}を停^{スレーション}車場へ急がせた。

私は停車場の壁へ紙^{かみぎれ}片^あを宛^あてがつて、その上から鉛筆で母と兄あてで手紙を書いた。手紙はごく簡単なものであつたが、断^{うち}らないで走るよりまだ増しだろうと思つて、それを急^{いそ}いで宅^{うち}へ届けるように車^{しゃ}夫^ふに頼んだ。そうして思い切^{いきお}つた勢^{いきお}いで東京行きの汽車に飛^{たもと}び乗ってしまった。私はごうごう鳴る三等列車の中で、また袂^{たもと}から先生の手紙を出して、ようやく始めからしまいまで眼を

通
し
た。
。

下 先生と遺書

一

「……わたくし私はこの夏あなたから二、三度手紙を受け取りました。東京で相当の地位を得たいから宜しくよろ頼むと書いてあったのは、たしか二度目に手に入いったものと記憶しています。私はそれを読ん

だ時何^{なん}とかしたいと思ったのです。少なくとも返事を上げなければ済まんとは考えたのです。しかし自白すると、私はあなたの依頼に対して、まるで努力をしなかったのです。ご承知の通り、実際区域の狭いというよりも、世の中にたった一人で暮しているといった方が適切なくらいの私には、そういう努力をあえてする余地が全くないのです。しかしそれは問題ではありません。実をいうと、私はこの自分をどうすれば好^いいのかと思^わい煩^{わづら}っていたところなのです。このまま人間の中に取り残されたミイラのように存在して行こうか、それとも……その時分の私は「それとも」という言葉を心のうちで繰り返すたびにぞつとしました。馳^{かけ}足^{あし}で絶壁^{はし}の端^{はじ}まで来て、急に底の見えない谷を覗^{のぞ}き込んだ人のように。

私は卑怯ひきようでした。そうして多くの卑怯な人と同じ程度において

煩悶はんもんしたのです。遺憾いかんながら、その時の私には、あなたという

ものがほとんど存在していなかったといつても誇張ではありません

ん。一歩進めていうと、あなたの地位、あなたの糊口こうの資し、そん

なものは私にとってまるで無意味なものでした。どうでも構わな

ったのです。私はそれどころの騒ぎでなかったのです。私は状じよう

差さへあなたの手紙を差したなり、依然として腕組をして考え込

んでいました。宅うちに相応の財産があるものが、何を苦しんで、卒

業するかしないのに、地位地位といつて藻掻もがき廻まわるのか。私はむ

しろ苦にが々しい気分で、遠くにいるあなたにこんな一瞥いちべつを与え

ただけでした。私は返事を上げなければ済まないあなたに対して、

言訳いいわけのためにこんな事を打ち明けるのです。あなたを怒らすためにわざと無躰ぶしつけな言葉を弄ろうするのではありません。私の本意は後あとをご覧になればよく解わかる事と信じます。とにかく私は何とか挨あ拶いさつすべきところを黙っていたのですから、私はこの怠慢の罪をあなたの前に謝したいと思います。

その後私はあなたに電報を打ちました。有体ありていに言えば、あの時私はちよつとあなたに会いたかったのです。それからあなたの希望通り私の過去をあなたのために物語りたかったのです。あなたは返電を掛かけて、今東京へは出られないと断つて来ましたが、私は失望して永らくあの電報を眺ながめていました。あなたも電報だけでは気が済まなかったとみえて、また後から長い手紙を寄こし

てくれたので、あなたの出京しゅつきようできない事情がよく解わかりました。

私はあなたを失礼な男だとも何とも思う訳がありません。あなたの大事なお父さんの病気をそっち退のけにして、何であなたが宅うちを空あけられるのですか。そのお父さんの生しょう死を忘れているような私の態度こそ不都合です。——私は實際あの電報を打つ時に、

あなたのお父さんの事を忘れていたのです。そのくせあなたが東京とうきようにいる頃ころには、難なん症しょうだからよく注意しなくってはいけないと、あれほど忠告したのは私ですのに。私はこういう矛盾な人間なのです。あるいは私の脳のう髓ずいよりも、私の過去が私を圧迫する結果こんな矛盾な人間に私を変化させるのかも知れません。私はこの点においても充分私の我がを認めています。あなたに許しても

らわなくてはなりません。

あなたの手紙、——あなたから来た最後の手紙——を読んだ時、私は悪い事をしたと思いました。それでその意味の返事を出そうかと考えて、筆を執^とりかけましたが、一行も書かずに已^やめました。どうせ書くなら、この手紙を書いて上げたかつたから、そうしてこの手紙を書くにはまだ時機が少し早過ぎたから、已めにしたのです。私がただ来るに及ばないという簡単な電報を再び打ったのは、それがためです。

「私はそれからこの手紙を書き出しました。平生筆を持ちつけ

ない私には、自分の思うように、事件なり思想なりが運ばないのが重い苦痛でした。私はもう少しで、あなたに対する私のこの義務を放擲するところでした。しかしいくら止そうと思つて筆を

擱いても、何にもなりませんでした。私は一時間経たないうちにまた書きたくなりました。あなたから見たら、これが義務の遂

行を重んずる私の性格のように思われるかも知れません。私もそれは否みません。私はあなたの知っている通り、ほとんど世間

と交渉のない孤独な人間ですから、義務というほどの義務は、自分の左右前後を見廻しても、どの方角にも根を張っておりません。

故意か自然か、私はそれをできるだけ切り詰めた生活をしていた

のです。けれども私は義務に冷淡だからこうなったのではありません。むしろ鋭敏^{えいびん}過ぎて刺戟^{しげき}に堪えるだけの精力がないから、ご覧のように消極的な月日を送る事になったのです。だから一旦^{いっただん}約束した以上、それを果たさないのは、大変厭^{いや}な心持です。私はあなたに対してこの厭な心持を避けるためにでも、擱いた筆をまた取り上げなければならぬのです。

その上私は書きたいのです。義務は別として私の過去を書きたいのです。私の過去は私だけの経験だから、私だけの所有といつても差支^{さしつか}えないでしょう。それを人に与えないで死ぬのは、惜しいともいわれるでしょう。私にも多少そんな心持があります。ただし受け入れる事のできない人に与えるくらいなら、私はむし

ろ私の経験を私の生命いのちと共に葬ほうむった方が好いいと思います。実際ここにあなたという一人の男が存在していないならば、私の過去はついに私の過去で、間接にも他人の知識にはならないで済んだでしょう。私は何千万という日本人のうちで、ただあなただけに、私の過去を物語りたいのです。あなたは真面目まじめだから。あなたは真面目に人生そのものから生きた教訓を得たいといったから。

私は暗い人世の影を遠慮なくあなたの頭の上に投げかけて上げます。しかし恐れてはいけません。暗いものを凝じっと見詰めて、その中からあなたの参考になるものをお攫つかみなさい。私の暗いというのは、固もとより倫理的に暗いのです。私は倫理的に生れた男です。また倫理的に育てられた男です。その倫理上の考えは、今の若い

人と大分違つたところがあるかも知れません。しかしどう間違つても、私自身のものです。間に合せて借りた損料そんりようぎ着ではありません。だからこれから発達しようというあなたには幾分か参考になるだろうと思うのです。

あなたは現代の思想問題について、よく私に議論を向けた事を記憶しているでしょう。私のそれに対する態度もよく解わかっているでしょう。私はあなたの意見を軽蔑けいべつまでしなかったけれども、決して尊敬を払い得うる程度にはなれなかった。あなたの考えには何らの背景もなかったし、あなたは自分の過去をもつには余りに若過ぎたからです。私は時々笑つた。あなたは物足りなそうな顔をちよいちよい私に見せた。その極きよくあなたは私の過去を絵巻物えまきもの

のように、あなたの前に展開してくれと逼^{せま}った。私はその時心のうちで、始めてあなたを尊敬した。あなたが無遠慮^{ぶえんりよ}に私の腹の中から、或^ある生きたものを捕^{つか}まえようという決心を見せたからです。私の心臓を立ち割って、温かく流れる血潮を啜^{すす}ろうとしたからです。その時私はまだ生きていた。死ぬのが厭^{いや}であつた。それで他日^{たじつ}を約して、あなたの要求を斥^{しりぞ}けてしまった。私は今自分で自分の心臓を破って、その血をあなたの顔に浴^あびせかけようとしているのです。私の鼓動^{こどう}が停^{とま}った時、あなたの胸に新しい命が宿る事ができるなら満足です。

「私が両親を亡くしたのは、まだ私の廿歳はたちにならない時分でした。いつか妻さいがあなたに話していたようにも記憶していますが、二人は同じ病気で死んだのです。しかも妻があなたに不審を起させた通り、ほとんど同時といつていいくらいに、前後して死んだのです。実をいうと、父の病気は恐るべき腸窒ちようしつ扶斯フスでした。それが傍そばにいて看護をした母に伝染したのです。

私は二人の間にできたたった一人の男の子でした。宅うちには相当の財産があつたので、むしろ鷹揚おうように育てられました。私は自分の過去を顧みて、あの時両親が死なずにいてくれたなら、少なくとも父か母かどっちか、片方で好いいから生きていてくれたなら、

私はあの鷹揚な気分を今まで持ち続ける事ができたろうにと思います。

私は二人の後にあと茫然ぼうぜんとして取り残されました。私には知識もなく、経験もなく、また分別ありませんでした。父の死ぬ時、母は傍はたにいる事ができませんでした。母の死ぬ時、母には父の死んだ事さえまだ知らせてなかったのです。母はそれを覚さとっていたか、または傍はたのものというごとく、実際父は回復期に向いつつあるものと信じていたか、それは分かりません。母はただ叔父おじに万事を頼んでいました。そこに居合いあわせた私を指さすようにして、「この子をどうぞ何分なにぶん」といました。私はその前から両親の許可を得て、東京へ出るはずになっていましたので、母はそれもつい

でにいうつもりらしかったのです。それで「東京へ」とだけ付け加えましたら、叔父がすぐ後あとを引き取つて、「よろしい決して心配しないがいい」と答えました。母は強い熱に堪え得るう体質の女なんでしたらうか、叔父は「確しつかりしたものだ」といつて、私に向つて母の事を褒ほめていました。しかしこれがはたして母の遺言であつたのかどうか、今考えると分らないのです。母は無論父の罹かかつた病気の恐るべき名前を知っていたのです。そうして、自分がそれに伝染していた事も承知していたのです。けれども自分はきつとこの病気で命を取られるとまで信じていたかどうか、そこになると疑う余地はまだいくらかでもあるだろうと思われるのです。その上熱の高い時に出る母の言葉は、いかにそれが筋道の通

った明らかなものにせよ、一向いつこう記憶となつて母の頭に影さえ残
 していない事がしばしばあつたのです。だから……しかしそんな
 事は問題ではありません。ただこういう風ふうに物を解きほどこいてみ
 たり、またぐるぐる廻まわして眺ながめたりする癖くせは、もうその時分から、
 私にはちゃんと備わつていたのです。それはあなたにも始めから
 お断わりしておかなければならないと思いますが、その実例とし
 ては当面の問題に大した関係のないこんな記述が、かえつて役に
 立ちはないかと考えます。あなたの方でもまあそのつもりで読
 んでください。この性しょうぶん分ぶんが倫理的に個人の行為やら動作の上
 に及んで、私は後こうらい来らいますます他の徳義心を疑うようになったの
 だろうと思うのです。それが私の煩はんもん悶もんや苦悩に向つて、積極的

に大きな力を添えているのは慥かですから覚えていて下さい。

話が本筋ほんすじをはずれると、分り悪にくくなりますからまたあとへ引

き返しましょう。これでも私はこの長い手紙を書くのに、私と同じ地位に置かれた他ほかの人と比べたら、あるいは多少落ち付いていやしくないかと思つてゐるのです。世の中が眠ると聞こえだすあの電車の響ひびきももう途絶とだえました。雨戸の外にはいつの間にか憐あわれな虫の声が、露の秋をまた忍びやかに思い出させるような調子で微かすかに鳴いてゐます。何も知らない妻さいは次の室へやで無邪気にすやすや寝入ねいつてゐます。私が筆を執とると、一字一劃かくができあがりつつペンの先で鳴つてゐます。私はむしろ落ち付いた気分で紙に向つてゐるのです。不馴ふなれのためにペンが横へ外それるかも知れませんが、

頭が悩^{のうらん}乱して筆がしどろに走るのではないように思います。

四

「とにかくたった一人取り残された私は、母のいい付け通り、この叔父^{おじ}を頼るより外^{ほか}に途^{みち}はなかったのです。叔父はまた一切^{いっさい}を引き受けて凡^{すべ}ての世話をしてくれました。そうして私を私の希望する東京へ出られるように取り計らってくれました。

私は東京へ来て高等学校へはいりました。その時の高等学校の生徒は今よりもよほど殺^{さつ}伐^{ばつ}で粗野でした。私の知ったものに、夜中職人と喧嘩^{けんか}をして、相手の頭へ下駄^{げた}で傷を負わせたのがあり

ました。それが酒を飲んだ揚句あげくの事なので、夢中に擲なぐり合いをしている間に、学校の制帽をとうとう向うのものに取られてしまつたのです。ところがその帽子の裏には当人の名前がちやんと、菱ひ形しがたの白いきれの上に書いてあつたのです。それで事が面倒になつて、その男はもう少しで警察から学校へ照会されるところでした。しかし友達が色々と骨を折つて、ついに表沙汰おもてぎたにせず済むようにしてやりました。こんな乱暴な行為を、上品な今の空気のなかに育つたあなた方に聞かせたら、定めて馬鹿馬鹿ばかばかしい感じを起すでしょう。私も實際馬鹿馬鹿しく思います。しかし彼らは今の学生にない一種質朴しつぽくな点をその代りにもつていたのです。当時私の月々叔父から貰もらつていた金は、あなたが今、お父さんか

ら送ってもらふ学資に比べると遥かに少ないものでした。（無論
 物価も違いました）。それでいて私は少しの不足も感じませ
 んでした。のみならず数ある同級生のうちで、経済の点にかけて
 は、決して人を羨ましがる憐れな境遇にいた訳ではないのです。
 今から回顧すると、むしろ人に羨ましがられる方だったのでし
 う。というのは、私は月々極きまった送金の外に、書籍費、（私はそ
 の時分から書物を買う事が好きでした）、および臨時の費用を、
 よく叔父から請求して、ずんずんそれを自分の思うように消費す
 る事ができたのですから。

何も知らない私は、叔父おじを信じていたばかりでなく、常に感謝
 の心をもって、叔父をありがたいもののように尊敬していました。

叔父は事業家でした。県会議員にもなりました。その関係からでもありましょう、政党にも縁故があつたように記憶しています。

父の実の弟ですけれども、そういう点で、性格からいうと父とはまるで違った方へ向いて発達したようにも見えます。父は先祖から譲られた遺産を大事に守つて行く篤実とくじつ一方いっぽうの男でした。楽しみには、茶だの花だのをやりました。それから詩集などを読む事も好きでした。書画しよが骨董こつとうといった風ふうのものにも、多くの趣味をもっている様子でした。家は田舎いなかにありましたけれども、二里ばかり隔へつた市し、——その市には叔父が住んでいたのです、——その市から時々道具屋が懸物かけものだの、香炉かうろだのを持って、わざわざ父に見せに來ました。父は一口ひとくちにいうと、まあマン・オフ

・ミーンズとでも評したら好いのでしよう。比較的上品な嗜好をもった田舎紳士だったのです。だから気性きしょうからいうと、闊達かつたつな叔父とはよほどの懸隔けんかくがありました。それでいて二人はまた妙に仲が良かったのです。父はよく叔父を評して、自分よりも遙はるかに働きのある頼もしい人のようにいつていました。自分のように、親から財産を譲られたものは、どうしても固有の材幹さいかんが鈍にぶる、つまり世の中と闘う必要がないからいけないのだともいつていました。この言葉は母も聞きました。私も聞きました。父はむしろ私の心得になるつもりで、それをいつたらしく思われます。「お前もよく覚えているが好い」と父はその時わざわざ私の顔を見たのです。だから私はまだそれを忘れずにいます。このくらい

私の父から信用されたり、褒め^ほられたりしていた叔父を、私がどうして疑う事ができるでしょう。私にはただでさえ誇りになるべき叔父でした。父や母が亡くなって、万事その人の世話にならないければならない私には、もう単なる誇りではなかったのです。私の存在に必要な人間になっていたのです。

五

「私が夏休みを利用して始めて国へ帰った時、両親の死に断えた私の住居^{すまい}には、新しい主人として、叔父夫婦が入れ代って住んでいました。これは私が東京へ出る前からの約束でした。たった一

人取り残された私が家にいない以上、そうでもするより外ほかに仕方がなかったのです。

叔父はその頃市ころにある色々な会社に関係していたようです。業務の都合からいえば、今までの居宅きやたくに寝起きねおする方が、二里りも隔へだたった私の家に移るより遥かに便利だといって笑いました。これは私の父母が亡くなった後あと、どう邸やしきを始末して、私が東京へ出るかという相談の時、叔父の口を洩もれた言葉であります。私の家は旧ふるい歴史をもっているのです、少しはその界限かいがいで人に知られていました。あなたの郷里でも同じ事だろうと思いますが、田舎では由緒ゆいしよのある家を、相続人があるのに壊こわしたり売ったりするのは大事件です。今の私ならそのくらいの事は何とも思いませんが、

その頃はまだ子供でしたから、東京へは出たし、家はそのままに
して置かなければならず、はなはだ所置しよちに苦しんだのです。

叔父おじは仕方なしに私の空家あきやへはいる事を承諾してくれました。

しかし市しの方にある住居すまいもそのままにしておいて、両方の間を往
ったり来たりする便宜を与えてもらわなければ困るといいました。
私に固もとより異議のありようはありますがありません。私はどんな条件で
も東京へ出られれば好いいくらいに考えていたのです。

子供らしい私は、故郷ふるさとを離れても、まだ心の眼で、懐かしげ
に故郷の家を望んでいました。固よりそこにはまだ自分の帰るべ
き家があるという旅人たびびとの心で望んでいたのです。休みが来れば
帰らなくてはならないという気分は、いくら東京を恋しがって出

て来た私にも、力強くあつたのです。私は熱心に勉強し、愉快に遊んだ後、^{あと}休みには帰れると思うその故郷の家をよく夢に見ました。

私の留守の間、叔父はどんな風^{ふう}に両方の間を往^ゆき来していたか知りません。私の着いた時は、家族のものが、みんな一つ家^{いえ}の内に集まっていました。学校へ出る子供などは平^{へい}生^{せい}おそらく市の方^{へい}にいたのでしょうが、これも休暇のために田舎^{いな}へ遊^{あそ}び半分といつた格^{かく}で引き取られていました。

みんな私の顔を見て喜びました。私はまた父や母のいた時より、かえつて賑^{にぎ}やかで陽気になった家の様子を見て嬉^{うれ}しがりしました。叔父はもと私の部屋になつていた一^{ひと}間^まを占領している一番目の男

の子を追いつ出して、私をそこへ入れました。座敷の数も少なくな
いのだから、私はほかの部屋で構わないと辞退したのですけれど
も、叔父はお前の宅うちだからといって、聞きませんでした。

私は折々亡くなった父や母の事を思い出す外ほかに、何の不愉快も
なく、その一夏ひとなつを叔父の家族と共に過ごして、また東京へ帰つ
たのです。ただ一つその夏の出来事として、私の心にむしろ薄暗
い影を投げたのは、叔父夫婦が口を揃そろえて、まだ高等学校へ入っ
たばかりの私に結婚を勧める事でした。それは前後で丁度三、四
回も繰り返されたでしょう。私も始めはただその突然なのに驚い
ただけでした。二度目には判然はつきり断りました。三度目にはこつち
からとうとうその理由を反問しなければならなくなりました。彼

らの主意は単簡^{たんかん}でした。早く嫁^{よめ}を貰^{もら}つてここの家へ歸つて来て、亡くなつた父の後を相続しろというだけなのです。家は休暇^{やすみ}になつて歸りさえすれば、それでいいものと私は考えていました。父の後を相続する、それには嫁が必要だから貰^{もら}う、両方とも理屈としては一^{ひとつ}通り聞こえます。ことに田舎の事情を知っている私には、よく解^{わか}ります。私も絶対にそれを嫌つてはいなかつたのでしよう。しかし東京へ修業に出たばかりの私には、それが遠眼鏡^{とおめがね}で物を見るように、遙^{はる}か先の距離に望まれるだけでした。私は叔父の希望に承諾を与えないで、ついにまた私の家を去りました。

六

「私は縁談の事をそれなり忘れてしまいました。私の周囲ぐもりを取り捲まいている青年の顔を見ると、世帯染しやたいじみたものは一人もいません。みんな自由です、そうして悉く単独らしく思われたのです。こういう気楽な人の中にも、裏面にはいり込んだら、あるいは家庭の事情に余儀なくされて、すでに妻を迎えていたものがあつたかも知れませんが、子供らしい私はそこに気が付きませんでした。それからそういう特別の境遇に置かれた人の方でも、四辺あたりにに気兼きがねをして、なるべくは書生に縁の遠いそんな内輪の話はしないように慎んでいたのでしょう。後あとから考えると、私自身がすでにその組だったのですが、私はそれさえ分らずに、ただ子供らしく愉快

に修学の道を歩いて行きました。

学年の終りに、私はまた行李こうりを絡からげて、親の墓のある田舎いなかへ帰つて来ました。そうして去年と同じように、父ちち母ははのいたわが家いえの中で、また叔父おじ夫婦とその子供の変わらない顔を見ました。私は再びそこで故郷ふるさとの匂においを嗅かぎました。その匂いは私に取つて依然として懐かしいものでありました。一学年の単調を破る変化としても有難いものに違いなかつたのです。

しかしこの自分を育て上げたと同じような匂いの中で、私はまた突然結婚問題を叔父から鼻の先へ突き付けられました。叔父のいう所は、去年の勧誘を再び繰すり返したのみです。理由も去年と同じでした。ただこの前す勧められた時には、何らの目的物がなか

つたのに、今度はちゃんと肝心かんじんの当人を捕つかまえていたので、私はなお困いらせられたのです。その当人というのは叔父の娘すなわち私の従妹いとこに当る女でした。その女を貰もらつてくれれば、お互いのために便宜である、父も存生ぞんしょうちゆう中ちゆうそんな話を話していた、と叔父がいうのです。私もそうすれば便宜だとは思いました。父が叔父にそういう風ふうな話をしたというのもあり得うべき事と考えました。しかしそれは私が叔父にいわれて、始めて気が付いたので、いわれない前から、覺さとつていた事柄ではないのです。だから私は驚きました。驚いたけれども、叔父の希望に無理のないところも、それがたによわかく解わかりました。私は迂闊うかつなんでしょうか。あるいはそうなのかも知れませんが、おそらくその従妹に無頓着むとんじやくであ

ったのが、おもな源^{げんいん}因^{いん}になつてゐるのでしよう。私は小供^{こども}のうちから市^しにいる叔父^{うち}の家へ始終遊びに行きました。ただ行くばかりでなく、よくそこに泊りました。そうしてこの従妹とはその時分から親しかつたのです。あなたもご承知でしよう、兄^{きょうだい}妹の間に恋の成立した例^{ためし}のないのを。私はこの公認された事実を勝手に布^ふ衍^{えん}しているかも知れないが、始終接触して親しくなり過ぎた男女^{なんによ}の間には、恋に必要な刺戟^{しげき}の起る清新な感じが失われてしまふように考えています。香^{かう}をかぎ得^うるのは、香を焚^たき出した瞬間に限るごとく、酒を味わうのは、酒を飲み始めた刹那^{せつな}にあるごとく、恋の衝動にもこういう際^{きわ}どい一点が、時間の上に存在してゐるとしか思われないのです。一度平気でそこを通り抜けたら、

馴なれれば馴れるほど、親しみが増すだけで、恋の神経はだんだん麻痺まひして来るだけです。私はどう考え直しても、この従妹いとこを妻にする気にはなれませんでした。

叔父おじはもし私が主張するなら、私の卒業まで結婚を延ばしてもいいといいました。けれども善は急げという諺ことわざもあるから、できるなら今のうちに祝しゅうげん言げんの盃さかずきだけは済ませておきたいともいいました。当人に望みのない私にはどっちにしたって同じ事です。私はまた断りました。叔父は厭いやな顔をしました。従妹は泣きました。私に添われないから悲しいのではありません。結婚の申し込みを拒絶されたのが、女として辛つらかったからです。私が従妹を愛していないごとく、従妹も私を愛していない事は、私によく知れ

ていました。私はまた東京へ出ました。

七

「私が三度目に帰国したのは、それからまた一年経った夏の取^{とつ}付^きでした。私はいつでも学年試験の済むのを待ちかねて東京を逃げました。私には故郷^{ふるさと}がそれほど懐かしかったからです。あなたにも覚えがあるでしょう、生れた所は空気の色が違います、土地^{にお}の匂いも格別です、父や母の記憶も濃^{こまや}かに漂^{ただよ}っています。一年のうちで、七、八の二月^{ふたつき}をその中に包^{くる}まれて、穴に入^へった蛇^びのように凝^{じっ}としているのは、私に取^とつて何よりも温かい好^いい心持

だったのです。

単純な私は従妹との結婚問題について、さほど頭を痛める必要がないと思っていました。厭なものは断る、断ってさえしまえば^{あと}後には何も残らない、私はこう信じていたのです。だから叔父の希望通りに意志を曲げなかったにもかかわらず、私はむしろ平気でした。過去一年の間いまだかつてそんな事に^{くったく}屈托した覚えもなく、相変らずの元気で国へ帰ったのです。

ところが帰って見ると叔父の態度が違っています。元のように^{ふところ}いい顔をして私を自分の懐に抱こうとしません。それでも^{おうよう}鷹揚に育った私は、帰って四、五日の間は気が付かずにいきました。ただ何かの機会にふと変に思い出したのです。すると妙なのは、叔

父ばかりではないのです。叔母おばも妙なのです。従妹も妙なのです。中学校を出て、これから東京の高等商業へはいるつもりだといつて、手紙でその様子を聞き合せたりした叔父の男の子まで妙なのです。

私の性しょうぶん分ぶんとして考えずにはいられなくなりました。どうして私の心持がこう変つたのだろう。いやどうして向うがこう變つたのだろう。私は突然死んだ父や母が、鈍にぶい私の眼を洗つて、急に世の中が判はつきり然見えるようにしてくれたのではないかと疑いました。私は父や母がこの世にいなくなつた後あとでも、いた時と同じように私を愛してくれるものと、どこか心の奥で信じていたのです。もつともその頃ころでも私は決して理に暗たちい質ではありませんでした。

した。しかし先祖から譲られた迷信の塊かたまりりも、強い力で私の血の中に潜ひそんでいたのです。今でも潜んでいるでしょう。

私はたった一人山へ行つて、父母の墓の前に跪ひざまずきました。半なかばは哀あい悼とうの意味、半は感謝の心持で跪いたのです。そうして私の未来の幸福が、この冷たい石の下に横たわる彼らの手にまだ握られてでもいるような気分で、私の運命を守るべく彼らに祈りました。あなたは笑うかもしれない。私も笑われても仕方がないと思います。しかし私はそうした人間だったのです。

私の世界は掌たなごころを翻すように変りました。もつともこれは私に取って初めての経験ではなかったのです。私が十六、七の時でしたろう、始めて世の中に美しいものがあるという事実を発見した時

には、一度にはつと驚きました。何^{なんべん}遍も自分の眼を疑^{うたぐ}つて、何遍も自分の眼を擦^{こす}りました。そうして心^{うち}の中でああ美しいと叫びました。十六、七といえ、男でも女でも、俗^{いろけ}にいう色気の付く頃です。色気の付いた私は世の中にある美しいものの代表者として、始めて女を見る事ができたのです。今までその存在に少しも気の付かなかつた異性に対して、盲目^{めくら}の眼が忽^{たちま}ち開いたのです。それ以来私の天地は全く新しいものとなりました。

私が叔父^{おじ}の態度に心づいたのも、全くこれと同じなんでしょう。俄^{がぜん}然として心づいたのです。何の予感も準備もなく、不意に來たのです。不意に彼と彼の家族が、今までとはまるで別物のように私の眼に映つたのです。私は驚きました。そうしてこのままにし

ておいては、自分の行先がどうなるか分らないという氣になりました。

八

「私は今まで叔父任せまかにしておいた家の財産について、詳しい知識を得なければ、死んだ父母ちちははに対して済まないという氣を起したのです。叔父は忙しい身体からだだと自称するごとく、毎晩同じ所に寝泊りねとまはしていませんでした。二日家へ帰ると三日は市しの方で暮らすといった風ふうに、両方の間を往来ゆききして、その日その日を落ち付きのない顔で過ごしていました。そうして忙しいという言葉くを口

ちくせ

癖ちくせのように使いました。何の疑いも起らない時は、私も実際に忙しいのだろうと思つていたのです。それから、忙しがらなくては当世流でないのだろうと、皮肉にも解釈していたのです。けれども財産の事について、時間の掛かかる話をしようという目的ができた眼で、この忙しがる様子を見ると、それが単に私を避ける口実としか受け取れなくなつて来たのです。私は容易に叔父を捕つらまえる機会を得ませんでした。

私は叔父が市の方に妾めかけをもっているという噂うわさを聞きました。私

はその噂を昔中学の同級生であつたある友達から聞いたのです。

妾を置くぐらいの事は、この叔父として少しも怪あやしむに足らないのです。父の生きているうちに、そんな評判を耳に入れた覚えおぼ

のない私は驚きました。友達はその外ほかにも色々叔父についての噂を語って聞かせました。一時事業で失敗しかかっていたように他ひとから思われていたのに、この二、三年来また急に盛り返して来たというのも、その一つでした。しかも私の疑惑を強く染めつけたものの一つでした。

私はとうとう叔父おじと談判を開きました。談判というのは少し不ふ穏当おんとうかも知れませんが、話の成行きなりゆからいうと、そんな言葉で形容するより外に途みちのないところへ、自然の調子が落ちて来たのです。叔父はどこまでも私を子供扱いにしようとします。私はまた始めから猜疑さいぎの眼で叔父に対しています。穏やかに解決のつくはずはなかったのです。

遺憾^{いかん}ながら私は今その談判の顛^{てん}末^{まつ}を詳しくここに書く事のできないほど先を急いでいます。実をいうと、私はこれより以上に、もつと大事なものを控えているのです。私のペンは早くからそこへ辿^{たど}りつきたがっているのを、漸^{やっ}との事で抑えつけているくらいです。あなたに会って静かに話す機会を永久に失った私は、筆を執^とる術^{すべ}に慣れないばかりでなく、貴^{たつと}い時間^{おし}を惜むという意味からして、書きたい事も省かなければなりません。

あなたはまだ覚えているでしょう、私がいつかあなたに、造り付けの悪人が世の中にいるものではないといった事を。多くの善人がいざという場合に突然悪人になるのだから油断してはいけないといった事を。あの時あなたは私に昂^{こう}奮^{ふん}していると注意して

くれました。そうしてどんな場合に、善人が悪人に変化するのかと尋ねました。私がただ一口金と答えた時、あなたは不満な顔をしました。私はあなたの不満な顔をよく記憶しています。私は今あなたの前に打ち明けるが、私はあの時この叔父の事を考えていたのです。普通のものが金を見て急に悪人になる例として、世の中に信用するに足るものが存在し得ない例として、憎悪ぞうおと共に私はこの叔父を考えていたのです。私の答えは、思想界の奥へ突き進んで行こうとするあなたに取って物足りなかったかも知れませんが、陳腐ちんぷだったかも知れません。けれども私にはあれが生きた答えでした。現に私は昂奮していたではありませんか。私は冷やひやかな頭で新しい事を口にするよりも、熱した舌で平凡な説を述べ

る方が生きています。血の力で体が動くからです。言葉が空気に波動を伝えるばかりでなく、もつと強い物にもつと強く働き掛ける事ができますからです。

九

「一口^{ひとくち}でいうと、叔父は私の財産を胡魔^{ごま}化したのです。事は私が東京へ出ている三年の間に容易^{たやす}く行われたのです。すべてを叔父任せ^{まか}にして平気でいた私は、世間的に言えば本当の馬鹿でした。世間的以上の見地から評すれば、あるいは純^{たつと}なる尊い男とでもいえましようか。私はその時の己^{おの}れを顧みて、なぜもつと人が悪く

生れて来なかつたかと思うと、正直過ぎた自分が口惜しくつて堪りません。しかしまたどうかして、もう一度ああいふ生れたままの姿に立ち帰って生きて見たいという心持も起るのです。記憶して下さい、あなたの知っている私は塵に汚れた後の私です。きたなくなつた年数の多いものを先輩と呼ぶならば、私はたしかになたより先輩でしょう。

もし私が叔父の希望通り叔父の娘と結婚したならば、その結果は物質的に私に取つて有利なものでしたろうか。これは考えるまでもない事と思います。叔父は策略で娘を私に押し付けようとしたのです。好意的に両家の便宜を計るというよりも、ずっと下卑た利害心に駆られて、結婚問題を私に向けたのです。私は従妹を

愛していないだけで、嫌ってはいなかったのですが、後から考え
てみると、それを断つたのが私には多少の愉快になると思います。
胡魔ごま化かされるのはどっちにしても同じでしょうけれども、載のせら
れ方からいえば、従妹を貰もらわない方が、向うの思い通りにならな
いという点から見て、少しは私の我がが通った事になるのですから。
しかしそれはほとんど問題とするに足りない些細ささいな事柄です。こ
とに關係のないあなたにいわせたら、さぞ馬鹿ばか氣げた意地に見える
でしょう。

私と叔父の間に他たの親戚しんせきのものがはいりました。その親戚の
ものも私はまるで信用していませんでした。信用しないばかりで
なく、むしろ敵視していました。私は叔父が私を欺あざむいたと覺さとると

共に、他のものも必ず自分を欺くに違いないと思い詰めました。父があれだけ賞め^ほ抜いていた叔父ですらこうだから、他のものとはというのが私の論理^{ロジック}でした。

それでも彼らは私のために、私の所有にかかる一切^{いっさい}のものを纏めて^{まと}くれました。それは金額に見積ると、私の予期^{はる}より遥かに少ないものでした。私としては黙ってそれを受け取るか、でなければ叔父を相手取って公沙汰^{おおやけざた}にするか、二つの方法しかなかったのです。私は憤り^{いきどお}しました。また迷いました。訴訟にすると落^{らく}着^{やく}までに長い時間のかかる事も恐れました。私は修業中の中からですから、学生として大切な時間を奪われるのは非常の苦痛だとも考えました。私は思案の結果、市^しにおける中学の旧友に頼んで、

私の受け取ったものを、すべて金の形かたちに変えようと思いました。旧友は止よした方が得だといって忠告してくれましたが、私は聞きませんでした。私は永こきく故郷きやうを離れる決心をその時に起したのです。叔父の顔を見まいと心のうちで誓ったのです。

私は国を立つ前に、また父と母の墓へ参りました。私はそれぎりその墓を見た事がありません。もう永久に見る機会も来ないでしょう。

私の旧友は私の言葉通りに取り計らってくれました。もつともそれは私が東京へ着いてからよほど経たった後の事のちです。田舎いなかで畠は地たちなどを売ろうとしたって容易には売れませんし、いざとなると足元を見て踏み倒される恐れがあるので、私の受け取った金額は、

時価に比べるとよほど少ないものでした。自白すると、私の財産は自分が懐^{ふところ}にして家を出た若干の公債と、後^{あと}からこの友人に送つてもらった金だけなのです。親の遺産としては固^{もと}より非常に減っていたに相違ありません。しかも私が積極的に減らしたのでないから、なお心持が悪かったのです。けれども学生として生活するにはそれで充分以上でした。実をいうと私はそれから出る利子の半分も使えませんでした。この余裕ある私の学生生活が私を思いも寄らない境遇に陥^{おと}し入れたのです。

十

「金に不自由のない私は、わたくし騒々しい下宿を出て、新しく一戸を

構えてみようかという氣になったのです。しかしそれには世帯道

具を買う面倒もありますし、世話をしてくれる婆さんばあの必要も起

りますし、その婆さんがまた正直でなければ困るし、宅を留守に

しても大丈夫なものでなければ心配だし、といった訳で、ちよく

らちよいと実行する事は覚束なく見えたのです。ある日私はま

あ宅うちだけでも探してみようかというそぞろ心から、散歩がてらに

本郷台ほんこうだいを西へ下りて小石川こいしかわの坂を真直まっすぐに伝通院の方へ上

がりました。電車の通路になってから、あそこいらの様子がまる

で違つてしまいましたが、その頃は左手が砲兵工廠ほうへいこうしようの土塀どべいで、

右は原とも丘ともつかない空地くうちに草が一面に生えていたものです。

私はその草の中に立つて、何^{なに}心^{こころ}なく向うの崖^{がけ}を眺^{なが}めました。

今でも悪い景色ではありませんが、その頃はまたずっとあの西側の趣^{おもむき}が違っていました。見渡す限り緑が一面に深く茂っているだけでなく、神経が休まります。私はふとここいらに適当な宅^{うち}はないだろうかと思いました。それで直^すぐ草^{くさはら}原を横切つて、細い通りを北の方へ進んで行きました。いまだに好^いい町になり切れないで、がたぴししているあの辺^{へん}の家^{いえ}並^{なみ}は、その時分の事ですからずいぶん汚らしいものでした。私は露^ろ次^じを抜けたり、横^{よこ}丁^{ちよう}を曲^{まが}ったり、ぐるぐる歩き廻^{まわ}りました。しまいに駄^だ菓子^{がし}屋^やの上^{かみ}さんに、ここいらに小ぢんまりした貸^{かし}家^やはないかと尋ねてみました。上さんは「そうですね」といって、少^{しば}時^{らく}首をかしげていましたが、

「かし家はちよいと……」と全く思い当たらない風ふうでした。私は望のぞみのないものと諦あきらめて帰り掛けました。すると上さんがまた、「素しろ人下宿うとげしゆくじゃいけませんか」と聞くのです。私はちよつと気が変りました。静かな素しろ人屋うとに一人で下宿しているのは、かえつて家うちを持つ面倒がなくなつて結構だろうと考え出したのです。それからその駄菓子屋の店に腰を掛けて、上さんに詳しい事を教えてもらいました。

それはある軍人の家族、というよりもむしろ遺族、の住んでいる家でした。主人は何でも日にっしん清戦争の時か何かに死んだのだと上さんがいました。一年ばかり前までは、市ヶ谷いちがやの士官学校の傍そばとかに住んでいたのだが、厩うまやなどがあつて、邸やしきが広過ぎるので、

そこを売り払って、ここへ引越して来たけれども、無人で淋しく
くって困るから相当の人があつたら世話をしてくれと頼まれてい
たのだそうです。私は上さんから、その家には未亡人と一人娘
と下女より外にいないのだという事を確かめました。私は閑静で
至極好かろうと心の中に思いました。けれどもそんな家族のう
ちに、私のようなものが、突然行つたところで、素性の知れない
書生さんという名称のもとに、すぐ拒絶されはしまいかという掛
念もありました。私は止そうかとも考えました。しかし私は書生
としてそんなに見苦しい服装はしていませんでした。それから大
学の制帽を被っていました。あなたは笑うでしょう、大学の制帽
がどうしたんだといって。けれどもその頃の大学生は今と違って、

大分^{だいぶん}世間に信用のあつたものです。私はその場合この四角な帽子に一種の自信を見出^{みいだ}したくらいです。そうして駄菓子屋のうさんに教わつた通り、紹介も何もなしにその軍人の遺族^{うち}の家を訪ねました。

私は未亡^{びぼうじん}人に会つて来意^{らいい}を告げました。未亡人は私の身元やら学校やら専門やらについて色々質問しました。そうしてこれなら大丈夫だというところをどこかに握つたのでしよう、いつでも引つ越して来て差^{さしつか}支えないという挨拶^{あいさつ}を即坐^{そくざ}に与えてくれました。未亡人は正しい人でした、また判然^{はつきり}した人でした。私は軍人の妻^{さいくん}君というものはみんなこんなものかと思つて感服しました。感服もしたが、驚きもしました。この気性^{きしょう}でどこが淋^{さむ}し

いのだろうと疑いもしました。

十一

「私は早速さつそくその家へ引き移りました。私は最初来た時に未亡人と話をした座敷を借りたのです。そこは宅うちじゆう中ちゆうで一番好い室へやでした。本郷辺ほんごうへんに高等下宿といった風ふうの家がぽつぽつ建てられた時分の事ですから、私は書生として占領し得る最も好い間まの様子を心得ていました。私の新しく主人となつた室は、それらよりもずっと立派でした。移つた当座は、学生としての私には過ぎるくらいに思われたのです。

室の広さは八畳でした。床の横に違い棚があつて、縁と反対の側には一間の押入れが付いていました。窓は一つもなかったのですが、その代り南向きの縁に明るい日がよく差ししました。

私は移つた日に、その室の床に活けられた花と、その横に立て懸けられた琴を見ました。どっちも私の氣に入りませんでした。

私は詩や書や煎茶を嗜なむ父の傍で育つたので、唐めいた趣味を小供のうちからもつていました。そのためでもありませんうか、こういう艶めかしい裝飾をいつの間にか軽蔑する癖が付いていたのです。

私の父が存生中にあつめた道具類は、例の叔父のために滅茶滅茶にされてしまったのですが、それでも多少は残っています。

した。私は国を立つ時それを中学の旧友に預かってもらいました。それからその中で面白^{うち}そうなものを四、五幅^{ふく}裸^こにして行李^{こうり}の底へ入れて来ました。私は移るや否^{いな}や、それを取り出して床へ懸けて楽しむつもりでいたのです。ところが今いった琴と活^{いけ}花^{ばな}を見たので、急に勇気がなくなつてしまいました。後^{あと}から聞いて始めてこの花が私に対するご馳走^{ちそう}に活けられたのだという事を知った時、私は心のうちで苦笑しました。もつとも琴は前からそこにあつたのですから、これは置き所がないため、やむをえずそのままに立て懸けてあつたのでしよう。

こんな話をする、自然その裏に若い女の影があなたの頭を掠^{かす}めて通るでしょう。移った私にも、移らない初めからそういう好

奇心がすでに動いていたのです。こうした邪氣^{じやき}が予備的に私の自然を損なつたためか、または私がまだ人慣れ^{ひとな}なかつたためか、私は始めてそのお嬢^{じよう}さんに会つた時、へどもどした挨拶^{あいさつ}をしました。その代りお嬢さんの方でも赤い顔をしました。

私はそれまで未亡人^{びぼうじん}の風采^{ふうさい}や態度から推^おして、このお嬢さんのすべてを想像していたのです。しかしその想像はお嬢さんに取つてあまり有利なものではありませんでした。軍人の妻^{さいくん}君だからあなのだろう、その妻君の娘だからこうだろうといった順序で、私の推測は段々延びて行きました。ところがその推測が、お嬢さんの顔を見た瞬間に、悉く打ち消されました。そうして私の頭の中へ今まで想像も及ばなかつた異性の匂^{にお}いが新しく入つて

来ました。私はそれから床の正面に活けてある花が厭でなくなりました。同じ床に立て懸けてある琴も邪魔にならなくなりました。その花はまた規則正しく凋れる頃になると活け更えられるのです。琴も度々鍵の手に折れ曲がった筋違の室に運び去られるのです。私は自分の居間で机の上に頬杖を突きながら、その琴の音を聞いていました。私にはその琴が上手なのか下手なのかよく解らないのです。けれども余り込み入った手を弾かないところを見ると、上手なのじやなかろうと考えました。まあ活花の程度ぐらいなものだろうと思いました。花なら私にも好く分るのです。が、お嬢さんは決して旨い方ではなかったのです。

それでも臆面なく色々な花が私の床を飾ってくれました。も

つとも活^{いけかた}方はいつ見ても同じ事でした。それから花瓶^{かへい}もついぞ
 変^{ためし}った例がありませんでした。しかし片方の音楽になると花より
 ももつと変でした。ぽつんぽつん糸を鳴らすだけで、一向^{いつこう}肉声
 を聞かせないのです。唄^{うた}わないのではありませんが、まるで内^{ないし}
 所^{よばなし}話でもするように小さな声しか出さないのです。しかも叱^{しか}
 られると全く出なくなるのです。

私は喜んでこの下手な活花^なを眺^{なが}めては、まずそんな琴^ねの音に耳
 を傾けました。

「私の気分は国を立つ時すでに厭世的えんせいてきになつていました。他はひと頼りにならないものだという觀念が、その時骨の中まで染み込んでしまったように思われたのです。私は私の敵視する叔父おじだの叔母おばだの、その他の親戚しんせきだのを、あたかも人類の代表者のごとく考え出しました。汽車へ乗つてさえ隣のものの様子を、それとなく注意し始めました。たまに向うから話し掛けられでもすると、なおの事警戒を加えたくくなりました。私の心は沈鬱ちんうつでした。鉛を呑のんだように重苦しくなる事が時々ありました。それでいて私の神経は、今いったごとくに鋭く尖とがつてしまつたのです。

私が東京へ来て下宿を出ようとしたのも、これが大きな原因げんいんになつてゐるように思われます。金に不自由がなければこそ、一

戸を構えてみる気にもなつたのだといえはそれまでですが、元の通りの私ならば、たとい懷中ふところに余裕ができて、好んでそんな面倒な真似まねはしなかつたでしょう。

私は小石川こいしかわへ引き移つてからも、当分この緊張した氣分くつろに寛

ぎを与える事ができませんでした。私は自分で自分が恥ずかしいほど、きよときよと周囲を見廻みまわしていました。不思議にもよく働

くのは頭と眼だけで、口の方はそれと反対に、段々動かなくなつて来ました。私は家のものうちの様子を猫のようによく觀察しながら、

黙つて机の前に坐すわっていました。時々は彼らに対して氣の毒だと思

うほど、私は油断のない注意を彼らの上に注そそいでいたのです。

おれは物を儉ぬすまない巾着切きんちやくきりみたようなものだ、私はこう考え

て、自分が厭^{いや}になる事さえあつたのです。

あなたは定^{さだ}めて変に思うでしょう。その私がそこのお嬢^{じよう}さんをどうして好^すく余裕をもっているか。そのお嬢さんの下手な活^{いけばな}花を、どうして嬉^{うれ}しがって眺^{なが}める余裕があるか。同じく下手なその人の琴をどうして喜んで聞く余裕があるか。そう質問された時、私はただ両方とも事実であつたのだから、事実としてあなたに教えて上げるといふより外^{ほか}に仕方がないのです。解釈は頭のあるあなたに任せるとして、私はただ一言^{いちごん}付け足しておきましょう。私は金に対して人類^{うたぐ}を疑^{うたぐ}つたけれども、愛に対しては、まだ人類を疑^{うたぐ}わなかつたのです。だから他^{ひと}から見ると変なものでも、また自分で考えてみて、矛盾したものでも、私の胸のなかでは平気で両

立っていたのです。

私は未亡人^{びぼうじん}の事を常に奥さんといっていましたから、これか

ら未亡人と呼ばずに奥さんといいます。奥さんは私を静かな人、

大人^{おとな}しい男と評しました。それから勉強家だとも褒^ほめてくれました

た。けれども私の不安な眼つきや、きよときよとした様子につい

ては、何事も口へ出しませんでした。気が付かなかったのか、遠

慮していたのか、どっちだかよく解^{わか}りませんが、何しろそこには

まるで注意を払っていないらしく見えました。そののみならず、

ある場合に私を鷹揚^{おうよう}な方^{かた}だといって、さも尊敬したらしい口の

利^きき方をした事があります。その時正直な私は少し顔を赤らめて、

向うの言葉を否定しました。すると奥さんは「あなたは自分で気

が付かないから、そうおっしゃるんです」と真面目に説明してくれました。奥さんは始め私のような書生を宅へ置くつもりではなかつたらしいのです。どこかの役所へ勤める人か何かに坐敷を貸す料簡で、近所のものに周旋を頼んでいたらしいのです。俸給が豊かゆたでなくつて、やむをえず素人屋しろうとやに下宿するくらいの人だからという考えが、それで前かたから奥さんの頭のどこかにはいつていたのでしょう。奥さんは自分の胸に描いたその想像のお客と私とを比較して、こっちの方を鷹揚だといって褒めるのです。なるほどそんな切り詰めた生活をする人に比べたら、私は金銭にかけて、鷹揚だったかも知れません。しかしそれは気性の問題ではありませんから、私の内生活に取ってほとんど関係のないの

と一般でした。奥さんはまた女だけにそれを私の全体に推し広げて、同じ言葉を応用しようと力めるのです。

十三

「奥さんのこの態度が自然私の気分に影響して来ました。しばらくするうちに、私の眼はもとほどこきよろ付かなくなりました。自分の心が自分の坐^{すわ}っている所に、ちゃんと落ち付いているような気にもなれました。要するに奥さん始め家^{うち}のものが、僻^{ひが}んだ私の眼や疑い深い私の様子に、てんから取り合わなかったのが、私に大きな幸福を与えたのでしよう。私の神経は相手から照り返して

来る反射のないために段々静まりました。

奥さんは心得のある人でしたから、わざと私をそんな風ふうに取り扱ってくれたものとも思われますし、また自分で公言するごとく、実際私を鷹揚おうようだと観察していたのかも知れません。私のこせつき方は頭の中の現象で、それほど外へ出なかつたようにも考えられますから、あるいは奥さんの方で胡魔化ごまかされていたのかも解わかりません。

私の心が静まると共に、私は段々家族のものと接近して来ました。奥さんともお嬢さんとも笑しょうだん談をいうようになりました。茶を入れたからといって向うの室へやへ呼ばれる日もありました。また私の方で菓子を買って来て、二人をこつちへ招いたりする晩も

ありました。私は急に交際の区域が殖^ふえたように感じました。それがために大切な勉強の時間を潰^{つぶ}される事も何度となくありました。不思議にも、その妨害が私には一向邪魔にならなかつたのです。奥さんはもとより閑^{ひまじん}人でした。お嬢さんは学校へ行く上に、花だの琴だのを習っているんだから、定めて忙しかろうと思うと、それがまた案外なもので、いくらでも時間に余裕をもっているように見えました。それで三人は顔さえ見るといっしょに集まって、世間話をしながら遊んだのです。

私を呼びに来るのは、大抵お嬢さんでした。お嬢さんは縁側を直角に曲^{へや}つて、私の室の前に立つ事もありますし、茶の間を抜けて、次の室の襖^{ふすま}の影から姿を見せる事もありました。お嬢さんは、

そこへ来てちよつと留^とまります。それからきつと私の名を呼んで、「ご勉強？」と聞きます。私は大抵むずかしい書物を机の前に開けて、それを見詰めていましたから、傍^{はた}で見たらさぞ勉強家のように見えたのでしょう。しかし實際をいうと、それほど熱心に書物を研究してはいなかったのです。頁^{ページ}の上に眼は着けていながら、お嬢さんの呼びに来るのを待っているくらいなものでした。待っていて来ないと、仕方がないから私の方で立ち上がるのです。そうして向うの室の前へ行つて、こつちから「ご勉強ですか」と聞くのです。

お嬢さんの部屋^{へや}は茶の間と続いた六畳でした。奥さんはその茶の間にいる事もあるし、またお嬢さんの部屋にいる事もありまし

た。つまりこの二つの部屋は仕切しきりがあつても、ないと同じ事で、親子二人が往いつたり来たりして、どっち付かずに占領していたのです。私が外から声を掛けると、「おはいんなさい」と答えるのはきつと奥さんでした。お嬢さんはそこにおいても滅多めったに返事をした事がありませんでした。

時たまお嬢さん一人で、用があつて私の室へはいったついでに、そこに坐すわつて話し込むような場合もその内うちに出て来ました。そういう時には、私の心が妙に不安に冒おかされて来るのです。そうして若い女とただ差さしむか向いで坐っているのが不安なのだと思へませんでした。私は何だかそわそわし出すのです。自分で自分を裏切るような不自然な態度が私を苦しめるのです。しかし相手

の方はかえって平氣でした。これが琴を浚^{さら}うのに声さえ碌^{ろく}に出せなかつたあの女かしらと疑われるくらい、恥ずかしがらないのです。あまり長くなるので、茶の間から母に呼ばれても、「はい」と返事をするだけで、容易に腰を上げない事さえありました。それでいてお嬢さんは決して子供ではなかつたのです。私の眼にはよくそれが解^{わか}っていました。よく解るように振舞つて見せる痕^{こんせ}迹^きさえ明らかでした。

十四

「私はお嬢さんの立つたあとで、ほつと一^{ひと}息^{いき}するのです。それ

と同時に、物足りないようなまた済まないような気持ちになるので
す。私は女らしかったのかも知れませんが。今の青年のあなたがた
から見たらなおそう見えるでしょう。しかしその頃の私^{こころ}たちは大
抵そんなものだったのです。

奥さんは滅多^{めった}に外出した事がありませんでした。たまに宅^{うち}を留
守にする時でも、お嬢さんと私を二人ぎり残して行くような事は
なかったのです。それがまた偶然なのか、故意なのか、私には解
らないのです。私の口からいうのは変ですが、奥さんの様子を能^よ
く観察していると、何だか自分の娘と私とを接近させたがついて
るらしくも見えるのです。それでいて、或^ある場合には、私に対し
て暗^{あん}に警戒するところもあるようなのですから、始めてこんな場

合に出会った私は、時々心持をわるくしました。

私は奥さんの態度をどつちかに片付けてもらいたかったのです。

頭の働きからいえば、それが明らかな矛盾に違いなかったのです。

しかし叔父おじ あざむに欺かれた記憶のまだ新しい私は、もう一步踏み込ん

だ疑いを挟さまずにはいられませんでした。私は奥さんのこの態度

のどつちかが本場で、どつちかが偽いつわりだろうと推定しました。そ

うして判断に迷いました。ただ判断に迷うばかりでなく、何でそ

んな妙な事をするかその意味が私には呑のみ込めなかったのです。

理由わけを考え出そうとしても、考え出せない私は、罪を女という一

字なすに塗り付けて我慢した事もありました。必ひつきよう 竟女だからああ

なのだ、女というものはどうせ愚ぐなものだ。私の考えは行き詰つま

ればいつでもここへ落ちて来ました。

それほど女を見^{みくび}縊^くっていた私が、またどうしてもお嬢さんを見縊る事ができなかったのです。私の理屈はその人の前に全く用を為^なさないほど動きませんでした。私はその人に対して、ほとんど信仰に近い愛をもっていたのです。私が宗教だけに用いるこの言葉を、若い女に応用するのを見て、あなたは変に思うかも知れません、私は今でも固く信じているのです。本当の愛は宗教心とそう違ったものでないという事を固く信じているのです。私はお嬢さんの顔を見るたびに、自分が美しくなるような心持がしました。お嬢さんの事を考えると、^{けだか}気高い気分がすぐ自分に乗り移つて来るように思いました。もし愛という不可思議なものに^{りようは}両

端はじがあつて、その高い端はじには神聖な感じが働いて、低い端には性欲せいよくが動いているとすれば、私の愛はたしかにその高い極点を捕つかまえたものです。私はもとより人間として肉を離れる事のできない身体からだでした。けれどもお嬢さんを見る私の眼や、お嬢さんを考える私の心は、全く肉の臭いにおを帯びていませんでした。

私は母に対して反感を抱いだくと共に、子に対して恋愛の度を増ましに行つたのですから、三人の關係は、下宿した始めよりは段々複雑になつて来ました。もっともその変化はほとんど内面的で外へは現れて来なかつたのです。そのうち私はあるひよつとした機会から、今まで奥さんを誤解していたのではなかうかという氣になりました。奥さんの私に対する矛盾した態度が、どっちも偽り

ではないのだろうと考え直して来たのです。その上、それが互^{たが}い
 違^{ちが}いに奥さんの心を支配するのではなくって、いつでも両方が同時
 に奥さんの胸に存在しているのだと思うようになったのです。つ
 まり奥さんができるだけお嬢さんを私に接近させようとしていな
 がら、同時に私に警戒を加えているのは矛盾のようだけれども、
 その警戒を加える時に、片方の態度を忘れるのでも翻すのでも何
 でもなく、やはり依然として二人を接近させたがっていたのだと
 観察したのです。ただ自分が正当と認める程度以上に、二人が密
 着するのを忌^いむのだと解釈したのです。お嬢さんに対して、肉の
 方面から近づく念の萌^{もぎ}さなかつた私は、その時入^いらぬ心配だと思
 いました。しかし奥さんを悪く思う気はそれからなくなりました。

十五

「私は奥さんの態度を色々そうごう綜合して見て、私がここの家うちで充分信用されている事を確かめました。しかもその信用は初対面の時からあつたのだという証拠さえ発見しました。他ひとを疑うたぐり始めた私の胸には、この発見が少し奇異なくらいに響いたのです。私は男に比べると女の方がそれだけ直覺に富んでいるのだらうと思いました。同時に、女が男のために、欺だまされるのもここにあるのではなからうかと思いました。奥さんをそう觀察する私が、お嬢さんに対して同じような直覺を強く働かせていたのだから、今考える

とおかしいのです。私は他^{ひと}を信じないと心に誓いながら、絶対にお嬢さんを信じていたのですから。それでいて、私を信じている奥さんを奇異に思ったのですから。

私は郷里の事について余り多くを語らなかつたのです。ことに今度の事件については何もいわなかつたのです。私はそれを念頭に浮べてさえすでに一種の不愉快を感じました。私はなるべく奥さんの方の話だけを聞こうと力^{つと}めました。ところがそれでは向うが承知しません。何かに付けて、私の国元の事情を知りたがるのです。私はとうとう何もかも話してしまいました。私は二度と国へは帰らない。帰っても何にもない、あるのはただ父と母の墓ばかりだと告げた時、奥さんは大変感動したらしい様子を見せまし

た。お嬢さんは泣きました。私は話して好い事をしたと思いました。私は嬉うれしかったのです。

私のすべてを聞いた奥さんは、はたして自分の直覚が的中したといわないばかりの顔をし出しました。それから私を自分の親み戚よりに当る若いものか何かを取り扱うように待遇するのです。私は腹も立ちませんでした。むしろ愉快に感じたくらいです。ところがそのうちに私の猜さい疑ぎ心しんがまた起つて来しました。

私が奥さんを疑うたぐり始めたのは、ごく些細ささいな事からでした。しかしその些細な事を重ねて行くうちに、疑惑は段々と根を張つて来ます。私はどういう拍子かふと奥さんが、叔父おじと同じような意味で、お嬢さんを私に接近させようと力つとめるのではないかと考え出

したのです。すると今まで親切に見えた人が、急に狡猾こうかつな策略家として私の眼に映じて来たのです。私は苦にが々しい唇を噛かみました。

奥さんは最初から、無人ぶにんで淋さむしいから、客を置いて世話をするのだと公言していました。私もそれを嘘うそとは思いませんでした。懇意になつて色々打ち明け話を聞いた後あとでも、そこに間違まちがいはなかったように思われます。しかし一般の経済状態は大して豊ゆたかだというほどではありませんでした。利害問題から考えてみて、私と特殊の關係をつけるのは、先方に取つて決して損ではなかったのです。

私はまた警戒を加えました。けれども娘に対して前いったくら

いの強い愛をもっている私が、その母に對していくら警戒を加えたって何になるでしょう。私は一人で自分を嘲ちやうしょう笑しょうしました。

馬鹿だなといって、自分を罵ののった事もあります。しかしそれだけの矛盾ならいくら馬鹿でも私は大した苦痛も感ぜずに済んだのです。私の煩悶はんもんは、奥さんと同じようにお嬢さんも策略家ではなからうかという疑問に会って始めて起るのです。二人が私の背後で打ち合せをした上、万事をやっているのだらうと思うと、私は急に苦しくって堪たまらなくなるのです。不愉快なのではありません。絶体絶命のような行き詰まった心持になるのです。それでいて私は、一方にお嬢さんを固く信じて疑わなかったのです。だから私は信念と迷いの途中に立って、少しも動く事ができなくなつてし

まいりました。私にはどっちも想像であり、またどっちも真実であつたのです。

十六

「私は相変らず学校へ出席していました。しかし教壇に立つ人の講義が、遠くの方で聞こえるような心持がしました。勉強もその通りでした。眼の中へはいる活字は心の底まで浸^しみ渡らないうちに烟^{けむ}のごとく消えて行くのです。私はその上無口になりました。それを二、三の友達が誤解して、冥想^{めいそう}に耽^{ふけ}つてでもいるかのよう^たに、他の友達に伝えました。私はこの誤解を解こうとはしませ

んでした。都合の好い仮面を人が貸してくれたのを、かえって仕合せ^{あわ}として喜びました。それでも時々は気が済まなかったのです。よう、発作的に焦燥^{はしや}ぎ廻^{まわ}って彼らを驚かした事もあります。

私の宿は人出入^{ひとでい}りの少ない家^{うち}でした。親類も多くはないようでした。お嬢さんの学校友達がときたま遊びに来る事がありました。が、極^{きわ}めて小さな声で、いるのだからかからないような話をして帰ってしまうのが常でした。それが私に対する遠慮からだとは、いかな私にも気が付きませんでした。私の所へ訪ねて来るものは、大した乱暴者でもありませんでした。宅^{うち}の人に気兼^{きがね}をするほどな男は一人もなかったのですから。そんなところになると、下宿人の私は主人^{あるじ}のようなもので、肝^{かん}心^{じん}のお嬢さ

んがかえって食^{いそろう}客の位地^{いち}にいたと同じ事です。

しかしこれはただ思い出したついでに書いただけで、実はどうでも構わない点です。ただそこにもどうでもよくない事が一つあったのです。茶の間か、さもなければお嬢^{へや}さんの室で、突然男の声が聞こえるのです。その声がまた私の客と違つて、すこぶる低いのです。だから何を話しているのかまるで分らないのです。そうして分らなければ分らないほど、私の神経に一種の昂^{こうふん}奮を与へるのです。私は坐^{すわ}つていて変にいらいらし出します。私はあれは親類なのだろうか、それともただの知り合いなのだろうかとまず考えて見るのです。それから若い男だろうか年輩の人だろうかと思案してみるのです。坐つていてそんな事の知れようはずがあり

ません。そうかといって、起たつて行つて障しょうじ子を開けて見る訳にはなおいきません。私の神経は震えるというよりも、大きな波動を打つて私を苦しめます。私は客の帰つた後で、きつと忘れずにその人の名を聞きました。お嬢さんや奥さんの返事は、また極めて簡単でした。私は物足りない顔を二人に見せながら、物足りるまで追つい窮きゆうする勇氣をもつていなかったのです。権利は無論もつていなかったのでしょうか。私は自分の品格を重んじなければならぬという教育から来た自尊心と、現にその自尊心を裏うら切ぎりしている物欲しそうな顔かお付つきとを同時に彼らの前に示すのです。彼らは笑いました。それが嘲ちやうしやう笑の意味でなくつて、好意から来たものか、また好意らしく見せるつもりなのか、私は即坐に解釈

の余地を見出し得ないほど落付おちつきを失つてしまうのです。そうして事が済んだ後で、いつまでも、馬鹿にされたのだ、馬鹿にされたんじやなかうかと、何遍なんべんも心のうちで繰り返すのです。

私は自由な身体からだでした。たとい学校を中途で已めようが、またどこへ行つてどう暮らそうが、あるいはどこの何者と結婚しようが、誰だれとも相談する必要のない位地に立っていました。私は思い切つて奥さんにお嬢さんを貰もらい受ける話をして見ようかという決心をした事がそれまでに何度となくありました。けれどもそのたびごとに私は躊躇ちゆうちよして、口へはとうとう出さずにしまったのです。断られるのが恐ろしいからではありません。もし断られたら、私の運命がどう変化するか分りませんけれども、その代り今

までとは方角の違つた場所に立つて、新しい世の中を見渡す便宜も生じて来るのですから、そのくらいの勇氣は出せば出せたのです。しかし私は誘き寄せられるのが厭でした。他の手に乗るのは何よりも業腹ごうはらでした。叔父おじに欺だまされた私は、これから先どんな事があつても、人には欺されまいと決心したのです。

十七

「私が書物ばかり買うのを見て、奥さんは少し着物を拵こしらえろといいました。私は實際田舎いなかで織つた木綿もめんものしかもっていませんでした。その頃の学生こころは絹いとの入はいつた着物を肌に着けませんでした。

私の友達に横浜よこはまの商人あきんどか何かで、宅うちはなかなか派出はでに暮して
 いるものがありました。が、そこへある時羽二重はぶたえの胴着どうぎが配達で届
 いた事があります。すると皆みんなながそれを見て笑いました。その男
 は恥ずかしがって色々弁解べんげしましたが、折角せつかくの胴着どうぎを行李こうりの底
 へ放り込んで利用しないのです。それをまた大勢が寄つてたかつ
 て、わざと着せました。すると運悪くその胴着しらみに蝨しらみがたかりまし
 た。友達はちようど幸さいわいとも思つたのでしよう、評判の胴着どうぎを
 ぐるぐると丸めて、散歩に出たついでに、根津ねづの大きな泥溝どぶの中
 へ棄すててしまいました。その時いつしよに歩いていた私は、橋の
 上に立つて笑いながら友達の所作しよさを眺ながめていましたが、私の胸の
 どこにも勿もったい体たいないという気は少しも起りませんでした。

その頃から見ると私も大分大人だいぶんになっていました。けれどもまだ自分で余所行よそゆきの着物を拵とぎえるというほどの分別ぶんべつは出なかつたのです。私は卒業して髯ひげを生やす時代が来なければ、服装の心配などはするに及ばないものだという変な考えをもっていたのです。それで奥さんに書物は要いるが着物は要らないといいました。奥さんは私の買う書物の分量を知っていました。買った本をみんな読むのかと聞くのです。私の買うものの中うちには字引きもあります。当然眼を通すべきはずでありながら、頁ページさえ切つてないのも多少あつたのですから、私は返事に窮しました。私はどうせ要らないものを買うなら、書物でも衣服でも同じだという事に気が付きました。その上私は色々世話になるという口実もとの下に、お嬢さんの

氣に入るような帯か反物たんのものを買ってやりたかったのです。それで万事を奥さんに依頼しました。

奥さんは自分一人で行くとはいいいません。私にもいつしよに来いと命令するのです。お嬢さんも行かなくてはいけないというのです。今と違つた空氣の中に育てられた私どもは、学生の身分として、あまり若い女などといつしよに歩き廻まわる習慣をもっていないかったものです。その頃の私は今よりもまだ習慣の奴隸でしたから、多少躊躇ちゆうちよしましたが、思い切つて出掛けました。

お嬢さんは大層着飾っていました。地体じたいが色の白いくせに、白粉しろいを豊富に塗つたものだからなお目立ちます。往來の人がじろ見てゆくのです。そうしてお嬢さんを見たものはきつとその

視線をひるがえして、私の顔を見るのだから、変なものでした。

三人は日本橋^{にほんばし}へ行つて買いたいものを買いました。買う間に

も色々気があるので、思ったより暇^{ひま}がかかりました。奥さんはわ

ざわざ私の名を呼んでどうだろうと相談をします。時々反^{たんも}

物^{もの}をお嬢さんの肩から胸へ^{たて}縦^あに宛てておいて、私に二、三步遠^と

退^{おの}いて見てくれろというのです。私はそのたびごとに、それは駄^だ

目^めだとか、それはよく似合うとか、とにかく一人前の口を聞きま

した。

こんな事で時間が掛^かつて帰りは夕飯^{ゆうめし}の時刻になりました。奥

さんは私に対するお札に何かご馳走^{ちそう}するといつて、木原店^{きはらだな}とい

う寄席^{よせ}のある狭い横丁^{よこちよう}へ私を連れ込みました。横丁も狭いが、

飯を食わせる家も狭いものでした。この辺の地理を一向心得ない私は、奥さんの知識に驚いたくらいです。

我々は夜に入って家へ帰りました。その翌日は日曜でしたから、私は終日室の中に閉じ籠っていました。月曜になって、学校へ出ると、私は朝っぱらそうそう級友の一人から調戲われました。いつ妻を迎えたのかといってわざとらしく聞かれるのです。それから私の細君は非常に美人だといって賞めるのです。私は三人連で日本橋へ出掛けたところを、その男にどこかで見られたものとみえます。

「私は宅^{うち}へ歸つて奥さんとお嬢さんにその話をしました。奥さんは笑いました。しかし定めて迷惑だろうといつて私の顔を見ました。私はその時腹のなかで、男はこんな風^{ふう}にして、女から氣を引いて見られるのかと思いました。奥さんの眼は充分私にそう思わせるだけの意味をもっていたのです。私はその時自分の考えている通りを直^{ちよくせつ}截^{せつ}に打ち明けてしまえば好かつたかも知れませんが、しかし私にはもう狐疑^{こぎ}という薩張^{さつぱ}りしない塊^{かたま}りがこびり付いていました。私は打ち明けようとして、ひよいと留^とまりました。そして話の角度を故意に少し外^そらしました。

私は肝^{かん}心^{しん}の自分というものを問題の中から引き抜いてしまい

ました。そうしてお嬢さんの結婚について、奥さんの意中を探つ
 たのです。奥さんは二、三そういう話のないでもないような事を、
 明らかに私に告げました。しかしまだ学校へ出ているくらいで年
 が若いから、こちらではさほど急がないのだと説明しました。奥
 さんは口へは出さないけれども、お嬢さんの容色に大分重きだいぶを置
 いているらしく見えました。極めきようと思えばいつでも極められ
 るんだからというような事さえ口外しました。それからお嬢さん
 より外ほかに子供がないのも、容易に手離てりしたたがらない源げん因いんになっ
 ていました。嫁にやるか、贅むこを取るか、それにさえ迷っているの
 ではなからうかと思われるところもありました。

話しているうちに、私は色々の知識を奥さんから得たような気

がしました。しかしそれがために、私は機会を逸いつしたと同様の結果に陥おちいつてしまいました。私は自分について、ついに一言いちごんも口を開く事ができませんでした。私は好いい加減なところで話を切り上げて、自分の室へやへ帰ろうとしました。

さつきまで傍そばにいて、あんまりだわとか何とかいつて笑ったお嬢さんは、いつの間にか向うの隅に行つて、背中をこつちへ向けていました。私は立とうとして振り返った時、その後姿うしろすがたを見たのです。後姿だけで人間の心が読めるはずはありません。お嬢さんがこの問題についてどう考えているか、私には見当が付きませんでした。お嬢さんは戸棚すわを前にして坐すわっていました。その戸棚の一尺しやくばかり開あいている隙間すきまから、お嬢さんは何か引き出して

膝ひざの上へ置いて眺ながめているらしかったです。私の眼はその隙間の端はしに、一昨日おととい買った反物たんものを見付け出しました。私の着物もお嬢さんのと同じ戸棚の隅に重ねてあったのです。

私が何ともいわずに席を立ち掛けると、奥さんは急に改まった調子になって、私にどう思ふかと聞くのです。その聞き方は何をどう思ふのかと反問しなければ解わからないほど不意でした。それがお嬢さんを早く片付けた方が得策だろうかという意味だと判然はつきりした時、私はなるべく緩ゆっくならな方がいだろうと答えました。奥さんは自分もそう思ふといいました。

奥さんとお嬢さんと私の関係がこうなっている所へ、もう一人男が入り込まなければならぬ事になりました。その男がこの家

庭の一員となつた結果は、私の運命に非常な変化を来^{きた}しています。もしその男が私の生活の行路^{こうろ}を横切らなかつたならば、おそらくこういう長いものをあなたに書き残す必要も起らなかつたでしょう。私は手もなく、魔の通る前に立つて、その瞬間の影に一生を薄暗くされて気が付かずにいたのと同じ事です。告白すると、私は自分でその男を宅^{うち}へ引張^{ひっぱ}つて来たのです。無論奥さんの許^{きよ}諾^{だく}も必要ですから、私は最初何もかも隠さず打ち明けて、奥さんに頼んだのです。ところが奥さんは止^よせといいました。私には連れて来なければ済まない事情が充分あるのに、止せという奥さんの方には、筋の立った理屈はまるでなかつたのです。だから私は私の善^いいと思うところを強^しいて断行してしまいました。

十九

「私はその友達の名をここにKと呼んでおきます。私はこのKと小供こどもの時からなかよしの仲好でした。小供の時からといえは断らないでも解とっているでしょう、二人には同郷の縁故があつたのです。Kは真しんしゅう宗の坊さんの子でした。もつとも長男ではありません、次男でした。それである医者ほんがんしはの所へ養子にやられたのです。私の生れた地方は大変本願寺派ほんがんしはの勢力の強い所でしたから、真宗の坊さんは他ほかのものに比べると、物質的に割が好かつたようです。一例を挙げると、もし坊さんに女の子があつて、その女の子が年としご

頃ころになったとすると、檀家だんかのものが相談して、どこか適当な所へ嫁にやってくれます。無論費用は坊さんの懐ふところから出るのではありません。そんな訳で真宗寺しんしゅうでらは大抵有ゆう福ふくでした。

Kの生れた家も相応に暮らしていたのです。しかし次男を東京へ修業に出すほどの余力があつたかどうか知りません。また修業に出られる便宜があるので、養子の相談が纏まとまつたものかどうか、そこも私には分りません。とにかくKは医者うちの家へ養子に行つたのです。それは私たちがまだ中学にいる時の事でした。私は教きょう場じょうで先生が名簿を呼ぶ時に、Kの姓が急に変つていたので驚いたのを今でも記憶しています。

Kの養子先もかなりな財産家でした。Kはそこから学資を貰もらつ

て東京へ出て来たのです。出て来たのは私といっしよでなかったけれども、東京へ着いてからは、すぐ同じ下宿に入りました。その時分は一つ室^{へや}によく二人も三人も机を並べて寝^ね起^おきしたものです。Kと私も二人で同じ間^まにいました。山で生^い捕^けられた動物が、檻^{おり}の中で抱き合いながら、外を睨^{にら}めるようなものでしたろう。二人は東京と東京の人を畏^{おそ}れました。それでいて六畳の間^まの中では、天下を睥^{へい}睨^{げい}するような事をいつていたのです。

しかし我々は真面目^{まじめ}でした。我々は實際偉くなるつもりでいたのです。ことにKは強かったのです。寺に生れた彼は、常に精進^{しんじん}という言葉を使いました。そうして彼の行為動作は悉くこの精進の一語で形容されるように、私には見えたのです。私は心の

うちに常にKを畏敬^{いけい}していました。

Kは中学にいた頃から、宗教とか哲学とかいうむずかしい問題で、私を困らせました。これは彼の父の感化なのか、または自分の生れた家、すなわち寺という一種特別な建物に属する空氣の影響なのか、解^{わか}りません。ともかくも彼は普通の坊さんよりは遙^{はる}かに坊さんらしい性格をもっていたように見受けられます。元来Kの養家^{ようか}では彼を医者にするつもりで東京へ出したのです。しかるに頑固な彼は医者にはならない決心をもつて、東京へ出て来たのです。私は彼に向つて、それでは養父母^{あやむ}を欺くと同じ事ではないかと詰^なりました。大胆な彼はそうだと答えるのです。道のためなら、そのくらいの事をして構わないというのです。その時彼の

用いた道という言葉は、おそらく彼にもよく解つていなかっただ
 しよう。私は無論解つたとはいえませんが。しかし年の若い私たち
 には、この漠然とした言葉が尊とく響いたのです。よし解らな
 いにしても気高い心持に支配されて、そちらの方へ動いて行こう
 とする意気組に卑しいところの見えるはずはありません。私はK
 の説に賛成しました。私の同意がKにとってどのくらい有力であ
 ったか、それは私も知りません。一図な彼は、たとい私がいくら
 反対しようとも、やはり自分の思い通りを貫いたに違いなからう
 とは察せられます。しかし万一の場合、賛成の声援を与えた私に、
 多少の責任ができてくるぐらいの事は、子供ながら私はよく承知
 していたつもりです。よしその時にそれだけの覚悟がないにして

も、成人した眼で、過去を振り返る必要が起った場合には、私に割り当てられただけの責任は、私の方で帯びるのが至当しとうになるくらいな語気で私は賛成したのです。

二十

「Kと私わたくしは同じ科へ入学しました。Kは澄ました顔をして、養家から送ってくれる金で、自分の好きな道を歩き出したのです。知れはしないという安心と、知れたって構うものかという度胸とが、二つながらKの心にあつたものと見るよりほか仕方ありません。Kは私よりも平気でした。

最初の夏休みにKは国へ帰りませんでした。駒込こまごめのある寺の

一間ひとまを借りて勉強するのだといっていました。私が帰つて来たの

は九月上旬でしたが、彼ははたして大観音おおがんのんの傍そばの汚い寺の中に

閉じ籠こもっていました。彼の座敷は本堂のすぐ傍の狭い室へやでしたが、

彼はそこで自分の思う通りに勉強ができたのを喜んでいるらしく

見えました。私はその時彼の生活の段々坊さんらしくなつて行く

のを認めたように思います。彼は手頸てくびに珠数じゆずを懸けていました。

私がそれは何のためだと尋ねたら、彼は親指で一つ二つと勘定す

る真似まねをして見せました。彼はこうして日に何なん遍べんも珠数の輪を

勘定するらしかったのです。ただしその意味は私には解わかりません。

円い輪になっているものを一粒ずつ数えてゆけば、どこまで数え

ていつても終局はありません。Kはどんな所でどんな心持がして、
爪繰る手を留めたでしょう。詰らない事です、私はよくそれを
思うのです。

私はまた彼の室に聖書を見ました。私はそれまでにお経の名を
たびたび彼の口から聞いた覚えがありますが、基督教について
は、問われた事も答えられた例もなかったのですから、ちよつと
驚きました。私はその理由を訊ねずにはいられませんでした。K
は理由はないといいました。これほど人の有難がる書物なら読
んでみるのが当り前だろうともいいました。その上彼は機会があ
つたら、『コーラン』も読んでみるつもりだといいました。彼は
モハメッドと剣という言葉に大いなる興味をもっているようだし

た。

二年目の夏に彼は国から催促を受けてようやく帰りました。帰つても専門の事は何にもいわなかったものとみえます。家でもまたそこに気が付かなかったのです。あなたは学校教育を受けた人だから、こういう消息をよく解しているでしょうが、世間は学生うちの生活だの、学校の規則だのに関して、驚くべく無知なものです。我々に何でもない事が一いっそう向外部へは通じていません。我々はまた比較的内部の空気ばかり吸っているのです、校内の事は細大ともに世の中に知れ渡っているはずだと思ひ過ぎる癖があります。Kはその点にかけて、私より世間を知っていたのでしょう、澄ました顔でまた戻つて来ました。国を立つ時は私もいっしょでしたか

ら、汽車へ乗るや否^{いな}やすぐどうだったとKに問いました。Kはどうでもなかったと答えたのです。

三度目の夏はちょうど私が永久に父母の墳墓の地を去ろうと決心した年です。私はその時Kに帰国を勧めましたが、Kは応じませんでした。そう毎^{まい}年家へ帰^{しうち}つて何をするのだというのです。

彼はまた踏み留^{とど}まつて勉強するつもりだったのです。私は仕方なしに一人で東京を立つ事にしました。私の郷里で暮らしたその二カ月間が、私の運命にとって、いかに波瀾^{はらん}に富んだものかは、前に書いた通りですから繰り返しません。私は不平と幽鬱^{ゆううつ}と孤独^{さび}の淋^{さび}しさを一つ胸に抱^{いだ}いて、九月に入^いつてまたKに逢^あいました。すると彼の運命もまた私と同様に変調を示していました。彼

は私の知らないうちに、養家^{ようか}先へ手紙を出して、こつちから自分の詐^{いつわ}りを白状してしまつたのです。彼は最初からその覚悟でいたのだそうです。今更^{いまさら}仕方がないから、お前の好きなものをやるより外^{ほか}に途^{みち}はあるまいと、向うにいわせるつもりもあつたのでしようか。とにかく大学へ入つてまでも養父母を欺^{あざむ}き通す気はないと見抜いたのかも知れません。

二十一

「Kの手紙を見た養父は大変怒りました。親を騙^{だま}すような不埒^{ふらち}な

ものに学資を送る事はできないという厳しい返事をすぐ寄こしたのです。Kはそれを私^{わたくし}に見せました。Kはまたそれと前後して実家から受け取った書翰^{しょかん}も見せました。これにも前に劣らないほど厳しい詰責^{きつせき}の言葉がありました。養家^{ようか}先へ対して済まないという義理が加わっているからでもありませんが、こつちでも一切^{いっさい}構わないと書いてありました。Kがこの事件のために復籍^{ふせき}してしまうか、それとも他^たに妥協の道を講じて、依然養家に留^{とど}まるか、そこはこれから起る問題として、差し当りどうかしなければならぬのは、月々に必要な学資でした。

私はその点についてKに何か考^{かん}えがあるのかと尋ねました。Kは夜^や学^が校^{こう}の教師でもするつもりだと答えました。その時分は今

に比べると、存^{ぞんがい}外世の中が寛^{くつ}ろいでいましたから、内職の口はあなたが考えるほど払^{ふつてい}底でもなかったのです。私はKがそれで充分やつて行けるだろうと考えました。しかし私には私の責任があります。Kが養家の希望に背^{そむ}いて、自分の行きたい道を行こうとした時、賛成したものは私です。私はそうかといって手を拱^{こまぬ}いでいる訳にゆきません。私はその場で物質的の補助をすぐ申し出しました。するとKは一も二もなくそれを跳^はね付けました。彼の性格からいって、自活の方が友達の保護の下に立^{もと}つより遥^{はるか}に快よいどうかでなければ男でないような事をいいました。私は私の責任を完^まうするために、Kの感情を傷つけるに忍びませんでした。

それで彼の思う通りにさせて、私は手を引きました。

Kは自分の望むような口をほどなく探し出しました。しかし時間^おを惜しむ彼にとって、この仕事^おがどのくらい辛^{つら}かったかは想像するまでもない事です。彼は今まで通り勉強の手をちつとも緩^{ゆる}めずに、新しい荷^{しよ}を背負^{しよ}つて猛進したのです。私は彼の健康^{きづか}を気遣^{きづか}いました。しかし剛^{ごう}氣^きな彼は笑うだけで、少しも私の注意に取り合いませんでした。

同時に彼と養家との関係は、段々こん絡^{がら}がつて来ました。時間に余裕のなくなった彼は、前のように私と話す機会を奪われたので、私はついにその顛^{てん}末^{まつ}を詳しく聞かずにしまいました^が、解決のますます困難^{くわんなん}になってゆく事だけは承知していました。人が

仲に入つて調停を試みた事も知っていました。その人は手紙でKに帰国を促したのですが、Kは到底駄目だといつて、応じませんでした。この剛情なところが、——Kは学年中で帰れないのだから仕方がないといいましたけれども、向うから見れば剛情でしょう。そこが事態をますます險惡にしたようにも見えました。彼は養家の感情を害すると共に、実家の怒りも買うようになりました。私が心配して双方を融和するために手紙を書いた時は、もう何の効果もありませんでした。私の手紙は一言の返事さえ受けずに葬られてしまったのです。私も腹が立ちました。今までも行掛り上、Kに同情していた私は、それ以後は理否を度外に置いてもKの味方をする気になりました。

最後にKはとうとう復籍に決しました。養家から出してもらった学資は、実家で弁償する事になったのです。その代り実家の方でも構わないから、これからは勝手にしろということです。昔の言葉でいえば、まあ勘^{かんどう}当なのでしょう。あるいはそれほど強いものでなかったかも知れませんが、当人はそう解釈していました。Kは母のない男でした。彼の性格の一面は、たしかに継母^{けいぼ}に育てられた結果とも見る事ができるようです。もし彼の実の母が生きていたら、あるいは彼と実家との関係に、こうまで隔^{へだ}たりがでずに済んだかも知れないと私は思うのです。彼の父はいうまでもなく僧侶^{そうりよ}でした。けれども義理堅い点において、むしろ武士^{さむらい}に似たところがありはしないかと疑われます。

二十二

「Kの事件が一段落ついた後で、私は彼の姉の夫から長い封書を受け取りました。Kの養子に行つた先は、この人の親類に当るのですから、彼を周旋した時にも、彼を復籍させた時にも、この人の意見が重きをなしていたのだと、Kは私に話して聞かせました。手紙にはその後Kがどうしているか知らせてくれと書いてありました。姉が心配しているから、なるべく早く返事を貰いたいという依頼も付け加えてありました。Kは寺を嗣いだ兄よりも、他家へ縁づいたこの姉を好いていました。彼らはみんな一つ腹から

生れた姉きょうだい 弟ですけれども、この姉とKとの間には大分年齒の差があつたのです。それでKの小供こどもの時分には、継母まははよりもこの姉の方が、かえつて本当の母らしく見えたのでしよう。

私はKに手紙を見せました。Kは何ともいいませんでしたけれども、自分の所へこの姉から同じような意味の書状が二、三度来たという事を打ち明けました。Kはそのたびに心配するに及ばないと答えてやったのだそうです。運悪くこの姉は生活に余裕のない家に片付いたために、いくらKに同情があつても、物質的に弟をどうしてやる訳にも行かなかつたのです。

私はKと同じような返事を彼の義兄宛あてで出しました。その中に、うち万一の場合には私がどうしてもするから、安心するようという意

味を強い言葉で書き現わしました。これは固^{もと}より私の一存^{いちぞん}でした。Kの行^{ゆく}先^{さき}を心配するこの姉に安心を与えようという好意は無論含まれていましたが、私を軽蔑^{けいべつ}したとより外^{ほか}に取りようのない彼の実家や養家^{ようか}に対する意地もあつたのです。

Kの復籍したのは一年生の時でした。それから二年生の中頃^{なかごろ}になるまで、約一年半の間、彼は独力で己^{おの}れを支えていったのです。ところがこの過度の労力が次第に彼の健康と精神の上に影響して来たように見え出しました。それには無論養家を出る出ないの蒼蠅^{うるさ}い問題も手伝っていたでしょう。彼は段々^{センチメンタル}感傷的になつて来たのです。時によると、自分だけが世の中の不幸を一人で背負^{しょ}つて立っているような事をいいます。そうしてそれを打ち消

せばすぐ激するのです。それから自分の未来に横たわる 光 明
が、次第に彼の眼を遠退とおのいて行くようにも思つて、いらいらする
のです。学問をやり始めた時には、誰しも偉大な抱負をもつて、
新しい旅に上るのが常ですが、一年と立ち二年と過ぎ、もう卒業
も間近になると、急に自分の足の運びの鈍のろいのに気が付いて、過
半はそこで失望するのが当り前になっていますから、Kの場合も
同じなのですが、彼の焦慮あせり方はまた普通に比べると遥はるかに甚はなはだし
かつたのです。私はついに彼の氣分を落ち付けるのが専せん一いちだと
考えました。

私は彼に向つて、余計な仕事をするのは止よせといいました。そ
うして当分身体からだを樂にして、遊ぶ方が大きな将来のために得策だ

と忠告しました。剛ごうじよう情なKの事ですから、容易に私のいう事

などは聞くまいと、かねて予期していたのですが、実際にい出して見ると、思ったよりも説き落すのに骨が折れたので弱りました。

Kはただ学問が自分の目的ではないと主張するのです。意志の力を養って強い人になるのが自分の考えだということです。それにはなるべく窮屈な境遇にいたってはならないと結論するのです。普通の人から見れば、まるで酔すいきよう興きようです。その上窮屈な境遇にいる彼の意志は、ちつとも強くなっていないのです。彼はむしろ神経衰弱に罹かかっているくらいなのです。私は仕方がないから、彼に向って至極しごく同感であるような様子を見せました。自分もそういう点に向って、人生を進むつもりだったとついには明言しました。

（もっともこれは私に取ってまんざら空虚な言葉でもなかったのです。Kの説を聞いていると、段々そういうところに釣り込まれて来るくらい、彼には力があつたのですから）。最後に私はKといつしよに住んで、いつしよに向上の路を辿つて行きたいと発議しました。私は彼の剛情を折り曲げるために、彼の前に跪く事をあえてしたのです。そうして漸との事で彼を私の家に連れて来ました。

二十三

「私の座敷には控えの間まというような四畳が付属していました。

玄関を上がって私のいる所へ通ろうとするには、ぜひこの四畳を横切らなければならぬのだから、実用の点から見ると、至極不便な室へやでした。私はここへKを入れたのです。もともと最初は同じ八畳に二つ机を並べて、次の間を共有にして置く考えだったのですが、Kは狭苦しくつても一人でいる方が好いいといつて、自分でそつちのほうを択えらんだのです。

前にも話した通り、奥さんは私のこの所置に対して始めは不賛成だったのです。下宿屋ならば、一人より二人が便利だし、二人より三人が得になるけれども、商売でないのだから、なるべくなら止よめた方が好いいというのです。私が決して世話の焼ける人でないから構うまいというと、世話は焼けないでも、氣心の知れない

人は厭だいやと答えるのです。それでは今厄介やっかいになつてゐる私だつて同じ事ではないかと詰なると、私の氣心は初めからよく分つてゐると弁解して已やまないのです。私は苦笑しました。すると奥さんはまた理屈の方向を更かえます。そんな人を連れて来るのは、私のために悪いから止よせといひ直します。なぜ私のために悪いかと聞くと、今度は向うで苦笑するのです。

実をいうと私だつて強しいてKといつしよにゐる必要はなかつたのです。けれども月々の費用を金の形で彼の前に並べて見せると、彼はきつとそれを受け取る時に躊躇ちゅうちよするだろうと思つたのです。彼はそれほど独立心の強い男でした。だから私は彼を私の宅うちへ置いて、二人前ふたりまえの食料を彼の知らない間まにそつと奥さんの手

に渡そうとしたのです。しかし私はKの経済問題について、一いちご言も奥さんに打ち明ける気はありませんでした。

私はただKの健康について云々うんぬんしました。一人で置くとます

ます人間が偏屈へんくつになるばかりだからといいました。それに付け

足して、Kが養家ようかと折合おりあいの悪かった事や、実家と離れてしまつ

た事や、色々話して聞かせました。私は溺れおぼれかかった人を抱いて、

自分の熱を向うに移してやる覚悟で、Kを引き取るのだと告げま

した。そのつもりであたたかい面倒を見てやってくれと、奥さん

にもお嬢さんにも頼みました。私はここまで来て漸々ようよう奥さんを

説き伏せたのです。しかし私から何にも聞かないKは、この顛てんま

末つをまるで知らずにいました。私もかえってそれを満足に思つ

て、のっそり引き移つて来たKを、知らん顔で迎えました。

奥さんとお嬢さんは、親切に彼の荷物を片付ける世話や何かをなにしてくれました。すべてそれを私に対する好意から来たのだと解釈した私は、心のうちで喜びました。——Kが相変らずむっちりした様子をしているにもかかわらず。

私がKに向つて新しい住居すまいの心持はどうだと聞いた時に、彼はただ一言いちげん悪くないといっただけでした。私からいわせれば悪くないどころではないのです。彼の今までいた所は北向きの湿っぽい臭いにおのする汚い室へやでした。食物くいものも室相そうおう応に粗末でした。私の家へ引き移った彼は、幽谷ゆうこくから喬木きようぼくに移った趣があつたくらいです。それをさほどに思う気色けしきを見せないのは、一つは彼の

強情から来ているのですが、一つは彼の主張からも出ているので
 す。仏教の教義で養われた彼は、衣食住についてとかくの贅沢ぜいたく
 をいうのをあたかも不道德のように考えていました。なまじい昔
 の高僧だとか聖徒セントだとかの伝でんを読んだ彼には、ややともすると
 精神と肉体とを切り離れたがる癖がありました。肉を鞭撻べんたつすれ
 ば霊の光輝が増すように感ずる場合さえあつたのかも知れません。
 私はなるべく彼に逆さからわない方針を取りました。私は氷を日向ひなた
 へ出して溶とかす工夫をしたのです。今に融とけて温かい水になれば、
 自分で自分に気が付く時機が来るに違いないと思つたのです。

二十四

「私は奥さんからそういう風^{ふう}に取り扱われた結果、段々快活になつて来たのです。それを自覺していたから、同じものを今度はKの上に応用しようと試みたのです。Kと私とが性格の上において、大分相違のある事は、長く交際^{つきあ}つて来た私によく解^{わか}っていましたけれども、私の神経がこの家庭に入ってから多少角^{かど}が取れたごとく、Kの心もここに置けばいつか沈まる事があるだろうと考えたのです。

Kは私より強い決心を有している男でした。勉強も私の倍ぐらいはしたでしょう。その上持つて生れた頭^{あたま}の質^{たち}が私よりもずっとよかったです。後^{あと}では専門が違いましたから何ともいえません

が、同じ級にいる間は、あいだ 中学でも高等学校でも、Kの方が常に上
 席を占めていました。私には平生から何をしてでもKに及ばないとい
 う自覚があつたくらいです。けれども私が強しいてKを私の宅へうち
 引ひつ張ばつて来た時には、私の方がよく事理を弁わきままえていると信じて
 いました。私にいわせると、彼は我慢と忍耐の区別を了解してい
 ないように思われたのです。これはとくにあなたのために付け足
 しておきたいのですから聞いて下さい。肉体なり精神なりすべて
 我々の能力は、外部の刺戟しげきで、発達もするし、破壊されもするで
 しょうが、どっちにしても刺戟を段々に強くする必要のあるのは
 無論ですから、よく考えないと、非常に險惡な方向へむいて進ん
 で行きながら、自分はもちろんはた傍たのものも気が付かずにいる恐れ

が生じてきます。医者の説明を聞くと、人間の胃袋ほど横着なものはないそうです。粥かゆばかり食っていると、それ以上の堅いものを消化こなす力がいつの間になくなってしまふのだそうです。だから何でも食う稽古けいこをしておくと医者はいうのです。けれどもこれはただ慣れるという意味ではなかうと思ひます。次第に刺戟を増すに従つて、次第に營養機能の抵抗力が強くなるという意味でなくてはなりません。もし反対に胃の力の方がじりじり弱つて行つたなら結果はどうなるだろうと想像してみればすぐ解わかる事です。Kは私より偉大な男でしたけれども、全くここに氣が付いていなかったのです。ただ困難に慣れてしまえば、しまいにその困難は何でもなくなるものだと思ひます。極きめていたらしいのです。艱苦かんくを繰

り返せば、繰り返すというだけの功德くどくで、その艱苦が氣にかからなくなる時機に邂逅めぐりあえるものと信じ切っていたらしいのです。

私はKを説くときに、ぜひそこを明らかにしてやりたかったのです。しかしいえばきつと反抗されるに極きまっていました。また昔の人の例などを、引合ひきあいに持つて来るに違いないと思いました。

そうなれば私だつて、その人たちとKと違っている点を明白に述べなければならなくなります。それを首肯うけがつてくれるようなKならいいのですけれども、彼の性質として、議論がそこまでゆくと容易あとに後へは返りません。なお先へ出ます。そうして、口で先へ出た通りを、行為で実現しに掛かります。彼はこうなると恐るべき男でした。偉大でした。自分で自分を破壊しつつ進みます。結果

から見れば、彼はただ自己の成功を打ち砕く意味において、偉大なのに過ぎないのですけれども、それでも決して平凡ではありませんでした。彼の気性きしょうをよく知った私はついに何ともいう事ができなかつたのです。その上私から見ると、彼は前にも述べた通り、多少神経衰弱に罹かつていたように思われたのです。よし私が彼を説き伏せたところで、彼は必ず激するに違いないのです。私は彼と喧嘩けんかをする事は恐れてはいませんでしたけれども、私が孤独の感に堪たえなかつた自分の境遇を顧みると、親友の彼を、同じ孤独の境遇に置くのは、私に取って忍びない事でした。一步進んで、より孤独な境遇に突き落すのはなお厭いやでした。それで私は彼が宅うちへ引き移ってから、当分の間は批評がましい批評を彼の上

に加えずにいました。ただ穏やかに周囲の彼に及ぼす結果を見る事にしたのです。

二十五

「私は蔭^{かげ}へ廻^{まわ}つて、奥さんとお嬢さんに、なるべくKと話をするように頼みました。私は彼のこれまで通つて来た無言生活が彼に崇^たつて^たいるのだらうと信じたからです。使わない鉄が腐るように、彼の心には錆^{さび}が出ていたとしか、私には思われなかつたのです。

奥さんは取り付き把^はのない人だといつて笑っていました。お嬢さんはまたわざわざその例を挙げて私に説明して聞かせるのです。

火鉢に火があるかと尋ねると、Kはないと答えるそうです。では持つて来ようという、要らないと断るそうです。寒くはないかと聞くと、寒いけれども要らないんだといったぎり応対をしないのだそうです。私はただ苦笑している訳にもゆきません。気の毒だから、何とかいってその場を取り繕っておかなければ済まなくなります。もつともそれは春の事ですから、強いて火にあたる必要もなかったのですが、これでは取り付き把がないといわれるのも無理はないと思いました。

それで私はなるべく、自分が中心になって、女二人とKとの連絡をはかるように力めました。Kと私が話している所へ家の人を呼ぶとか、または家の人と私が一つ室に落ち合った所へ、Kを引

つ張り出すとか、どっちでもその場合に応じた方法をとって、彼らを接近させようとしたのです。もちろんKはそれをあまり好みませんでした。ある時はふいと起たつて室の外へ出ました。またある時はいくら呼んでもなかなか出て来ませんでした。Kはあんな無駄むだばなし話をしてどこが面白いというのです。私はただ笑っていました。しかし心の中うちでは、Kがそのために私を軽蔑けいべつしていることがよく解わかりました。

私はある意味から見て實際彼の軽蔑あたいに価あたいしていたかも知れませんが。彼の眼の着け所は私より遥はるかに高いところにあつたともいわれるでしょう。私もそれを否いなみはしません。しかし眼だけ高くつて、外ほかが釣り合わないのは手もなく不具かたわです。私は何を措おいても、

この際彼を人間らしくするのが専一だと考えたのです。いくら彼の頭が偉い人の影像イメージで埋うずまっていたても、彼自身が偉くなつてゆかない以上は、何の役にも立たないという事を発見したのです。私は彼を人間らしくする第一の手段として、まず異性の傍そばに彼を坐すわらせる方法を講じたのです。そうしてそこから出る空氣に彼を曝さらした上、錆さび付きかかった彼の血液を新しくしようと試みたのです。

この試みは次第に成功しました。初めのうち融合しにくいように見えたものが、段々一つに纏まとまって来出きだしました。彼は自分以外に世界のある事を少しずつ悟つてゆくようでした。彼はある日私に向つて、女はそう輕蔑けいべつすべきものでないというような事を

いいました。Kははじめ女からも、私同様の知識と学問を要求していたらしいのです。そうしてそれが見付からないと、すぐ輕蔑の念を生じたものと思われまゝ。今までの彼は、性によつて立場を変える事を知らずに、同じ視線ですべての男女なんによを一樣に觀察していたのです。私は彼に、もし我ら二人だけが男同志で永久に話を交換しているならば、二人はただ直線的に先へ延びて行くに過ぎないだろうといひました。彼はもつともだと答えました。私はその時お嬢さんの事で、多少夢中になつてゐる頃ころでしたから、自然そんな言葉も使うようになったのでしよう。しかし裏面の消息は彼には一ひとくち口も打ち明けませんでした。

今まで書物で城壁をきずいてその中に立て籠こもつていたようなK

の心が、段々打ち解けて来るのを見ているのは、私に取って何よりも愉快でした。私は最初からそうした目的で事をやり出したのですから、自分の成功に伴う喜びを感じずにはいられなかったのです。私は本人にいわない代りに、奥さんとお嬢さんに自分の思つた通りを話しました。二人も満足の様子でした。

二十六

「Kと私は同じ科わたくしにおりながら、専攻の学問が違っていましたから、自然出る時や帰る時に遅速がありました。私の方が早ければ、ただ彼の空室くうしつを通り抜けるだけですが、遅いと簡単な挨拶あいさつを

して自分の部屋へはいるのを例にしていました。Kはいつもの眼を
 書物からはなして、襖ふすまを開ける私をちよつと見ます。そうして
 きつと今帰つたのかといいます。私は何も答えないで点頭うなずく事も
 ありませんし、あるいはただ「うん」と答えて行き過ぎる場合もあ
 ります。

ある日私は神田かんだに用があつて、帰りがいつもよりずっと後おくれま
 した。私は急ぎ足に門前まで来て、格子こうしをがらりと開けました。
 それと同時に、私はお嬢さんの声を聞いたのです。声は慥たしかにK
 の室へやから出たと思ひました。玄関から真直まつすぐに行けば、茶の間、
 お嬢さんの部屋と二つ続いていて、それを左へ折れると、Kの室、
 私の室、という間取まどりなのですから、どこで誰の声かしたくらいは、

久しく厄やつかい介になつてゐる私にはよく分るのです。私はすぐ格子を締めました。するとお嬢さんの声もすぐ已やみました。私が靴を脱いでゐるうち、——私はその時分からハイカラで手数てかずのかかる編あみあげ上はを穿はいていたのですが、——私がごんでその靴紐くつひもを解はいているうち、Kの部屋では誰の声もしませんでした。私は変に思いました。ことによると、私の疳かんちがい違ちがいかも知れないと考へたのです。しかし私がいつもの通りKの室を抜けようとして、襖を開けると、そこに二人はちやんと坐すわつていました。Kは例の通り今歸つたかといひました。お嬢さんも「お歸り」と坐すわつたままで挨拶しました。私には氣のせいとその簡単な挨拶が少し硬かたいように聞こえました。どこかで自然を踏み外はずしてゐるような調子とし

て、私の鼓膜こまくに響いたのです。私はお嬢さんに、奥さんはと尋ねました。私の質問には何の意味ありませんでした。家のうちが平常より何だかひっそりしていたから聞いて見ただけの事です。

奥さんははたして留守でした。下女げじょも奥さんといっしょに出たのでした。だから家うちに残っているのは、Kとお嬢さんだけだったのです。私はちよつと首を傾けました。今まで長い間世話になつていたけれども、奥さんがお嬢さんと私だけを置き去りにして、宅うちを空けた例ためしはまだなかったのですから。私は何か急用でもできたのかとお嬢さんに聞き返しました。お嬢さんはただ笑っているのです。私はこんな時に笑う女が嫌いでした。若い女に共通な点だといえばそれまでかも知れませんが、お嬢さんも下らない事に

よく笑いたがる女でした。しかしお嬢さんは私の顔色を見て、すぐ不斷ふだんの表情に帰りました。急用ではないが、ちよつと用があつて出たのだと真面目まじめに答えました。下宿人の私にはそれ以上問ひ詰める権利はありません。私は沈黙しました。

私が着物を改めて席に着くか着かないうちに、奥さんも下女も歸つて来ました。やがて晩食ばんめしの食卓でみんなが顔を合わせる時刻が来しました。下宿した当座は万事客扱いだったので、食事のたびに下女が膳ぜんを運んで来てくれたのですが、それがいつの間にか崩れて、飯時めしどきには向うへ呼ばれて行く習慣になつていたのです。Kが新しく引き移つた時も、私が主張して彼を私と同じように取り扱わせる事に極きめました。その代り私は薄い板で造つた足の畳たた

み込める華奢きやしやな食卓を奥さんに寄附きふしました。今ではどこの宅うちでも使っているようですが、その頃ころそんな卓の周囲に並んで飯を食う家族はほとんどなかったのです。私はわざわざ御茶おちやの水みずの家具屋へ行つて、私の工夫通りにそれを造り上げあさせたのです。

私はその卓上で奥さんからその日いつもの時刻に肴屋さかなやが来なかったので、私たちに食わせるものを買いに町へ行かなければならなかったのだという説明を聞かされました。なるほど客を置いている以上、それももつともな事だと私が考えた時、お嬢さんは私の顔を見てまた笑い出しました。しかし今度は奥さんに叱しかられてすぐ已やめました。

二十七

「一週間ばかりして私はまたKとお嬢さんがいつしよに話している室へやを通り抜けました。その時お嬢さんは私の顔を見るや否いなや笑い出しました。私はすぐ何がおかしいのかと聞けばよかったのでしよう。それをつい黙って自分の居間まで来てしまったのです。だからKもいつものように、今帰ったかと声を掛ける事ができなくなりました。お嬢さんはすぐ障しょうじ子を開けて茶の間へ入ったようでした。

夕飯ゆうめしの時、お嬢さんは私を変な人だといいました。私はその時もなぜ変なのか聞かずにしまいました。ただ奥さんが睨にらめるよ

うな眼をお嬢さんに向けるのに気が付いただけでした。

私は食後Kを散歩に連れ出しました。二人は伝通院でんずういんの裏手か

ら植物園の通りをぐるりと廻まわつてまた富坂とみざかの下へ出ました。散

歩としては短い方ではありませんでしたが、その間あいだに話した事は

極めて少きわなかつたのです。性質からいうと、Kは私よりも無口な

男でした。私も多弁な方ではなかつたのです。しかし私は歩きな

がら、できるだけ話を彼に仕掛しかけてみました。私の問題はおもに

二人の下宿している家族についてでした。私は奥さんやお嬢さん

を彼がどう見ているか知リたかつたのです。ところが彼は海のも

のとも山のものとも見分みわけの付かないような返事ばかりするので

す。しかもその返事は要領を得ないくせに、極めて簡単でした。

彼は二人の女に関してよりも、専攻の学科の方に多くの注意を払っているように見えました。もつともそれは二学年目の試験が目の前に逼せまっている頃ころでしたから、普通の人間の立場から見て、彼の方が学生らしい学生だったのでしょう。その上彼はシュエデンボルグがどうかこうだとかいって、無学な私を驚かせました。

我々が首尾よく試験を済ましました時、二人とももう後あと一年だといつて奥さんは喜んでくれました。そういう奥さんの唯ゆい一いつの誇ほこりとも見られるお嬢さんの卒業も、間もなく来る順になつていたのです。Kは私に向つて、女というものは何にも知らないで学校を出るのだといいました。Kはお嬢さんが学問以外に稽古けいこしている縫針ぬいはりだの琴だの活花いけばなだのを、まるで眼中に置いていない

ようでした。私は彼の迂闊うかつを笑ってやりました。そうして女の価値はそんな所にあるものでないという昔の議論をまた彼の前で繰り返しました。彼は別段反駁はんぱくもしませんでした。その代りなるほどという様子も見せませんでした。私にはそこが愉快でした。彼のふんといったような調子が、依然として女を輕蔑けいべつしているように見えたからです。女の代表者として私の知っているお嬢さんを、物の数かずとも思っていないらしかったからです。今から回顧すると、私のKに対する嫉妬しつとは、その時にもう充分萌きざしていたのです。

私は夏休みにどこかへ行こうかとKに相談しました。Kは行きたくないような口振くちぶりを見せました。無論彼は自分の自由意志で

どこへも行ける身体からだではありませんが、私が誘いさえすれば、またどこへ行つても差さ支しえつかない身体だったのです。私はなぜ行きたくないのかと彼に尋ねてみました。彼は理由も何にもないというのです。宅で書物うちを読んだ方が自分の勝手だというのです。私が避暑地へ行つて涼しい所で勉強した方が、身体のためだと主張すると、それなら私一人行つたらよからうというのです。しかし私はK一人をここに残して行く気にはなれないのです。私はただでさえKと宅のものが段々親しくなつて行くのを見ているのが、余り好いい心持ではなかったのです。私が最初希望した通りになるのが、何で私の心持を悪くするのかといわれればそれまでです。私は馬鹿に違いないのです。果はてしのつかない二人の議論を見るに

見かねて奥さんが仲へ入りました。二人はどうとういつしよに房ぼ
うしゅう

州へ行く事になりました。

二十八

「Kはあまり旅へ出ない男でした。わたくし 私にも房州ぼうしゅうは始めてでした。二人は何にも知らないで、船が一番先へ着いた所から上陸したのです。たしか保田ほたとかいいました。今ではどんなに変つていくか知りませんが、その頃ころはひどい漁村でした。第一だいちどこもかしこも腥なまぐさいのです。それから海へ入ると、波に押し倒されて、すぐ手だの足だのを擦すり剥むくのです。こぶし 拳のような大きな石が打ち寄せ

る波に揉もまれて、始終ごろごろしているのです。

私はすぐ厭いやになりました。しかしKは好いいとも悪いともいいません。少なくとも顔かお付つきだけは平気なものでした。そのくせ彼は海へ入るたんびにどこかに怪我けがをしない事はなかったのです。私はとうとう彼を説き伏せて、そこから富浦とみうらに行きました。富浦からまた那古なこに移りました。すべてこの沿岸はその時分から重おもに学生の集まる所でしたから、どこでも我々にはちようど手頃てごろの水浴場だったのです。Kと私はよく海岸の岩の上に坐すわって、遠い海の色や、近い水の底を眺ながめました。岩の上から見下す水は、また特別に綺麗きれいなものでした。赤い色だの藍あいの色だの、普通市場しじょうに上のぼらないような色をした小魚こうおが、透き通る波の中をあちらこち

らと泳いでいるのが鮮やかに指さされました。

私はそこに坐つて、よく書物をひろげました。Kは何もせずに黙っている方が多かったです。私にはそれが考えに耽^{ふけ}っているのか、景色に見惚^{みと}れているのか、もしくは好きな想像を描^{えが}いているのか、全く解^{わか}らなかつたのです。私は時々眼を上げて、Kに何をしているのだと聞きました。Kは何もしていないと一^{ひと}口^{くち}答えるだけでした。私は自分の傍^{そば}にこうじつとして坐っているもの、Kでなくつて、お嬢さんだつたらさぞ愉快だろうと思う事がよくありました。それだけならまだいいのですが、時にはKの方でも私と同じような希望を抱^{いだ}いて岩の上に坐っているのではないかしらと忽^{こっぜん}然疑い出すのです。すると落ち付いてそこに書物をひろ

げているのが急に厭になります。私は不意に立ち上ります。そうして遠慮のない大きな声を出して怒鳴ります。纏まった詩だの歌だのを面白そうに吟ずるような手緩い事はできないのです。ただ野蛮人のごとくにわめくのです。ある時私は突然彼の襟頸を後ろからぐいと攫みました。こうして海の中へ突き落したらどうするといつてKに聞きました。Kは動きませんでした。後ろ向きのまま、ちようど好い、やってくれと答えました。私はすぐ首筋を抑えた手を放しました。

Kの神経衰弱はこの時もう大分よくなっていたらしいのです。それと反比例に、私の方は段々過敏になって来ていたのです。私は自分より落ち付いているKを見て、羨ましがりました。また憎

らしがりました。彼はどうしても私に取り合う^{けしき}気色を見せなかつたからです。私にはそれが一種の自信のごとく映りました。しかしその自信を彼に認めたところで、私は決して満足できなかったのです。私の疑いはもう一歩前へ出て、その性質を明^{あき}らめたがりました。彼は学問なり事業なりについて、これから自分の進んで行くべき前途の^{こうみよう}光明を再び取り返した心持になったのだらうか。単にそれだけならば、Kと私との利害に何の衝突の起る訳はないのです。私はかえって世話のし甲斐^{がい}があつたのを嬉^{うれ}しく思うくらいなものです。けれども彼の安心がもしお嬢さんに対してであるとするば、私は決して彼を許す事ができなくなるのです。不思議にも彼は私のお嬢さんを愛している^{そぶり}素振に全く気が付いてい

ないように見えました。無論私もそれがKの眼に付くようにわざとらしくは振舞いませんでした。Kは元来そういう点にかけると鈍^{にぶ}い人なのです。私には最初からKなら大丈夫という安心があつたので、彼をわざわざ宅^{うち}へ連れて来たのです。

二十九

「私は思い切つて自分の心をKに打ち明けようと思いました。もつともこれはその時に始まった訳でもなかったのです。旅に出ない前から、私にはそうした腹ができていたのですけれども、打ち明ける機会をつらまえる事も、その機会を作り出す事も、私の手際^{てぎわ}

では旨くゆかなかったのです。今から思うと、その頃私の周囲にいた人間はみんな妙でした。女に関して立ち入った話などをするものは一人もありませんでした。中には話す種をもたないのも大分いいたでしょうが、たといもついても黙っているのが普通のようでした。比較的自由な空気を呼吸している今のあなたがたから見たら、定めし変に思われるでしょう。それが道学どうがくの余習よしゅうなのか、または一種のはにかみなのか、判断はあなたの理解に任せておきます。

Kと私は何でも話し合える中でした。偶には愛とか恋とかいふ問題も、口には上らないではありませんでしたが、いつでも抽象的な理論に落ちてしまうだけでした。それも滅多めったには話題にならな

かったのです。大抵は書物の話と学問の話と、未来の事業と、抱負と、修養の話ぐらいで持ち切っていたのです。いくら親しくつてもこう堅くなつた日には、突然調子を崩せるものではありません。二人はただ堅いなりに親しくなるだけです。私はお嬢さんの事をKに打ち明けようと思ひ立つてから、何^{なんべん}遍^{へん}齒^はがゆい不快に悩まされたか知れません。私はKの頭のどこか一力所を突き破つて、そこから柔らかな空氣を吹き込んでやりたい氣がしました。

あなたがたから見て笑^{しょうしせんぼん}止^と千^{せん}万^{まん}な事もその時の私には實際大困難だったのです。私は旅先でも宅^{うち}にいた時と同じように卑^{ひきよう}怯^{けつ}でした。私は始終機会を捕える氣でKを觀察していながら、変に高踏的な彼の態度をどうする事もできなかつたのです。私にいわ

せると、彼の心臓の周囲は黒い漆で重く塗り固められたのも同然でした。私の注ぎ懸け^{そそ}ようとする血潮は、一滴もその心臓の中へは入らないで、悉く弾き返されてしまうのです。
ことごとことはじ

或る時はあまりKの様子が強くて高いので、私はかえって安心した事もあります。そうして自分の疑いを腹の中で後悔すると共に、同じ腹の中で、Kに詫^わびました。詫^わびながら自分が非常に下等な人間のように見えて、急に厭^{いや}な心持になるのです。しかし少^{しば}らく時すると、以前の疑いがまた逆戻りをして、強く打ち返して来ます。すべてが疑いから割り出されるのですから、すべてが私には不利益でした。容貌^{ようぼう}もKの方が女に好かれるように見えまして。性質も私のようにこせこせしていないところが、異性には気

に入るだろうと思われました。どこか間が抜けていて、それでどこかに確^{しつ}かりした男らしいところのある点も、私よりは優勢に見えました。学力^{がくりき}になれば専門こそ違いますが、私は無論Kの敵でない^{めさき}と自覚していました。——すべて向うの好^いいところだけがこう一度に眼先^{めさき}へ散らつき出すと、ちよつと安心した私はすぐ元の不安に立ち返るのです。

Kは落ち付かない私の様子を見て、厭^{いや}ならひとまず東京へ帰つてもいいといったのですが、そういわれると、私は急に帰りたくなくなりました。実はKを東京へ帰したくなかつたのかも知れません。二人は房^{ぼう}州^{しゅう}の鼻^{なわ}を廻^{まわ}つて向う側へ出ました。我々は暑い日に射^いられながら、苦しい思いをして、上総^{かずさ}のそこ一里^{いちり}に騙^{だま}さ

れながら、うんうん歩きました。私にはそうして歩いている意味がまるで解わからなかつたくらいです。私は冗じょう談だん半分Kにそういました。するとKは足があるから歩くのだと答えました。そうして暑くなると、海に入つて行こうといつて、どこでも構しわおず潮しおへ漬つかりました。その後あとをまた強い日で照り付けられるのですから、身体からだが倦怠だるくてぐたぐたになりました。

三十

「こんな風ふうにして歩いていると、暑さと疲労とで自然身体からだの調子が狂ひつて来るものです。もつとも病氣とは違います。急に他ひとの身

体の中へ、自分の靈魂が宿替やどがえをしたような気分になるのです。

私は平生わたくしがいぜいの通りKと口を利ききながら、どこかで平生の心持と離

れるようになりました。彼に対する親しみも憎しみも、旅中りよちゆう

限りかぎという特別な性質を帯びおる風になったのです。つまり二人は

暑さのため、潮しおのため、また歩行のため、在来と異なつた新しい

関係に入る事ができたのでしよう。その時の我々はあたかも道づ

れになつた行商ぎようしやうのようなものでした。いくら話をしてもいつ

もと違つて、頭を使う込み入つた問題には触れませんでした。

我々はこの調子でとうとう銚子ちやうしまで行つたのですが、道中た

つた一つの例外があつたのを今に忘れる事ができないのです。ま

だ房州を離れない前、二人は小湊こみなとという所で、鯛たいの浦うらを見物し

ました。もう年数ねんすうもよほど経たっていますし、それに私にはそれほど興味の無い事ですから、判然はんぜんとは覚えていませんが、何でもそこは日蓮にちれんの生れた村だとかいう話でした。日蓮の生れた日に、鯛が二尾磯びいそに打ち上げられていたとかいう言いい伝つたえになつて居るのです。それ以来村の漁師が鯛をとる事を遠慮して今に至つたのだから、浦には鯛が沢山いるのです。我々は小舟を傭やとつて、その鯛をわざわざ見に出掛けたのです。

その時私はただ一図いちずに波を見ていました。そうしてその波の中に動く少し紫がかった鯛の色を、面白い現象の一つとして飽かず眺めました。しかしKは私ほどそれに興味をもち得なかつたものとみえます。彼は鯛よりもかえつて日蓮の方を頭の中で想像して

いたらしいのです。ちようどそこに誕生寺たんじょうじという寺がありました。日蓮の生れた村だから誕生寺とでも名を付けたものでしょう、立派な伽藍がらんでした。Kはその寺に行つて住持じゅうじに会つてみるといい出しました。実をいうと、我々はずいぶん変な服装なりをしていたのです。ことにKは風のために帽子を海に吹き飛ばされた結果、菅笠すががさを買つて被かぶつていました。着物は固もとより双方とも垢あかじみた上に汗くさで臭くさくなつていました。私は坊さんなどに会うのは止よそうといいました。Kは強情ごうじょうだから聞きません。厭いやなら私だけ外に待つていろというのです。私は仕方がないからいつしよに玄関にかかりましたが、心のうちではきつと断られるに違ちがひないと思つていました。ところが坊さんというものは案外ていねい丁寧なもので、

広い立派な座敷へ私たちを通して、すぐ会ってくれました。その
 時分の私はKと大分^{だいぶん}考えが違っていましたから、坊さんとKの談
 話にそれほど耳を傾ける気もありませんでしたが、Kはしきりに
 日蓮の事を聞いていたようです。日蓮は草^{そう}日蓮^{にちれん}といわれるくら
 いで、草書^{そうしょ}が大変上手であつたと坊さんがいった時、字の拙^{まず}い
 Kは、何だ下らないという顔をしたのを私はまだ覚えています。
 Kはそんな事よりも、もっと深い意味の日蓮が知リたかつたので
 しよう。坊さんがその点でKを満足させたかどうかは疑問ですが、
 彼は寺の境^{けいだい}内を出ると、しきりに私に向つて日蓮の事を云々^{うんぬん}
 し出しました。私は暑くて草^{くた}臥^{たび}れて、それどころではありません
 でしたから、ただ口の先で好^いい加減な挨拶^{あいさつ}をしていました。そ

れも面倒になつてしまひには全く黙つてしまつたのです。

たしかその翌^{あく}る晩の事だと思ひますが、二人は宿へ着いて飯^{めし}を食つて、もう寝ようという少し前になつてから、急にむずかしい問題を論じ合い出しました。Kは昨日^{きのう}自分の方から話しかけた日蓮の事について、私に取り合ひなかつたのを、快く思つていなかったのです。精神的に向上心がないものは馬鹿だといつて、何だか私をさも軽薄もののようにやり込めるのです。ところが私の胸にはお嬢さんの事が蟠^{わだかま}つていますから、彼の侮蔑^{ぶべつ}に近い言葉をただ笑つて受け取る訳にいきません。私は私で弁解を始めたのです。

「その時私はしきりに人間らしいという言葉を使いました。Kはこの人間らしいという言葉のうちに、私が自分の弱点のすべてを隠しているというのです。なるほど後から考えれば、Kのいう通りでした。しかし人間らしくない意味をKに納得させるためにその言葉を使い出した私には、しゅったつてん出立点がすでに反抗的でしたから、それを反省するような余裕はありません。私はなおの事自説を主張しました。するとKが彼のどこをつらまえて人間らしくないというのかと私に聞くのです。私は彼に告げました。——君は人間らしいのだ。あるいは人間らし過ぎるかも知れないのだ。けれども口の先だけでは人間らしくないような事をいうのだ。また

人間らしくないように振舞おうとするのだ。

私がこういった時、彼はただ自分の修養が足りないから、他ひとにはそう見えるかも知れないと答えただけで、一いつ向私を反駁はんぱくしようとしませんでした。私は張合いが抜けたというよりも、かえって気の毒になりました。私はすぐ議論をそこで切り上げました。彼の調子もだんだん沈んで来ました。もし私が彼の知っている通り昔の人を知るならば、そんな攻撃はしないだろうといって悵ちやう然ぜんとしていました。Kの口にした昔の人とは、無論英雄でもなければ豪傑でもないのです。霊のために肉を虐しいたげたり、道のために体たいを鞭むちうったりしたいいわゆる難行苦行なんぎよくくぎよくの人を指すのです。Kは私に、彼がどのくらいそのために苦しんでいるか解わからないの

が、いかにも残念だと明言しました。

Kと私とはそれぎり寝てしまいました。そうしてその翌^{あく}る日からまた普通の行^{ぎようしやう}商の態度に返つて、うんうん汗を流しながら歩き出したのです。しかし私は路^{みちみち}々その晩の事をひよいひよいと思ひ出しました。私にはこの上もない好^いい機会が与えられたのに、知らない振^ふりをしてなぜそれをやり過ぎたのだろうという悔恨の念が燃えたのです。私は人間らしいという抽象的な言葉を用いる代りに、もつと直^{ちよくせつ}截で簡単な話をKに打ち明けてしまえば好かつたと思ひ出したのです。実をいうと、私がそんな言葉を創造したのも、お嬢さんに対する私の感情が土台になっていたのですから、事実を蒸溜^{じやうりゆう}して搾^{こしら}えた理論などをKの耳に吹き

込むよりも、原の形そのまゝを彼の眼の前に露出した方が、私にはたしかに利益だつたでしょう。私にそれができなかったのは、学問の交際が基調を構成している二人の親しみに、自から一種の惰性があつたため、思い切つてそれを突き破るだけの勇気が私に欠けていたのだという事をここに告白します。気取り過ぎたといつても、虚栄心が崇つたといつても同じでしょうが、私のいう氣取るとか虚栄とかいう意味は、普通のとは少し違います。それがあなたに通じさえすれば、私は満足なのです。

我々は真黒になつて東京へ帰りました。帰つた時は私の気分がまた變つていました。人間らしいとか、人間らしくないとかいう小理屈はほとんど頭の中に残っていませんでした。Kにも宗教家

らしい様子が全く見えなくなりました。おそらく彼の心のどこにも霊がどうの肉がどうのという問題は、その時宿っていなかったでしょう。二人は異人種のような顔をして、忙しそうに見える東京をぐるぐる眺めながました。それからりようごく両国へ来て、暑いのに軍し鶏やもを食いました。Kはその勢いきおいで小石川こいしかわまで歩いて帰ろうというのです。体力からいえばKよりも私の方が強いのですから、私はすぐ応じました。

宅うちへ着いた時、奥さんは二人の姿を見て驚きました。二人はただ色が黒くなっただけでなく、むやみに歩いていたうちに大変瘠やせてしまったのです。奥さんはそれでも丈夫そうになったといほって賞めてくれるのです。お嬢さんは奥さんの矛盾がおかしいと

いつてまた笑い出しました。旅行前時々腹の立った私も、その時だけは愉快な心持がしました。場合が場合なのと、久しぶりに聞いたせいでしょう。

三十二

「それのみならず私はお嬢さんわたくしの態度の少し前と変っているのに気が付きました。久しぶりで旅から帰った私たちが平生へいぜいの通り落ち付くまでには、万事について女の手が必要だったのですが、その世話をしてくれる奥さんはとにかく、お嬢さんがすべて私の方を先にして、Kを後廻しあとまわにするように見えたのです。それを

露骨にやられては、私も迷惑したかもしれません。場合によつてはかえつて不快の念さえ起しかねなかつたろうと思うのですが、お嬢さんの所作はその点で甚だ要領を得ていたから、私は嬉しかつたのです。つまりお嬢さんは私だけに解るように、持前の親切を余分に私の方へ割り宛ててくれたのです。だからKは別に厭な顔もせず、平気でいました。私は心の中でひそかに彼に対する愷歌を奏しました。

やがて夏も過ぎて九月の中頃から我々はまた学校の課業に出席しなければならぬ事になりました。Kと私とは各自の時間の都合で出入りの刻限にまた遅速ができてきました。私がKより後れて帰る時は一週に三度ほどありましたが、いつ帰つてもお嬢さ

んの影をKの室^{へや}に認める事はないようになりました。Kは例の眼を私の方に向けて、「今帰ったのか」を規則のごとく繰り返しました。私の会釈もほとんど器械のごとく簡単でかつ無意味でした。たしか十月の中頃と思います。私は寢坊^{ねぼう}をした結果、日本服のまま急いで学校へ出た事があります。穿^{はきもの}物も編^{あみ}上^{あげ}などを結んでゐる時間が惜しいので、草履^{ぞうり}を突っかけたなり飛び出したのです。その日は時間割からいうと、Kよりも私の方が先へ帰るはずになっていました。私は戻つて来ると、そのつもりで玄関の格子^こ子をがらりと開けたのです。するといないと思つていたKの声がひよいと聞こえました。同時にお嬢さんの笑い声が私の耳に響きました。私はいつものように手数^{てかず}のかかる靴を穿^はいていないから、

すぐ玄関に上がって仕切の襖しきりふすまを開けました。私は例の通り机の前に坐すわっているKを見ました。しかしお嬢さんはもうそこにはいなかったのです。私はあたかもKの室へやから逃のがれ出るように去るそのうしろすがた後姿をちらりと認めただけでした。私はKにどうして早く帰ったのかと問いました。Kは心持が悪いから休んだのだと答えました。私が自分の室にはいつてそのまま坐っていると、間もなくお嬢さんが茶を持って来てくれました。その時お嬢さんは始めてお帰りといって私に挨拶あいさつをしました。私は笑いながらさつきはなぜ逃げたんですと聞けるような捌さばけた男ではありません。それでいて腹の中では何だかその事が気にかかるような人間だったのです。お嬢さんはすぐ座を立てて縁側えんがわづた伝いに向うへ行ってしまう

いました。しかしKの室の前に立ち留まって、ふたことみこと一言三言内と外とで話をしていました。それは先刻さつきの続きらしかったのですが、前を聞かない私にはまるで解りませんでした。

そのうちお嬢さんの態度がだんだん平気になって来ました。Kと私がいっしょに宅うちにいる時でも、よくKの室へやの縁側へ来て彼の名を呼びました。そうしてそこへ入って、ゆつくりしていました。無論郵便を持って来る事もあるし、洗濯物を置いてゆく事もあるのですから、そのくらいの交通は同じ宅にいる二人の関係上、当然と見なければならぬのでしようが、ぜひお嬢さんを専有したという強烈な一念に動かされている私には、どうしてもそれが当然以上に見えたのです。ある時はお嬢さんがわざわざ私の室へ

来るのを回避して、Kの方ばかりへ行くように思われる事さえあったくらいです。それならなぜKに宅を出てもらわないのかとあなたは聞くでしょう。しかしそうすれば私がKを無理に引張^{ひっぱ}つて来た主意が立たなくなるだけです。私にはそれができないのです。

三十三

「十一月の寒い雨の降る日の事でした。私は^{わたくし}外套^{がいとう}を濡^ぬらして例の通り^{こん}蒟^{やく}蒟^{えん}魔^まを抜けて細い坂路^{さかみち}を上^{あが}つて宅^{うち}へ帰りました。Kの室は^{がらんど}空^{くう}虚^{きょ}でしたけれども、火鉢には継ぎたての火が暖かそうに燃えていました。私も冷たい手を早く赤い炭の上に翳^{かざ}そう

と思つて、急いで自分の室の仕切りしきを開けました。すると私の火鉢には冷たい灰が白く残っているだけで、火種ひだねさえ尽きているのです。私は急に不愉快になりました。

その時私の足音を聞いて出て来たのは、奥さんでした。奥さんは黙つて室の真中に立っている私を見て、気の毒そうに外套を脱がせてくれたり、日本服を着せてくれたりしました。それから私が寒いというのを聞いて、すぐ次の間まからKの火鉢を持って来てくれました。私がKはもう帰つたのかと聞きましたら、奥さんは帰つてまた出たと答えました。その日もKは私より後おくれて帰る時間割だったのですから、私はどうした訳かと思いました。奥さんは大おお方用事おかたでもできたのだらうといつていました。

私はしばらくそこに坐^{すわ}ったまま書^{しよ}見^{けん}をしました。宅の中がし
んと静^{だれ}まって、誰^{だれ}の話^{はなし}し声^{こゑ}も聞^{きこ}えないうちに、初^{はつ}冬^{ふゆ}の寒^ふさと
佗^わびしさが、私の身体^{からだ}に食^くい込^こむような感^{かん}じがしました。私は
すぐ書物を伏^ふせて立ち上^ありました。私はふと賑^{にぎ}やかな所^{ところ}へ行^いきた
くなつたのです。雨はやつと歇^{あが}つたようですが、空はまだ冷^{ひや}たい
鉛^{えん}のように重^{おも}く見^みえたので、私は用^{よう}心^{しん}のため、蛇^{じゃ}の目^めを肩^{かた}に担^かい
で、砲^{ほう}兵^{へい}工^{こう}廠^{しょう}の裏^{うら}手^ての土^ど堀^{ぼり}につい^て東^{ひがし}へ坂^{さか}を下^{くだ}りました。
その時分はまだ道路の改^{かい}正^{せい}がで^きない頃^{ころ}なので、坂^{さか}の勾^{こう}配^{ぱい}が今
よりもずつと急^{いそ}でした。道幅も狭^{せま}くて、あ^まま真^ま直^{ちき}ではなかつた
のです。その上あ^{みづ}の谷^{はき}へ下^{くだ}りると、南^{みなみ}が高^{たか}い建^{たて}物^{ぶつ}で塞^{ふさ}が^さつてい
るの、放^{みづ}水^{はき}がよ^よくないの^{こと}で、往^い来^{らい}はど^どろど^どろでした。ことに

細い石橋を渡つて柳町やなぎちようの通りへ出る間が非道ひどかつたのです。足駄あしだでも長靴でもむやみに歩く訳にはゆきません。誰でも路みちの真中に自然と細長く泥が掻かき分けられた所を、後生ごしょうだいじ大事に辿たどつて行かなければならないのです。その幅は僅わずか一、二尺しゃくしかないのですから、手もなく往来に敷いてある帯の上を踏んで向うへ越すのと同じ事です。行く人はみんな一列になつてそろそろ通り抜けます。私はこの細帯の上で、はたりとKに出合いました。足の方にばかり気を取られていた私は、彼と向き合うまで、彼の存在にまるで気が付かず^{ふさ}にいたのです。私は不意に自分の前が塞ふさがったので偶然眼を上げた時、始めてそこに立っているKを認めたのです。私はKにどこへ行つたのかと聞きました。Kはちよつとそこ

までといったぎりでした。彼の答えはいつもの通りふんという調
 子でした。Kと私は細い帯の上で身体を替かわせました。するとKの
 すぐ後ろに一人の若い女が立っているのが見えました。近眼の私
 には、今までそれがよく分らなかつたのですが、Kをやり越した
 後あとで、その女の顔を見ると、それが宅うちのお嬢さんだったので、私
 は少なからず驚きました。お嬢さんは心持薄赤い顔をして、私に
 挨拶あいさつをしました。その時分の束そくはつ髪は今と違って廂ひさしが出ていな
 いのです、そうして頭の真ま中んなかに蛇へびのようにぐるぐる巻きつけて
 あつたものです。私はぼんやりお嬢さんの頭を見ていましたが、
 次の瞬間に、どっちか路みちを譲らなければならぬのだという事に
 気が付きました。私は思い切ってどろどろの中へ片足踏ふん込こみま

した。そうして比較的通りやすい所を空^あけて、お嬢さんを渡してやりました。

それから柳町の通りへ出た私はどこへ行つて好いか自分にも分らなくなりました。どこへ行つても面白くないような心持がするのです。私は飛^は泥^ねの上がるのも構^かわずに、糠^{ぬか}る海^みの中を自暴^{やけ}にどしどし歩きました。それから直^すぐ宅へ歸つて来ました。

三十四

「私はKに向つてお嬢さんといつしよに出たのかと聞きました。

Kはそうではないと答えました。真砂^{まさがちよう}町で偶然出会ったから連

れ立って帰って来たのだと説明しました。私はそれ以上に立ち入った質問を控えなければなりませんでした。しかし食事の時、またお嬢さんに向って、同じ問いを掛けたくまりました。するとお嬢さんは私の嫌いな例の笑い方をするのです。そうしてどこへ行ったか中あててみるとしまいにいうのです。その頃の私はまだ癩かんし癩やくも持ちでしたから、そう不真面目ふまじめに若い女から取り扱われると腹が立ちました。ところがそこに気の付くのは、同じ食卓に着いているもののうちで奥さん一人だったのです。Kはむしろ平気でした。お嬢さんの態度になると、知ってわざとやるのか、知らないで無邪気むじやきにやるのか、その区別がちよつと判然はんぜんしない点がありました。若い女としてお嬢さんは思慮に富んだ方ほうでしたけれど

も、その若い女に共通な私の嫌いなところも、あると思えば思えなくもなかったのです。そうしてその嫌いなところは、Kが宅へ来てから、始めて私の眼に着き出したのです。私はそれをKに対する私の嫉妬しつとに帰きしていいものか、または私に対するお嬢さんの技巧と見倣みなしてしかるべきものか、ちよつと分別に迷いました。

私は今でも決してその時の私の嫉妬心を打ち消す気はありません。私はたびたび繰り返した通り、愛の裏面りめんにこの感情の働きを明らかに意識していたのですから。しかも傍はたのものから見ると、ほとんど取るに足りない瑣事さじに、この感情がきつと首を持ち上げたがるのでしたから。これは余事よじですが、こういう嫉妬しつとは愛の半面じやないでしょうか。私は結婚してから、この感情がだんだん薄ら

いで行くのを自覚しました。その代り愛情の方も決して元のように猛烈ではないのです。

私はそれまで躊躇ちゆうちゆうして自分の心を、一思ひとおもいに相手の

胸へ擲たき付けようかと考え出しました。私の相手というのはお嬢

さんではありません、奥さんの事です。奥さんにお嬢くさんを呉

ろと明白な談判を開こうかと考えたのです。しかしそう決心しな

がら、一日一日と私は断行の日を延ばして行つたのです。そうい

うと私はいかにも優ゆうじゆう柔な男のように見えます、また見えても

構いませんが、實際私の進みかねたのは、意志の力に不足があつ

たためではありません。Kの来ないうちは、他ひとの手に乗るのが厭いや

だという我慢が私を抑おさえ付けて、一步も動けないようにしていま

した。Kの来た後^{のち}は、もしかするとお嬢さんがKの方に意があるのではなからうかという疑念が絶えず私を制するようになったのです。はたしてお嬢さんが私よりもKに心を傾けているならば、この恋は口へいい出す価値のないものと私は決心していたのです。恥を搔^かかせられるのが辛い^{つら}などというのとは少し訳が違います。こつちでいくら思つても、向うが内心^{ほか}他の人に愛の眼^{まなこ}を注いでいるならば、私はそんな女といつしよになるのは厭なのです。世の中では否^{いや}応^{おう}なしに自分の好いた女を嫁に貰^{もら}つて嬉^{うれ}しがっている人もありますが、それは私たちよりよっぽど世間ずれのした男か、さもなければ愛の心理がよく呑^のみ込めない鈍^{どん}物^{ぶつ}のする事と、当時の私は考えていたのです。一度貰つてしまえばどうかこうか落

ち付くものだらゐの哲理では、承知する事ができないくらい私は熱していました。つまり私は極めて高尚な愛の理論家だったのです。同時にうえんもつとも迂遠な愛の実際家だったのです。

かんじん 肝心のお嬢さんに、直接この私というものを打ち明ける機会も、長くいつしよにいるうちには時々出て来たのですが、私はわざとそれを避けました。日本の習慣として、そういう事は許されていないのだという自覚が、その頃の私には強くありました。しかし決してそればかりが私を束縛したとはいえません。日本人、ことに日本の若い女は、そんな場合に、相手にきがねに氣兼ねなく自分の思つた通りを遠慮せずに口にするだけの勇氣に乏しいものと私は見込んでいたのです。

三十五

「こんな訳で私はどちらの方面へ向つても進む事ができずに立ち
竦すくんでいました。身体からだの悪い時に午睡ひるねなどをすると、眼だけ覚さめ
て周囲のものが判然はつきり見えるのに、どうしても手足の動かせない
場合がありました。私は時としてああいう苦しみを人知れず感
じたのです。

その内年うちが暮れて春になりました。ある日奥さんがKに歌留多かるた
をやるから誰だれか友達を連れて来ないかといった事があります。す
るとKはすぐ友達なぞは一人もないと答えたので、奥さんは驚い

てしまいました。なるほどKに友達というほどの友達是一人もな
 かったのです。往来で会った時^{あいさつ}挨拶をするくらいのもものは多少
 ありましたが、それらだつて決して歌留多^{かるた}などを取る柄^{がら}ではな
 ったのです。奥さんはそれじゃ私の知つたものでも呼んで来たら
 どうかといひ直しましたが、私も生憎^{あいにく}そんな陽気な遊びをする
 心持になれないので、好^いい加減な生返事^{なまへんじ}をしたなり、打ちやつ
 ておきました。ところが晩になつてKと私はとうとうお嬢さんに
 引つ張り出されてしまいました。客も誰も来ないので、内々^{うちうち}の
 小人数^{こにんず}だけで取ろうという歌留多ですからすこぶる静かなもので
 した。その上こういう遊技をやり付けないKは、まるで懐^{ふところ}手
 をしている人と同様でした。私はKに一体百人一首^{ひやくにんいっしゅ}の歌を知

っているのかと尋ねました。Kはよく知らないと答えました。私の言葉を聞いたお嬢さんは、おおかた大方Kをけいべつ軽蔑するとでも取ったのでしよう。それから眼に立つようにKの加勢をし出しました。しまいには二人がほとんど組になって私に当たるといふ有様になって来ました。私は相手次第では喧嘩けんかを始めたかも知れなかったのです。幸いにKの態度は少しも最初と変わりませんでした。彼のどこにも得意らしい様子を認めなかった私は、無事にその場を切り上げる事ができました。

それから二、三日経たつた後の事でしたらう、奥さんとお嬢さんは朝から市ヶ谷にいる親類の所へ行くといつて宅うちを出しました。Kも私もまだ学校の始まらない頃ころでしたから、留守居同様あとに残

っていました。私は書物を読むのも散歩に出るのも厭いやだったので、ただ漠然と火鉢の縁ふちに肱ひじを載せて凝じつと願あじを支えたなり考えていました。となりへや隣の室むろにいるKも一いつこう向音を立てませんでした。双方ともいるのだかいけないのだか分らないくらい静かでした。もつともこういう事は、二人の間柄として別に珍しくも何ともなかったのですから、私は別段それを気にも留めませんでした。

十時頃になって、Kは不意に仕切りの襖ふすまを開けて私と顔を見合みあせました。彼は敷居の上に立ったまま、私に何を考えていると聞きました。私はもとより何も考えていなかったのです。もし考えていたとすれば、いつもの通りお嬢さんが問題だったかも知れませんが、そのお嬢さんには無論奥さんも食つ付いていますが、近頃

ではK自身が切り離すべからざる人のように、私の頭の中をぐるぐる回^{めぐ}つて、この問題を複雑にしているのです。Kと顔を見合せた私は、今まで臃^{おぼろげ}気に彼を一種の邪魔ものの如く意識していながら、明らかにそうと答える訳にかなかったのです。私は依然として彼の顔を見て黙っていました。するとKの方からつかつかと私の座敷へ入って来て、私のあたっている火鉢の前に坐^{すわ}りました。私はすぐ両^{りょうひじ}肱を火鉢の縁から取り除^のけて、心持それをKの方へ押しやるようにしました。

Kはいつもに似合わない話を始めました。奥さんとお嬢^{お嬢}さんは市ヶ谷のどこへ行つたのだろ^うというのです。私は大方叔母^{おば}さんの所だろ^うと答えました。Kはその叔母さんは何だとまた聞きま

す。私はやはり軍人の細君^{さいくん}だと教えてやりました。すると女の年始は大抵十五日過^{すぎ}だのに、なぜそんなに早く出掛けたのだろうと質問するのです。私はなぜだか知らないと挨拶するより外^{ほか}に仕方がありませんでした。

三十六

「Kはなかなか奥さんとお嬢さんの話を已^やめませんでした。しまいに^{わたくし}は私も答えられないような立ち入った事まで聞くのです。私は面倒よりも不思議の感に打たれました。以前私の方から二人を問題にして話しかけた時の彼を思い出すと、私はどうしても彼の

調子の変つているところに気が付かずにはいられないのです。私はとうとうなぜ今日に限つてそんな事ばかりいうのかと彼に尋ねました。その時彼は突然黙りました。しかし私は彼の結んだ口元の肉が顫ふるえるように動いているのを注視しました。彼は元来無口な男でした。平生へいぜいから何かいおうとすると、いう前によく口のあたりをもぐもぐさせる癖くせがありました。彼の唇がわざと彼の意志に反抗するように容易たやすく開あかないところに、彼の言葉の重みも籠こもつていたのでしよう。一旦いったん声が口を破つて出るとなると、その声には普通の人よりも倍の強い力がありました。

彼の口元をちよつと眺ながめた時、私はまた何か出て来るなとすぐ瘖かんづ付いたのですが、それがはたして何の準備なのか、私の予覚は

まるでなかったのです。だから驚いたのです。彼の重々しい口から、彼のお嬢さんに対する切ない恋を打ち明けられた時の私を想像してみてください。私は彼の魔法棒のために一度に化石されたようなものです。口をもぐもぐさせる働きさえ、私にはなくなってしまったのです。

その時の私は恐ろしさの塊かたまりりといいました。または苦しきの塊りといいました。何しろ一つの塊りでした。石か鉄のように頭から足の先までが急に固くなったのです。呼吸をする弾力性さえ失われたくらいに堅くなったのです。幸いな事にその状態は長く続きませんでした。私は一瞬間ののち後に、また人間らしい気分を取り戻しました。そうして、すぐ失策しまったと思いました。先せん

を越されたなと思いました。

しかしその先を^{さき}をどうしようという分別はまるで起りません。恐らく起るだけの余裕がなかったのでしょう。私は腋^{わき}の下から出る気味のわるい汗が襯衣に滲^しみ透^{とお}るのを凝^{じっ}と我慢して動かずにいました。Kはその間^{あいだ}いつもの通り重い口を切つては、ぽつりぽつりと自分の心を打ち明けてゆきます。私は苦しくつて堪^{たま}りませんでした。おそらくその苦しさは、大きな広告のように、私の顔の上に判然^{はつき}とした字で貼^はり付けられてあつたろうと私は思うのです。いくらKでもそこに気の付かないはずはないのですが、彼はまた彼で、自分の事に一切^{いっさい}を集中しているから、私の表情などに注意する暇がなかったのでしょう。彼の自白は最初から最後まで同

じ調子で貫いていました。重くて鈍^{のろ}い代りに、とても容易な事では動かせないという感じを私に与えたのです。私の心は半分その自白を聞いていながら、半分どうしようどうしようという念に絶えず搔^かき乱されていましたから、細^{こま}かい点になるとほとんど耳へ入らないと同様でしたが、それでも彼の口に出す言葉の調子だけは強く胸に響きました。そのために私は前いった苦痛ばかりでなく、ときには一種の恐ろしさを感じるようになつたのです。つまり相手は自分より強いのだという恐怖の念が萌^{きざ}し始めたのです。

Kの話が一通り済んだ時、私は何ともいう事ができませんでした。こつちも彼の前に同じ意味の自白をしたものだろうか、それとも打ち明けずにいる方が得策だろうか、私はそんな利害を考え

て黙っていたのではありません。ただ何事もいえなかったのです。またいう気にもならなかったのです。

ひるめし
午食の時、Kと私は向い合せに席を占めました。下女に給仕をしてもらって、私はいつにない不味い飯を済ませました。二人は食事中もほとんど口を利きませんでした。奥さんとお嬢さんはいつ帰るのだから分りませんでした。

三十七

「二人は各自の室に引き取ったぎり顔を合わせませんでした。Kの静かな事は朝と同じでした。私も凝と考え込んでいました。」

私は当然自分の心をKに打ち明けるべきはずだと思いました。

しかしそれにはもう時機おくが後れてしまったという気も起りました。

なぜ先刻さつきKの言葉さえぎを遮さへぎって、こっちから逆襲しなかったのか、そ

こが非常な手落てぬかりのように見えて来ました。せめてKの後あとに続い

て、自分は自分の思う通りをその場で話してしまつたら、まだ好

かつたろうにとともに考えました。Kの自白に一段落が付いた今とな

つて、こっちからまた同じ事を切り出すのは、どう思案しても変

でした。私はこの不自然に打ち勝つ方法を知らなかったのです。

私の頭は悔恨に揺ゆられてぐらぐらしました。

私はKが再び仕切しきりの襖ふすまを開あけて向うから突進ふいうちしてきてくれ

ば好いいと思いました。私にいわせれば、先刻はまるで不意撃ふいうちに会

ったも同じでした。私にはKに応ずる準備も何もなかったのです。私は午前に失ったものを、今度は取り戻そうという下^{したところ}心を持つていました。それで時々眼を上げて、襖を眺^{なが}めました。しかしその襖はいつまで経^たつても開きません。そうしてKは永久に静かなのです。

その内^{うち}私の頭は段々この静かさに掻^かき乱されるようになって来ました。Kは今襖の向うで何を考えているだろうと思うと、それが気になって堪^{たま}らないのです。不断もこんな風^{ふう}にお互いが仕切一枚を間に置いて黙り合っている場合は始終あつたのですが、私はKが静かであればあるほど、彼の存在を忘れるのが普通の状態だったのですから、その時の私はよほど調子が狂っていたものと見

なければなりません。それでいて私はこっちから進んで襖を開ける事ができなかつたのです。一旦^{いったん}いいそびれた私は、また向うから働き掛けられる時機を待つより外^{ほか}に仕方がなかつたのです。

しまいに私は凝^{じつ}としておられなくなりました。無理に凝としていれば、Kの部屋へ飛び込みたくなるのです。私は仕方なしに立つて縁側へ出ました。そこから茶の間へ来て、何という目的もなく、鉄瓶^{てつびん}の湯を湯呑^{ゆのみ}に注^つで一杯呑みました。それから玄関へ出ました。私はわざとKの室を回避するようにして、こんな風に自分を往来の真中に見出^{みいだ}したのです。私には無論どこへ行くという的^{あて}ありません。ただ凝^{じつ}としていられないだけでした。それで方角も何も構わずに、正月の町を、むやみに歩き廻^{まわ}つたのです。私

の頭はいくら歩いてもKの事でいっぱいになっていました。私もKを振り落す^{ふる}気で歩き廻る訳ではなかったのです。むしろ自分から進んで彼の姿を咀^そ嚼^{しゃく}しながらうついていたのです。

私には第一に彼が解^{かい}しがたい男のように見えました。どうしてあんな事を突然私に打ち明けたのか、またどうして打ち明けない^なければいけないほどに、彼の恋が募^つつて来たのか、そうして平生の彼はどこに吹き飛ばされてしまったのか、すべて私には解^{かい}しにくい問題でした。私は彼の強い事を知っていました。また彼の真^ま面目^{じめ}な事を知っていました。私はこれから私の取るべき態度を決する前に、彼について聞かなければならない多くをもっていると信じました。同時にこれからさき彼を相手にするのが変に気味が

悪かったのです。私は夢中に町の中を歩きながら、自分の室に凝^{じつ}と坐^{すわ}っている彼の容^{よう}貌^{ぼう}を始終眼の前に描^{えが}き出しました。しかもいくら私が歩いていても彼を動かす事は到底できないのだという声^{こゑ}がどこかで聞こえるのです。つまり私には彼が一種の魔物^{まぶつ}のように思えたからでしょう。私は永久彼に崇^たられたのではなからうかという気さえしました。

私が疲れて宅^{うち}へ帰った時、彼の室は依然として人^{ひと}気^けのないように静かでした。

三十八

「私が家へはいると間もなく俵くるまの音が聞こえました。今のように
護謨輪ゴムわのない時分でしたから、がらがらいう厭いやな響ひびきかなりの
距離でも耳に立つのです。車はやがて門前で留まりました。

私が夕飯ゆうめしに呼び出されたのは、それから三十分ばかり経たつた
後の事あとでしたが、まだ奥さんとお嬢さんの晴着はれぎが脱すぎ棄すてられた
まま、次の室を乱雑いろうどに彩いろどっていました。二人は遅くなると私たち
に済まないというので、飯の支度に間に合うように、急いで帰つ
て来たのだそうです。しかし奥さんの親切はKと私とに取つてほ
んど無効も同じ事でした。私は食卓に坐りながら、言葉を惜し
がる人のように、素気そっけない挨拶あいさつばかりしていました。Kは私よ
りもなお寡言かげんでした。たまに親子連おやこづれで外出した女二人の気分が、

また平生^{へいぜい}よりは勝^{すぐ}れて晴れやかだったので、我々の態度はなおの事眼に付きます。奥さんは私にどうかしたのかと聞きました。私は少し心持が悪いと答えました。実際私は心持が悪かったので。すると今度はお嬢さんがKに同じ問いを掛けました。Kは私のように心持が悪いとは答えません。ただ口が利^ききたくないからだといいました。お嬢さんはなぜ口が利^ききたくないのかと追^{ついき}窮^うしました。私はその時ふと重^{まづ}たい瞼^{まぶた}を上げてKの顔を見ました。私にはKが何と答えるだろうかという好奇心があつたのです。Kの唇は例のように少し顫^{ふる}えていました。それが知らない人から見ると、まるで返事に迷っているとしか思われないのです。お嬢さんは笑いながらまた何かむずかしい事を考えているのだろうと

いいました。Kの顔は心持薄赤くなりました。

その晩私はいつもより早く床へ入りました。^{とこ}私が食事の時気分が悪いといったのを気にして、奥さんは十時頃蕎麦湯^{そばゆ}を持って来てくれました。しかし私の室^{へや}はもう真暗^{まっくら}でした。奥さんはおやおやといつて、仕切りの襖^{ふすま}を細目に開けました。洋燈^{ランプ}の光がKの机から斜^{なな}めにぼんやりと私の室に差し込みました。Kはまだ起きていたものとみえます。奥さんは枕^{まくらもと}元に坐つて、大^{おお}方^{かた}風邪^{かぜ}を引いたのだろうから身体^{からだ}を暖^{あつ}ためるがいいといつて、湯^{ゆのみ}呑^のを顔^{かほ}の傍^{そば}へ突き付けるのです。私はやむをえず、どろどろした蕎麦湯を奥さんの見ている前で飲みました。

私は遅くなるまで暗いなかで考えていました。無論一つ問題を

ぐるぐる廻かいてん転させるだけで、外ほかに何の効力もなかったのです。

私は突然 K が今隣りの室で何をしているだろうと思い出しました。私は半ば無意識においと声を掛けました。すると向うでもおいと返事をしました。K もまだ起きていたのです。私はまだ寝ないのかと襖ふすまごしに聞きました。もう寝るといふ簡単な挨拶あいさつがありました。した。何をしているのだと私は重ねて問いました。今度は K の答えがありません。その代り五、六分経ったと思う頃に、押入おしいれをがらりと開けて、床とこを延べる音が手に取るように聞こえました。私はもう何時なんじかとまた尋ねました。K は一時二十分だと答えました。やがて洋燈ランブをふつと吹き消す音がして、家うち中が真暗なうちに、しんと静まりました。

しかし私の眼はその暗いなかでいよいよ冴^さえて来るばかりです。私はまた半ば無意識な状態で、おいとKに声を掛けました。Kも以前と同じような調子で、おいと答えました。私は今朝^{けさ}彼から聞いた事について、もっと詳しい話をしたいが、彼の都合はどうだと、とうとうこつちから切り出しました。私は無論^{ふすまごし}越にそんな談話を交換する気はなかったのですが、Kの返答だけは即座に得られる事と考えたのです。ところがKは先刻^{さつぎ}から二度おいと呼ばれて、二度おいと答えたような素直^{すなお}な調子で、今度は応じません。そうだなあと低い声で洩^もっています。私はまたはつと思わせられました。

三十九

「Kの生返事なまへんじは翌日よくじつになつても、その翌日になつても、彼の態度によく現あらわれていました。彼は自分から進んで例の問題に触れようとする気色けしきを決して見せませんでした。もつとも機会もなかつたのです。奥さんとお嬢さんそうらが揃そろつて一日宅うちを空あけでもしなければ、二人はゆつくり落ち付いて、そういう事を話し合う訳にも行かないのですから。わたくし私はそれをよく心得ていました。心得ていながら、変にいらいらし出すのです。その結果始めは向うから来るのを待つつもりで、暗あんに用意をしていた私が、折があつたらこつちで口を切ろうと決心するようになったのです。

同時に私は黙って家のもの^{うち}の様子を観察して見ました。しかし奥さんの態度にもお嬢さんの素振^{そぶり}にも、別に平生^{へいぜい}と変った点はありませんでした。Kの自白以前と自白以後とで、彼らの挙動にこれという差違が生じないならば、彼の自白は単に私だけに限られた自白で、肝^{かん}心^{しん}の本人にも、またその監督者たる奥さんにも、まだ通じていないのは慥^{たし}かでした。そう考えた時私は少し安心しました。それで無理に機会^{こしち}を拵えて、わざとらしく話を持ち出すよりは、自然の与えてくれるものを取り逃さないようにする方が好かろうと思つて、例の問題にはしばらく手を着けずにそつとしておく事にしました。

こういつてしまえば大変簡単に聞こえますが、そうした心の経

過には、潮しほの満干みちひと同じように、色々の高低たかびくがあつたのです。

私はKの動かない様子を見て、それにさまざまの意味を付け加えました。奥さんとお嬢さんの言語動作を観察して、二人の心がはたしてそこに現われている通りなのだろうかと疑うたがつてもみました。そうして人間の胸の中に装置された複雑な器械が、時計の針のよ
うに、明めい瞭りょうに偽いつわりなく、盤ばん上じょうの数字を指し得うるものだらうかと考えました。要するに私は同じ事をこうも取り、ああも取りした揚句あげく、漸ようやくここに落ち付いたものと思つて下さい。更にむずかしくいえば、落ち付くなどという言葉は、この際決して使われた義理でなかつたのかも知れません。

その内学校うちがまた始まりました。私たちは時間の同じ日には連

れ立って宅うちを出ます。都合がよければ帰る時にもやはりいつしよに帰りました。外部から見たKと私は、何にも前と違ったところがないように親しくなつたのです。けれども腹の中では、各自てんでんに各自てんでんの事を勝手に考えていたに違いありません。ある日私は突然往来でKに肉薄しました。私が第一に聞いたのは、この間の自白が私だけに限られているか、または奥さんやお嬢さんにも通じているかの点にあつたのです。私のこれから取るべき態度は、この問いに対する彼の答え次第で極きめなければならないと、私は思つたのです。すると彼は外ほかの人にはまだ誰だれにも打ち明けていないと明言しました。私は事情が自分の推察通りだつたので、内心うれ嬉れしがりました。私はKの私より横着なのをよく知っていました。

彼の度胸にも敵かなわないという自覚があつたのです。けれども一方ではまた妙に彼を信じていました。学資の事で養家ようかを三年も欺あざむいていた彼ですけれども、彼の信用は私に対して少しも損われていなかったのです。私はそれがためにかえつて彼を信じ出したくらいです。だからいくら疑い深い私でも、明白な彼の答えを腹の中で否定する気は起りようがなかったのです。

私はまた彼に向つて、彼の恋をどう取り扱うつもりかと尋ねました。それが単なる自白に過ぎないのか、またはその自白について、實際的效果をも収める気なのかと問うたのです。しかるに彼はそこになると、何にも答えません。黙つて下を向いて歩き出します。私は彼に隠かくし立てをしてくれるな、すべて思った通りを

話してくれと頼みました。彼は何も私に隠す必要はないと判然^{はつきり}断言しました。しかし私の知ろうとする点には、一言の返事も与えないのです。私も往来だからわざわざ立ち留^{いちごん}まつて底^{そこ}まで突き留める訳にいきません。ついそれなりにしてしまいました。

四十

「ある日私は久しぶりに学校の図書館に入りました。私は広い机の片隅で窓から射す光線を半身に受けながら、新着の外国雑誌を、あちらこちらと引^ひつ繰^くり返して見ていました。私は担任教師から専攻の学科に関して、次の週までにある事項を調べて来いと命ぜ

られたのです。しかし私に必要な事柄がなかなか見付からないので、私は二度も三度も雑誌を借り替えなければなりません。最後に私はやっと自分に必要な論文を探し出して、一心にそれを読み出しました。すると突然幅の広い机の向う側から小さな声で私の名を呼ぶものがあります。私はふと眼を上げてそこに立っているKを見ました。Kはその上半身を机の上に折り曲げるようにして、彼の顔を私に近付けました。ご承知の通り図書館では他の人の邪魔になるような大きな声で話をする訳にゆかないのですから、Kのこの所作は誰でもやる普通の事なのですが、私はその時に限って、一種変な心持がしました。

Kは低い声で勉強かと聞きました。私はちよつと調べものがあ

るのだと答えました。それでもKはまだその顔を私から放しませ
ん。同じ低い調子でいっしょに散歩をしないかというのです。私
は少し待っていればしてもいいと答えました。彼は待っていると
いったまま、すぐ私の前の空席に腰をおろしました。すると私は
気が散って急に雑誌が読めなくなりました。何だかKの胸に一
物があつて、談判でもしに來られたように思われて仕方がない
のです。私はやむをえず読みかけた雑誌を伏せて、立ち上がろう
としました。Kは落ち付き払つてもう済んだのかと聞きます。私
はどうでもいいのだと答えて、雑誌を返すと共に、Kと図書館を
出ました。

二人は別に行く所もなかったので、
竜岡町から池の端へ出

たつおかちよう
いけはた

て、上野うえのの公園の中へ入りました。その時彼は例の事件について、突然向うから口を切りました。前後の様子を綜合そうごうして考えると、Kはそのために私をわざわざ散歩に引ひつ張り出だしたらしいのです。けれども彼の態度はまだ實際的の方面へ向つてちつとも進んでいませんでした。彼は私に向つて、ただ漠然と、どう思うというのです。どう思うというのは、そうした恋愛の淵ふちに陥おちいつた彼を、どんな眼で私が眺ながめるかという質問なのです。一言いちごんでいうと、彼は現在の自分について、私の批判を求めたいようなのです。そこに私は彼の平生へいぜいと異なる点を確かに認める事ができたと思ひました。たびたび繰り返すようですが、彼の天性は他の思ひわくを憚はばかるほど弱くでき上つてはいなかったのです。こうと信じたら一人

でどんどん進んで行くだけの度胸もあり勇氣もある男なのです。
養家事件ようかでその特色を強く胸の裏うちに彫り付けられた私が、これは
様子が違うと明らかに意識したのは当然の結果なのです。

私がKに向つて、この際何なんで私の批評が必要なのかと尋ねた
時、彼はいつもにも似ない悄しょうぜん然とした口調で、自分の弱い人
間であるのが實際耻はずかしいといいました。そうして迷っている
から自分で自分が分らなくなつてしまつたので、私に公平な批評
を求めるより外ほかに仕方がないといいました。私は隙すかさず迷うと
いう意味を聞き糺ただしました。彼は進んでいいか退しりぞいていいか、そ
れに迷うのだと説明しました。私はすぐ一步先へ出ました。そう
して退こうと思えば退けるのかと彼に聞きました。すると彼の言

葉がそこで不意に行き詰りました。彼はただ苦しいといっただけでした。実際彼の表情には苦しそうなところがありありと見えていました。もし相手がお嬢さんでなかったならば、私はどんなに彼に都合のいい返事を、その渴き切った顔の上に慈雨の如く注いでやったか分かりません。私はそのくらい美しい同情をもつて生れて来た人間と自分ながら信じています。しかしその時の私は違っていました。

四十一

「私はちように他流試合でもする人のようにKを注意して見てい

たのです。私は、私の眼、私の心、私の身体からだ、すべて私という名の付くものを五分ぶの隙間すきまもないように用意して、Kに向つたのです。罪のないKは穴だらけというよりむしろ明け放しと評するのが適當なくらいに無用心でした。私は彼自身の手から、彼の保管している要塞ようさいの地図を受け取つて、彼の眼の前でゆつくりそれを眺ながめる事ができたと同じでした。

Kが理想と現実の間に彷徨ほうこうしてふらふらしているのを発見した私は、ただ一打ひとつうちで彼を倒す事ができるだろうという点にばかり眼を着けました。そうしてすぐ彼の虚きよに付け込んだのです。私は彼に向つて急に厳肅な改まった態度を示し出しました。無論策略からですが、その態度に相應するくらいな緊張した気分もあつ

たのですから、自分に滑稽こっけいだの羞恥しゅうちだのを感じる余裕はあり
 ませんでした。私はまず「精神的に向上心のないものは馬鹿ばかだ」
 といい放ちました。これは二人で房州ぼうしゅうを旅行している際、K
 が私に向って使った言葉です。私は彼の使った通りを、彼と同じ
 ような口調で、再び彼に投げ返したのです。しかし決して復讐ふくしゅう
 ではありません。私は復讐ふくしゅう以上に残酷な意味をもっていたと
 いう事を自白します。私はその一言いちごんでKの前に横たわる恋の行手ゆくて
 を塞ふさごうとしたのです。

Kは真宗寺しんしゅうでらに生れた男でした。しかし彼の傾向は中学時代
 から決して生家の宗旨しゅうしに近いものではなかったのです。教義上
 の区別をよく知らない私が、こんな事をいう資格に乏しいのは承

知していますが、私はただ男女なんによに關係した点についてののみ、そう認めていたのです。Kは昔から精進しょうじんという言葉が好きでした。私はその言葉の中に、禁欲きんよくという意味も籠こもっているのだらうと解釈していました。しかし後で實際を聞いて見ると、それよりもまだ嚴重な意味が含まれているので、私は驚きました。道のためにはすべてを犠牲にすべきものだというのが彼の第一信条なのですから、摂欲せつよくや禁欲きんよくは無論、たとい欲を離れた恋そのものでも道の妨害さまたげになるのです。Kが自活生活をしている時分に、私はよく彼から彼の主張を聞かされたのでした。その頃ころからお嬢さんを思っていた私は、勢いどうしても彼に反対しなければならなかったのです。私が反対すると、彼はいつでも氣の毒そうな顔

をしました。そこには同情よりも侮蔑ぶべつの方が余計に現われていました。

こういう過去を二人の間に通り抜けて来ているのですから、精神的に向上心のないものは馬鹿だという言葉は、Kに取って痛いに違ひなかつたのです。しかし前にもいった通り、私はこの一言で、彼が折角せっかく積み上げた過去を蹴散けちらしたつもりではありません。かえつてそれを今まで通り積み重ねて行かせようとしたのです。それが道に達しようが、天に届こうが、私は構いません。私はただKが急に生活の方向を転換して、私の利害と衝突するのを恐れたのです。要するに私の言葉は単なる利己心の発現でした。

「精神的に向上心のないものは、馬鹿だ」

私は二度同じ言葉を繰り返しました。そうして、その言葉がKの上にどう影響するかを見詰めていました。

「馬鹿だ」とやがてKが答えました。「僕は馬鹿だ」

Kはぴたりとそこへ立ち留^どまったまま動きません。彼は地面の上を見詰めています。私は思わずぎよつとしました。私にはKがその刹那^{せつな}に居直^{いな}り強盗のごとく感ぜられたのです。しかしそれにしては彼の声がいかにも力に乏しいという事に気が付きました。私は彼の眼遣^{めづか}いを参考にしたかったのですが、彼は最後まで私の顔を見ないのです。そうして、徐^{そろ}々とまた歩き出しました。

四十二

「私はKと並んで足を運ばせながら、彼の口を出る次の言葉を腹
 の中で暗に待ち受けました。^{あん}あるいは待ち伏せといった方がまだ
 適当かも知れません。その時の私はたといKを騙し^{だま}打ちにしても
 構わないくらいに思っていたのです。しかし私にも教育相当の良
 心がありますから、もし誰か私の傍へ来て、お前は卑怯^{そば}だと一^ひ
 言私語^{とことささや}いてくれるものがあつたなら、私はその瞬間に、はつと
 我に立ち帰ったかも知れません。もしKがその人であつたなら、
 私はおそらく彼の前に赤面したでしょう。ただKは私を窘める^{たしな}に
 は余りに正直でした。余りに単純でした。余りに人格が善良だつ
 たのです。目のくらんだ私は、そこに敬意を払う事を忘れて、か

えつてそこに付け込んだのです。そこを利用して彼を打ち倒そうとしたのです。

Kはしばらくして、私の名を呼んで私の方を見ました。今度は私の方で自然と足を留めました。するとKも留まりました。私はその時やつとKの眼を真向^{まむき}に見る事ができたのです。Kは私より背^{せい}の高い男でしたから、私は勢い彼の顔を見上げるようにしなければなりません。私はそうした態度で、狼^{おおかみ}のごとき心を罪のない羊に向けたのです。

「もうその話は止め^やよう」と彼がいいました。彼の眼にも彼の言葉にも変に悲痛なところがありました。私はちよつと挨拶^{あいさつ}ができなかったのです。するとKは、「止め^やてくれ」と今度は頼むよ

うにいい直しました。私はその時彼に向つて残酷な答を与えたのです。おおかみすき狼が隙を見て羊の咽喉のどぶえ笛へ食くい付くように。

「止やめてくれつて、僕がいい出した事じゃない、もともと君の方から持ち出した話じゃないか。しかし君が止めたければ、止めてもいいが、ただ口の先で止めたつて仕方があるまい。君の心でそれを止めるだけの覚悟がなければ。一体君は君の平生の主張をどうするつもりなのか」

私がこういつた時、背せいの高い彼は自然と私の前に萎縮いしゆくして小さくなるような感じがしました。彼はいつも話す通りすこぶ頗ごうる強

情うな男でしたけれども、一方ではまた人一倍の正直者でしたから、自分の矛盾などをひどく非難される場合には、決して平気で

いられない質たちだったのです。私は彼の様子を見てようやく安心しました。すると彼は卒然そつぜん「覚悟？」と聞きました。そうして私がまだ何とも答えない先に「覚悟、——覚悟ならない事もない」と付け加えました。彼の調子は独言ひとりごとのようでした。また夢の中の言葉のようでした。

二人はそれぎり話を切り上げて、小石川こいしかわの宿の方に足を向けました。割合に風のない暖かな日でしたけれども、何しろ冬の事です。ですから、公園のなかは淋さびしいものでした。ことに霜に打たれて蒼味あおみを失った杉の木立こたちの茶褐色ちやかっしよくが、薄黒い空の中に、梢こずえを並べて聳そびえているのを振り返って見た時は、寒さが背中へ嚙かじり付いたような心持がしました。我々は夕暮の本郷台ほんごうだいを急ぎ足でどし

どし通り抜けて、また向うの岡へ上るべく小石川の谷へ下りたのです。私はその頃ころになつて、ようやく外套がいとうの下に体たいの温あた味たかみを感じ出したぐらいです。

急いだためでもありませんが、我々は帰り路みちにはほとんど口を聞きませんでした。宅うちへ歸つて食卓に向つた時、奥さんはどうして遅くなつたのかと尋ねました。私はKに誘われて上野うえのへ行つたと答えました。奥さんはこの寒いのにといつて驚いた様子を見せました。お嬢さんは上野に何があつたのかと聞きたがります。私は何も無いが、ただ散歩したのだという返事だけしておきました。平生へいぜいから無口なKは、いつもよりなお黙もくっていました。奥さんが話しかけても、お嬢さんが笑つても、碌ろくな挨拶あいさつはしませ

んでした。それから飯を呑み込むように掻き込んで、私がまだ席を立たないうちに、自分の室へ引き取りました。

四十三

「その頃は覚醒とか新しい生活とかいう文字のまだない時分でした。しかしKが古い自分をさりと投げ出して、一意に新しい方角へ走り出さなかったのは、現代人の考えが彼に欠けていたからではないのです。彼には投げ出す事のできないほど尊い過去があつたからです。彼はそのために今日まで生きて来たといつてもいいくらいなのです。だからKが一直線に愛の目的物に向つて

猛進しないといって、決してその愛の生なまぬる温い事を証拠立てる訳にはゆきません。いくら熾烈しれつな感情が燃えていても、彼はむやみに動けないのです。前後を忘れるほどの衝動が起る機会を彼に与えない以上、Kはどうしてもちよつと踏み留とどまって自分の過去を振り返らなければならなかつたのです。そうすると過去が指し示す路みちを今まで通り歩かなければならなくなるのです。その上彼には現代人のもたない強ごうじよう情と我慢がありました。私はこの双方の点においてよく彼の心を見抜いていたつもりなのです。

上野うえのから歸つた晩は、私に取つて比較的安静な夜よでした。私はKが室へやへ引き上げたあとを追ひ懸けて、彼の机の傍そばに坐すわり込みました。そうして取り留めもない世間話をわざと彼に仕向けました。

彼は迷惑そうでした。私の眼には勝利の色が多少輝いていたでしょう、私の声にはたしかに得意の響きがあつたのです。私はしばらくKと一つ火鉢に手を翳かざした後、自分あとの室に帰りました。外ほかの事にかけては何をしても彼に及ばなかつた私も、その時だけは恐るるに足りないという自覚を彼に対してもつていたのです。

私はほどなく穏やかな眠りに落ちました。しかし突然私の名を呼ぶ声で眼を覚めました。見ると、間の襖ふすまが二尺しゃくばかり開あいて、そこにKの黒い影が立っています。そうして彼の室には宵よいの通りまだ燈火あかりが点ついているのです。急に世界の変つた私は、少しの間口きを利く事もできずに、ぼうつとして、その光景ながを眺めていました。

その時Kはもう寝たのかと聞きました。Kはいつでも遅くまで起きている男でした。私は黒い影法師かげぼうしのようなKに向つて、何か用かと聞き返しました。Kは大した用でもない、ただもう寝たか、まだ起きているかと思つて、便所へ行つたついでに聞いてみただけだと答えました。Kは洋燈ランプの灯ひを背中に受けているので、彼の顔色や眼つきは、全く私には分りませんでした。けれども彼の声は不断よりもかえつて落ち付いていたくらいでした。

Kはやがて開けた襖をびたりと立て切りました。私の室はすぐ元くらやみの暗闇に帰りました。私はその暗闇より静かな夢を見るべくまた眼を閉じました。私はそれぎり何も知りません。しかし翌よくあ朝さになつて、昨夕ゆうべの事を考えてみると、何だか不思議でした。

私はことによると、すべてが夢ではないかと思いました。それで飯^{めし}を食う時、Kに聞きました。Kはたしかに襖を開けて私の名を呼んだといいます。なぜそんな事をしたのかと尋ねると、別に判^はつきり然した返事もしません。調子の抜けた頃になって、近頃は熟睡ができるのかとかえって向うから私に問うのです。私は何だか変に感じました。

その日ちょうど同じ時間に講義の始まる時間割になっていたのだ、二人はやがていっしょに宅^{うち}を出しました。今朝^{けさ}から昨夕の事が気に掛^かつている私は、途中でまたKを追^{ついきゆう}窮^{きゆう}しました。けれどもKはやはり私を満足させるような答えをしません。私はあの事件について何か話すつもりではなかったのかと念を押してみまし

た。Kはそうではないと強い調子でいい切りました。昨日^{きのう}上野で「その話はもう止めよう^や」といったではないかと注意するごとくにも聞こえました。Kはそういう点に掛けて鋭い自尊心をもった男なのです。ふとそこに氣のついた私は突然彼の用いた「覚悟」という言葉を連想し出しました。すると今までまるで氣にならなかったその二字が妙な力で私の頭を抑え^{おさ}始めたのです。

四十四

「Kの果斷に富んだ性格は私^{わたし}によく知れていました。彼のこの事件^{じけん}についてのみ優^{ゆうじゆう}柔^なな訳も私にはちゃんと呑^のみ込めていたの

です。つまり私は一般を心得た上で、例外の場合をしつかり攫つらましたつもりで得意だったのです。ところが「覚悟」という彼の言葉ななべんを、頭のなかで何遍も咀嚼そしやくしているうちに、私の得意はだんだん色を失って、しまいにはぐらぐら揺うごき始めるようになりました。私はこの場合もあるいは彼にとって例外でないのかも知れないと思ひ出したのです。すべての疑惑、煩悶はんもん、懊惱おうのう、を一度に解決する最後の手段を、彼は胸のなかに畳たたみ込んでいるのはななかうかと疑うたぐり始めたのです。そうした新しい光で覚悟の二字を眺め返してみた私は、はつと驚きました。その時の私がもしこの驚きをもつて、もう一返いっぺん彼の口にした覚悟の内容を公平に見廻みまわしたならば、まだよかったかも知れません。悲しい事に私は片

眼^つでした。私はただKがお嬢さんに対して進んで行くという意味にその言葉を解釈しました。果断に富んだ彼の性格が、恋の面に発揮されるのがすなわち彼の覚悟だろうと一^{いち}図^ずに思い込んでしまったのです。

私は私にも最後の決断が必要だという声を心の耳で聞きました。私はすぐその声に応じて勇気を振り起しました。私はKより先に、しかもKの知らない間^まに、事を運ばなくてはならないと覚悟を極^きめました。私は黙って機会^ねを覘^らっていました。しかし二日経^たっても三日経^つっても、私はそれを捕^{つか}まえる事ができません。私はKのいない時、またお嬢さんの留守な折を待って、奥さんに談判を開こうと考えたのです。しかし片方がいなければ、片方が邪魔をす

るといった風の^{ふう}日ばかり続いて、どうしても「今だ」と思う好都合が出て来てくれないのです。私はいらいらしました。

一週間の後^{のち}私はとうとう堪え切れなくなつて仮病^{けびょう}を遣^{つか}いまし

た。奥さんからもお嬢さんからも、K自身からも、起きろという

催促を受けた私は、生返事^{なまへんじ}をしただけで、十時頃^{じごろ}まで蒲団^{ふとん}を被^{かぶ}

つて寝ていました。私はKもお嬢さんもなくなくなつて、家の内^{なか}が

ひっそり静まった頃を見計^{みはか}らつて寢床を出しました。私の顔を見た

奥さんは、すぐどこが悪いかと尋ねました。食物^{たべもの}は枕^{まくら}元^{もと}へ運

んでやるから、もっと寝ていたらよかろうと忠告してもくれまし

た。身体^{からだ}に異状のない私は、とても寝る気にはなれません。顔を

洗つていつもの通り茶の間で飯^{めし}を食いました。その時奥さんは長^{なが}

がひばち
火鉢の向側から給仕をしてくれたのです。私は朝飯とも
ひるめし
午飯とも片付かない茶碗を手に持ったまま、どんな風に問題
を切り出したものだろうか、そればかりに屈托していたから、
外観からは実際気分の好くない病人らしく見えただろうと思いま
す。

私は飯を終つて烟草を吹かし出しました。私が立たないので奥
さんも火鉢の傍を離れる訳にゆきません。下女を呼んで膳を下
させた上、鉄瓶に水を注したり、火鉢の縁を拭いたりして、私
に調子を合わせています。私は奥さんに特別な用事でもあるのか
と問いました。奥さんはいえと答えましたが、今度は向うでな
ぜですと聞き返して来ました。私は実は少し話したい事があるの

だといいました。奥さんは何ですかといって、私の顔を見ました。奥さんの調子はまるで私の気分にはいり込めないような軽いものでしたから、私は次に出すべき文句も少し渋りました。

私は仕方なしに言葉の上で、好^いい加減にうろつき廻^{まわ}った末、Kが近^{ちかごろ}頃何かいいはしなかったかと奥さんに聞いてみました。奥さんは思いも寄らないという風をして、「何を？」とまた反問して来ました。そうして私の答える前に、「あなたには何かおっしゃったんですか」とかえって向うで聞くのです。

四十五

「Kから聞かされた打ち明け話を、奥さんに伝える気のなかった私は、「いいえ」といつてしまった後で、すぐ自分の嘘うそを快からず感じました。仕方がないから、別段何も頼まれた覚えはないのだから、Kに関する用件ではないのだといい直しました。奥さんは「そうですか」といつて、後あとを待っています。私はどうしても切り出さなければならなくなりました。私は突然「奥さん、お嬢さんを私に下さい」といいました。奥さんは私の予期してかかったほど驚いた様子も見せませんでした。でも、少しばらく時返事ができなかったものと見えて、黙って私の顔を眺ながめていました。一度いい出した私は、いくら顔を見られても、それに頓とんじやく着などはしていません。「下さい、ぜひ下さい」といいました。

「私の妻としてぜひ下さい」といいました。奥さんは年を取っているだけに、私よりもずっと落ち付いていました。「上げてもいいが、あんまり急じゃありませんか」と聞くのです。私が「急に貰もらいたいのだ」とすぐ答えたら笑い出しました。そうして「よく考えたのですか」と念を押すのです。私はいい出したのは突然でも、考えたのは突然でないという訳を強い言葉で説明しました。

それからまだ二つ三つの問答がありました。私はそれを忘れてしまいました。男のように判然はきはきしたところのある奥さんは、普通の女と違ってこんな場合には大変心持よく話のできる人でした。「宜よござんす、差し上げましょう」といいました。「差し上げるなんて威張いばった口の利きける境遇ではありません。どうぞ貰もらって下

さい。ご存じの通り父親のない憐れな子です」と後では向うから頼みました。

話は簡単でかつ明瞭めいりょうに片付いてしまいました。最初からしまいまでにおそらく十五分とは掛らなかつたでしょう。奥さんは何の条件も持ち出さなかつたのです。親類に相談する必要もない、後から断ればそれで沢山だといいました。本人の意嚮いこうさえたしかめるに及ばないと明言しました。そんな点になると、学問をした私の方が、かえって形式に拘泥こうでいするくらいに思われたのです。親類はとにかく、当人にはあらかじめ話して承諾を得るのが順序らしいと私が注意した時、奥さんは「大丈夫です。本人が不承知の所へ、私があの子をやるはずがありませんから」といいました。

自分の室へ^{へや}歸った私は、事のあまりに訳もなく進行したのを考
えて、かえって変な気持ちになりました。はたして大丈夫なのだろ
うかという疑念さえ、どこからか頭の底に^は這い込んで来たくらい
です。けれども大体の上において、私の未来の運命は、これで定
められたのだという觀念が私のすべてを新たにしました。

私は午^{ひるごろ}頃また茶の間へ出掛けて行つて、奥さんに、今朝^{けさ}の話
をお嬢さんに何時^{いつ}通じてくれるつもりかと尋ねました。奥さんは、
自分さえ承知していれば、いつ話しても構わなかうというよう
な事をいうのです。こうなると何だか私よりも相手の方が男みた
ようなので、私はそれぎり引き込もうとしました。すると奥さん
が私を引き留めて、もし早い方が希望ならば、今日でもいい、稽^け

古^{いにしへ}から歸つて來たら、すぐ話そうというのです。私はそうしても
 らう方が都合が好いと答えてまた自分の室に歸りました。しかし
 黙つて自分の机の前に坐^{すわ}つて、二人のこそこそ話を遠くから聞い
 ている私を想像してみると、何だか落ち付いていられないような
 氣もするのです。私はとうとう帽子を被^{かぶ}つて表へ出ました。そう
 してまた坂の下でお嬢さんに行き合いました。何にも知らないお
 嬢さんは私を見て驚いたらしかったのです。私が帽子を脱^とつて
 「今お歸り」と尋ねると、向うではもう病氣は癒^{なお}つたのかと不思議
 そうに聞くのです。私は「ええ癒りました、癒りました」と答
 えて、ずんずん水^{すい}道橋^{どうばし}の方へ曲つてしまいました。

四十六

「私は猿樂町さるがくちようから神保町じんぼうちようの通りへ出て、小川町おがわまちの方へ曲りました。私がこの界限かいわいを歩くのは、いつも古本屋をひやかすのが目的でしたが、その日は手摺てずれのした書物などを眺ながめる気が、どうしても起らないのです。私は歩きながら絶えず宅うちの事を考えていました。私には先刻さつきの奥さんの記憶がありました。それからお嬢さんが宅へ帰ってから想像がありました。私はつまりこの二つのもので歩かせられていたようなものです。その上私は時々往来の真中で我知らずふと立ち留まりました。そうして今頃は奥さんがお嬢さんにもうあの話をしていゝ時分だろうなどと考

えました。また或る時は、もうあの話が済んだ頃だとも思いました。

私はとうとう万世橋を渡つて、明神の坂を上がつて、本郷台へ来て、それからまた菊坂を下りて、しまいに小石川の谷へ下りたのです。私の歩いた距離はこの三区に跨がつて、いびつな円を描いたともいわれるでしょうが、私はこの長い散歩の間ほとんどKの事を考えなかったのです。今その時の私を回顧して、なぜだと自分に聞いてみても一向分りません。ただ不思議に思うだけです。私の心がKを忘れ得るくらい、一方に緊張していたとみればそれまでですが、私の良心がまたそれを許すべきはずはなかったのですから。

Kに對する私の良心が復活したのは、私が宅の格子こうしを開けて、玄關から坐敷ざしきへ通る時、すなわち例のごとく彼の室へやを抜けようとした瞬間でした。彼はいつもの通り机に向つて書見をしていました。彼はいつもの通り書物から眼を放して、私を見ました。しかし彼はいつもの通り今歸つたのかとはいいませんでした。彼は「病氣はもう癒いいのか、医者へでも行つたのか」と聞きました。私はその刹那せつなに、彼の前に手を突いて、詫あやまりたくなつたのです。しかも私の受けたその時の衝動は決して弱いものではなかつたのです。もしKと私がたつた二人曠野こうやの真中にでも立っていたならば、私はきっと良心の命令に従つて、その場で彼に謝罪したろうと思います。しかし奥には人がいます。私の自然はすぐそこで食

い留められてしまったのです。そうして悲しい事に永久に復活しなかつたのです。

夕飯ゆうめしの時Kと私はまた顔を合せました。何にも知らないKは

ただ沈んでいただけで、少しも疑い深い眼を私に向けません。何にも知らない奥さんはいつもより嬉うれしそうでした。私だけがすべてを知っていたのです。私は鉛のような飯を食いました。その時お嬢さんはいつものようにみんなと同じ食卓に並びませんでした。奥さんが催促すると、次の室で只ただいま今と答えるだけでした。それをKは不思議そうに聞いていました。しまいはどうしたのかと奥さんに尋ねました。奥さんは大方おおかたさま極りが悪いのだらうといつて、ちよつと私の顔を見ました。Kはなお不思議そうに、なんで極り

が悪いのかと追^{つきゅう}窮^{きゆう}しに掛^かかりました。奥さんは微笑しながらまた私の顔を見るのです。

私は食卓に着いた初めから、奥さんの顔^{かおつき}付で、事の成行^{なりゆき}をほぼ推察していました。しかしKに説明を与えるために、私のいる前で、それを悉^{ことごと}く話されては堪^{たま}らないと考えました。奥さんはまたそのくらいの事を平気でする女なのですから、私はひやひやしましたのです。幸いにKはまた元の沈黙に帰りました。平生^{へいぜい}より多少機嫌のよかった奥さんも、とうとう私の恐れ^{いだい}を抱^{いだ}いている点までは話を進めずにしまいました。私はほっと一息^{ひといき}して室へ帰りました。しかし私がこれから先Kに対して取るべき態度は、どうしたものだろうか、私はそれを考えずにはいられませんでした。

私は色々の弁護を自分の胸で^{こしら}拵えてみました。けれどもどの弁護もKに対して面と向うには足りませんでした、卑怯^{ひきよう}な私はついに自分で自分をKに説明するのが厭^{いや}になったのです。

四十七

「私はそのまま二、三日過ごしました。その二、三日の間Kに対する絶えざる不安が私の胸を重くしていたのはいうまでもありません。私はただでさえ何とかしなければ、彼に済まないと思ったのです。その上奥^{しげき}さんの調子や、お嬢さんの態度が、始終私を突ツつくように刺戟^{しげき}するのですから、私はなお辛^{つら}かったです。ど

こか男らしい気性を具えた奥さんは、いつ私の事を食卓でKに素
ば抜かないとも限りません。それ以来ことに目立つように思えた
私に対するお嬢さんの挙止動作も、Kの心を曇らす不審の種とな
らないとは断言できません。私は何とかして、私とこの家族との
間に成り立った新しい関係を、Kに知らせなければならぬ位置
に立ちました。しかし倫理的に弱点をもっていると、自分で自分
を認めている私には、それがまた至難の事のように感ぜられたの
です。

私は仕方がないから、奥さんに頼んでKに改めてそういつても
らおうかと考えました。無論私のいない時にです。しかしありの
ままを告げられては、直接と間接の区別があるだけで、面目めんぼくの

ないのに変りはありません。といつて、こしらえ事を話してもらおう
 とすれば、奥さんからその理由を詰問きつもんされるに極きまつています。
 もし奥さんにすべての事情を打ち明けて頼むとすれば、私は好ん
 で自分の弱点を自分の愛人とその母親の前に曝さらけ出さなければな
 りません。真面目まじめな私には、それが私の未来の信用に關するとし
 か思われなかつたのです。結婚する前から恋人の信用を失うのは、
 たとい一分一厘ぶりんでも、私には堪え切れない不幸のように見えまし
 た。

要するに私は正直みちな路を歩くつもりで、つい足を滑らした馬鹿
 ものでした。もしくは狡猾こうかつな男でした。そうしてそこに氣のつ
 いているものは、今のところただ天と私の心だけだったのです。

しかし立ち直って、もう一步前へ踏み出そうとするには、今滑つた事をぜひと周囲の人に知らなければならぬ窮境きゆうきように陥つたのです。私はあくまで滑つた事を隠したがりました。同時に、どうしても前へ出ずにはいられなかったのです。私はこの間に挟はさまってまた立ち竦すくみました。

五、六日経たつた後、のち奥さんは突然私に向つて、Kにあの事を話したかと聞くのです。私はまだ話さないと答えました。するとなぜ話さないのかと、奥さんが私を詰なめるのです。私はこの問いの前に固くなりました。その時奥さんが私を驚かした言葉を、私は今でも忘れずに覚えています。

「道理で妾わたしが話したら変な顔をしていましたよ。あなたもよくな

いじやありませんか。平生^{へいぜい}あんなに親しくしている間柄なのに、黙って知らん顔をしているのは」

私はKがその時何かいいはしなかったかと奥さんに聞きました。奥さんは別段何にもいわないと答えました。しかし私は進んでもつと細^{こま}かい事を尋ねずにはいられませんでした。奥さんは固^{もと}より何も隠す訳がありません。大した話もないがといいながら、一々Kの様子を語って聞かせてくれました。

奥さんのいうところを綜^{そうごう}合して考えてみると、Kはこの最後の打撃を、最も落ち付いた驚きをもつて迎えたらしいのです。Kはお嬢さんと私との間に結ばれた新しい関係について、最初はどうですかとただ一^{ひとくち}口いっただけだったそうです。しかし奥さん

が、「あなたも喜んで下さい」と述べた時、彼ははじめて奥さんの顔を見て微笑を洩^もらしながら、「おめでとうございます」といったまま席を立ったそうです。そうして茶の間の障^{しょうじ}子を開ける前に、また奥さんを振り返って、「結婚はいつですか」と聞いたそうです。それから「何かお祝いを上げたいが、私は金がないから上げる事ができません」といったそうです。奥さんの前に坐^{すわ}っていた私は、その話を聞いて胸が塞^{ふさが}るような苦しさを覚えました。

四十八

「勘定して見ると奥さんがKに話をしてからも二日余りになり

ます。その間Kは私に対して少しも以前と異なつた様子を見せなかつたので、私は全くそれに気が付かず^にいたのです。彼の超然とした態度はたとい外観だけにせよ、敬服^{あたい}に値すべきだと私は考えました。彼と私を頭の中で並べてみると、彼の方が遙^{はる}かに立派に見えました。「おれは策略で勝つても人間としては負けたのだ」という感じが私の胸に渦巻いて起りました。私はその時さぞKが軽蔑^{けいべつ}している事だろうと思つて、一人で顔を赧^{あか}らめました。しかし今更Kの前に出て、恥を搔^かかせられるのは、私の自尊心にとつて大いな苦痛でした。

私が進もうか止^よそうかと考えて、ともかくも翌^{あくるひ}日まで待とうと決心したのは土曜の晩でした。ところがその晩に、Kは自殺し

て死んでしまったのです。私は今でもその光景を思い出すと慄然ぞつとします。いつも東ひがしまくら枕で寝る私が、その晩に限って、偶然西枕とこに床を敷いたのも、何かの因縁いんねんかも知れません。私は枕元から吹き込む寒い風でふと眼を覚ましたのです。見ると、いつも立って切つてあるKと私の室へやとの仕切しきりの襖ふすまが、この間の晩と同じくらい開あいています。けれどもこの間のように、Kの黒い姿はそこには立っていません。私は暗示を受けた人のように、床の上に肱ひじを突いて起き上がりながら、屹きつとKの室のぞを覗きました。洋燈ランプが暗く点ともつているのです。それで床も敷いてあるのです。しかし掛蒲かけぶと団んは跳返はねかえされたように裾すその方に重なり合っているのです。そうしてK自身は向うむきに突つツ伏ふしているのです。

私はおいといって声を掛けました。しかし何の答えもありません。おいどうかしたのかと私はまたKを呼びました。それでもKの身体は些とも動きません。私はすぐ起き上って、敷居際までの身体は些とも動きません。私はすぐ起き上って、敷居際まで行きました。そこから彼の室の様子を、暗い洋燈の光で見廻してみしました。

その時私の受けた第一の感じは、Kから突然恋の自白を聞かされた時のそれとほぼ同じでした。私の眼は彼の室の中を一目見ると、いや、あたかも硝子で作った義眼のように、動く能力を失いました。私は棒立ちに立ち竦みました。それが疾風のごとく私を通過したあとで、私はまたああ失策ったと思いました。もう取り返しが付かないという黒い光が、私の未来を貫いて、一瞬間に私

の前に横たわる全生涯を物^{もの}凄く照らしました。そうして私はがたがた顫^{ふる}え出したのです。

それでも私はついに私を忘れる事ができませんでした。私はすぐ机の上に置いてある手紙に眼を着けました。それは予期通り私の名宛^{なあて}になっていました。私は夢中で封を切りました。しかし中には私の予期したような事は何にも書いてありませんでした。私は私に取ってどんなに辛い文句^{つら}がその中に書き列^{つら}ねてあるだろうと予期したのです。そうして、もしそれが奥さんやお嬢さんの眼に触れたら、どんなに軽蔑されるかも知れないという恐怖があったのです。私はちよつと眼を通しただけで、まず助かったと思いました。

(固^{もと}より世間^{せけん}体の上だけで助かったのですが、その世

間体がこの場合、私にとっては非常な重大事件に見えたのです。）

手紙の内容は簡単でした。そうしてむしろ抽象的でした。自分

は薄志弱行で到底行先の望みがないから、自殺するという

だけなのです。それから今まで私に世話になつた礼が、ごくあつ

さりとした文句でその後あとに付け加えてありました。世話ついでに

死後の片付方かたづけかたも頼みたいという言葉もありました。奥さんに迷

惑を掛けて済まんから宜しく詫わびをしてくれという句もありました。

国元へは私から知らせてもらいたいという依頼もありました。必

要な事はみんな一ひとくち口ずつ書いてある中にお嬢さんの名前だけは

どこにも見えません。私はしまいまで読んで、すぐKがわざと回

避したのだという事に気が付きました。しかし私のもつとも痛切

に感じたのは、最後に墨すみの余りで書き添えたらしく見える、もつと早く死ぬべきだのになぜ今まで生きていたのだろうという意味の文句でした。

私は顫ふるえる手で、手紙を巻き収めて、再び封の中へ入れました。私はわざとそれを皆みんなの眼に着くように、元の通り机の上に置きました。そうして振り返って、襖ふすまに迸とばしっている血潮を始めて見たのです。

四十九

「私は突然Kの頭を抱かかえるように両手で少し持ち上げました。私

はKの死しにが顔おが一目見たかつたのです。しかし俯伏うつぶしになつて
 いる彼の顔を、こうして下から覗のぞき込んだ時、私はすぐその手を放
 してしまいました。慄ぞつとしたばかりではないのです。彼の頭が非
 常に重たく感ぜられたのです。私は上から今触さわつた冷たい耳と、
 平生へいぜいに変わらない五分刈ごぶがりの濃い髪かみの毛を少しば時眺らめていました。
 私は少しも泣く気にはなれませんでした。私はただ恐ろしかつた
 のです。そうしてその恐ろしさは、眼の前の光景が官能しげきを刺激し
 て起る单调な恐ろしさばかりではありません。私は忽然こつぜんと冷た
 くなつたこの友達によつて暗示された運命の恐ろしさを深く感じ
 たのです。

私は何の分別ふんべつもなくまた私の室へやに帰りました。そうして八畳

の中をぐるぐる廻り始めました。私の頭は無意味でも当分そうして動いていると私に命令するのです。私はどうかしなければならなないと思いました。同時にもうどうする事もできないのだと思いました。座敷の中をぐるぐる廻らなければいらなくなったのです。檻おりの中へ入れられた熊くまのような態度で。

私は時々奥へ行つて奥さんを起そうという気になります。けれども女にこの恐ろしい有様を見せては悪いという心持がすぐ私を遮さえぎります。奥さんはとにかく、お嬢さんを驚かす事は、とてもできないという強い意志が私を抑おさえつけます。私はまたぐるぐる廻り始めるのです。

私はその間に自分の室の洋燈ランプを点けました。それから時計を折

々見ました。その時の時計ほど埒らちの明あかない遅いものはありませ
 んでした。私の起きた時間は、正確に分らないのですけれども、
 もう夜明よあけに間まもなかった事だけは明らかです。ぐるぐる廻まわりなが
 ら、その夜明を待ち焦こがれた私は、永久に暗い夜が続くのではなか
 ろうかという思いに悩まされました。

我々は七時前に起きる習慣でした。学校は八時に始まる事が多
 いので、それでないと授業に間に合わないのです。下女げじょはその関
 係で六時頃に起きる訳になっていました。しかしその日私が下女
 を起しに行ったのはまだ六時前でした。すると奥さんが今日は日
 曜だといって注意してくれました。奥さんは私の足音で眼を覚ま
 したのです。私は奥さんに眼が覚めているなら、ちよつと私の室へや

まで来てくれと頼みました。奥さんは寝巻の上へ不斷着の羽織ふだんぎを引ひつ掛かけて、私の後あとに跟ついて来ました。私は室へはいるや否いなや、今まで開あいていた仕切りの襖ふすまをすぐ立て切りました。そうして奥さんに飛んだ事ができたと小声で告げました。奥さんは何だと聞きました。私は顚あごで隣の室を指すようにして、「驚いちゃいけません」といいました。奥さんは蒼あおい顔をしました。「奥さん、Kは自殺しました」と私がまたいいました。奥さんはそこに居い竦すくまったように、私の顔を見て黙っていました。その時私は突然奥さんの前へ手を突いて頭を下げました。「済みません。私が悪かったです。あなたにもお嬢さんにも済まない事になりました」と詫あやまりました。私は奥さんと向い合うまで、そんな言葉を口にす

る気はまるでなかったのです。しかし奥さんの顔を見た時不意に
 我とも知らずそういつてしまったのです。Kに詫まる事のできな
 い私は、こうして奥さんとお嬢さんに詫^わびなければいられなくな
 ったのだと思つて下さい。つまり私の自然^{へいぜい}が平生の私を出し抜
 いてふらふらと懺悔^{ざんげ}の口を開かしたのです。奥さんがそんな深い
 意味に、私の言葉を解釈しなかったのは私にとって幸いでした。

蒼い顔をしながら、「不慮の出来事なら仕方がないじやありませんか」と慰めるようにいつてくれました。しかしその顔には驚き
 と怖^{おそ}れとが、彫^ほり付けられたように、硬^{かた}く筋肉を攪^{つか}んでいました。

「私は奥さんに気の毒でしたけれども、また立つて今閉めたばかりの唐紙からかみを開けました。その時Kの洋燈ランプに油が尽きたと見えて、^{へや}室の中はほとんど真暗まっくらでした。私は引き返して自分の洋燈を手に持ったまま、入口に立つて奥さんを顧みしました。奥さんは私の後ろから隠れるようにして、四畳の中を覗のぞき込みました。しかしはいろいろとはしません。そこはそのままにしておいて、雨戸を開けてくれと私にいいました。

それから後の奥さんあとの態度は、さすがに軍人の未亡人びぼうじんだけあって要領を得ていました。私は医者いしやの所へも行きました。また警察へも行きました。しかしみんな奥さんに命令されて行つたので

す。奥さんはそうした手続てつづきの済むまで、誰もKの部屋へは入れ
ませんでした。

Kは小さなナイフで頸動脈けいどうみやくを切つて一息ひといきに死んでしまつたのです。外ほかに創きずらしいものは何にもありませんでした。私が夢のような薄暗い灯ひで見た唐紙の血潮は、彼の頸筋くびすじから一度ほどばしに迸ほとばしつたものと知れました。私は日中にっちゅうの光で明らかにその迹あとを再び眺めながめました。そうして人間の血の勢いきおいというものの劇しいのに驚きました。

奥さんと私はできるだけの手際てぎわと工夫を用いて、Kの室へやを掃除しました。彼の血潮の大部分は、幸い彼の蒲団ふとんに吸収されてしまつたので、畳はそれほど汚れないで済みましたから、後始末はま

だ楽でした。二人は彼の死骸^{しかい}を私の室に入れて、不断の通り寝ている体^{てい}に横にしました。私はそれから彼の実家へ電報を打ちに出たのです。

私が帰った時は、Kの枕^{まくらもと}元にもう線香が立てられていました。室へはいるとすぐ^{ほとけくさ} 仏 臭い烟で鼻^{けむり}を撲^うたれた私は、その烟の中に坐^{すわ}つてゐる女二人を認めました。私がお嬢さんの顔を見たのは、昨夜^{さくやらい}来この時が始めてでした。お嬢さんは泣いていました。奥さんも眼を赤くしていました。事件が起つてからそれまで泣く事を忘れていた私は、その時ようやく悲しい気分^{気分}に誘われる事ができたのです。私の胸はその悲しさのために、どのくらい寛^{くつ}ろいだか知れません。苦痛と恐怖でぐいと握り締められた私の心

に、いつてきうるおい一滴の潤を与えてくれたものは、その時の悲しさでした。

私は黙つて二人の傍そばに坐っていました。奥さんは私にも線香を

上げてやれといいます。私は線香を上げてまた黙つて坐つていま

した。お嬢さんは私には何ともいいません。たまに奥さんと一ひとく

口ちふたくち二一口言葉を換かわす事がありました。それは当座の用事に

ついてのみでした。お嬢さんにはKの生前について語るほどの余

裕がまだ出て来なかつたのです。私はそれでも昨夜ゆうべの物もの凄すごい有

様を見せずに済んでまだよかったと心のうちで思いました。若い

美しい人に恐ろしいものを見せると、折角せつかくの美しさが、そのた

めに破壊されてしまいそうで私は怖こわかつたのです。私の恐ろしさ

が私の髪の毛の末端まで来た時ですら、私はその考えを度外に置

いて行動する事はできませんでした。私には綺麗きれいな花を罪もないのに妄みだりに鞭むちうつと同じような不快がそのうちに籠こもっていたのです。

国元からKの父と兄が出て来た時、私はKの遺骨をどこへ埋うめるかについて自分の意見を述べました。私は彼の生前に雑司ヶ谷近辺をよくいっしょに散歩した事があります。Kにはそこが大変気に入っていたのです。それで私は笑しょうだん談はんぶん半分に、そんなに好きなら死んだらここへ埋めてやろうと約束した覚えがあるのです。私も今その約束通りKを雑司ヶ谷へ葬ほうむったところで、どのくらいくどくの功德になるものかとは思いました。けれども私は私の生きている限り、Kの墓の前に跪ひざまずいて月々私の懺悔ざんげを新たにしたかつ

たのです。今まで構い付けなかったKを、私が万事世話をして来たという義理もあつたのでしよう、Kの父も兄も私のいう事を聞いてくれました。

五十一

「Kの葬式の帰り路に、私はその友人の一人から、Kがどうして自殺したのだらうという質問を受けました。事件があつて以来私はもう何度となくこの質問で苦しめられていたのです。奥さんもお嬢さんも、国から出て来たKの父兄も、通知を出した知り合いも、彼とは何の縁故もない新聞記者までも、必ず同様の質問を私

に掛けない事はなかったのです。私の良心はそのたびにちくちく刺されるように痛みました。そうして私はこの質問の裏に、早くお前が殺したと白状してしまえという声を聞いたのです。

私の答えは誰に対しても同じでした。私はただ彼の私宛あてで書き残した手紙を繰り返すだけで、外ほかに一口ひとくちも付け加える事はしませんでした。葬式の帰りに同じ問いを掛けて、同じ答えを得たKの友人は、懐ふところから一枚の新聞を出して私に見せました。私は歩きながらその友人によって指し示された箇所を読みました。それにはKが父兄から勘当された結果厭世えんせい的な考えを起して自殺したと書いてあるのです。私は何にもいわずに、その新聞を畳たたんで友人の手に帰しました。友人はこの外ほかにもKが気が狂って自殺した

と書いた新聞があるといつて教えてくれました。忙しいので、ほとんど新聞を読む暇がなかった私は、まるでそうした方面の知識を欠いていましたが、腹の中では始終気にかかつていたところでした。私は何よりも宅うちのものの迷惑になるような記事の出るのを恐れたのです。ことに名前だけにせよお嬢さんが引合いに出たら堪たまらないと思つていたのです。私はその友人に外ほかに何とか書いたのではないかと聞きました。友人は自分の眼に着いたのは、ただその二種ぎりだと答えました。

私が今おる家へ引ひつ越こしたのはそれから間もなくでした。奥さんもお嬢さんも前の所にいるのを厭いやがりますし、私もその夜よの記憶を毎晩繰り返すのが苦痛だったので、相談の上移る事に極きめた

のです。

移つて二カ月ほどしてから私は無事に大学を卒業しました。卒業して半年も経^たないうちに、私はとうとうお嬢さんと結婚しました。外側から見れば、万事が予期通りに運んだのですから、目^め出度^{でたい}といわなければなりません。奥さんもお嬢さんもいかにも幸福らしく見えました。私も幸福だったのです。けれども私の幸福には黒い影が随^ついていました。私はこの幸福が最後に私を悲しい運命に連れて行く導火線ではなからうかと思いました。

結婚した時お嬢さんが、——もうお嬢さんではありませんから、妻^{さい}といえます。——妻が、何を思い出したのか、二人でKの墓^{はかま}参^{まい}りをしようといいい出しました。私は意味もなくただぎよっと

しました。どうしてそんな事を急に思い立ったのかと聞きました。妻は二人揃そろつてお参りをしたら、Kがさぞ喜ぶだろうというのです。私は何事も知らない妻の顔をしけじけ眺ながめていましたが、妻からなぜそんな顔をするのかと問われて始めて気が付きました。私は妻の望み通り二人連れ立って雑司ぞうしがやヶ谷へ行きました。私は新しいKの墓へ水をかけて洗ってやりました。妻はその前へ線香と花を立てました。二人は頭を下げて、合掌しました。妻は定めて私といっしょになった顛てんまつ末を述べてKに喜んでもらうつもりでしたらう。私は腹の中で、ただ自分が悪かったと繰り返すだけでした。

その時妻はKの墓を撫なでてみて立派だと評していました。その

墓は大したものではないのですけれども、私が自分で石屋へ行つて見^{みた}立てたりした因^{いんねん}縁があるので、妻はとくにそういいたかったのだでしょう。私はその新しい墓と、新しい私の妻と、それから地面の下に埋^{うず}められたKの新しい白骨とを思い比べて、運命の冷^れ罵^{いば}を感じずにはいられなかったのです。私はそれ以後決して妻といっしよにKの墓参りをしない事にしました。

五十二

「私の亡友に対するこうした感じはいつまでも続きました。実は私も初めからそれを恐れていたのです。年来の希望であつた結婚

すら、不安のうちに式を挙げたといえはいえない事もないでしょう。しかし自分で自分の先が見えない人間の事ですから、ことによるとあるいはこれが私の心持を一転して新しい生涯に入る端緒^ちになるかも知れないとも思ったのです。ところがいいよい夫として朝夕妻^{さい}と顔を合せてみると、私の果敢^{はか}ない希望は手厳しい現実のために脆^{もろ}くも破壊されてしまいました。私は妻と顔を合せているうちに、卒然^{そつぜん} K に脅^{おび}かされるのです。つまり妻が中間に立つて、K と私をどこまでも結び付けて離さないようにするのです。妻のどこにも不足を感じない私は、ただこの一点において彼女を遠ざけたがりました。すると女の胸にはすぐそれが映^{うつ}ります。映るけれども、理由は解^{わか}らないのです。私は時々妻からなぜそん

なに考えているのだとか、何か気に入らない事があるのだろうかとかいう詰問きつもんを受けました。笑って済ませる時はそれで差支えさしつかないのですが、時によると、妻の癩かんも高こうじて来ます。しまいには「あなたは私を嫌っていらつしやるんでしょう」とか、「何でも私に隠していらつしやる事があるに違いない」とかいう怨言えんげんも聞かなくてはなりません。私はそのたびに苦しみました。

私は一層いっそう思い切つて、ありのままを妻に打ち明けようとした事が何度もあります。しかしいざという間際になると自分以外のあ
る力が不意に来て私を抑えおさ付けるのです。私を理解してくれるあ
なたの事だから、説明する必要もあるまいと思いますが、話すべ
き筋だから話しておきます。その時分の私は妻に對して己おのれを飾

る気はまるでなかったのです。もし私が亡友に対すると同じような善良な心で、妻の前に懺悔ざんげの言葉を並べたなら、妻は嬉し涙うれをこぼしても私の罪を許してくれたに違い不大的です。それをあえてしない私に利害の打算があるはずはありません。私はただ妻の記憶に暗黒な一点を印いんするに忍びなかったから打ち明けなかったのです。純白なものに一雫ひとしずくの印氣インキでも容赦ようしゃなく振り掛けるのは、私にとって大変な苦痛だったのだと解釈して下さい。

一年経たつてもKを忘れる事のできなかった私の心は常に不安でした。私はこの不安を駆逐くちくするために書物に溺れおぼようと力めました。私は猛烈な勢いきおいをもつて勉強し始めたのです。そうしてその結果を世の中に公おおやけにする日の来るのを待ちました。けれども無理に

目的を^{こしら}えて、無理にその目的の達せられる日を待つのは嘘^{うそ}です。から不愉快です。私はどうしても書物のなかに心を埋^{うず}めていられなくなりました。私はまた腕組みをして世の中を眺^{なが}めだしたのです。

妻はそれを今^{こんにち}日に困らないから心に弛^{たる}みが出るのだと観察していたようでした。妻の家にも親子二人ぐらいは坐^{すわ}っていてどうか暮^{しつか}して行ける財産がある上に、私も職業を求めないで差^さ支^{しつか}えのない境遇にいたのですから、そう思われるのももつとです。私も幾分かスポイルされた気味がありました。しかし私の動^{うご}かなくなつた原因の主なもの、全くそこにはなかつたのです。叔父^{おじ あざむ}に欺^{あざむ}かれた当時の私は、他^{ひと}の頼^{たの}みにならない事をつくづ

くと感じたには相違ありませんが、他を悪く取るだけあつて、自分はまだ確かな気がしていました。世間はどうかろうともこの己は立派な人間だという信念がどこかにあつたのです。それがKのために美事に破壊されてしまつて、自分もあの叔父と同じ人間だと意識した時、私は急にふらふらしました。他に愛想を尽かした私は、自分にも愛想を尽かして動けなくなつたのです。

五十三

「書物の中に自分を生埋めにする事のできなかつた私は、酒に魂を浸して、己れを忘れようと試みた時期もあります。私は酒が好

きだとはいいいません。けれども飲めば飲める質たちでしたから、ただ量を頼みに心を盛り潰つぶそうと力めたのです。この浅薄せんぱくな方便はしばらくするうちに私をなお厭世えんせい的にしました。私は爛醉らんすいのまっさいちゅう

真最中まねにふと自分の位置に気が付くのです。自分はわざとこんな真似まねをして己れを偽いつわっている愚物ぐぶつだという事に気が付くのです。すると身振みふるいと共に眼も心も醒さめてしまいます。時にはいくら飲んでもうこうした仮装状態にさえ入はいり込めないでむやみに沈んで行く場合も出て来ます。その上技巧で愉快を買った後あとには、きつと沈鬱ちんうつな反動があるのです。私は自分の最も愛さいしている妻とその母親に、いつでもそこを見せなければならなかったのです。しかも彼らは彼らに自然な立場から私を解釈して掛かります。

妻の母は時々^{きまず}氣拙い事を妻にいうようでした。それを妻は私に隠していました。しかし自分は自分で、単独に私を責めなければ気が済まなかったらしいのです。責めるといつても、決して強い言葉ではありません。妻から何かいわれたために、私が激した^{ためし}例はほとんどなかったくらいですから。妻はたびたびどが氣に入らないのか遠慮なくいつてくれと頼みました。それから私の未来のために酒を止めろと忠告しました。ある時は泣いて「あなたはこの頃人間が違った」といいました。それだけならまだいいのですけれども、「Kさんが生きていたら、あなたもそんなにはならなかったでしょう」というのです。私はそうかも知れないと答えました事がありました。私の答えた意味と、妻の了解した意味とは

全く違っていたのですから、私は心のうちで悲しかったのです。それでも私は妻に何事も説明する気にはなれませんでした。

私は時々妻に詫まりました。^{あや}それは多く酒に酔って遅く帰った翌^{あくるひ}日の朝でした。妻は笑いました。あるいは黙っていました。

たまにぼろぼろと涙を落す事もありました。私はどっちにしても自分が不愉快で堪^{たま}らなかつたのです。だから私の妻に詫まるのは、自分に詫まるのとつまり同じ事になるのです。私はしまいに酒を止^やめました。妻の忠告で止めたというより、自分で厭^{いや}になったから止めたといった方が適当でしょう。

酒は止めたけれども、何もする気にはなりません。仕方がないから書物を読みます。しかし読めば読んだなりで、打^うち遣^やって置

きます。私は妻から何のために勉強するのかという質問をたびたび受けました。私はただ苦笑していました。しかし腹の底では、世の中で自分が最も信愛しているたった一人の人間すら、自分を理解していないのかと思うと、悲しかったのです。理解させる手段があるのに、理解させる勇気が出せないのだと思うとますます悲しかったのです。私は寂^{せき}寞^{ぼく}でした。どこからも切り離されて世の中にたった一人住んでいるような気のした事もよくありました。

同時に私はKの死因を繰り返し繰り返し考えたのです。その当座は頭がただ恋の一字で支配されていたせいでもありませんが、私の観察はむしろ簡単でしかも直線的でした。Kは正^{まさ}しく失恋の

ために死んだものとすぐ極^きめてしまったのです。しかし段々落ち付いた気分で、同じ現象に向つてみると、そう容易^{たやす}くは解決が着かないように思われて来ました。現実と理想の衝突、——それでもまだ不充分でした。私はしまいにKが私のようにたつた一人で淋^{さむ}しくつて仕方がなくなつた結果、急に所^{しよ}決^{けつ}したのではなからうかと疑い出しました。そうしてまた慄^{ぞつ}としたのです。私もKの歩いた路^{みち}を、Kと同じように辿^{たど}っているのだという予^よ覚^{かく}が、折々風のように私の胸を横^{よこぎ}過り始めたからです。

五十四

「その内妻さいの母が病氣になりました。医者に見せると到底癒とってなおらないという診断でした。私は力の及ぶかぎり懇切に看護をしてやりました。これは病人自身のためでもありますし、また愛する妻のためでもありました。もつと大きな意味からいうと、ついに人間のためでした。私はそれまでも何かしたくつて堪たまらなかつたのだけれども、何もする事ができないのでやむをえず懷ふところ手をしていたに違いありません。世間と切り離された私が、始めて自分から手を出して、幾分でも善いい事をしたという自覚を得たのはこの時でした。私は罪つみほろぼ滅ほろしとでも名づけなければならない、一種の氣分に支配されていたのです。

母は死にました。私と妻さいはたつた二人ぎりになりました。妻は

私に向つて、これから世の中で頼りにするものは一人しかなくなつたといいました。自分自身さえ頼りにする事のできない私は、妻の顔を見て思わず涙ぐみました。そうして妻を不幸な女だと思いました。また不幸な女だと口へ出してもいいました。妻はなぜだと聞きます。妻には私の意味が解わからないのです。私もそれを説明してやる事ができないのです。妻は泣きました。私が不ふ断だんからひねくれた考えで彼女を觀察しているために、そんな事もうようになるのだと恨うらみました。

母の亡くなつた後、あと私はできるだけ妻を親切に取り扱つてやりました。ただ、当人を愛していたからばかりではありません。私の親切には箇人こじんを離れてもつと広い背景があつたようです。ちよ

うど妻の母の看護をしたと同じ意味で、私の心は動いたらしいのです。妻は満足らしく見えました。けれどもその満足のうちには、私を理解し得ないために起るぼんやりした稀薄きはくな点がどこかに含まれているようでした。しかし妻が私を理解し得たにしたところで、この物足りなさは増すとも減る氣遣きづかいはなかったのです。女には大きな人道の立場から来る愛情よりも、多少義理をはずれても自分だけに集注される親切を嬉うれしがる性質が、男よりも強いように思われますから。

妻はある時、男の心と女の心とはどうしてもぴたりと一つにならないものだろうかといいました。私はただ若い時ならなれるだろうと曖あいまい昧な返事をしておきました。妻は自分の過去を振り返

つて眺^{なが}めているようでしたが、やがて微^{かす}かな溜^{ため}息^{いき}を洩^もらししました。

私の胸にはその時分から時々恐ろしい影^{ひらめ}が閃^{ひらめ}きました。初めはそれが偶然^{そと}外から襲^襲つて来るのです。私は驚きました。私はぞつとしました。しかししばらくしている中^{うち}に、私の心がその物^{もの}凄^{すご}い閃^{ひらめ}きに応^おずるようになりました。しまいには外から来ないでも、自分の胸の底に生れた時から潜^{ひそ}んでいるもののごとくに思われ出して来たのです。私はそうした心持になるたびに、自分の頭がどうかしたのではなからうかと疑^{うたぐ}つてみました。けれども私は医者にも誰^みにも診^みてもらおう気にはなりませんでした。

私はただ人間の罪というものを深く感じたのです。その感じが

私をKの墓へ毎月^{まいげつ}行かせます。その感じが私に妻の母の看護をさせます。そうしてその感じが妻に優しくしてやれと私に命じます。私はその感じのために、知らない路傍^{ろぼう}の人から鞭^{むち}うたれたいとまで思つた事もあります、こうした階段を段々経過して行くうちに、人に鞭うたれるよりも、自分で自分を鞭うつべきだという気になります。自分で自分を鞭うつよりも、自分で自分を殺すべきだという考えが起ります。私は仕方がないから、死んだ気で生きて行こうと決心しました。

私がそう決心してから^{こんにち}今日まで何年になるでしょう。私と妻とは元の通り仲好く暮して来ました。私と妻とは決して不幸ではありません、幸福でした。しかし私のもっている一点、私に取っ

ては容易ならんこの一点が、妻には常に暗黒に見えたらしいのです。それを思うと、私は妻さいに対して非常に気の毒な気がします。

五十五

「死んだつもりで生きて行こうと決心した私の心は、時々外界の刺戟しげきで躍り上がりおどました。しかし私がどの方面かへ切つて出ようと思ひ立つや否や、恐ろしい力がどこから出て来て、私の心をぐいと握り締めて少しも動けないようにするので。そうしてその力が私にお前は何をする資格もない男だと抑えおさ付けけるようにいつて聞かせます。すると私はその一言で直ぐいちげんたりと萎しおれてしま

ます。しばらくしてまた立ち上がろうとすると、また締め付けられます。私は齒を食いしばって、何で他の邪魔をするのかと怒鳴り付けます。不可思議な力は冷やかな声で笑います。自分でよく知っているくせにといいます。私はまたぐたりとなります。

波瀾はらんも曲折もない単調な生活を続けて来た私の内面には、常にこうした苦しい戦争があつたものと思つて下さい。妻さいが見て齒痒はがゆがる前に、私自身が何層倍なんぞうばい齒痒い思いを重ねて来たか知れないくらいです。私がこの牢屋ろうやの中に凝じつとしてゐる事がどうしてもできなくなつた時、またその牢屋をどうしても突き破る事ができなくなつた時、必ひつきよう 竟私にとつて一番楽な努力で遂行すいこうできるものは自殺より外ほかにないと私は感ずるようになったのです。あなた

はなぜといって眼を睜^{みは}るかも知れませんが、いつも私の心を握り締めに来るその不可思議な恐ろしい力は、私の活動をあらゆる方面で食い留めながら、死の道だけを自由に私のために開けておくのです。動かずにいればともかくも、少しでも動く以上は、その道を歩いて進まなければ私には進みようがなくなつたのです。

私は今日^{こんにち}に至るまで二、三度運命の導いて行く最も楽な方向へ進もうとした事があります。しかし私はいつでも妻に心を惹^ひかされました。そうしてその妻をいっしょに連れて行く勇氣は無論ないので。妻にすべてを打ち明ける事のできないくらいな私ですから、自分の運命の犠牲^{ぎせい}として、妻の天^{てん}寿^{じゆ}を奪うなどという手荒^{てあら}な所作^{しよさ}は、考えてさえ恐ろしかったのです。私に私の

宿命がある通り、妻には妻の廻り合せがあります、二人を一束にして火に燻べるのは、無理という点から見ても、痛ましい極端としか私には思えませんでした。

同時に私だけがなくなった後の妻を想像してみるといかにも不憫でした。母の死んだ時、これから世の中で頼りにするものは私より外になくなったといった彼女の述懐を、私は腸に沁み込むように記憶させられていたのです。私はいつも躊躇しました。妻の顔を見て、止してよかったと思う事もありました。そうしてまた凝と竦んでしまいます。そうして妻から時々物足りなそうな眼で眺められるのです。

記憶して下さい。私はこんな風にして生きて来たのです。始め

てあなたに鎌倉^{かまくら}で会った時も、あなたといっしよに郊外を散歩した時も、私の氣分に大した変りはなかったのです。私の後ろにはいつでも黒い影が括ッ^く付^ついていました。私は妻^{さい}のために、命を引きずって世の中を歩いていたようなものです。あなたが卒業して国へ帰る時も同じ事でした。九月になったらまたあなたに会おうと約束した私は、嘘^{うそ}を吐^ついたのではありません。全く会う氣でいたのです。秋が去って、冬が来て、その冬が尽きても、きつと会うつもりでいたのです。

すると夏の暑い盛りに明治天皇^{めいじてんのう}が崩御^{ほうぎよ}になりました。その時私は明治の精神が天皇に始まって天皇に終わったような氣がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが、その後^{あと}に生き残っ

ているのは必^{ひつきよう}竟時勢遅れだという感じが烈^{はげ}しく私の胸を打ち
ました。私は明白^{あから}さまに妻にそういいました。妻は笑って取り合
いませんでしたが、何を思ったものか、突然私に、では殉^{じゆんし}死で
もしたらよかろうと調^{からか}戯いました。

五十六

「私は殉死という言葉をほとんど忘れていました。平生^{へいぜい}使う必
要のない字だから、記憶の底に沈んだまま、腐れかけていたもの
と見えます。妻の笑^{じようだん}談を聞いて始めてそれを思い出した時、
私は妻に向つてももし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死す

るつもりだと答えました。私の答えも無論笑談に過ぎなかったのですが、私はその時何だか古い不要な言葉に新しい意義を盛り得たような心持がしたのです。

それから約一カ月ほど経ちました。御大葬ごたいそうの夜私はいつもの通り書斎に坐すわつて、相図あいずの号砲ごうほうを聞きました。私にはそれが明治が永久に去った報知のごとく聞こえました。後で考えると、それが乃木大将のぎたいしょうの永久に去った報知にもなっていたのです。私は号外を手にして、思わず妻に殉死だ殉死だといいました。

私は新聞で乃木大将の死ぬ前に書き残して行ったものを読みました。西南戦争せいなんせんそうの時敵に旗を奪とられて以来、申し訳のために死のう死のうと思って、つい今日こんにちまで生きていたという意味の

句を見た時、私は思わず指を折って、乃木さんが死ぬ覚悟をしな
 がら生きながらえて来た年としつき月を勘定して見ました。西南戦争は
 明治十年ですから、明治四十五年までには三十五年の距離があり
 ます。乃木さんはこの三十五年の間死あいだのう死のうと思つて、死ぬ
 機会を待つていたらしいのです。私はそういう人にとつて、生き
 ていた三十五年が苦しいか、また刀を腹へ突き立てた一刹那いっせつなが
 苦しいか、どっちが苦しいだろうと考えました。

それから二、三日して、私はとうとう自殺する決心をしたので
 す。私に乃木さんの死んだ理由がよく解わからないように、あなたに
 も私の自殺する訳が明らかに呑み込めのないかも知れませんが、も
 しそうだとすると、それは時勢の推移から来る人間の相違だから

仕方がありません。あるいは箇人^{こじん}のもって生れた性格の相違といった方が確^{たし}かかも知れません。私は私のできる限りこの不可思議な私というものを、あなたに解らせるように、今までの叙述で己^{おの}れを尽^{つく}したつもりです。

私は妻^{さい}を残して行きます。私がいなくなつても妻に衣食住の心配がないのは仕^{しあわ}合せです。私は妻に残酷な驚^{きよう}怖^ふを与える事を好みません。私は妻に血の色を見せないで死ぬつもりです。妻の知らない間^まに、こつそりこの世からいなくなるようにします。私は死んだ後で、妻から頓^{とん}死^ししたと思われたいのです。気が狂つたと思われても満足なのです。

私が死のうと決心してから、もう十日以上になります、その

大部分はあなたにこの長い自叙伝の一節を書き残すために使用されたものと思つて下さい。始めはあなたに会つて話をする氣でいたのですが、書いてみると、かえつてその方が自分を判然描き出す事ができたような心持がして嬉しいのです。私は酔興に書くものではありません。私を生んだ私の過去は、人間の経験の部分として、私より外に誰も語り得るものはないのですから、それを偽りなく書き残して置く私の努力は、人間を知る上において、あなたにとつても、外の人にとつても、徒勞ではなかうと思ひます。渡辺華山は邯鄲という画を描くために、死期を一週間繰り延べたという話をつい先達て聞きました。他から見たら余計な事のようにも解釈できましようが、当人にはまた当人相應の

要求が心の中にあるのだからやむをえないともいわれるでしょう。私の努力も単にあなたに対する約束を果たすためばかりではありません。半ば以上は自分自身の要求に動かされた結果なのです。^{なか}しかし私は今その要求を果たしました。もう何にもする事はありません。この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう。とくに死んでいるでしょう。妻は十日ばかり前から市ヶ谷^{いちがや}の叔母の所へ行きました。叔母が病気で手が足りないというから私が勧めてやったのです。私は妻の留守の間に、この長いものの大部分を書きました。時々妻が帰って来ると、私はすぐそれを隠しました。

私は私の過去を善悪ともに他の参考^{ひと}に供するつもりです。しか

し妻だけはたった一人の例外だと承知して下さい。私は妻には何にも知らせたくないのです。妻が己れの過去おのに対してもつ記憶を、なるべく純白に保存しておいてやりたいのが私の唯一ゆいの希望なのですから、私が死んだ後あとでも、妻が生きている以上は、あなた限りに打ち明けられた私の秘密として、すべてを腹の中にしまっておいて下さい。」

青空文庫情報

底本：「いころ」集英社文庫、集英社

1991（平成3）年2月25日第1刷

1995（平成7）年6月14日第10刷

初出：「朝日新聞」

1914（大正3）年4月20日～8月11日

※誤植の修正は「漱石全集」岩波書店を参照しました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：j.utiyama

校正：伊藤時也

1999年7月31日公開

2010年10月31日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.waozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

こころ

夏目漱石

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>